

長野県松本市

HIRASE

平瀬遺跡 II

—緊急発掘調査報告書—



2000.3

松本市教育委員会

長野県松本市

HIRASE

平瀬遺跡 II

—緊急発掘調査報告書—

2000.3

松本市教育委員会

序

平瀬遺跡は松本市北西部の島内地区に位置します。本遺跡は埋蔵文化財の包蔵地として知られており、平成8年に第1次調査が行われています。

このたび当地に国道147号線のバイパス築造が計画されたため、松本市では松本建設事務所から発掘調査の委託を受け、埋蔵文化財を記録する目的で緊急発掘調査を実施することとなりました。

発掘調査は市教育委員会によって平成10年6月29日から平成11年1月25日にかけて行われました。長期にわたる調査となりましたが関係の皆様のご尽力により無事終了することができました。発掘調査の結果、古墳時代から中世にかけての集落址を発見することができました。これは、今後地域の歴史解明に大変役立つ資料になることと思われます。

しかしながら、開発事業に先立って行われる発掘調査は、記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実です。開発により私たちの生活が豊かになる一方、それとともに歴史遺産が失われてしまうのは残念なことです。発掘調査により当時の生活が明らかとなり、私たちの郷土松本が歩んできた歴史が一つずつでも解き明かされることは大変貴重なことだと考えます。

最後になりましたが、発掘調査に多大なご理解とご協力をいただいた松本建設事務所の皆様、地元関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成12年3月

松本市教育委員会 教育長 竹淵公章

例　言

- 1 本書は、平成 10 年 6 月 29 日から平成 11 年 1 月 25 日にかけておこなわれた、松本市大字島内 7214 番地他に所在する平瀬遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は長野県松本建設事務所が一般国道 147 号線高家バイパス及び新島橋を建設するのに伴って松本市教育委員会がおこなったものである。
- 3 本遺跡は平成 8 年度、9 年度に第 1 次の発掘調査を行っているため、今回を第 2 次調査とした。またその中で調査日程が 3 期に分かれており、それぞれ 2 次 A、2 次 B、2 次 C とした。なお遺構番号は先の調査の番号としている。
- 4 本書の執筆分担は次の通りである。

第 1 章：事務局

第 2 章第 1 節：森 義直

第 3 章第 3 節：澤柳秀利、荒木 龍、太田圭祐、竹原 学

第 4 章第 2 節：パリノ サーヴェイ株式会社

上記以外：澤柳秀利

- 5 本書の作成・編集にあたっての作業分担は次の通りである。

遺物洗浄接合：五十嵐周子、内澤紀代子、百瀬二三子

土器・陶磁器実測：竹内直美、竹平悦子、松尾明恵、横山真理

土器・陶磁器トレース：開鶴八重子、櫻井 了

石器実測：太田圭祐、加島泰祐、堀 久士

石器トレース：太田圭祐

金属製品保存処理：洞澤文江

金属製品実測：洞澤文江

金属製品トレース：洞澤文江

自然遺物分析：森 義直、パリノ サーヴェイ株式会社

遺構図調整・整理：石合英子、林 和子、加島泰祐、堀 久士

遺構図トレース：開鶴八重子、櫻井 了

図版組み：石合英子、澤柳秀利、林 和子、加島泰祐、堀 久士

写真撮影：(現場写真) 荒木 龍、樋川大輔、太田圭祐、澤柳秀利

(遺物写真) 宮崎洋一

(航空写真) エアーテック

総括・編集：澤柳秀利

- 6 本書の中で使用した遺構名の呼称は次の通りである。

第 1 号住居址→1 住 第 1 号掘立柱建物址→1 建 第 1 号土坑→1 土 第 1 号ピット→P 1

第 1 号竪穴状遺構→1 竪 第 1 号溝址→1 溝 第 1 号流路址→流路 1 第 1 号土器集中域→土集 1

第 1 号石列→石列 1

遺物包含層調査におけるグリッド番号の呼称は、そのグリッド北東隅の座標を用いている。

- 7 土器・陶磁器の実測図において断面図の白抜きは土師器で、(古)は古墳時代土器を表す。スミ塗りは須恵器、陶器、磁器で、(縁)は縁付陶器、(青)は青磁、(白)は白磁、(青白)は青白磁、(須)は須恵器、(陶)は陶器を表し、表示のないものは灰釉陶器である。

- 8 本遺跡の調査及び本書の執筆・作成にあたって次の方々のご教示、ご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。
大久保知己、倉澤正幸、佐々木明、佐野 元、西沢寿晃、野村一寿

- 9 本調査における出土遺物及び現場で作成した測量図、写真等の諸記録は松本市教育委員会が管理し、松本市立考古博物館に保管、収蔵されている。(松本市立考古博物館 〒 390-0823 長野県松本市大字中山 3738 番地 1
TEL 0263-86-4710)

目 次

序
例言
目次
図・表目次

第1章 調査の経緯	5
1. 調査に至る経過	5
2. 調査体制	5
第2章 遺跡の環境	6
第1節 遺跡の立地と地形・地質	6
第2節 歴史的環境	8
第3節 第1次調査の概要	11
第3章 調査結果	13
第1節 調査の概要	13
第2節 遺構	16
1. 構築	16
2. 坑穴住居址	16
3. 据立柱建物址	24
4. 土坑	24
5. ピット	25
6. 坑穴状遺構	25
7. 渓・流路址	25
8. 土器集中域	26
9. 石列	26
第3節 遺物	50
1. 土器・陶磁器	50
2. 瓦	88
3. 金属製品	88
4. 石器	93
第4章 自然遺物分析	123
第1節 出土炭化材・炭化物	123
第2節 出土炭化材放射性炭素年代測定結果	125
第5章 調査のまとめ	127
写真図版	

目次

第 1 図	平瀬遺跡 II 土層柱状断面	7
第 2 図	遺跡の位置と周辺遺跡	9
第 3 図	調査範囲	10
第 4 図	第 1 次調査 A・B 全体図	12
第 5 図	平瀬遺跡 II 全体図北半部	14
第 6 図	平瀬遺跡 II 全体図南半部	15
第 7 図	第 5 ~ 7・10 号住居址	31
第 8 図	第 8・9・13 号住居址	32
第 9 図	第 11・14・15 号住居址	33
第 10 図	第 12・17・18・20 号住居址	34
第 11 図	第 16・19・21・23 号住居址	35
第 12 図	第 22・24・25・28 号住居址	36
第 13 図	第 26・27・29・30・32・33 号住居址	37
第 14 図	第 31・34 ~ 37 号住居址	38
第 15 図	第 38 ~ 45 号住居址	39
第 16 図	第 47 ~ 51・53・66 号住居址	40
第 17 図	第 52・55 号住居址	41
第 18 図	第 54・56 ~ 58・60・64・78 号住居址	42
第 19 図	第 61・63・65・68・77 号住居址	43
第 20 図	第 67・73 ~ 76 号住居址	44
第 21 図	第 69・79・80 号住居址	45
第 22 図	第 81 ~ 86 号住居址	46
第 23 図	建物址、竪穴状遺構、土器集中域	47
第 24 図	土坑(1)	48
第 25 図	土坑(2)、溝址	49
第 26 図	土器種類・器形一覧	58
第 27 図	土器・陶磁器(1)	72
第 28 図	土器・陶磁器(2)	73
第 29 図	土器・陶磁器(3)	74
第 30 図	土器・陶磁器(4)	75
第 31 図	土器・陶磁器(5)	76
第 32 図	土器・陶磁器(6)	77
第 33 図	土器・陶磁器(7)	78
第 34 図	土器・陶磁器(8)	79
第 35 図	土器・陶磁器(9)	80
第 36 図	土器・陶磁器(10)	81
第 37 図	土器・陶磁器(11)	82
第 38 図	土器・陶磁器(12)	83
第 39 図	土器・陶磁器(13)	84
第 40 図	土器・陶磁器(14)	85
第 41 図	土器・陶磁器(15)	86
第 42 図	土器・陶磁器(16)	87
第 43 図	瓦拓影・実測図	90
第 44 図	銅製三尊仏略測図(参考資料)	90
第 45 図	金属製品錢拓影	90
第 46 図	金属製品(1)	91
第 47 図	金属製品(2)	92
第 48 図	平瀬遺跡 II C 遺構間接合・同一母岩資料分布図	103
第 49 図	平瀬遺跡 II C 遺物出土状況図(1)	104
第 50 図	平瀬遺跡 II C 遺物出土状況図(2)	105
第 51 図	平瀬遺跡 II C 遺物出土状況図(3)	106
第 52 図	平瀬遺跡 II C 遺物出土状況図(4)	107
第 53 図	平瀬遺跡 II C 遺物出土状況図(5)	108
第 54 図	平瀬遺跡 II C 遺物出土状況図(6)	109
第 55 図	平瀬遺跡 II C 出土石器(1)	110
第 56 図	平瀬遺跡 II C 出土石器(2)	111
第 57 図	平瀬遺跡 II C 出土石器(3)	112
第 58 図	平瀬遺跡 II C 出土石器(4)	113
第 59 図	平瀬遺跡 II C 出土石器(5)	114
第 60 図	平瀬遺跡 II C 出土石器(6)	115
第 61 図	平瀬遺跡 II C 出土石器(7)	116
第 62 図	平瀬遺跡 II C 出土石器(8)、II A、II B 出土石器	117
第 63 図	平瀬遺跡 II C 遺構間土層対比模式図	119

目次

第 1 表	住居址一覧表	27
第 2 表	掘立柱建物址一覧表	29
第 3 表	竪穴状遺構一覧表	29
第 4 表	溝・流路址一覧表	29
第 5 表	土坑一覧表	30
第 6 表	土器観察表	59
第 7 表	金属製品一覧表	89
第 8 表	器種一覧	100
第 9 表	石材一覧	100
第 10 表	平瀬遺跡 II AB 遺構単位器種組成	101
第 11 表	平瀬遺跡 II AB 遺構単位石材組成	101
第 12 表	平瀬遺跡 II C 遺構単位器種組成	101
第 13 表	平瀬遺跡 II C 遺構単位石材組成	101
第 14 表	平瀬遺跡 II AB 石材単位器種組成	101
第 15 表	平瀬遺跡 II C 石材単位器種組成	101
第 16 表	平瀬遺跡 II C 母岩別資料一覧	102
第 17 表	平瀬遺跡 II C 遺構・土層単位集計	118
第 18 表	平瀬遺跡 II C 出土石器属性一覧	120
第 19 表	平瀬遺跡 II AB 実測図掲載個体属性一覧	122
第 20 表	出土炭化物・炭化材一覧表	123
第 21 表	樹種一覧表	124
第 22 表	放射性炭素年代測定表	125

第1章 調査の経緯

1 調査に至る経緯

平成10年4月17日 松本建設事務所において試掘調査、本調査の日程調整

5月27日

～6月2日 道路予定地のうち、南東部分について試掘調査を実施。遺物を確認する。

6月9日 松本建設事務所と保護協議。道路部分のうち、新島橋橋梁建設部分、本線南東部分について埋蔵文化財発掘調査を行い、記録保存を行うこととした。

6月10日 道路予定地のうち、北西部分について再度試掘調査を実施。遺構・遺物の確認はなし。

6月29日 松本建設事務所と発掘調査委託契約を締結。発掘調査を開始する。

2 調査体制

(1) 調査団

調査団長 松本市教育長 守屋立秋(～H10.6.30) 舟田智理(H10.7.1～H10.10.15) 竹淵公章(H10.11.1～)

調査担当者 澤柳秀利、荒木龍、太田圭都、稲川大輔(松本市立考古博物館)

調査員 松尾明恵

協力者 麻和角弥、麻和一男、浅輪敬二、麻和元重、荒井留美子、飯田三男、五十嵐周子、石合英子、石川三男、入山正男、内沢紀代子、太田万喜子、大月八十喜、岡村行夫、開島八重子、加島泰祐、上條道代、菊池直哉、北坂実恵、久保田登子、窪田瑞恵、奥喜義、小松正子、近藤忠美、齋藤政雄、清水陽子、鈴木幸子、諏訪部有紀、瀬古雅大、高橋登喜男、滝沢喜美代、竹平悦子、田崎真理、田中一雄、鶴川登、中村恵子、中村地香子、中谷高志、中村自子、林和子、林武佐、廣田早和子、藤井道明、二木一男、布野行雄、布山洋、洞澤文江、堀久士、堀内早苗、持井敏夫、丸山喜和子、道浦久美子、宮坂ふみ、宮田美智子、村山牧枝、百瀬二三子、森山亮、矢崎寛子、山崎照友、吉田勝、横山清、横山尚澄、横山喜治、横山真理、渡邊順子

(2) 事務局

(平成10年度)

松本市教育委員会 木下雅文(文化課長)、熊谷康治(文化課長補佐)、村田正幸(文化財担当係長)、久保田剛、近藤潔、上条まゆみ

(平成11年度)

松本市教育委員会 木下雅文(文化課長)、熊谷康治(文化課長補佐)、松井敬治(文化財担当係長)、久保田剛、武井義正、酒井まゆみ(旧姓上条)

第2章 遺跡の環境

第1節 平瀬遺跡の地形・地質

木平瀬遺跡は松本市の北西、城山から北へ延びる筑摩山地の西麓を洗って流れる奈良井川が、梓川と合流して犀川となる地点のすぐ南側で、標高575m前後の両河川にはさまれた氾濫原にある。

1 本遺跡に直接関係ある両河川について

梓川は松本盆地を形成した主河川で、源を北アルプス槍ヶ岳に発し、南安曇郡島々付近を扇頂として南安曇・東筑摩両郡にわたる広大な扇状地を形成している。扇状地形成後右岸に四段、左岸に三段の河岸段丘を形成した。右岸の上位二面と左岸の一面にはローム層が載っているので、洪積世のものとみられ、それ以下は沖積世のものである。

本遺跡に直接関係のあるのは最下段の面であり、右岸でいえば波田町押出付近から広がる押出面、左岸でいえば梓川村岩岡付近で代表される岩岡面である。本遺跡は岩岡面の一帯と考えられ、現梓川の氾濫原にできた微高地（後述）である。

梓川は河況係数（最少流量に対する最大流量の比）の極めて大きな河川、即ち荒れ川で、安曇ダムができるまでは、しばしば氾濫を繰り返して流路が首を振り、有史以後においても新村付近から城山方向に向かって流れ、そこで奈良井川と合流していた時期もあり、その址が現樽木川として残っている。

その後、中世には洪水の記録が多く残っており、梓川村岩岡～豊科町上真々付近でしばしば決壊し、西は上鳥羽～矢原を結ぶ線にまで達したこともある。

したがって、本遺跡付近は樽木川と上鳥羽～矢原線のちょうど中間にあり、洪水の最危険地域ということができる。

奈良井川は源を木曾山駒駒ヶ岳の北方に発して北流し、松本盆地にてから左岸に小曾部川・鏡川を、右岸に田川、薄川、女鳥羽川を合流し、それらの河川の扇状地と合して流馬付近を扇頂とする広大な扇状地を作り、西は梓川扇状地と接し、両岸にそれぞれ三段の河岸段丘を形成している。

奈良井川は、河況係数は大きいが梓川ほどの荒れ川ではなく、島立付近より北では常に西から梓川の影響を受けつつ宮潤付近で筑摩山地の西山麓を洗いながら北流している。

2 本遺跡の地形・地質の成因について

発掘地点は、両河川の合流点付近から奈良井川左岸に沿って、約1.5kmほどの長さに起伏を生じながら延びる自然堤防の北端近くにある。自然堤防の成因は、河川によって運搬される土砂の体積は流速の6乗に比例して増すので、逆に流速が $1/2$ に減少すれば、運搬される土砂の体積は $1/64$ に減少して急速に堆積が起こる。本遺跡は奈良井川に対して梓川が約45°の角度で合流（衝突）しているので、両河川の洪水時には合流点の上流で、両河川にはさまれた所では水がよどみ、勢いの強かった梓川の洪水により、奈良井川左岸沿いに北へ大量の土砂を堆積させ、自然堤防を作りつつ流路が北へ移動し、現在に至ったものとみられる。即ち、梓川自身の作った自然堤防で流路が次第に変わったことになり、今でも自然堤防に沿って西側に、梓川の流れた跡が凹地となっている。

同じことは、遺跡の下流5.5km付近で、高瀬川と犀川が180°反対方向から衝突する合流点の上流側でも、土砂の堆積がみられる。

自然堤防の形成時期ははっきりしないが、弥生時代末から古墳時代前期頃の大洪水で、それまで樽木川方向に流れていた梓川の本流が、下流に向かって最短距離の方向に流路をとったことが認められる。なお、時代推定の根拠は、遺跡付近に弥生時代の遺構がないこと・段丘の年代や地形の変遷・炭化物にコナラが減り、雑木が多いこと、などから推定される。

3 自然堤防形成以後について

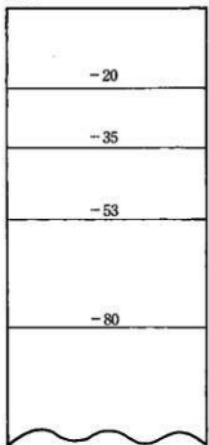
本遺跡のA地区は尾根状に堆積した自然堤防の北の先端近くにあり、B地区はA地区的尾根筋付近に、一番広く発掘したC地区は、尾根状堆積の東斜面で尾根筋に沿って南北方向に発掘され、地山は中程が船底状に低くなっている。

尾根状の自然堤防が形成されてから以後についてみると、洪水性堆積物は極めてふるい分けが悪く、堆積後細粒の堆積物は雨水により洗い出されて凹地を埋め、その結果シルトや粘土などはレンズ状に重なって堆積した。このような二次堆積物の上に古墳時代～平安時代の住居が作られ、引き続いて細粒堆積物の洗い出しは続いているため、古い遺構は洗い出された堆積物で次第に埋没していった。

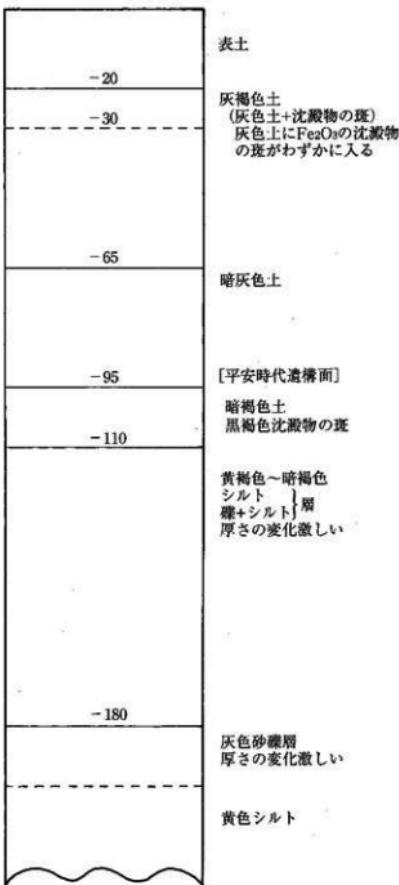
平安時代末頃の松木平一帯を襲った大洪水（北は僧馬遺跡・東は岡田町遺跡…を洪水層が覆っている）により、A地区付近から尾根状微高地を越え、B地区の大半を洪水による、ふるい分けの悪い砂礫が堆積した（第1図の北壁参照）。その後尾根筋からの洗い出しでシルト質がその上に堆積し、そこに中世の遺構が存在する。更に、このシルト質を覆って中・近世に起きた洪水で、ふるい分けの悪い砂礫がB地区とC地区の大半に堆積した。

現在の表土は、この洪水層の上に雨水で洗い出されたシルト質が堆積し風化したものである。なおB地区的南端は、洪水の直撃を受けなかったらしく、平安時代住居址より上には、ふるい分けの悪い砂礫層ではなく（第1図の南壁参照）、洪水時の渦り水か、以後の洗い出しによるとみられる細粒の堆積物が載っている。

北壁



南壁



第1図 平潮遺跡II 土層柱状断面（西侧）

第2節 歴史的環境

島内地区は、現在の行政区画では松本市大字島内となっているが、近世以前は安曇郡、筑摩郡とその所属が変わっているところで、両地区にまたがる地域であるといえる。

前述でも述べた通り、この地区的歴史を語る上で欠くことの出来ない要素として梓川と奈良井川(木曾川)の両河川がある。特に梓川は、古来より知られる墨れ川で、近代まで氾濫を繰り返してきている。そのため、島内地区の平地部においては、集落は発達せず、遺跡はないと考えられてきた。しかし昭和40年代以降、圃場整備に先立つ発掘調査の増大によって、次第に明らかになってきた。

縄文時代の遺跡は、この周辺ではほとんど確認されていない。奈良井川右岸の下平瀬地区でわずかに土器が採集されている程度である。さらに東の丘陵部分である山田集落の周辺では、旧石器時代から縄文時代にかけての遺構・遺物が確認されている。弥生時代になると、全く遺構・遺物の確認はされない。

古墳時代については、平瀬遺跡は該期の遺跡としては周知されていない。前回の第1次調査において平安時代面の100cm下より確認された古墳時代の土器集中域は、この周囲に該期の集落が存在していたことを示しており、今回の調査で住居址が確認できたことは、それを証明したといえる。奈良井川右岸の坂下(位坂)古墳群に関連するのではないかとも考えられるが、古墳自体の解明がされていない現在では断言できない。

奈良・平安時代の平瀬は、梓川と奈良井川の合流する部分、三角形の段丘上に広がる集落である。時期についても、第1次調査においては4軒の住居址が確認されただけで詳細は不明であったが、今回の調査によって、平安時代後半の11～12世紀から12世紀以降の中世初頭鎌倉時代にかけて存続した集落であることが判明し、特に11～12世紀には最盛期を迎えていたことが確認できた。平瀬の地名は、神奈川県の鎌倉文庫所蔵文書に、養和2年(1182)に源延という僧が平瀬法住寺において「簡素要略」を書写したという記録がある(註1)ことから、古代末には存在したことがわかる。またそれにより、法住寺という寺院が平瀬に存在していたことが明らかとなった。しかしその正確な位置、存続期間は不明で、よって遺構もまた不明である。痕跡として周辺に寺村、寺畠等の小字名を残すのみであり、また、近年まで経塚と思われる塚が存在しており、道路拡幅に際して破壊され、現在は位置も不明となっているが、その周辺での青磁、白磁等の輸入陶器片、古瓦の出土が寺の存在を想起させるのみとなっている。

中世の平瀬は、先述の法住寺及び平瀬城の存在が大きな割合を占める。またこの地に居住した犬甘氏の一族平瀬氏との関係を切り離して考えることはできない。とはいえ先述のように法住寺の実体は明らかでなく、鎌倉～室町時代、13～15世紀の平瀬については文献もほとんどない。16世紀の記録では、その初頭に他の小宮、大甘嶋村とともに總高神社に奉仕していたことが知られる(註2)。中期になると、隣国甲斐の戦国大名武田氏が信濃に侵攻し、府中(松本)は天文19年(1550)に武田領となった。それにより信濃守護笠原氏は没落したが、平瀬城の平瀬氏を含む一部家臣は武田氏に抵抗していた。しかし翌年10月24日、武田軍の攻撃を受けて平瀬城は落城し、城兵204人が討ち取られた。武田氏はすぐに平瀬城を改修して前線基地として使用し、2年後の天文22年に破却している(註3)。平瀬城は、詰めの城(山城)が奈良井川右岸山中に存在し、遺構を残している。しかし平地居館址は不明で、調査地の南、川合鶴宮神社境内が比定されているが、周囲の試掘調査結果では遺構の確認はなく、これもまた詳細は不明である。

近世以降、島内地区は松本市領となり、他の10ヶ村とともに安曇郡成相組に属する。江戸時代後期の文化13年(1816)、新橋北の木曾川(奈良井川)から取り入れる灌漑用水、捨ヶ瀬が開鑿された。梓川左岸の安曇郡10ヶ村の新田開発に供するもので、平瀬川東西地籍内を現在も南東から北西へ流れ、豊科町・穂高町等の水田を潤している。

明治7年(1874)、近世の周辺11ヶ村は合併して南安曇郡島内村となる。同12年には東筑摩郡に編入され、昭和29年に、他の東筑摩郡の村村とともに松本市と合併し、松本市大字島内となっている。

参考文献：松本市 1993『 松本市史 第四巻 旧市町村編Ⅲ一 』

註1：信濃史料補遺卷上 念祖次第 天台 本云、美和二年三月一日、於信州平瀬法住寺、味岡御房奉受了、源延廿七
簡素要略 美和二年三月廿日、於信州平瀬法住寺、味岡御房御本書了、源延廿七
交了 尊延

註2：信濃史料叢書二十四 三宮總高社御造営定日記 明治十年、永正四年、天文十八年、天文二十四年、永禄四年、永禄十年、元龟四年、天文七年、天正十三年の条に記載がある。

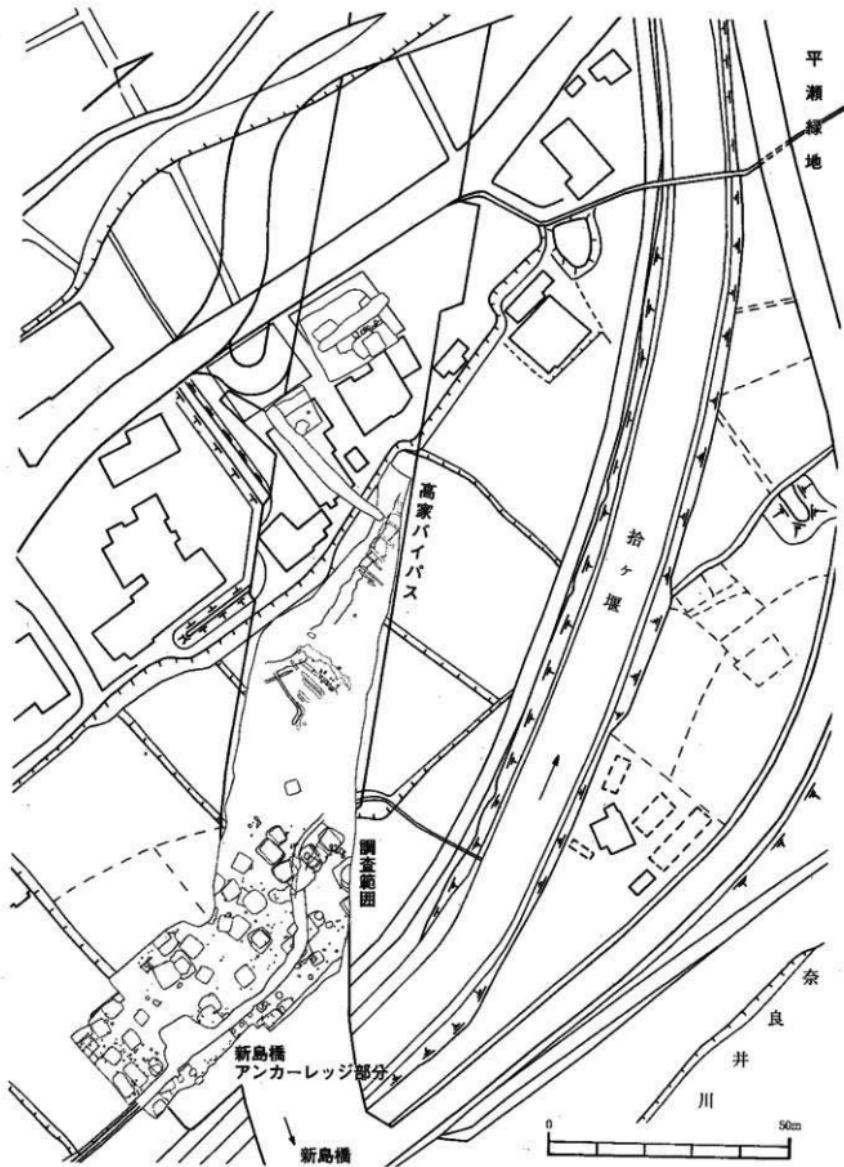
註3：武田史料集 高白著記 天文二十年辛亥年。(前略)十月大朝日乙卯節。(中略)廿四日戊寅平瀬ヲ攻破ル。敵二百四人被討取候。終日細雨。西刻ヨリ大雨。(中略)廿八日壬午刻巳ノ方ニ向テ平瀬城削其上築立。十一月小朝日乙酉。(中略)十日甲午早朝敵守平瀬ニ在城被仰付。(後略)
天文二十二年癸丑年。(前略)五月八日癸丑平瀬ノ城破却御覽、スグニ深志へ被納御馬。(後略)



●印：今回調査地点、■印：第1次調査地点

- 1: 平瀬遺跡
- 2: 島内上平瀬遺跡
- 3: 島内八幡原遺跡
- 4: 犬甘館址
- 5: 島内北方遺跡
- 6: 島内北中遺跡
- 7: 島内南中遺跡
- 8: 板下(泣坂)古墳群
- 9: 下平瀬椎現堂古墳
- 10: 平瀬城址
- 11: 島内山田遺跡
- 12: 平瀬川東古窯址群
- 13: 御殿山城址
- 14: 老根田古墳
- 15: 塩倉池遺跡
- 16: 御宝殿遺跡
- 17: 土田遺跡
- 18: 墓山古墳
- 19: 神沢遺跡
- 20: 峰の平遺跡
- 21: 島居山古墳
- 22: 放光寺遺跡
- 23: 大飼城址
- 24: 北部古窯址群
- 25: 芥子望主山古墳
- 26: 峰の平1号古墳

第2図 遺跡の位置と周辺遺跡



第3図 調査範囲

第3節 第1次調査の概要

1 概要

平瀬遺跡の調査は、平成8年度、9年度に第1次調査A、Bが行われており、今回は第2次の調査となった。本節では第1次調査についてその概要を記しておく。

第1次調査A、Bとともに新焼却プラントに伴う平瀬緑地建設に先立ち、A：平成8年5月30日から9月3日、B：平成9年6月11日から12日に実施された。位置的には遺跡の北側隣接地（当時は遺跡北側の隣接地、この調査結果により遺跡の範囲は北へ広がることが明らかになった）の奈良井川左岸段丘上で、すぐ東側が段丘崖となっている場所である。面積は延べ3,191m²を測る。この部分では、現地表下70cmからは平安時代中期～鎌倉時代の面（2・1面）で、堅穴住居址・掘立柱建物址などの遺構が確認された。また平安～鎌倉面の下約1mからは古墳時代前～中期の土器集中域が2ヶ所・流路址1条がそれぞれ確認された（3面）。遺物も1・2面からは土師器・須恵器などの土器の他、輸入陶磁である白磁片も若干みられた。また特殊遺物として銅鏡片・銅製三尊仏像、布目瓦といった仏教関連遺物が出土する遺構もみられた。これは、この辺りに存在したとされる法住寺が、文献上だけでなく、考古学上発見される可能性があることを示す資料となりうるものであると考えた。また、島内地区では古墳時代の遺構（古墳を除く）は発見されていなかったが、3面で確認した2ヶ所の土器集中域及びその遺物は、この周辺に古墳時代前期末～中期の集落が存在したことを示唆するものであると考えた。

2 遺構

第1次調査で検出した遺構のうち、平安～中世のものは堅穴住居址4棟、掘立柱建物址11棟、土坑41基、ピット380個、溝状遺構10条で、古墳時代のものは土器集中域2ヶ所と、流路址1条である。これらの遺構は、調査区の東～北部分に集中して広がり、西側部分では、ほとんど遺構はみられず、密度は希薄となっている。

4棟の堅穴住居址のうち1住、4住が中世I期に属するとみられ、2住、3住が古代14～15期に想定されるため、両者の間に時間的差はないといふられる。2住からは、銅製三尊仏像・銅鏡が出土している。

11棟の建物址のうち1・8・10建は純柱式で他は假柱式である。また1～4建は、内側に土坑を取込むものである。平成7年度に実施した試掘調査の際、3建のP₂底部から3/5程度残存する土師器皿が1点逆位で出土している。

土坑は多くみられた。これらのうち7・8・10・11土は建物址に取り込まれるものである。また1～6土は大型で、堅穴状遺構ともいえるもので、底部は平坦である。

ピットは多くみられたが、建物址を構成するもの以外の用途は分からぬ。

溝状遺構は、用途を明らかにできるものはなかった。流路は、南から北へ流れると考えられ、第2章第1節で述べた弥生時代末～古墳時代前期にあったとされる梓川洪水の痕跡かもしれない。

2ヶ所確認された土器集中域は、いずれも流路右岸で検出したもので、規模は大きくなないが、古墳時代前期に属する甕類片を中心に多くの遺物出土がみられる。出土状況からみて、流れ込みなどの自然によるものではなく、人为的に置かれたものと考えられる。いわゆる「水辺の祭祀」的なものではないだろうか。おそらく近傍に該期の集落が存在していたものと考える。出土遺物は2ヶ所合わせて整理用テンバコで3箱を数える。

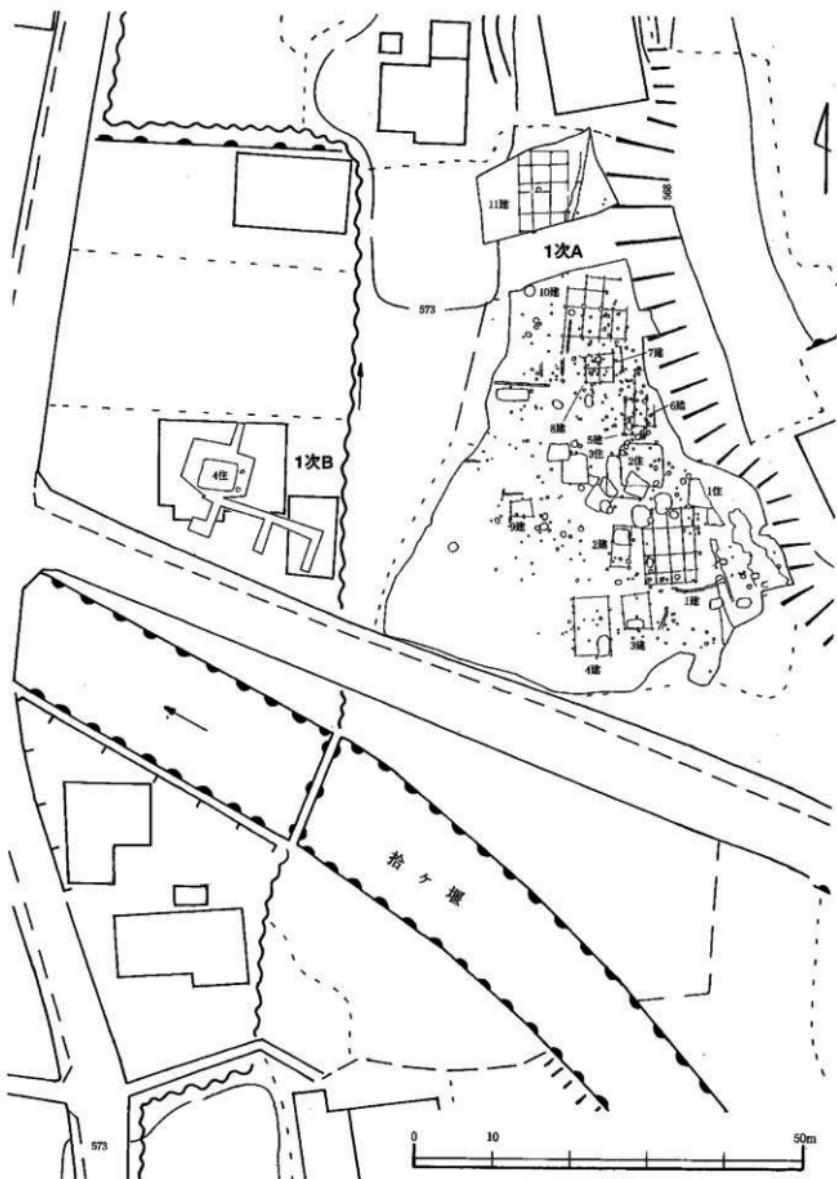
調査区西側の空白地帯の理由は不明である。しかしその更に西側にあたる1次B調査において、住居址他の遺構を確認しているため、集落内においてこのエリアに何らかの規制が存在し、そのため遺構が少ないと考える。

3 遺物

第1次調査での遺物は、古墳時代の七器がテンバコ3箱、平安～中世の土器・陶磁器がテンバコ5箱、特殊遺物として銅製三尊仏像1体・銅鏡・鉄製品若干が出土している。

古墳時代前期末（4世紀末～5世紀）の土器は、3検の第1号及び第2号土器集中域から出土している。多くは甕片であり、縦まつた形で出土している。接合できるものもあるが、多くは摩耗している。

平安～中世の遺物は、土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器がみられる。ほとんどが住居址等の遺構内からの出土である。白磁片も5点出土している。特殊遺物として銅製三尊仏・銅鏡・布目瓦といったものがみられ、いずれも住居址内から出土している。平瀬の地に法住寺と呼ばれる寺院があったとされることは前述のとおりであるが、これらの遺物は、その存在を示唆するものと考える。



第4図 第1次調査 A・B全体図

第3章 調査結果

第1節 調査の概要

1 調査地

今回の調査地は松本市大字島内7214番地他の水田、住宅地である。平瀬遺跡は、前述のとおり平瀬緑地造成に伴う第1次調査が平成8年、9年におこなわれており、今回が第2次調査となる。遺跡内のうち国道の対象面積は6000m²で、そのうち試掘調査によって遺構の存在が確認された部分を中心に4255m²について調査を実施した。

2 調査方法

今回の調査は、道路本体工事の都合上3回に分けて行った。調査を行った順に2次A、2次B、2次Cとした。それについて、2次A調査は、新島橋橋梁アンカーレッジ部分、2次B調査は堰によって囲まれた水田で、橋梁アンカーレッジ部分の残り及び国道本線の一部、2次C調査は国道本線部分となる。調査にあたっては、重機を使用して整地層を除去している。2次A調査区の中央に任意の基準点を設け、磁北を基軸として調査区内に3mの方眼を設定し、測量を行った。また、2次C調査については、平安時代の面的調査終了後に、重機によって再度掘り下げをし、遺物包含層のグリッド調査を行った。調査区の区分及び略称は、2次A=A調査区（A地区）、2次B=B調査区（B地区）、2次C=C調査区（C地区）、C調査区台上北地区（C台上北区）、C調査区台上南地区（C台上南区）とした。なお、全体図（北半部：第5図、南半部：第6図）のN、S、E、Wは方位を表し、数字は基準点からの距離を示している。遺構番号は、第1次調査の番号を継いでいる。

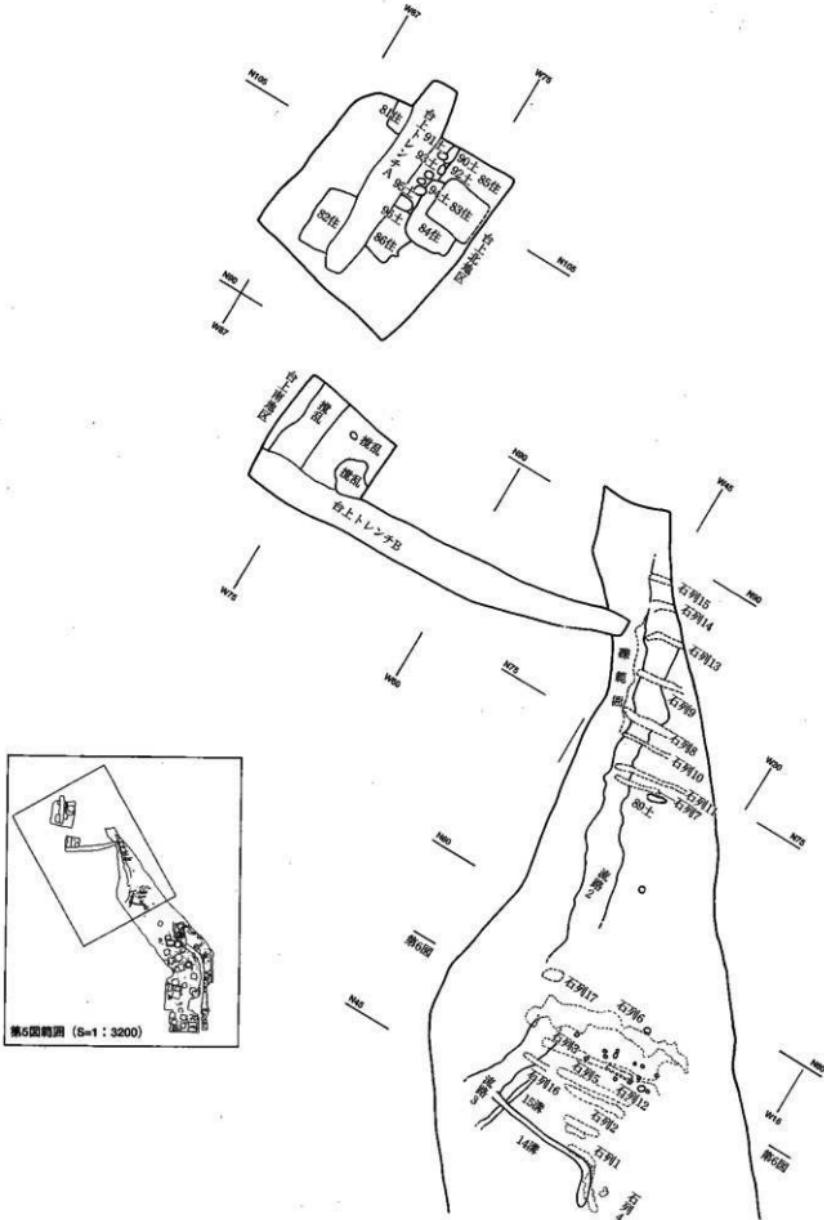
3 遺構

住居址 76軒、土坑52基、ピット262個、建物址2棟、竪穴状遺構3基、溝址4条、流路址2条、土器集中域1ヶ所、石列17本。

住居址を含む多くの遺構が平安時代後期に属すると考えられるが、古墳時代中期及び中世に属する住居址も確認されている。土坑はいくつかが墓址とみられるが、残りについては用途不明である。ピットは、掘立柱建物址を構成するもの以外についての用途は不明である。

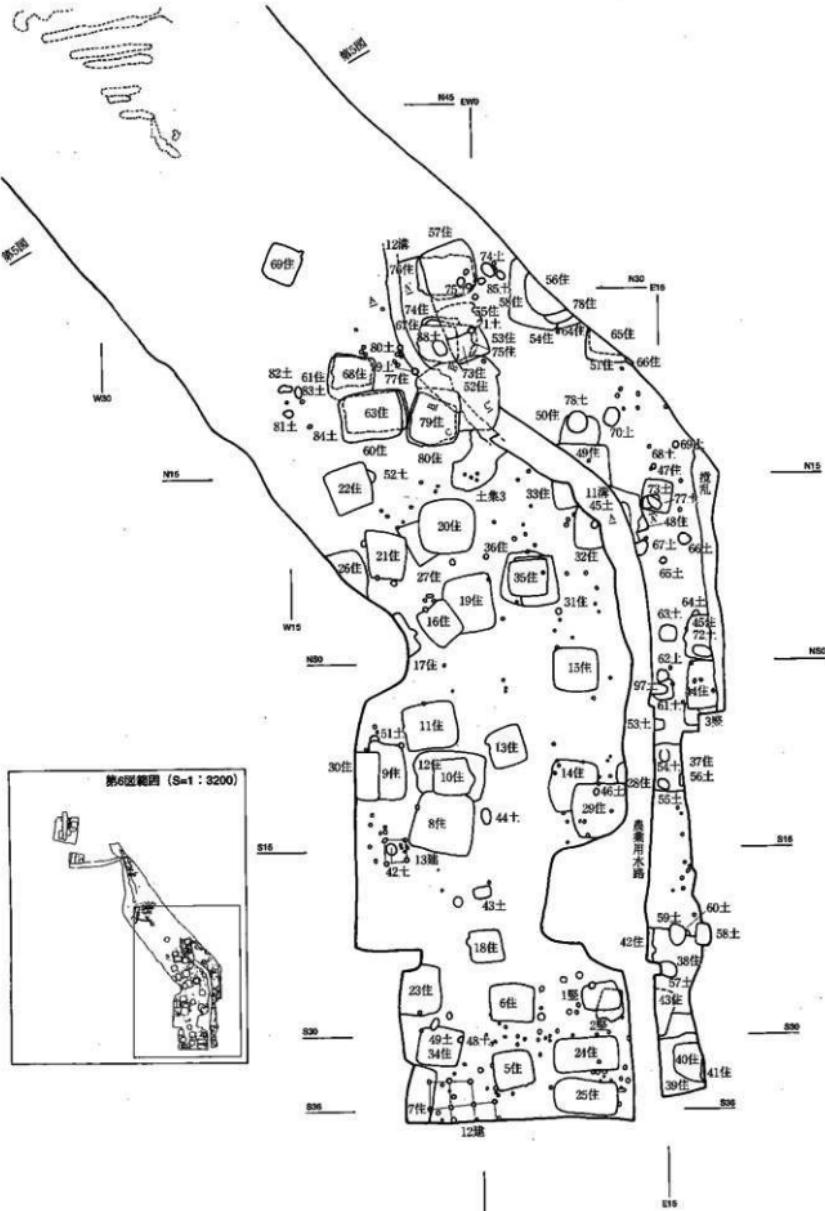
4 遺物

古墳時代から平安時代、中世にかけての遺物が出土している。古墳時代の遺物は、土師器の高杯、小形丸底壺などを中心に、38住、土集3より出土がみられ、前期末から中期にかけての良好な資料となりうるものである。平安時代以降の遺物は、土師器、黒色土器、灰釉陶器の杯、碗といった食器を中心多く出土がみられる。また綠釉陶器、青磁、白磁といった高級陶磁器片も多く出土している。金属製品では錢貨の他、錫・銀、鎌等の農具、また刀子、釘が多量に出土している。特殊遺物としては布目瓦や埴仏頭を転用した石製観音像といった寺院関連遺物、また用途不明の海星型の石製品がみられる。



第5図 平瀬遺跡 II 全体図 北半部

S = 1 : 400



第2節 遺構

1 概観

現在まで島内地区では古墳時代の遺構、遺物はほとんど知られていない。平瀬遺跡の、奈良井川を挟んで対岸の平瀬川東地蔵には坂下(泣坂)古墳群・下平瀬堆現堂古墳が、高松地蔵には高松立石古墳が存在する(した)ことが知られているが、詳細については不明な点も多く、また集落址に至っては全く確認されていない。今回の調査及び第1次調査において、古墳時代前期から中期にかけての3ヶ所の土器集中城、1軒の堅穴住居址等を確認することができた。

平安時代になると、梓川の氾濫原を避けるように集落が形成されはじめ、当遺跡をはじめ北方、北中など多くの遺跡が確認されている。また古代には、法住寺がこの付近に建立されていたことが知られている。今回の調査では寺院に直接関連する遺構は確認できず、一般的な集落址が検出され、堅穴住居址数は71軒にのぼる。この中には、塔礎の型を転用したものとみられる石製硯や布目瓦といった寺院関係遺物が出土している遺構もあり、近傍における寺院の存在を想起させてはいる。

中世では、この地を領していた平瀬氏の館が存在していたとされるが、これもまた、今回の調査ではそれに関連すると思われる遺構の確認はできなかった。鎌倉時代に属すると考えられる堅穴住居址が4軒、掘立柱建物址が2棟、その他堅穴状遺構といった遺構が検出されている。

なお、各遺構の規模については、第1~5表の一覧表を参照していただきたい。

2 堅穴住居址(第7~22図、第1表)

第5号住居址(第7図)

A地区南部で検出した。ピットは6個確認し、その内P₁、P₃、P₄、P₅が主柱穴とみられる。カマドは確認できなかつた。床面は黄褐色砂質土であり硬くない。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。覆土中に多くみられた礫は、住居廃絶時に投げ込まれたものであろう。遺物は多くみられず、土師器杯・皿、黒色土器碗、灰釉陶器碗等が出土した。本址の時期は、古墳~中世の遺物が混在するため明らかにすることはできない。

第6号住居址(第7図)

A地区南部で検出した。ピット、カマドは確認できなかつた。床面は黄褐色砂質土であり硬くない。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物は灰釉陶器碗等で出土量はあまり多くない。本址の時期は、平安~中世の遺物が混在するため明らかにすることはできない。

第7号住居址(第7図)

A地区南端で検出した。西側及び南側は調査区外にかかる。ピットは2個確認したがいずれも掘り込みは浅く、柱穴とは考えない。カマドは不明である。床面は黄褐色砂質土であり硬くない。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物は食器具、貯蔵具とともに多くの出土がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代11期、10世紀後半の平安時代中期に属すると考える。

第8号住居址(第8図)

A地区中央部で検出した。ピットは7個確認したが、いずれも柱穴と判断できない。カマドは南西隅の焼土範囲と思われるが不明である。床面は黄褐色砂質土であり硬くない。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は土師器杯・碗・盤・皿、灰釉陶器碗・段皿がみられる。本址の時期は、遺物及び切り合い関係から判断して古代14期、11世紀後半の平安時代後期に属すると考える。

第9号住居址(第8図)

A地区西部で検出した。ピットは1個確認したが柱穴と判断できない。カマドは東壁北隣の焼土範囲を想定する。床面は黄褐色砂質土であり硬くなく、床下から土坑が3基確認された。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物は土師器皿・杯、黒色土器杯・碗、灰釉陶器碗・皿がみられ、また鉄製の鋤先が1点出土している。本址の時期は、遺物及び切り合い関係から判断して古代14期、11世紀後半の平安時代後期に属すると考える。

第10号住居址(第7図)

A地区中央部で検出した。ピットは2個確認したが、いずれも柱穴と判断できない。カマドは東側中央の突出部にあったとみられるが不明である。床面は黄褐色砂質土であり硬くなく、北東部に焼土、炭化物の広がりが見られる。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土中に多く含まれる礫は、住居廃絶時に投げ込まれたものと考える。遺物は土師器杯・碗等の食器具を中心に多くの出土がみられた。本址の時期は、遺物及び切り合い関係から判断して古代14期、11世紀後半の平安時代後期に属すると考える。

第11号住居址（第9図）

A地区中央部で検出した。ピットは1個確認したが柱穴と判断できない。カマドは西壁中央より検出した粘土カマドで、火床前面に焼土及び炭化物の広がりがみられる。床面は、東側中央付近に炭化物範囲がみられ、その際際に食込んで柱或いは壁材と思われる炭化材が出土している。さらに覆土下層からは焼土及び炭化物が多く含まれていることから本址は焼失住居である可能性もある。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物としては土師器杯・壺・羽釜、灰釉陶器碗等がみられ、また特殊遺物として用途不明の海星形石製品が1点出土している。本址の時期は、遺物から判断して古代14期、11世紀後半の平安時代後期に属すると考える。

第12号住居址（第10図）

A地区中央部で検出した。ピットは1個確認したが柱穴と判断できない。カマドは確認することはできなかった。床面は黄褐色砂質土でやや硬い。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物は土師器杯・碗等食器具のみであるが、8・10住に大きく切られながらも圓化し得るものだけ33点という多量の出土がみられた。本址の時期は、遺物及び切り合い関係から判断して古代14期、11世紀後半の平安時代後期に属すると考える。

第13号住居址（第8図）

A地区中央部で検出した。ピットは確認できなかった。カマドは西壁北隅の壁を削り込んだ石組粘土カマドでよく残存しており、火床はよく被熱している。床面は小穂混じりの茶褐色砂質土で硬い。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物は土師器杯・碗・小型壺がみられ、またカマド内からは下部を欠失している土師器壺もみられる。本址の時期は、遺物から判断して古代10期、10世紀中頃の平安時代中期に属すると考える。

第14号住居址（第9図）

A地区東部で検出した。床面からピットを確認することはできなかった。柱穴は、本址を切るピットのうちP99-129-130である可能性がある。カマドは西壁中央で確認した石組粘土カマドで、袖石はよく残存している。壁はあまり残存せず緩やかに立ち上がる。覆土中に多くみられる礫は、住居廃絶時に投げ込まれたものと考える。遺物としては土師器杯・壺・灰釉陶器碗等の食器具を中心多く出土がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代9期、10世紀前半の平安時代前期に属すると考える。

第15号住居址（第9図）

A地区東部で検出した。ピットは4個確認したが、いずれも柱穴と判断できない。カマドは西壁中央で確認した石組粘土カマドで袖石はよく残存している。床面は黄褐色砂質土であり硬くない。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は土師器杯、黒色土器碗等多くの出土がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代10期、10世紀中頃の平安時代中期に属すると考える。

第16号住居址（第11図）

A地区北部で検出した。ピットは4個確認したが、いずれも柱穴と判断できない。カマドは確認することはできなかった。床下より土坑が2基確認されたが、用途は不明である。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は多く、土師器皿・小型壺、黒色土器碗・灰釉陶器碗等食器具を中心出土がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代10期、10世紀中頃の平安時代中期に属すると考える。

第17号住居址（第10図）

A地区中央部で検出した。西側の大部分が調査区外にかかり、東側のカマド部分周辺のみを調査し得た。ピットは確認できなかった。カマドは東壁中央で確認した石組粘土カマドで袖石はよく残存している。床面は黄褐色砂質土の地山でやや硬く、南壁際がテラス状になっている。遺物は、カマド周辺の出土のみながら圓化し得るものだけ16点を数え、土師器皿・小型壺、黒色土器碗・杯等がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代13～14期、11世紀後半の平安時代後期に属すると考える。

第18号住居址（第10図）

A地区中央部で検出した。壁はほとんど残存せずカマドの痕跡及び床面の範囲のみを確認したにとどまる。ピットは1個のみ確認されており、柱痕がみられることから柱穴であると考える。本址の時期は、遺物がほとんどみられないため不明である。

第19号住居址（第11図）

A地区北部で検出した。ピットは1個確認したのみで、柱穴と判断できない。カマドは確認できなかったが、床面西壁際に炭化物の広がりがみられるため、この部分に存在した可能性はある。床面は黄褐色砂質土でやや硬く、床下から土坑2基を検出した。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は土師器杯・碗・羽釜、黒色土器碗等多くの出土がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代12期、11世紀前半の平安時代中期に属すると考える。

第20号住居址（第10図）

A地区北部で検出した。ピットは6個確認したが、いずれも柱穴と判断できない。カマドは西壁北隅から被熱した石が纏まって出土したため判断したが、火床からは焼土が若干みられたのみで、残存状況は良好ではない。覆土に含まれる礫は、住居廃絶時に投げ込んだものとみられる。床面は黄褐色砂質土であり硬くない。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物は土師器杯・皿・羽釜、黒色土器碗等多くの出土がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代14期、11世紀後半の平安時代後期に属すると考える。

第21号住居址（第11図）

A地区北部で検出した。ピットは確認できなかった。カマドも確認することはできなかったが、床下土坑1内の覆土に焼土、炭化物が多く含まれるため、それがカマド残痕である可能性もある。床面は黄褐色砂質土であり硬くない。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は土師器杯・盤等食膳具を中心多く出土がみられ、これらは古代8期、11期と2時期のものがみられた。このことから、本址は古代11期、10世紀後半の平安時代中期に属すると考えるが、それ以前に古代8期、9世紀後半の平安時代前期の遺構が存在していた可能性がある。

第22号住居址（第12図）

A地区北部で検出した。ピット、カマドは確認できなかった。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は黄褐色砂質土であり硬くなく、北西隅部分がテラス状になっている。また床下から遺物の出土がみられたため、床下土坑として調査した。その結果上坑部分西壁中央にカマド跡とみられる焼土範囲が確認されたことから、本址が貼る住居址があった可能性を想定した。しかし時間的制約により詳細な調査をし得なかったため、今回はそのまま床下土坑として扱うこととした。遺物は、覆土上層部分のものと床下土坑部分合わせて、図化し得るものだけでも土師器杯・甕、黒色土器杯・碗等27点がみられた。それらは、覆土の上下による時期の駆別はできなかったが、大きくは古代8期と9期の2時期に分かれることがわかった。よって本址の時期は古代9期、10世紀前半の平安時代前期に属し、下層の床下土坑として扱った部分が古代8期、9世紀後半の平安時代前期の住居址であった可能性がある。

第23号住居址（第11図）

A地区南部で検出した。ピットは9個確認したが、いずれも柱穴と判断できない。カマドは確認できなかった。床面は黄褐色砂質土の地山で硬い。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物は、食膳具、煮炊具、貯藏具が揃つており、図化し得るものだけでは24点を数える。それらは、古代8期、11期と2つの様相を呈しているが、本址の時期は古代8期、9世紀後半の平安時代前期に属すると考えられ、11期の遺物は後に混入したものとみられる。

第24号住居址（第12図）

A地区南部で検出した。床面のピットは18個確認できた。柱痕を確認できたものはないが、いくつかは柱穴であったとみられる。また周囲に多くのピットが見られ、これらも本址に伴うものである可能性がある。カマドは確認されていない。床面は小礫混じりの暗褐色砂質土で硬く、叩き締められている。壁はほとんど残存しない。遺物は非常に少ない。本址の性格は、隣接する25住を工房跡と考えた場合、その居住空間であると考えられる。本址の時期は、形狀から判断して中世1期、13～14世紀の鎌倉時代に属すると考える。

第25号住居址（第12図）

A地区南部で検出した。床面からピットは確認できなかったが、周間に多くのピットが見られ、これらが本址に伴う可能性はある。カマドは確認できなかった。床面は小礫混じりの黄褐色砂質土で硬いが平坦ではなく、西側部分の約1/3が緩やかに落ち込む凹部になっている。底部はほぼ平坦であるが、中央部がやや高い。3方に住居壁となり、ほぼ垂直に立ちあがる。本址壁は四部分をのぞいてあまり残存せず、やや緩やかに立ち上がる。遺物はあまり多くないが、土師器器台、灰釉陶器碗等の他、中世陶器片、青白磁瓶片がみられ、覆土上層部からは皇宋通寶、紹聖元寶各1点が出土した。また東側床面部分の直上からは被熱した石が多く出土しており、その床面の小礫も被熱を受けていた。本址の性格について、今回は住居址として捉えたが、床面の状況等から考えると居住施設ではなく、何らかの工房跡と考えた方がよいかもしれない。北に隣接する25住が、本址に関わる居住空間であると考えられる。本址の時期は、遺物及び形狀から判断して中世1期、13～14世紀の鎌倉時代に属すると考える。

第26号住居址（第13図）

A地区北部で検出した。西側の一部が調査区外にかかる。ピット、カマドは確認できなかった。床面は黄褐色砂質土であり硬くなく、また平坦ではない。床下からは土坑2基が確認され、内部から遺物が出土している。壁はよく残存し、緩やかに立ち上がる。遺物は、床下土坑のものを含め、土師器杯、黒色土器碗、灰釉陶器碗等食膳具を中心に多くの出土がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代14期、11世紀後半の平安時代中期に属すると考える。

第27号住居址（第13図）

A地区北部で検出した。ピットは2個確認したが、いずれも柱穴と判断できない。カマドも確認できなかった。床面は黄褐色砂質土の地山であり硬くない。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物の量は少なく、土器器碗他若干の出土があったにとどまる。本址の時期は、遺物から判断して古代8期、9世紀後半の平安時代前期に属すると考える。

第28号住居址（第12図）

A地区東部で検出した。東側のほとんどが調査区外にかかる。ピット、カマドは確認できなかった。床面は黄褐色砂質土であり硬くない。壁はあまり残存せず、緩やかに立ち上がる。遺物は土器器杯、黒色土器碗等がみられた。本址の時期は判然とせず、遺物から判断して古代8期以降であるとしかわからない。

第29号住居址（第13図）

A地区東部で検出した。東側の一部は調査区外にかかる。ピットは1個確認され、柱穴の可能性がある。カマドは西壁北隅で確認された石組カマドで袖石もよく残存し、覆土下層に焼土を含んでいる。床面は黄褐色砂質土の地山でやや硬い。壁はあまり残存せず、緩やかに立ち上がる。遺物は土器器杯・碗・壺、黒色土器碗等がみられる。本址の時期は、遺物から判断して古代14期、11世紀後半の平安時代後期に属すると考える。

第30号住居址（第13図）

A地区西部で検出した。西側の一部は調査区外にかかる。ピットは1個確認したが、柱穴と判断できない。カマドは確認できなかった。床面は黄褐色砂質土の地山でやや硬い。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は土器器杯等食器具の他、完形の鉄製鎌先が1点出土している。本址の時期は、遺物から判断して古代14期、11世紀後半の平安時代後期に属すると考える。

第31号住居址（第14図）

A地区北部で検出した。西側の一部は調査区外にかかる。ピットは1個確認し、柱穴であると考える。カマドは東壁中央で検出した石組薪土カマドで、袖石の一部は失われている。床面は小穂混じりの暗褐色土で硬い。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は土器器杯・碗等食器具を中心に出土している。本址は36住を切り、35住に切られるが、時期については、遺物から判断して古代10期、10世紀中頃の平安時代中期に属すると考える。よって切り合い関係にある35・36住との時期差はほとんどないとみられる。

第32号住居址（第13図）

A地区北東部で検出した。東側の一部が調査区外にかかる。ピット、カマドは確認できなかった。床面は黄褐色砂質土の地山であり硬くない。壁はあまり残存せず、やや緩やかに立ち上がる。遺物の出土量は少なく、土器器壺の他若干の土器片が出土したのみである。本址の時期は、遺物から判断することはできず不明である。

第33号住居址（第13図）

A地区北東部で検出した。東側の一部が調査区外にかかる。ピット、カマドは確認できなかった。床面は黄褐色砂質土の地山であり硬くない。壁はあまり残存せず、緩やかに立ち上がる。遺物は土器器杯・皿、黒色土器杯等食器具を中心に若干の出土がみられた。本址の時期は、遺物から判断して、古代14～15期、11世紀後半～12世紀の平安時代後期に属すると考える。

第34号住居址（第14図）

A地区南部で検出した。ピットは6個確認され、その内P₁・P₃・P₄・P₆の4個が柱穴であるとみられる。カマドは確認できない。床面は暗褐色砂質土の地山であり硬くない。壁はあまり残存せず、緩やかな立ち上がりである。遺物もほとんどみられず、本址の時期を明らかにすることはできない。

第35号住居址（第14図）

A地区北部で検出した。ピットは4個確認したが、いずれも柱穴と判断できない。カマドは不明である。東壁際にある焼土は、31住カマドの残存部分であると考える。床面は小穂混じりの暗褐色土で硬い。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は多く、固化できるものだけ27点を数え、食器具を中心に出土がみられる。本址は31・36住を切り、3軒の切り合いの中では一番新しいが、時期については遺物から判断すると古代10期、10世紀中頃の平安時代中期に属するとみられ、切り合い関係にある31・36住との時期差はほとんどないと考える。

第36号住居址（第14図）

A地区北部で検出した。ピットは3個確認したが、いずれも柱穴と判断できない。カマドは不明である。床面は小穂混じりの暗褐色土で硬い。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物は土器器杯、黒色土器杯等の食器具を中心に出土がみられる。本址の時期は、遺物から判断して古代10期、10世紀中頃の平安時代中期に属すると考える。

3軒の切り合いの中では一番古いが、時期的な差はほとんどない。

第37号住居址（第14図）

B地区北部で検出した。東側及び西側は調査区外にかかる。ピット、カマドは確認できなかった。床面は黄褐色砂質土の地山であり硬くない。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物としては土師器杯・羽釜・黒色土器碗・灰釉陶器皿・椀等がみられる。本址の時期は、遺物から判断して古代11期、10世紀後半の平安時代中期に属すると考える。

第38号住居址（第15図）

B地区中央部で検出した。東側と西側は調査区外にかかる。覆土は黒褐色土で、この遺跡全般でみられる灰褐色土の覆土を有さない。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ちあがる。床は黄褐色砂質土でやや軟弱である。ピットは2個確認したが、いずれも掘り方は浅く柱穴と判断できない。カマドは調査区外にあるとみられ不明である。また炉も確認されない。遺物は床面直上から土師器高杯・壺・小形丸底壺等が出土している。本址の時期は、遺物から判断して5世紀前半の古墳時代中期に属すると考える。

第39号住居址（第15図）

B地区南端で検出した。西側及び南側の一部が調査区外にかかる。覆土内には5~20cm大の礫がみられ、住居廃絶後投げ込まれたものとみられる。床は黄褐色砂質土でやや軟弱である。ピットは4個確認され、柱穴とみられる。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ちあがる。カマドは調査区外にあるとみられ不明である。遺物の量は少なく、固化し得るものはなかった。本址の時期は、遺物から判断できず不明である。

第40号住居址（第15図）

B地区南部で検出した。ピット、カマドは確認できなかった。床面は黄褐色砂質土で非常に硬い。壁も39号住居址部分より下部はよく残存し、ほぼ垂直に立ちあがる。出土遺物は中世土器器皿等の他、青磁瓶・椀・不明品が各1点みられる。本址の時期は、遺物の量が少ないので判然としないが、中世1期、13世紀以降の鎌倉時代に属すると考える。

第41号住居址（第15図）

B地区南東隅で検出した。調査区東壁のセクションのみで確認した遺構であるが、西側壁及び南西隅を確認したため住居址と判断した。ピットは不明である。カマドは、西壁際で焼土が多量にみられるため、そこにあった可能性はあるが、面的な調査を行っていないため不明である。壁は、残存部ではしっかりと垂直な立ち上がりを確認した。遺物の出土はみられなかったため時期は判然としないが、切り合いで関係から判断して40号より新しい時期、すなわち中世1期以降、13世紀以降の鎌倉時代に属すると考える。

第42号住居址（第15図）

B地区中央部で検出した。西側の大部分は調査区外（水路下）にかかる。ピット、カマドは確認できない。床面は黄褐色砂質土でやや硬い。壁の立ち上がりはあまり明瞭ではない。遺物は非常に少なく、本址の時期は不明である。

第43号住居址（第15図）

B地区中央部で検出した。西側の大部分は調査区外（水路下）にかかる。ピットは1個確認したが柱穴と判断できない。カマドも確認できない。床面は黄褐色砂質土の地山でやや硬い。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ちあがる。遺物は非常に少なく、固化し得たものは古墳時代の高杯が1点のみであるが、本址に伴う遺物であるとは考えない。本址の時期は不明である。

第44号住居址（第15図）

C地区南部で検出した。ピットは7個確認したが、いずれも掘り方は浅く柱穴と判断できない。カマドも不明である。床面は黄褐色砂質土の地山でやや硬く、南西部に焼土の広がりがみられる。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ちあがる。遺物は土師器杯・皿・盤、黒色土器杯、灰釉陶器碗等多量の出土がみられた。土器のうち1点には墨書きもみられる。その他には高杯の脚部が1点出土しているが、これは周囲の古墳時代の遺構からの流入品であると考える。本址の時期は遺物の量の割に判然としないが、古代9期、10世紀前半の平安時代前期に属すると考える。

第45号住居址（第15図）

C地区南部で検出した。ピット、カマドは確認できなかった。床面は黄褐色砂質土の地山でやや硬く、中央部に焼土の広がりがみられる。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ちあがる。遺物の量はそれほど多くないが、食膳具、貯蔵具、煮炊具が揃って出土している。本址の時期は、遺物から判断して古代11期以降、10世紀後半以降の平安時代中期に属すると考える。

第47号住居址（第16図）

C地区南部で検出した。ピットは3個確認したがいずれも柱穴と判断できない。カマドは東壁中央で確認した石組

粘土カマドであるが、土坑に切られる。床面は黄褐色砂質土の地山でやや硬く、北東隅に周溝がみられる。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物は土師器羽釜・小型壺、灰釉陶器皿・段皿がみられる。本址の時期は、遺物から判断して古代11～12期、10世紀末～11世紀初頭の平安時代中期に属すると考える。

第48号住居址（第16図）

C地区南部で検出した。西側の一部が調査区外（水路下）にかかる。ピットは1個確認し、柱穴と考える。カマドは確認できない。床面はほとんどが11溝に切られて残存しないが、黄褐色砂質土の地山でやや硬い。壁はあまり残存せず、やや緩やかに立ち上がる。遺物は少なく、図化し得るものはない。本址の時期は、遺物から判断できず不明である。

第49号住居址（第16図）

C地区南部で検出した。西側の一部が調査区外（水路下）にかかる。ピットは2個確認したがいずれも柱穴と判断できない。カマドも確認できなかった。その他の施設は床下土坑が2基、北及び東壁沿いに周溝がみられる。床面は黄褐色砂質土地山でやや硬い。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物は土師器杯・皿、灰釉陶器碗がみられる。本址の時期は、遺物から判断して古代15期、12世紀の平安時代後期に属すると考える。

第50号住居址（第16図）

C地区南部で検出した。ピットは3個確認したがいずれも柱穴と判断できない。カマドは東壁中央で確認した石組粘土カマドであるが残存状況は良好ではない。床面は黄褐色砂質土であり硬くない。壁はあまり残存せずやや緩やかに立ち上がる。遺物は土師器杯・碗・盤、灰釉陶器碗・皿等がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代13期、11世紀の平安時代後期に属すると考える。

第51号住居址（第16図）

C地区南部で検出した。北東部は調査区外にかかる。床面で確認したピットは3個で、いずれも柱穴と断定することはできない。このうちP₃の内部から焼土、鉄滓が出土しており、また本址内からは砥石、フイゴ羽口が出土していることから、P₃は鍛冶炉とみられる。カマドは調査区外にあるとみられ不明である。床面は65住の覆土であり、あまり硬くない。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ちあがる。なお、床下で検出した65住は、本址に先行する住居址の可能性がある。遺物として土師器杯、灰釉陶器広口壺・短頸壺等がみられる。本址の時期は遺物から判断して古代14期、11世紀後半の平安時代後期に属すると考える。

第52号住居址（第17図）

C地区南部で検出した。本址内を南から北へ流れる農業用水路が切るために検出は困難であった。ピットは14個確認したがいずれも柱穴と判断できない。カマドは東壁北隅の壁を削り込んだ石組粘土カマドで袖石もよく残存する。床面は暗褐色粘土であり硬くない。壁は比較的よく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物は土師器杯・盤、黒色土器碗、灰釉陶器壺等が出土し、また青白磁瓶が1点みられた。本址の時期は、遺物から判断して古代13～15期、11世紀後半～12世紀の平安時代後期に属すると考える。

第53号住居址（第16図）

C地区南部で検出した。西側は調査区外にかかる。本址内からはピット、カマドを検出することはできなかった。床面は黄褐色砂質土であり硬くない。壁はやや緩やかに立ち上がる。遺物として土師器碗等食器具が数点みられる。本址の時期は、遺物から判断して古代12～14期、11世紀の平安時代後期に属すると考える。

第54号住居址（第18図）

C地区南部で検出した。北東部は調査区外にかかる。ピットは1個確認したが柱穴と判断できない。カマドは確認できない。床面は黄褐色砂質土でやや硬い。壁は比較的よく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物はそれほど多くはないが食器具、貯藏具、煮炊具が確認された。本址の時期は、遺物から判断して古代15期、12世紀の平安時代後期に属すると考える。

第55号住居址（第17図）

C地区南部で検出した。ピット、カマドは確認できない。床面は小砾混じりの暗褐色粘土で硬い。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物は土師器碗、黒色土器碗等食器具を中心に出土がみられた。本址の性格について、今回は住居址として扱ったが、規模・形状から判断すれば竪穴状造構とすべきものかも知れない。時期については、遺物から判断して古代12期、11世紀前半の平安時代中期に属すると考える。

第56号住居址（第18図）

C地区南部で検出した。北西部は調査区外にかかる。ピットは8個確認したがいずれも柱穴と判断できない。カマドは不明である。床面は黄褐色砂質土でやや硬い。壁は比較的よく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は土師器杯・

楕、灰釉陶器碗といった食膳具を中心に出土がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代15期、12世紀の平安時代後期に属すると考える。

第57号住居址（第18図）

C地区南部で検出した。ピットは6個確認したがいずれも柱穴と判断できない。カマドは不明である。東壁の北隅に若干の焼土、炭化物範囲を確認したため調査したが、痕跡を明らかにすることはできなかった。床面は小藻混じりの暗褐色土で硬く、床下から土坑を検出した。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物は土師器杯・碗・皿、黒色土器杯・碗、灰釉陶器碗等食膳具が多く出土している。本址の時期は、遺物から判断して古代14期、11世紀後半の平安時代後期に属すると考える。なお本址は、76住の上面にあたる部分で検出されていること、また西側部分が水路のため未調査であったことから考えると、76住の覆土上層部分である可能性もある。

第58号住居址（第18図）

C地区南部で検出した。54・56住の調査中、床面と思しき面を確認したが、54・56住の覆土の変化と捉えて調査をした。しかし両住居址の土層確認の際、それが上面に存在した住居址の床面であったことが判明したため、58住とした。そのため、本址の規模・形状については全く明らかにできず、またピット、カマドも確認できない。床面は暗灰褐色土で硬い。本址床面直上まで表土が載るため、壁もほとんど残存しない。遺物の量も少なく、本址の時期は不明である。

第60号住居址（第18図）

C地区南部で検出した。ピットは7個確認したがいずれも柱穴と判断できない。カマドは西壁北隅の石組粘土カマドであるが、袖石の多くは失われている。床面は黄褐色砂質土でやや硬い。壁は比較的よく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は土師器杯・碗・羽釜・壺、黒色土器碗、灰釉陶器碗がみられ、食膳具、煮炊具、貯蔵具が揃っている。本址の時期は、遺物から判断して古代15期、12世紀の平安時代後期に属すると考える。

第61号住居址（第19図）

C地区南部で検出した。ピットは11個確認された。このうちP₂、P₆、P₈が主柱穴とみられ、P₈の底から石が確認された。カマドは確認できなかった。床面は黄褐色砂質土でやや硬い。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は土師器杯・碗・壺、黒色土器碗等の食膳具を中心に出土がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代9期、10世紀前半の平安時代前期に属すると考える。

第62号住居址

欠番とした。後に79住として扱っている。

第63号住居址（第19図）

C地区南部で検出した。ピットは33個確認され、P₁₃・P₁₄・P₁₅は柱穴とみられる。カマドは東壁北隅で確認された粘土カマドである。床面は黄褐色砂質土でやや硬い。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物はあまりみられない。本址の時期は不明である。

第64号住居址（第18図）

C地区南部で検出した。ピットは1個確認したのみで、柱穴と判断できない。カマドは不明である。床面は黄褐色砂質土でやや硬い。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物の量は少なく、本址の時期は不明である。

第65号住居址（第19図）

C地区南部で検出した。東北部は調査区外にかかる。ピットは2個確認したが、いずれも柱穴と判断できない。カマドも確認できなかった。床面は黄褐色砂質土でやや硬い。本址を貼る51住は、本址を抵張したものである可能性がある。遺物は少なく、土師器杯等が若干出土したにとどまる。本址の時期は判然とせず、切り合い関係から判断して古代14期以前であるとしかわからない。

第66号住居址（第16図）

C地区南部で検出した。ほとんどが調査区外であるため、住居内施設の確認はできない。床面は黄褐色土の地山で硬いこと、壁もほぼ垂直にしっかりと立ち上がることから、本址を住居址と判断した。遺物は圓化し得るものはみられなかったが、若干の出土はみられた。本址の時期は判然としないが、切り合い関係から判断して古代13期以降、11世紀後半以降の平安時代後期に属すると考える。

第67号住居址（第20図）

C地区南部で検出した。ピットは2個確認したがいずれも柱穴と断定できない。壁はほぼ垂直に立ちあがる。カマドははっきりしないが、西壁中央から焼土・炭化物がみられたため、この部分がカマドの痕跡である可能性がある。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は土師器杯・盤、黒色土器碗、灰釉陶器段皿等がみられる。本址の時期

は、遺物から判断して古代13～14期、11世紀後半の平安時代後期に属すると考える。

第68号住居址（第19図）

C地区南部で検出した。ピットは4個確認し、このうちP4は柱穴とみられる。カマドは確認できなかった。床面は黄褐色砂質土でやや硬い。壁はあまり残存せず緩やかに立ち上がる。遺物量は少なく、土師器杯等若干の出土がみられたにとどまる。本址の時期は遺物が少ないため不明である。

第69号住居址（第21図）

C地区中央部で検出した。ピットは3個確認されたが、いずれも柱穴と判断できない。カマドは東壁北隅で検出した石組粘土カマドで、残存状況は良好である。床面は茶褐色粘質土の地山で硬い。壁はよく残存し、垂直に立ち上がる。遺物は土師器壺・椀、黒色土器杯等が出土した。本址の時期は判然としないが、遺物から判断して古代の11～15期、10世紀後半～12世紀の平安時代後半期に属すると考える。

第73号住居址（第20図）

C地区南部で検出した。遺構自体の残存部分が少なく、ピットは確認できなかった。カマドは東壁中央で検出した石組粘土カマドで、天井石の一部も残存し、良好な状態である。床面は黄褐色砂質土で硬い。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物はカマド周辺を中心に多く出土し、食膳具、貯蔵具、煮炊具が揃ってみられる。本址の時期は遺物から判断して古代11～12期、10世紀後半～11世紀前半の平安時代中期に属すると考える。

第74号住居址（第20図）

C地区南部で検出した。遺構自体の残存部分が少なく、ピット、カマドは確認できなかった。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物の量は少ない。本址の時期は判然としないが、遺物から判断して古代11～12期、10世紀後半～11世紀前半の平安時代中期に属すると考える。

第75号住居址（第20図）

C地区南部で検出した。遺構自体の残存部分が少なく、ピット、カマドは確認できなかった。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は少なく、土師器壺等若干の出土をみたのみである。本址の時期は判然とせず、遺物から判断して古代8期以降であるとしかわからない。

第76号住居址（第20図）

C地区南部で検出した。ピットは5個確認したがいずれも柱穴と断定できない。カマドは西壁南寄りで検出した石組粘土カマドで、上面は瓦棗に伴う投石によって壊されていたが、袖石はよく残存していた。床面は黄褐色砂質土で硬い。壁はあまり残存せず、やや緩やかに立ち上がる。遺物は土師器皿・椀、黒色土器碗、灰釉陶器碗等が出土した。本址の時期は、遺物から判断して古代14期、11世紀後半の平安時代後期に属すると考える。上面で検出した57住は、本址の上層覆土である可能性がある。

第77号住居址（第19図）

C地区南部で検出した。63住に切られ、ほとんど残存しないため、柱穴、カマドは不明である。床面は黄褐色砂質土でやや硬い。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物量も少なく、土師器皿等若干の出土をみたのみである。本址の時期は、遺物から判断できず不明である。

第78号住居址（第18図）

C地区南東部で検出した。ピットは5個確認したがいずれも柱穴と断定できない。カマドは確認できない。床面は黄褐色砂質土でやや硬い。壁はよく残存し、垂直に立ち上がる。遺物量は少なく、食膳具の土師器碗等若干量が出土したにとどまる。本址の時期は、遺物から判断して古代15期、12世紀の平安時代後期に属すると考える。

第79号住居址（第21図）

C地区南部で検出した。当初は62住として掘り下げたが不明瞭のため一旦欠番としたものが後に住居址であることが判明したので、本来ならば62住とするところであるが、整理の都合上79住とした。ピットは床面では確認できなかった。カマドは西壁中央で確認した石組粘土カマドで、袖石はかなり崩れている。床面全体に焼土・炭化物が散乱し、中央部付近では炭化材がみられることから本址は焼失住居であると考える。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は土師器杯・盤、黒色土器碗、灰釉陶器碗等がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代15期、12世紀の平安時代後期に属すると考える。

第80号住居址（第21図）

C地区南部で検出した。ピットは7個確認したがいずれも柱穴と断定できない。カマドは西壁中央部で確認したが、火床が残存するのみで良好ではない。床面は黄褐色砂質土であまり硬くない。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物は土師器杯・碗・壺、黒色土器碗、灰釉陶器碗等食膳具を中心に、固化できるものだけで27点を数える。

本址の時期は、遺物から判断して古代14～15期、11世紀後半～12世紀の平安時代後期に属するを考える。

第81号住居址（第22図）

C台上北区、遺構確認トレンチによって確認した。北側の一部が調査区外にかかる。ピットは2個確認したがいずれも柱穴と判断できない。カマドは確認できない。床面は砂礫混じり黄褐色土で硬い。壁はほとんど残存しない。出土遺物は非常に少ないと本址の時期は不明である。

第82号住居址（第22図）

C台上北区、遺構確認トレンチによって確認した。東側の一部は調査区外にかかる。ピット、カマドは確認できない。床面は砂礫混じり黄褐色土で硬い。壁はほとんど残存しない。出土遺物は非常に少ないと本址の時期は不明である。

第83号住居址（第22図）

C台上北区で確認した。東側の一部が擾乱により失われている。ピット、カマドは確認できない。床面は砂礫混じり黄褐色土で硬い。壁はほとんど残存しない。出土遺物は非常に少ないと本址の時期は不明である。

第84号住居址（第22図）

C台上北区で確認した。ピットは5個確認したがいずれも柱穴とは考えない。カマドは確認できない。床面は砂礫混じり黄褐色土で硬い。壁はほとんど残存しない。遺物としては土師器杯等がみられ、また白磁不明品底部が1点出土している。本址の時期は、遺物から判断して古代14～15期、11世紀後半～12世紀の平安時代後期に属すると考える。

第85号住居址（第22図）

C台上北区北端で確認した。北側及び東側の一部が調査区外にかかる。ピットは6個確認したがいずれも柱穴とは考えない。カマドは確認できない。床面は砂礫混じり黄褐色土で硬い。壁はほとんど残存しない。出土遺物は非常に少ないと本址の時期は不明である。

第86号住居址（第22図）

C台上北区、遺構確認トレンチによって確認した。ピットは6個確認したがいずれも柱穴とは考えない。カマドは確認できない。床面は砂礫混じり黄褐色土で硬い。壁はほとんど残存しない。出土遺物は非常に少ないと本址の時期は不明である。

3 挖立柱建物址（第23図、第2表）

第12号掘立柱建物址（第23図）

A地区南端で検出した。南側の一部は調査区外にかかるため、全体の規模は不明である。黄褐色砂質土の地山を掘り込む、切り合い関係は7往を切る。東西2間乃至3間×南北1間以上の純柱式建物址である。柱痕はP₁のみから検出された。遺物の出土はみられないため本址の時期は判然としないが、形状及び切り合い関係から中世1期、13世紀の鎌倉時代に属すると思われる。

第13号掘立柱建物址（第23図）

A地区西部で検出した。黄褐色砂質土の地山を掘り込む。他遺構との切り合い関係はない。東西、南北ともに1間四方の、内側に土坑を取込む側柱式の建物址である。柱痕はいずれのピットからも検出されない。ピット、土坑ともに遺物の出土はみられないため、本址の時期は判然としないが、形状等から中世2期、14世紀以降の室町時代に属すると思われる。

4 土坑（第24・25図、第5表）

今回の調査では52基の土坑を検出した。しかし、用途、時期の判明できるものは少なく、また遺物の出土も少ない。ここでは、遺物を伴うもの、用途について考えうるもの数個について述べていきたい。

第42号土坑（第24図）

A地区西部で検出した。他遺構との切り合い関係はない。平面形は円形である。本址は13建の4個のピットに囲まれていることから、13建に伴う土坑である可能性がある。遺物の出土はみられなかった。本址の時期は、13建に伴うものであれば中世2期、14世紀以降の室町時代に属すると考えてよいだろう。

第44号土坑（第24図）

A地区中央部で検出した。黄褐色砂質土の地山を掘り込む。他遺構との切り合い関係はない。覆土中より骨骼が若干出土している。人骨の残存状況はあまり良好ではなく、ほとんど風化しつつある。残存部位として確認できるのは

上肢骨のみで、出土状態から横臥屈葬で土葬にされていたとみられる。被葬者の年齢および性別は不明である。遺物として鉄製小刀が1点出土しており、副葬品であると考えられる。本址の時期については遺物が少ないため詳細は不明であるが、覆土より中世1期、13世紀の鎌倉時代に属すると考える。

第54号土坑（第24図）

B地区北部で検出した。他遺構との切り合い関係は37住を切る。平面形は長円形で、黄褐色砂質土の地山を掘り込む。遺物量は少ないと、特殊遺物として、裏面に三尊仏の影刻を持つ石製硯（石-79）が1点出土している。時期は遺物のみから判断できないが、覆土の状況及び切り合い関係から中世1期、鎌倉時代以降に属すると考える。

第58号土坑（第24図）

B地区東部で検出した。他遺構との切り合い関係は38住を切る。平面形は長円形で、黄褐色砂質土の地山を掘り込む。川原石を数段積んでいたようであるが、上段は耕作などによって失われ、底部の2段のみ残存している。石によって囲まれた部分の規模は長軸90cm、短軸60cmで、底部は黄褐色砂質土で三和土状に叩き締められている。その下層からは人工的な構築はみられず、また遺物の出土はなかった。本址の性格については、墓址であるとみられるが明確ではない。時期についても、古墳時代及び中世に類似したものがあるが、本址は伴出遺物がないため時期を特定することは難しい。

5 ピット

今回の調査では262個のピットを検出した。しかし、建物址を構成するものは用途、時期の判明できるものは少ない。またいくつかからは遺物の出土がみられたものの、意図的に埋設したという感じを受けるものではなく、用途を明らかにはできない。

6 壺穴状遺構（第23図、第3表）

第1号壺穴状遺構

A地区東部で検出した。黄褐色砂質土の地山を掘り込み、床面は平坦で硬い。ピット等の施設はみられない。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。西側の覆土中に多量の礫がみられ、これらは投げ込まれたものと考える。遺物は須恵器壺が1点出土したのみである。本址の時期、用途は不明である。

第2号壺穴状遺構

A地区東部で検出した。黄褐色砂質土の地山を掘り込み、床面は平坦で硬い。ピット等の施設はみられない。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物は灰釉陶器長頸壺が1点出土したのみである。本址の時期は遺物から判断して7期以降、すなわち9世紀後半以降であるとしかわからない。また用途は不明である。

第3号壺穴状遺構

C地区南部で検出した。黄褐色砂質土の地山を掘り込み、床面は平坦で硬い。ピットが1個検出されたため、当初は住居址である可能性も考えたが、形状及び規模から壺穴状遺構とした。遺物は土師器杯・碗、灰釉陶器皿がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代7期以降、すなわち9世紀後半以降であるとしかわからない。また用途は不明である。

7 溝址・流路址（第25図、第4表）

第11号溝址（第25図）

C地区南東部用水堰東で検出した。48住、49住を切る。12溝と同一のものである可能性がある。幅は概ね50cm前後で一定しており、両岸とも壁は硬いことから人工の溝と考える。覆土は暗灰褐色砂質土の単層で、底部付近に5~10cm大の礫を含む。これらの礫は自然礫であるとみられるが、人為的に投げ込まれたものである可能性が高い。用途については特定できないが、流水痕がみられないことから、区画溝等であった可能性はある。遺物としては土師器杯・碗等が混入している。本址の時期は判然としないが、12溝と同一のものである可能性があることから、古代14~15期、11~12世紀の平安時代後期に属すると考える。

第12号溝址（第25図）

C地区南部で検出した。既存の農業用水路には沿った形で検出された。幅は概ね100cm前後で一定しており、両岸とも壁は硬いことから人工の溝と考える。覆土は暗灰褐色土で、径10~20cm大の礫を多く含む。これらの礫は、多くが自然礫であるとみられるが、主として底部からまとめてみられるため、人為的に投げ込まれたものである可能性が高い。遺物は土師器杯・碗等が混入している。また特殊遺物として布目瓦の小片が数点みられる。用途について

は特定できないが、11溝同様流水痕がみられないことから、区画溝等であった可能性はある。本址の時期については、遺物及び他遺構との切り合いから判断して古代14～15期、11～12世紀の平安時代後期に属する考える。11溝と同一のものである可能性がある。

第13号溝址

当初流路2を13溝と考えたが、自然流路と判断したため欠番とした。

第14号溝址

C地区南部で検出した。幅は概ね50cm程度で一定し、両岸とも壁は硬いこと、また意図的に曲げて掘られていることから人工の溝と考える。覆土は上層が暗灰褐色粘質土、中層が暗黃灰色土、下層が暗灰褐色土である。遺物は鉄製品等が若干みられた。本址の用途は不明であるが、東側部分において石列4と一部重なるため、石列に関連した遺構かもしれない。本址の時期は不明である。

第15号溝址

C地区南部で検出した。流路3に沿った形で確認された。幅は概ね40cm程度で一定し、また両岸とも硬いことから人工溝と考えた。覆土は暗灰色砂質土である。遺物はほとんどみられない。本址の用途及び時期は不明である。

第2号流路址

C地区北部で検出した。当初は暗茶褐色の帯を溝と考えたが、幅も一定ではなく、覆土である暗茶褐色砂質土の堆積も極めて浅いことから、人工溝ではなく、比較的短い期間の流路であると判断した。方向としては南から北に向かって緩やかに流れたとみられ、上流にあたる流路3と同一である可能性がある。遺物は土師器杯・椀等の小片を若干含むが、流れ込みによるものとみられる。本址の時期は不明である。

第3号流路址

C地区北部で検出した。流路2の追跡調査によって確認した。中途で流路2と断続しているため別の流路3としたが、流路2と同じく暗茶褐色土の覆土であり、指向する方向もほぼ同じであるため、同一のものと考えてよいかもしれない。遺物は土師器杯・椀等の小片を若干含むが、流れ込みによるものとみられる。本址の時期は不明である。

8 土器集中域（第23図）

A地区北東部で検出した。平面形は不整形で、北東の一部は調査区外にかかる。他遺構との切り合い関係は、P176、177、178、179に切られる。また52住、12溝にも切られるとみられる。確認された規模は長軸(320)cm×短軸213cmで緩やかに落ち込み、深さは5～21cmである。底部は凸凹がみられ、あまり平坦ではない。覆土は黒褐色粘質土で単層である。当初は、黒色土が堆積した部分が住居址などの遺構であると考えたが、平面形も不定形であること、落ち込みもなだらかで壁が存在せず、底部に凸凹がみられ床面が確認できること、しかし覆土中に多量の遺物（土器）が堆積した形で出土しているのがみられるという理由から、第1次調査において確認した2ヶ所の土器集中域と同様の遺構であると考え、本址を第3号土器集中域として扱うこととした。本来ならばグリッドを設定して、出土位置を確認しながら遺物の取り上げをしなければならないのだが、時間的制約により、一部の土器を除き、出土状況を記録することができなかったことを記しておく。ただし、本址において確認された土器はほぼ取り上げることができた。本址より出土した土器については次節において詳述するが、4世紀末から5世紀初頭、古墳時代前中期から中期初頭にかけてのものである。玉類、石製品については、遺構覆土による精査(洗浄)ができなかったこともあり、確認することはできなかった。

9 石列

今回の調査で、17本の石列が確認された。いずれもC調査区北部で検出している。当初、検出した石列3及び石列4からそれぞれ綠釉陶器碗片、青磁小片が出土したことから古代の何らかの遺構ではないかと考えた。しかし高い部分から掘り込まれているものもあるため、近世以降の暗渠等である可能性もある。詳細な時期及び用途については明らかにできない。

第1表 住居址一覧表

()：推定、()：残存

順位	地名	面積	南北	東西	南北	東西	南北	東西
5 A 7	隅丸方形	284×284×24	7.46	N-5° -W	不明		不明	P 20-21を切る
6 A 7	隅丸長方形	348×288×58	8.15	N-0°	不明		不明	
7 A 7	方形か	(450) × (216) × 62	(7.70)	N-13° -E	不明	10C後 平安中	12建に切られる	
8 A 8	隅丸方形	492×468×24	19.95	N-11° -E	西壁南寄りか	11C後 平安後	12往を切る 10往、P92に切られる	
9 A 8	隅丸長方形	456×284×30	(11.26)	N-3° -W	西壁北寄りか	11C後 平安後	51土を切る 30往、P141に切られる	
10 A 7	隅丸方形	336×280×42	7.36	N-90° -E	東壁中央か	11C後 平安後	8-12往を切る	
11 A 9	隅丸長方形	420×376×30	12.94	N-99° -W	西壁中央 鉢土	11C後 平安後	P 114に切られる 海星形石製品出土	
12 A 10	隅丸長方形	568×372×40	(17.07)	N-5° -E	不明	11C後 平安後	8-10往に切られる	
13 A 8	方形	300×280×28	6.95	N-15° -W	西壁北隅 石組粘土	10C中 平安中		
14 A 9	隅丸方形	408×384×32	12.59	N-88° -W	西壁中央 石組粘土	10C前 平安前	29往・46土・P99-129- 130-131-132に切られる	
15 A 9	隅丸方形	360×340×32	10.46	N-88° -W	西壁中央 石組粘土	10C中 平安中	P173に切られる	
16 A 11	隅丸長方形	320×276×48	7.29	N-34° -W	不明	10C中 平安中	19往を切る P175に切られる	
17 A 10	不明	356 × (144) × 48	(2.25)	N-64° -E	東壁中央 石組粘土	11C後 平安後	西側区域外にかかる	
18 A 10	隅丸方形	264×248×-	6.00	N-6° -W	西壁北寄りか		不明	
19 A 11	隅丸長方形	436×392×44	(14.84)	N-11° -W	西壁中央か	11C前 平安中	16往、P137に切られる	
20 A 10	隅丸方形	448×424×32	14.79	N-0°	北壁西隅 石組粘土	11C後 平安後	27往を切る	
21 A 11	長方形	360×316×40	9.33	N-85° -W	西壁中央か	10C後 平安中	27往を切る P147に切られる 下層に9C後の住居址か	
22 A 12	方形	346×332×68	10.00	N-20° -W	不明	10C前 平安前	52土を切る 下層に5C後の住居址か	
23 A 11	隅丸方形か	400 × (316) × 60	(9.95)	N-1° -E	不明	9C後 平安前	西側区域外にかかる	
24 A 12	隅丸長方形	492×256×8	11.97	N-0°	なし	13~14C 縁倉	P161-188を切る P186に切られる 25往とセッカ?	
25 A 12	隅丸長方形	520×276×48	11.69	N-8° -E	なし	13~14C 縁倉	P64を切る 住居ではなく工房か? 24往とセッカ?	
26 A 13	不明	(324) × (256) × 56	(6.01)	N-7° -W	不明	11C後 平安後	西側区域外にかかる	
27 A 13	不明	352 × (192) × 24	(4.14)	N-30° -W	不明	9C後 平安前	20-21往に切られる	
28 A 12	不明	(165) × (70) × 16	(0.86)	不明	不明	10C~ 不明	29往に切られる 東側区域外にかかる	
29 A 13	隅丸長方形	444×416×26	(15.65)	N-91° -W	西壁北隅 石組粘土	11後 平安後	14往を切る P 127-136-166-167- 168に切られる 東側区域外にかかる	
30 A 13	不明	360 × (180) × 44	(5.70)	N-0°	不明	11C後 平安後	9往に切る 西側区域外にかかる	
31 A 14	隅丸長方形	408×328×40	(11.56)	N-84° -E	西壁中央	10C中 平安中	36往を切る 35往に切られる	
32 A 13	不明	(332) × (224) × 12	(5.07)	N-0°	不明	11~12C 平安後	45土、P116に切られる 東側区域外にかかる	
33 A 13	不明	(220) × (160) × 22	(2.92)	N-0°	不明			
34 A 14	隅丸方形	336×316×8	9.19	N-11° -E	不明		不明 48-49土に切られる	
35 A 14	長方形	316×288×42	7.65	N-0°	不明	10C中 平安中	31-36往を切る P169に切られる	
36 A 14	隅丸長方形	428×268×34	(9.83)	N-8° -E	不明	10C中 平安中	31-35往、P143に切ら れる	
37 B 14	不明	384 × (216) × 44	(7.34)	不明	不明	11C前 平安中	53-54-55土に切られる 東側西側区域外にかかる	
38 B 15	不明	660 × (400) × 44	(21.03)	N-8° -E	不明	5C前 占墳中	42-43往、57-58土に切 られる 東側西側区域外にかかる	
39 B 15	不明	484 × (348) × 32	(15.88)	不明	不明	40-41往に切られる	西側南側区域外にかかる	

地 点	形 状	寸 法	材 質	付 属	施 工	付 属	施 工	付 属	施 工
40 B 15	不明	348×(228)×52	(4.89)	不明	不明	13~14C 縫合	39住を切る 41住に切られる 東側区域外にかかる		
41 B 15	不明	(184)×(20)×60	(0.34)	不明	不明	13~14C 縫合	39~40住を切る セクションのみで確認		
42 B 15	不明	(276)×(68)×20	(0.96)	不明	不明	不明	38住を切る 西側区域外にかかる		
43 B 15	不明	(380)×(180)×30	(4.59)	N-11°-E	不明	不明	38住を切る 西側区域外にかかる		
44 C 15	不明	392×(240)×40	(7.57)	N-0°	不明	10C前 平安前	45住、3箇所を切る P203~204-207に切られる 東側区域外にかかる		
45 C 15	不明	372×(204)×48	(5.82)	N-0°	不明	10C後~ 平安中	64住、P209を切る 44住、72住に切られる 東側区域外にかかる		
46	欠番	-	-	-	-	-	-	欠番	
47 C 16	方形	244×236×24	5.15	N-82°-W	東壁中央 石組粘土	10~11C 平安中	73~77住に切られる		
48 C 16	不明	(252)×(132)×18	(0.60)	不明	不明	不明	11溝に切られる		
49 C	隅丸方形か	420×(342)×26	(6.70)	N-0°	不明	12C 平安後	50住を切る 11溝に切られる		
50 C 16	不明	328×(220)×12	(6.21)	N-90°-E	東壁中央	10C 平安後	49住、78住に切られる		
51 C 16	不明	(308)×(248)×62	(4.23)	N-0°	不明	11C後 平安後	66住に切られる 東側区域外にかかる P31燃治炉か		
52 C 17	隅丸方形	624×596×24	(32.13)	N-80°-E	東壁北隅 石組粘土	11~12C 平安後	53~58住を切る 79住、12住に切られる		
53 C 16	不明	(286)×(232)×32	(5.65)	N-26°-W	不明	11C 平安後	67~73-74~75住を切る 52~55住、71住に切られる 西側区域外にかかる		
54 C 18	隅丸長方形	512×380×44	(14.26)	N-10°-E	不明	12C 平安後	56~58~54~78住に切られる 北東側区域外にかかる		
55 C 17	不明	(292)×(248)×62	(6.07)	N-24°-W	不明	11C前 平安中	53~67~73~74~75住を切る 71住、P219に切られる 西側区域外にかかる		
56 C 18	不明	(404)×(180)×32	(4.80)	不明	不明	12C 平安後	54~58~64~78住を切る 北東側区域外にかかる		
57 C 18	方形	428×412×48	13.68	N-17°-W	不明	11C後 平安後	76住を切る 75住、P224に切られる 76住の覆土か		
58 C 18	不明	-×-×16	-	不明	不明	不明	54住を切る 56~78住に切られる		
59	-	-	-	-	-	-	-	欠番	
60 C 18	隅丸長方形	500×388×32	17.10	N-98°-W	東壁南隅 石組粘土	12C 平安後	61住を切る		
61 C 19	隅丸方形	372×372×36	(11.96)	N-4°-E	不明	10C前 平安前	68住を切る 60住に切られる		
62	-	-	-	-	-	-	-	欠番	
63 C 19	隅丸長方形	500×320×44	13.98	N-7°-W	東壁北隅 粘土	11C後か	77住を切る 60住に切られる		
64 C 18	不明	(204)×(52)×28	(0.66)	不明	不明	不明 ~12C	54住を切る 56~78住に切られる 東側区域外にかかる		
65 C 19	不明	(260)×(196)×16	(2.82)	不明	不明	12C 平安後	51住に切られる 北東側区域外にかかる		
66 C 16	不明	(72)×(22)×36	(0.11)	不明	不明	不明 11C後か	51住を切る 北東側区域外にかかる		
67 C 20	隅丸方形	308×304×34	8.33	N-1°-E	西壁中央か	11C後 平安後	73~74~75住を切る 53~55住、88住に切られる		
68 C 19	長方形	292×284×12	6.90	N-0°	不明	不明	61住に切られる		
69 C 21	隅丸方形	296×268×36	7.20	N-22°-E	東壁北隅 石組粘土	10~12C 平安後半			
70	-	-	-	-	-	-	-	欠番	
71	-	-	-	-	-	-	-	欠番	
72	-	-	-	-	-	-	-	欠番	
73 C 20	隅丸長方形	376×296×28	(11.03)	N-105°-E	東壁中央 石組粘土	10~11C 平安中	74~75住を切る 52~55~56~73住に切られる		
74 C 20	不明	288×(64)×26	(0.90)	不明	不明	10~11Cか	53~55~67~73住に切られる		
75 C 20	不明	240×(44)×28	(0.62)	不明	不明	10C~ 不明	53~55~67~73住に切られる		
76 C 20	隅丸長方形	468×288×20	12.64	N-95°-W	西壁南隅 石組粘土	11C後 平安後	57住に切られる 57住は覆土上層か		

77	C 19	不明	(332) × (20) × 32	(0.19)	不明	不明	不明 60-63住に切られる
78	C 18	不明	(200) × (108) × 36	(1.87)	不明	不明	12C 平安後 54-64住を切る 56住に切られる 北側区域外にかかる
79	C 21	隅丸長方形	460 × 358 × 40	14.70	N - 82° - W	西壁中央 石組筋土	平安後 52-80住を切る 77住、12溝に切られる
80	C 21	隅丸方形	396 × 372 × 44	11.83	N - 72° - W	西壁中央	平安後 11～12C 11-79住、12溝に切られる
81	C 22	不明	(258) × (184) × 6	(3.42)	不明	不明	不明 確認トレンチに切られる 北側区域外にかかる
82	C 22	不明	520 × (288) × 8	(12.67)	N - 0°	不明	不明 確認トレンチに切られる
83	C 22	方形	(432) × 392 × 12	(14.91)	N - 7° - E	不明	不明 84-85住を切る
84	C 22	長方形	540 × 420 × 10	(20.98)	N - 0°	不明	11～12C 85住を切る 平安後 83住に切られる
85	C 22	不明	(500) × (300) × 8	(13.05)	不明	不明	不明 83-84住に切られる 北側区域外にかかる
86	C 22	不明	416 × (284) × 8	(9.02)	N - 15° - E	不明	不明 84住、96土、確認トレンチに切られる

第2表 堀立柱建物址一覧表

():推定、():残存

12	A 23	不明 縦柱式	N - 0° (6.97)	2間(3間) ×1間以上 340(536) × 220	桁行 184～220 (202) 梁行 164～180 (172)	円形	径 32～52 深 16～60	P 1 のみ	不明 中世 1 (鎌倉)か
13	A 23	方形 側柱式	N - 3° - E 2.90	1間×1間 168 × 184	桁行 184 梁行 168	円形	径 28～48 深 12～24	-	不明 中世 2 (室町)か

第3表 壁穴状遺構一覧表

():推定、():残存

1	A 23	隅丸長方形	312 × 232 × 22	5.12	N - 2° - E	なし	不明	2棟を切る P52に切られる	
2	A 23	隅丸長方形	244 × 192 × 44	2.88	N - 4° - W	なし	9C～ 不明	1壁に切られる	
3	C 23	不明	(260) × 172 × 30	(1.91)	N - 0°	ピット1個	9C～ 不明	44住に切られる 東側区域外にかかる	

第4表 溝、流路址一覧表

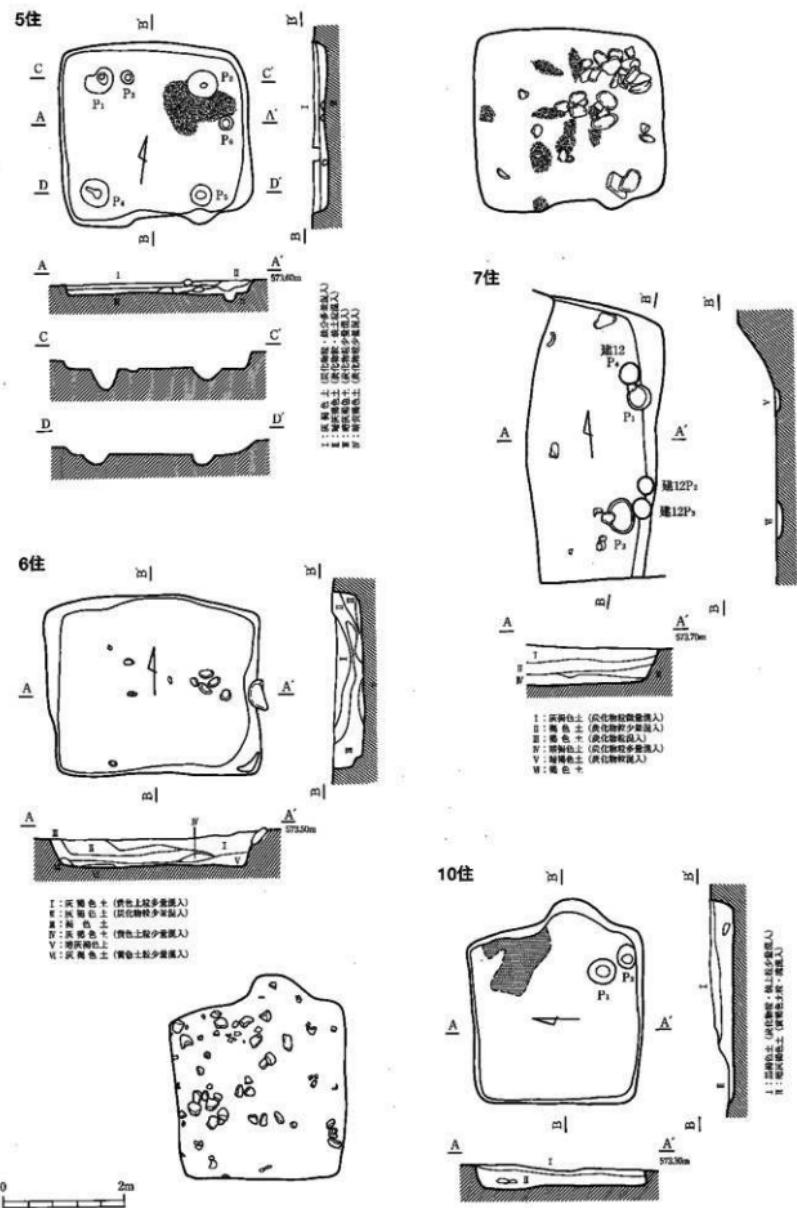
():推定、():残存

11	C 南	N9-B12 (北西端)	N13-E12 (南端)	半円形	(540)	100 ～110	30 ～35	不明 11～12Cか	48-49住を切る 12溝、同一か 両端は区域外にかかる
12	C 南	N15-E1 (南端)	N31-W7 (北端)	半円形	(3,200)	100 ～200	17 ～22	11～12C 平安後	52-79-80住を切る 第25号 11溝、同一か 両端は区域外にかかる
13	溝								欠番
14	C 南	N38-W25 (南端)	N42-W36 (西端)	逆台形	(1,280)	40 ～60	15 ～20	不明	N41-E26で約60度走る 15溝を切る 石列4に伴うか
15	C 南	N39-W35 (南端)	N45-W33 (北端)	半円形	(580)	40 ～50	8 ～10	不明	14溝に切られる
流路 2	C 北	N54-W36 (南端)	N84-W44 (北端)	皿状	(3,080)	140 ～300	2 ～10	不明	石列7-8-9-10-11-13-14 に切られる 流路3と同一か
流路 3	C 南	N42-W38 (南端)	N49-W34 (北端)	皿状	(740)	160 ～240	2 ～8	不明	14溝、石列16に切られる 流路2と同一か

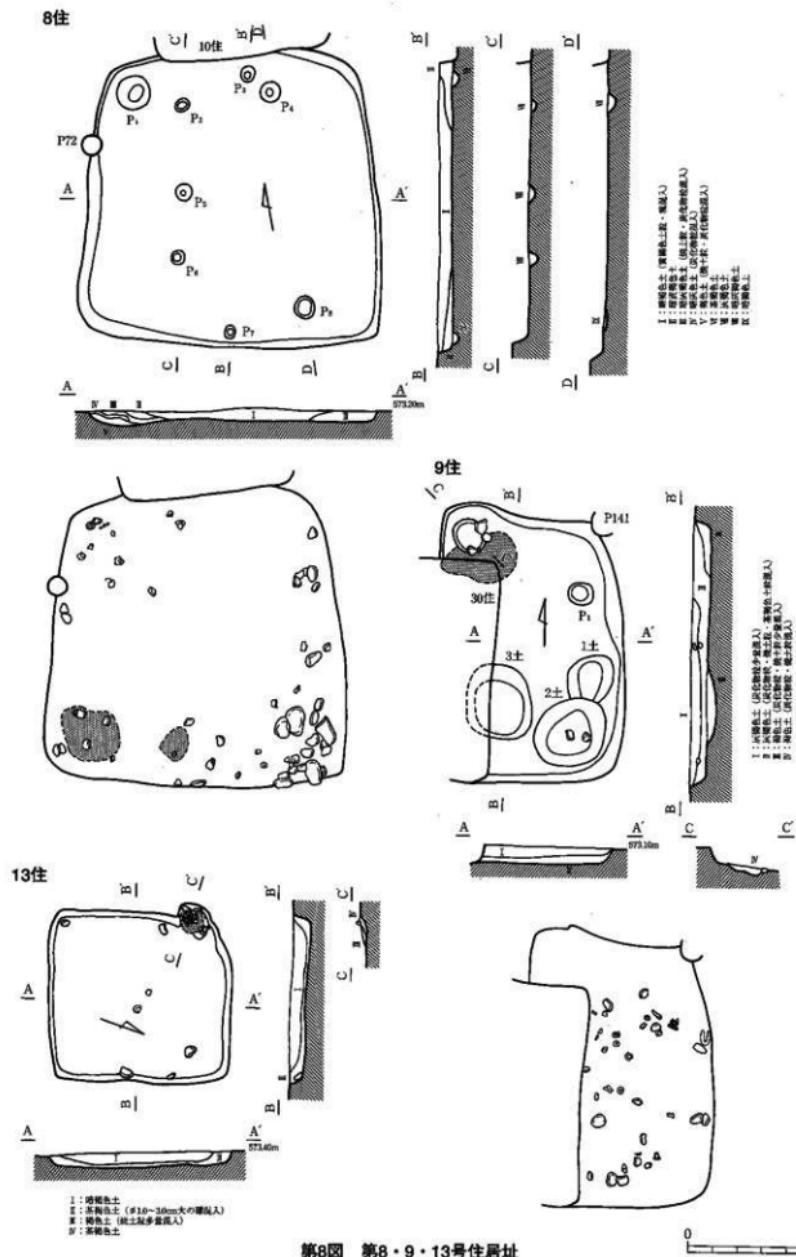
第5表 土坑一覧表

():推定、():残存

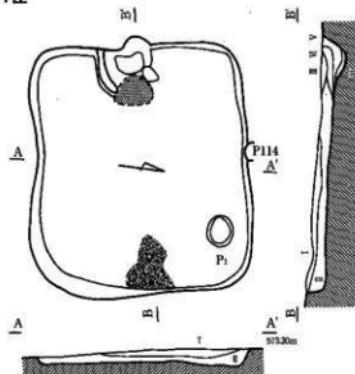
地盤	層	形	寸法	性状	切る	備考
42	A中 24	円形	85×76×24	中世か	13往に伴うか	
43	A中 24	長円形	144×90×16	中世	墓地か	
44	A中 24	楕円形	136×68×15	中世	墓地 剣葬執刀出土	
45	A北 24	楕円形	70×64×8		32往を切る、北東側区域外にかかる	
46	A中 24	長円形	58×48×20	10C中~	14往を切る	
47	-	-	-	-	-	欠番
48	A南 24	椭円形	60×48×10		34往を切る	
49	A南 24	長円形	104×56×4		34往を切る	
50	A中	不明	48×-×14		28往を切る、20往のセクションでのみ確認	
51	A中 24	椭円形	80×68×24	~11C後	9往に切られる	
52	A北 24	不明	126×(56)×52	9~10C	22往に切られる	
53	B北	長円形	(84)×82×75	13C	西側区域外にかかる	
54	B北 24	長円形	90×75×36	中世か	37往を切る、遺物として三輪仏形剣のある石製鏡出土	
55	B北 24	椭円形	112×92×64	中世か	37往を切る	
56	B北 24	不明	104×(36)×80	中世か	37往を切る、東側区域外にかかる	
57	B南 24	円形	124×(124)×50		38往を切る、西側区域外にかかる	
58	B南 24	長円形	152×124×24	古墳或は中世	38往を切る、石組で曲まれている、墓地か	
59	B南 24	椭円形	164×132×100		38往、60土を切る	
60	B南 24	不明	(48)×(44)×16		38往、59土に切られる	
61	C南 24	不整円形	170×160×20		53~62土、P205に切られる	
62	C南 24	不整長円形	100×80×24		61土を切る	
63	C南 24	円形	132×132×34			
64	C南 24	不明	60×(40)×6	~10C前	45往に切られる	
65	C南 24	円形	54×48×8			
66	C南 24	円形	88×76×12			
67	C南 24	不整楕円形	132×100×34	古代	11溝に切られる、西側区域外にかかる	
68	C南 25	円形	40×36×4		P225を切る	
69	C南 25	円形	54×44×10			
70	C南 25	長円形	152×116×14			
71	C南 25	円形	52×46×12	中世	53~55土を切る	
72	C南 25	椭円形	158×92×56	10C後~	45往を切る	
73	C南 25	長円形	144×102×26	11C前~	47往を切る、77土に切られる	
74	C南 25	椭円形	122×82×18			
75	C南 25	長円形	72×64×8	中世か	57往を切る	
76	-	-	-	-	-	欠番
77	C南 25	不整楕円形	132×84×18	11C前~	47往、73土を切る	
78	C南 25	円形	164×164×26	11C前~	50往を切る	
79	C南 25	円形	52×50×14	中世	12溝を切る	
80	C南 25	円形	48×44×12	中世	12溝を切る	
81	C南 25	椭円形	82×56×20	11~12C		
82	C南 25	不整形	104×44×24			
83	C南 25	椭円形	94×69×18			
84	C南 25	椭円形	42×28×12			
85	C南 25	椭円形	76×54×8	古墳		
86	-	-	-	-	-	欠番
87	-	-	-	-	-	欠番
88	C南 25	長円形	128×100×16	9C後~		
89	C南 25	長円形	174×32×10			
90	C台 25	椭円形	(162)×(60)×-		85往、91土に切られる、未確認	
91	C台 25	円形	84×76×12		90土を切る	
92	C台 25	椭円形	68×(32)×6		85往に切られる	
93	C台 25	椭円形	72×58×12			
94	C台 25	円形	62×62×12			
95	C台 25	椭円形	96×76×16	中世か	84往を切る	
96	C台 25	長円形	(156)×112×14		86往を切る、確認トレンチに切られる	
97	C南 24	長円形	136×92×76		61土を切る	



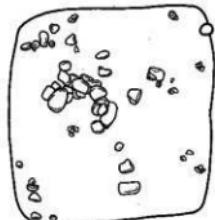
第7図 第5~7・10号住居址



11住

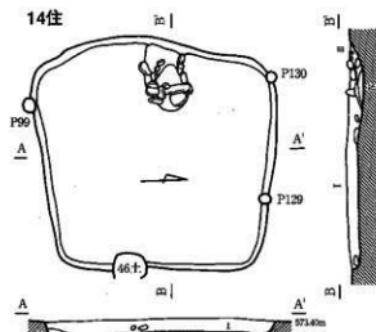


I: 烧土 (未烧物较少混入)
II: 烧土 (未烧物较多混入, 土块被混入)
III: 烧土 (烧土块被混入)
IV: 烧土 (烧土块混入)
V: 灰褐色土 (灰化物较少, 土块较少混入)
VI: 黑褐色土 (灰化物多, 土块多混入)

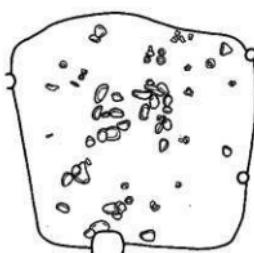


0 2m

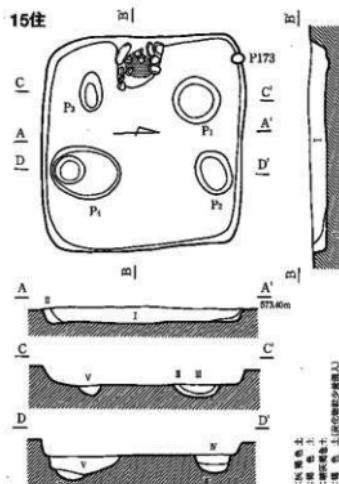
14住



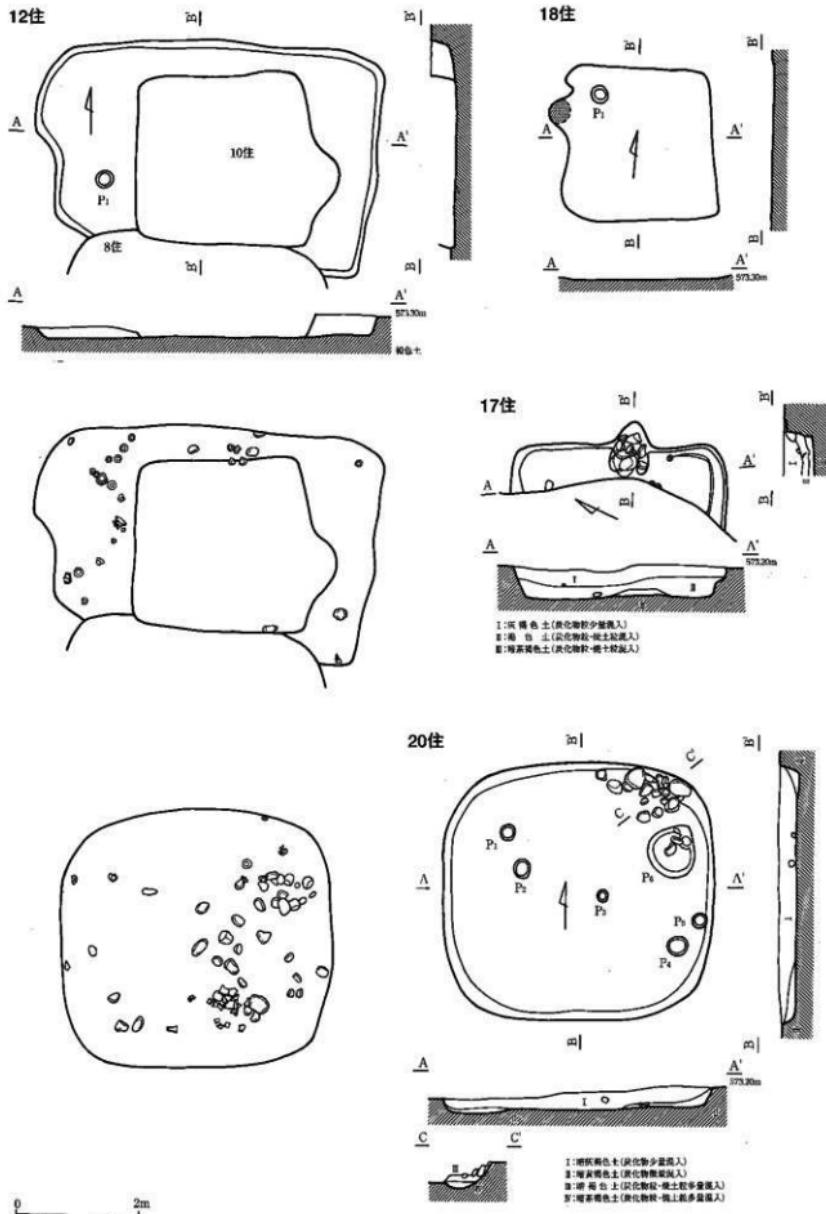
I: 灰褐色土 (灰化物少, 土块少混入, 上部较分层)
II: 灰褐色土 (土层均匀, 均质)
III: 灰褐色土 (灰化物少, 黄褐土)
IV: 黑褐色土 (灰化物多, 黄褐土)



15住



第9図 第11・14・15号住居址

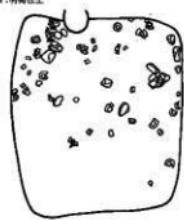


第10図 第12・17・18・20号住居址

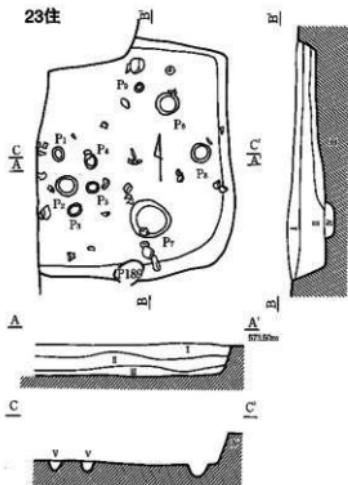
16住



I: 布面色土(鉄分・黄化物多量・鉄上鉄鉱入)
II: 滅失層上(鉄分・黄化物多量・鉄鉱鉄入)
III: 塗覆色土
IV: 滅失層下(鉄分・黄化物少量・鉄土鉄多量混入)
V: 特殊色土

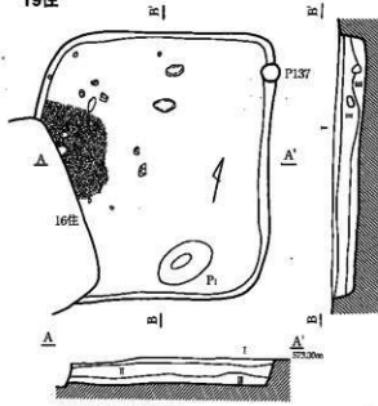


23住



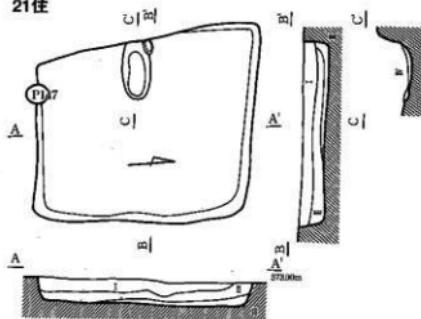
I: 布面色土(鉄分多量者入)
II: 滅失層上(鉄分少量・鉄土多量・鉄化物鉄入)
III: 滅失層下(黄褐色土・鉄分少量混入)
IV: 塗覆色土
V: 滅失層上
(I-V部は 0~10~20cm代の鉄少量混入)

19住

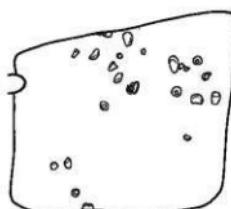


I: 布面色土(茶褐色土鉄混入)
II: 滅失層上(鉄分・黄化物多量混入)
III: 特殊色土

21住



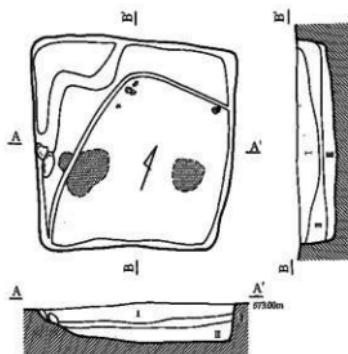
I: 布面色土(鉄分多量混入・やや鐵質)
II: 滅失層上(鉄分・鉄土多量・鉄化物鉄入)
III: やや鉄質の強い土層
IV: 塗覆色土(鉄化物鉄・鉄土鉄多量混入)



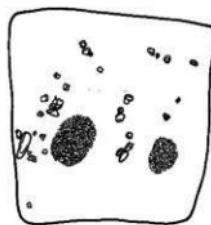
0 2m

第11図 第16・19・21・23号住居址

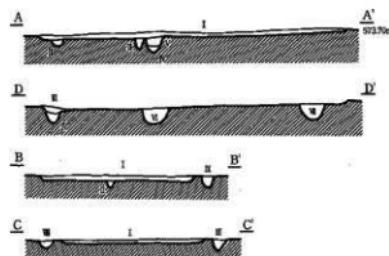
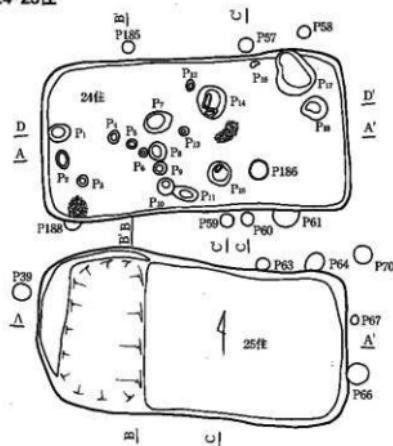
22住



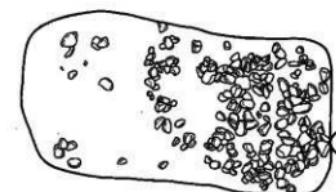
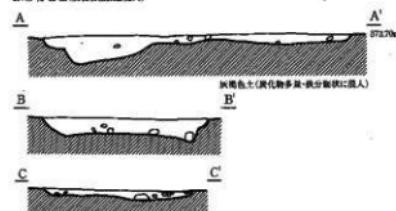
I:灰褐色土上(茶褐色土被少量侵入)
II:褐色土
III:深褐色土



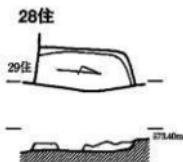
24・25住



I:灰褐色土(铁分多量侵入)
II:灰褐色土
III:深褐色土(茶褐色土被少量侵入)
IV:灰褐色土
V:灰褐色土(茶褐色土被少量侵入)
VI:灰褐色土(深褐色土被少量侵入)
VII:深褐色土(灰褐色土被侵入)
VIII:深褐色土
IX:褐褐色土上(灰褐色土被少量侵入)

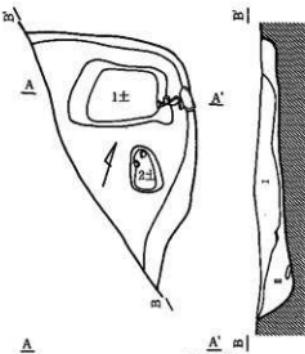


0 2m

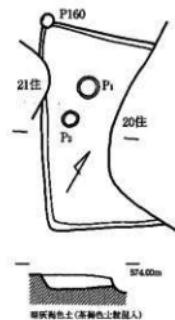


第12図 第22・24・25・28号住居址

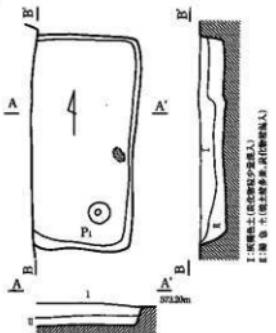
26住



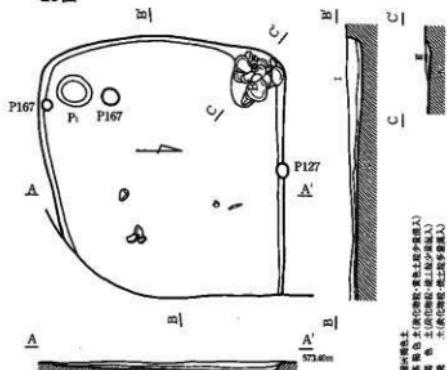
27住



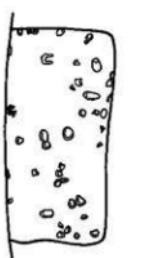
30住



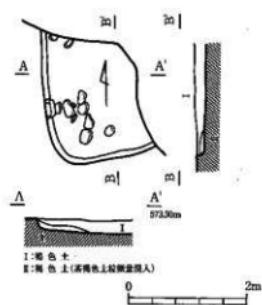
29住



32住

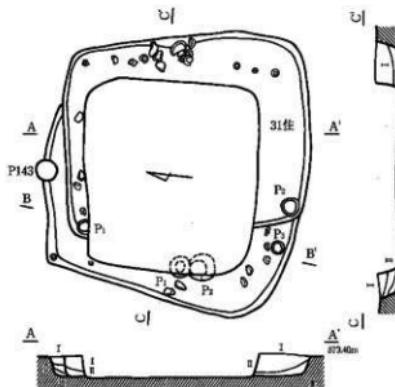


33住



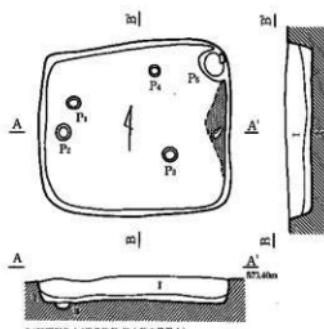
第13図 第26・27・29・30・32・33号住居址

31・36住



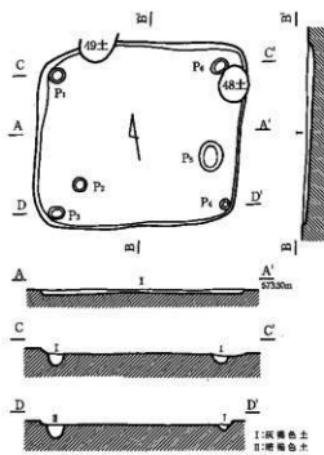
36住
I:灰褐色土(炭化物較多量混入)
II:灰褐色土(炭化物較少量混入)
III:深褐色土(炭化物較少量混入)
IV:深褐色土(炭化物較少量混入)

35住

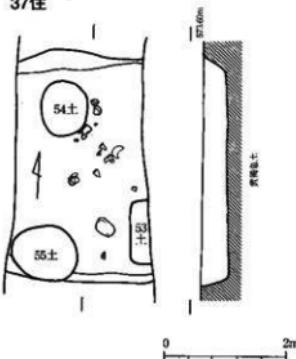


I:灰褐色土(炭化物較多量混入)
II:深褐色土(炭化物較少量混入)
III:深褐色土(炭化物較少量混入)

34住

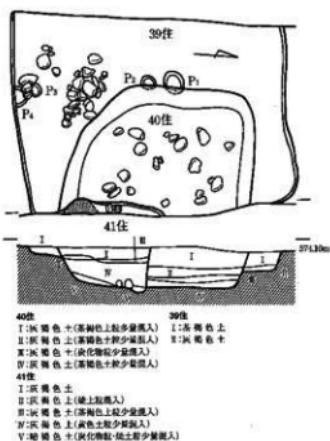


37住

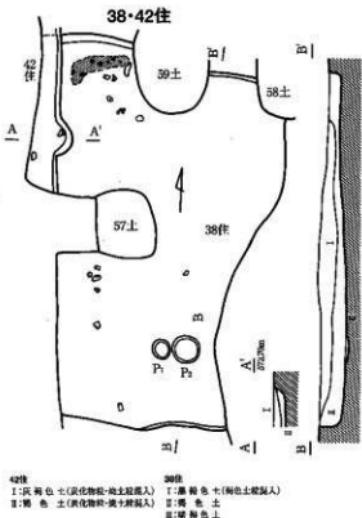


第14図 第31・34~37号住居址

39-40-41住



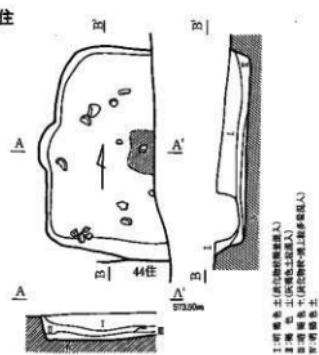
38-42住



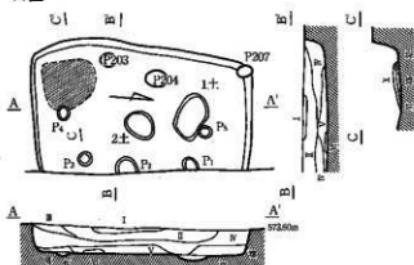
43住



45住

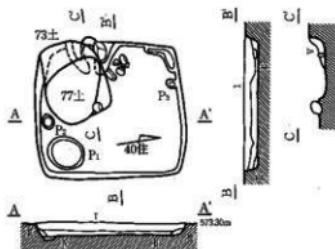


44住

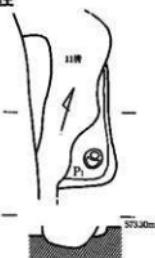


第15図 第38～45号住居址

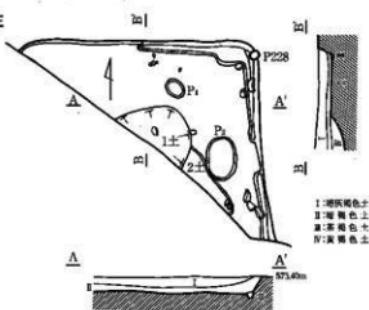
47住



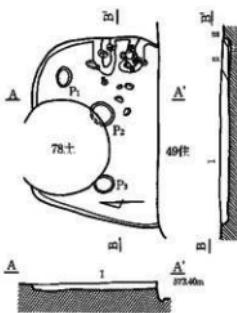
48住



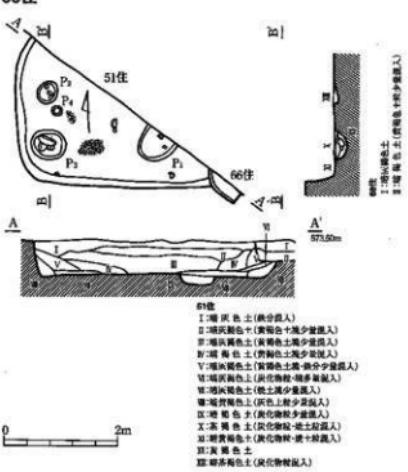
49住



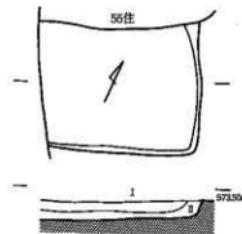
50住



51・66住

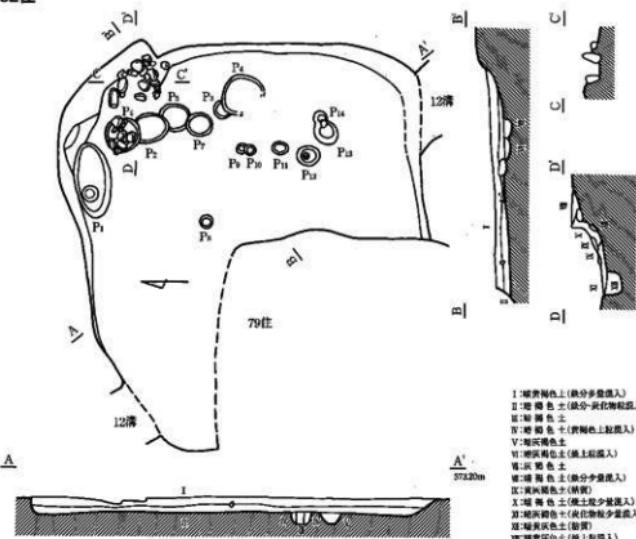


53住

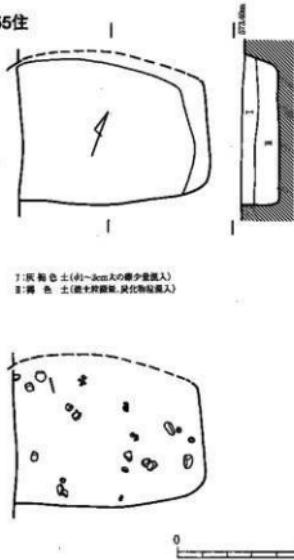


第16図 第47~51・53・66号住居址

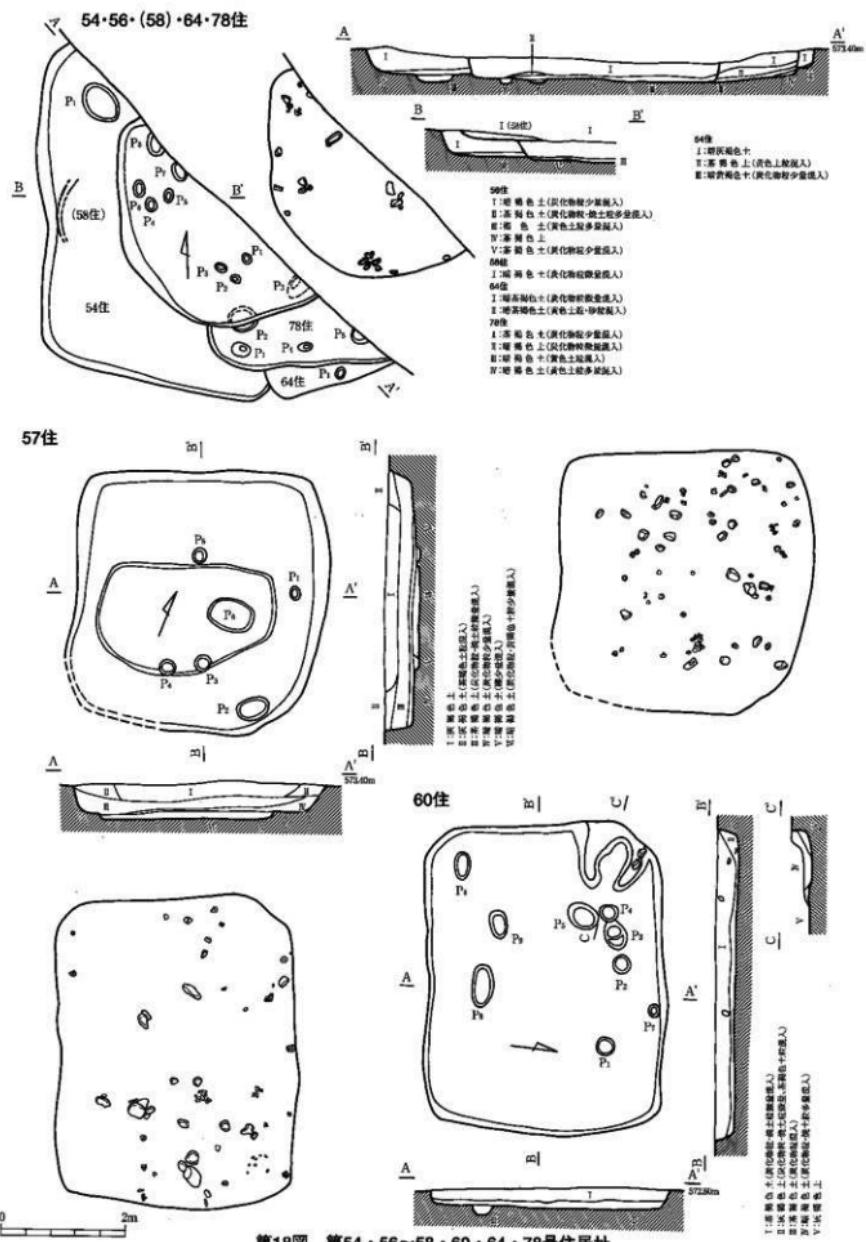
52住



55住

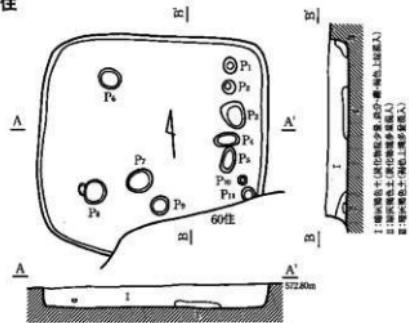


第17図 第52・55号住居址

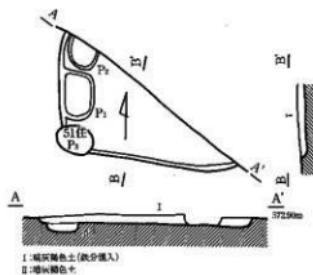


第18図 第54·56~58·60·64·78号住居址

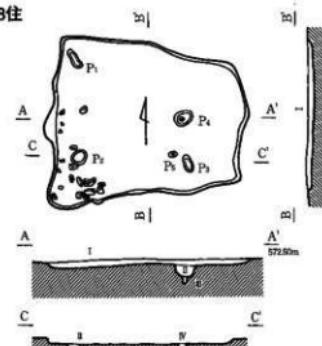
61住



65住

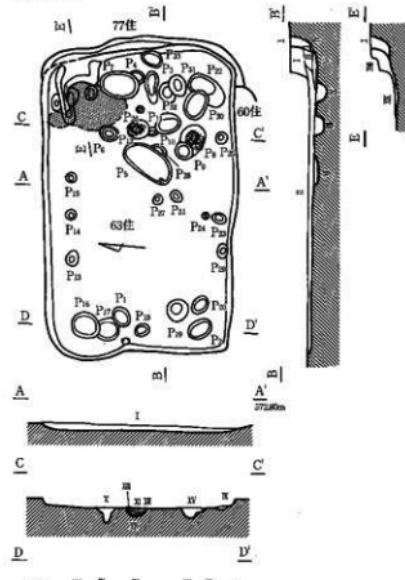


68住



0 2m

63-77住



66住

77住

I 地灰褐色土 (铁分混入)

II 地灰褐色土 (铁分混入)

III 地灰褐色土 (铁分混入)

IV 地灰褐色土 (铁分混入)

V 地灰褐色土 (铁分混入)

VI 地灰褐色土 (铁分混入)

VI 地灰褐色土 (铁分混入)

VII 地灰褐色土 (铁分混入)

VIII 地灰褐色土 (铁分混入)

X 地灰褐色土 (铁分混入)

XI 地灰褐色土 (铁分混入)

XII 地灰褐色土 (铁分混入)

XIII 地灰褐色土 (铁分混入)

XIV 地灰褐色土 (铁分混入)

XV 地灰褐色土 (铁分混入)

XVI 地灰褐色土 (铁分混入)

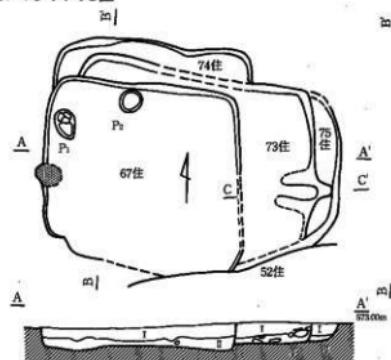
XVII 地灰褐色土 (铁分混入)

XVIII 地灰褐色土 (铁分混入)

XIX 地灰褐色土 (铁分混入)

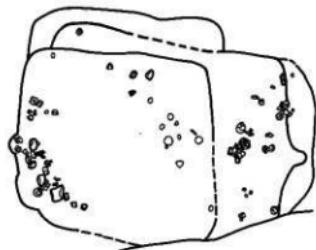
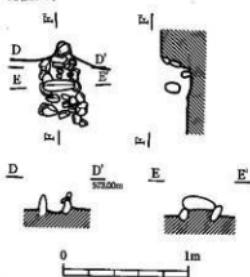
第19圖 第61・63・65・68・77号住居址

67・73・74・75住

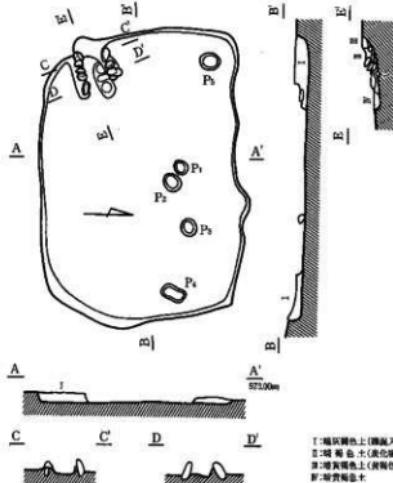


74住
I:褐青褐色土
II:褐褐色土
III:褐青褐色土(铁分混入)
IV:褐褐色土(铁分多量混入)
75住
I:褐灰褐色土(铁分多量混入)
II:褐灰褐色土(豆腐2量混入)
III:褐灰褐色土
IV:褐褐色土上(铁分稍少)褐十铁少量混入
76住
I:褐青褐色土
II:褐褐色土(铁分多量混入)

73住カマド



76住

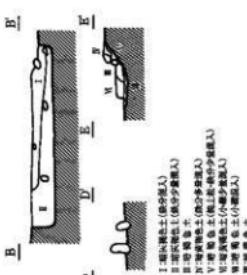
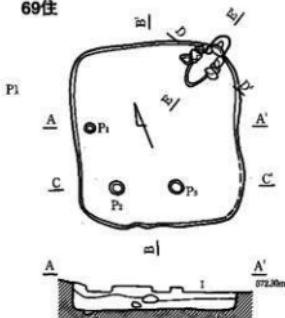


I:褐灰褐色土(鐵混入)
II:褐褐色土(鐵化物質+土鉄少量混入)
III:褐灰褐色土(褐青褐色土混入)
IV:褐灰褐色土
V:褐灰褐色土

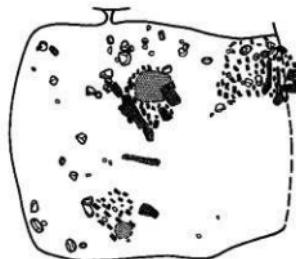
第20図 第67・73~76号住居址

0 2m

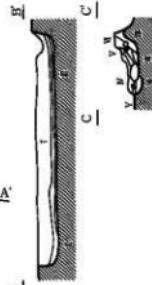
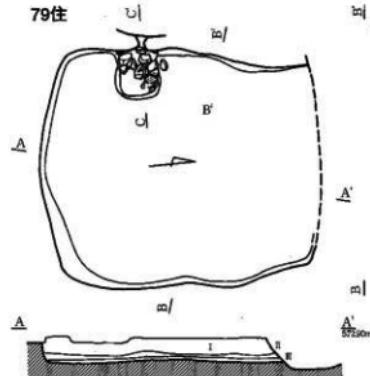
69住



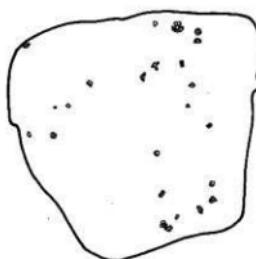
C C'



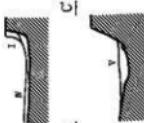
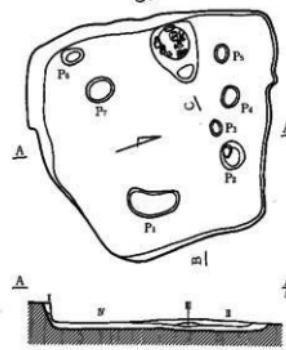
79住



1. 淡灰褐色土 (淡化物较少入)
2. 淡褐色土 (淡化物较多入)
3. 深褐色土 (深化物较少入, 深褐色土多量混入)
4. 深褐色土 (深化物较多入, 深褐色土少量混入)
5. 黑褐色土 (深化物少入)
6. 黑褐色土 (深化物多入)
7. 黑褐色土 (深化物极多入)
8. 淡青褐色土
9. 淡青褐色土 (淡青褐色土少量混入)
10. 淡褐色土

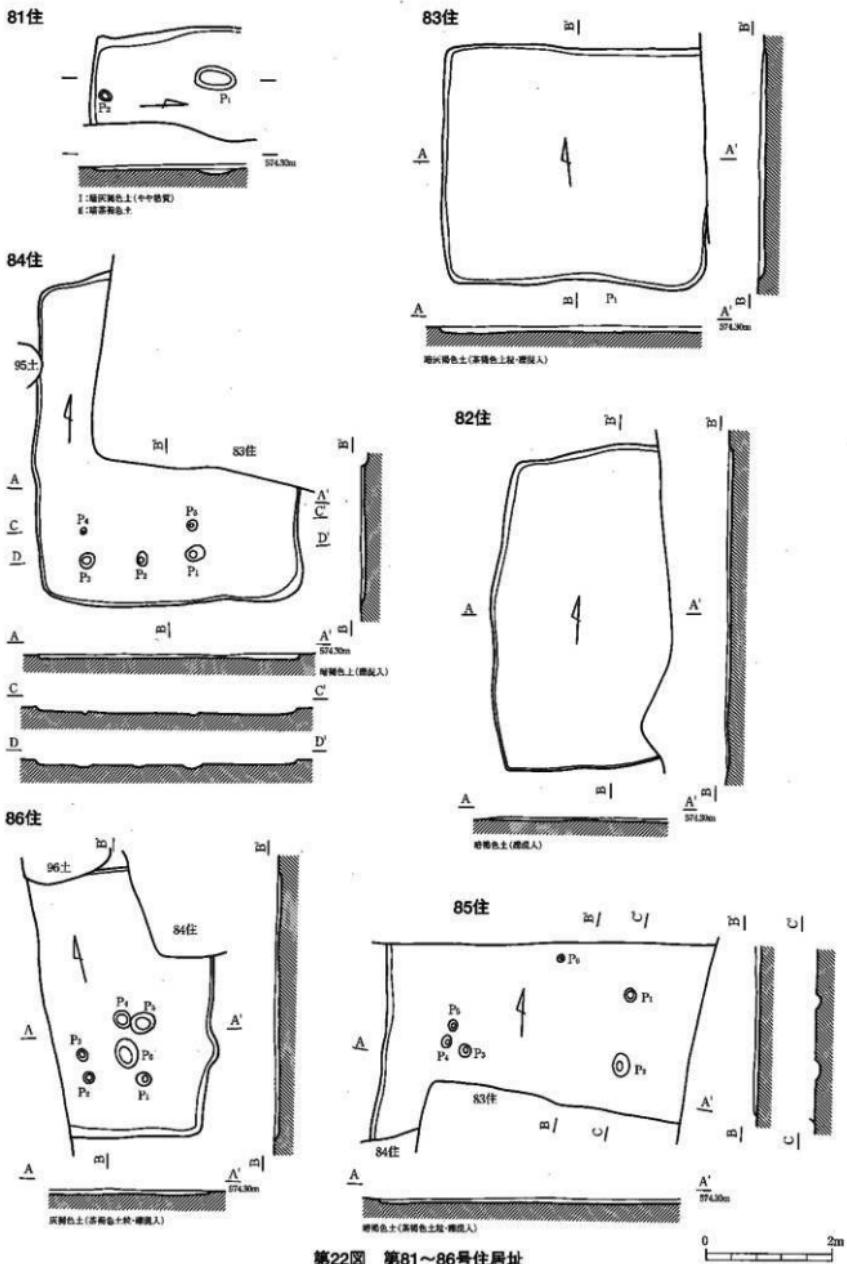


80住



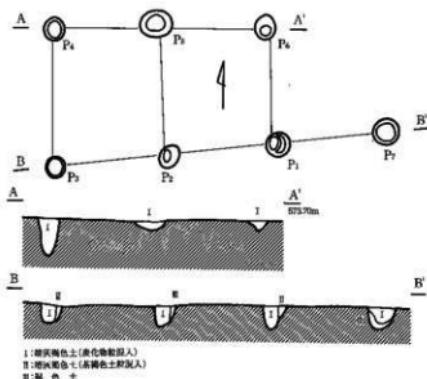
1. 淡灰褐色土 (淡化物较少入)
2. 淡褐色土 (淡化物较多入)
3. 深褐色土 (深化物较少入)
4. 深褐色土 (深化物较多入)
5. 黑褐色土 (深化物少入)
6. 黑褐色土 (深化物多入)

第21図 第69・79・80号住居址

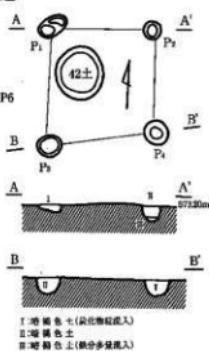


第22図 第81~86号住居址

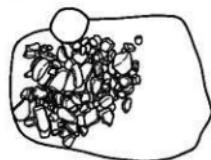
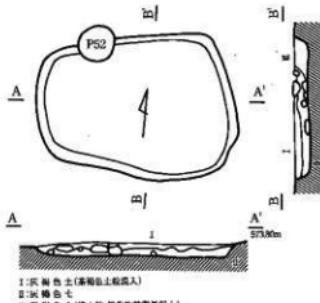
12號



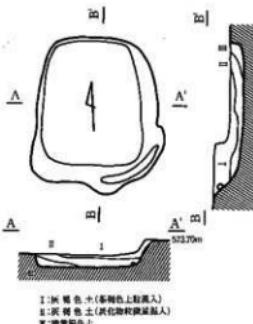
13號



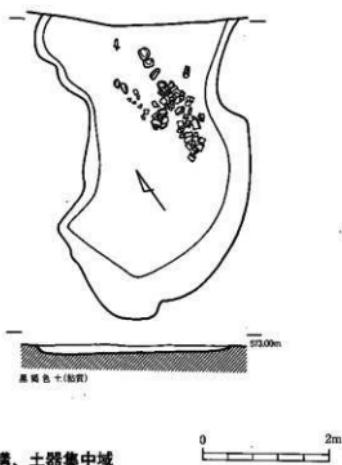
1號



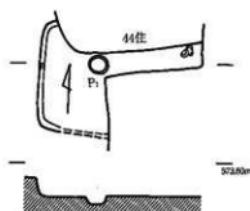
2號



土器集中域

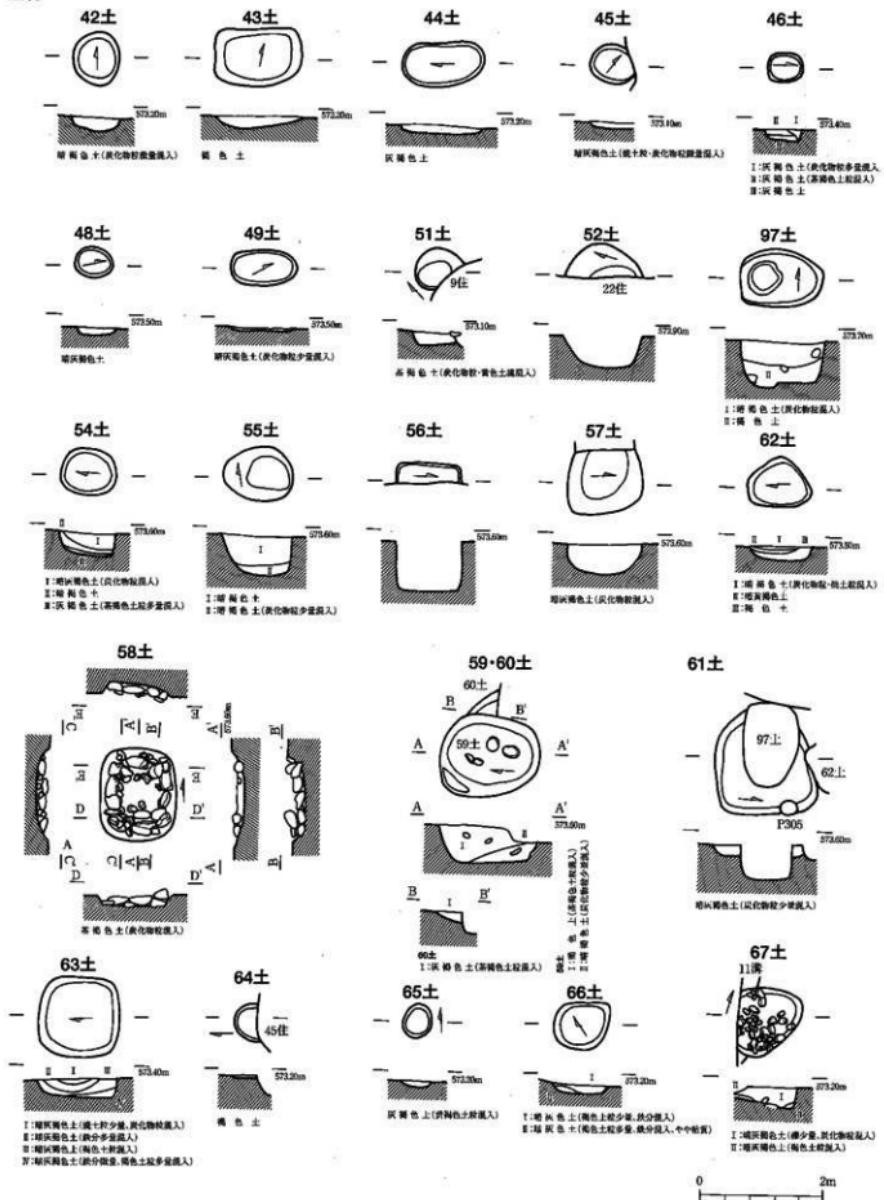


3號

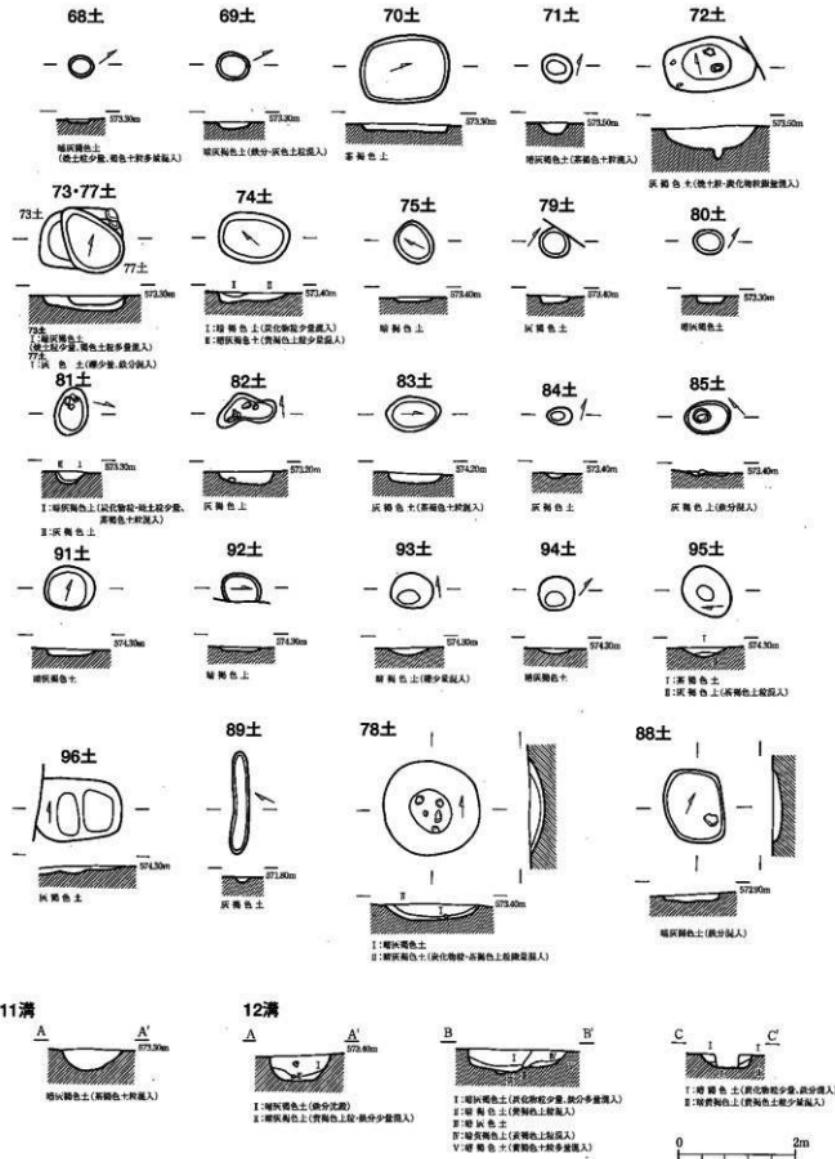


第23図 建物址、竪穴状遺構、土器集中域

土坑



第24図 土坑 (1)



第25圖 土坑(2)、溝址

第3節 遺物

1 土器・陶磁器（第26～42図、第6表）

今回の調査によって出土した遺物は、整理用テンバコ30箱を数え、古墳時代・平安～中世の多量の良好な資料を得ることができた。それらのうち図化し得たものは、土器・陶磁器が968点、金属製品が98点、石器が83点である。ここではそれらの様相について述べていく。

A 古墳時代の土器

今回の調査では、第1次調査に引き続き古墳時代の遺構を調査することができた。特に今回は、1軒ではあるが古墳時代中期の住居址を確認し、遺物を得ることができた。ここでは今回確認した古墳時代の遺物について述べていく。

第38号住居址出土土器群

図化し得たものは10点で、そのうち古墳時代に属するものは土師器小型壺（増）2点、小型壺1点、壺1点、高杯5点がみられた。いずれも古墳時代中期の5世紀に属する。また上層には混入した。青磁碗1点もみられた。

第78号ピット

高杯脚部が1点みられる。古墳時代中期の5世紀に属する。

第3号土器集中区出土土器群

図化し得たものは17点で土師器高杯5点、壺8点、小型丸底壺1点、短頸壺1点、壺1点で、いずれも古墳時代前期末から中期にかけての4世紀末から5世紀という過渡期の貴重な資料といえる。高杯は脚部のみ残存するものが4点、杯部のみ残存するものが1点である。特に885の高杯脚部は、内部が中空ではなく詰まっており、前期の様相を色濃く残しているもので貴重な資料である。今回出土したこの土集3の遺物は、第1次調査の土集1、土集2の土器とほぼ同時期に属するもので、該期の集落が周囲にあることをしめしている。

B 平安時代の土器

(1) 種別・器形

種別には土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器、輸入陶磁器（白磁、青白磁）などがある。出土した土器・陶磁器類の大半を占めている。堅穴住居址覆土中からの出土が多い。以下では文献1に従って種別に器形を述べていく。綠釉陶器の分類は文献2に従った。

土師器

576点図化した。器形には杯A、皿A、碗、盤、鉢、壺類（小型壺E、小型壺D、壺、羽釜、瓶）などがみられる。

杯A

ロクロ成形、底部回転糸切り、無高台の土師器である。320点図化した。杯A IIと杯A IIIの2つの法量がある。

杯A IIは黒色土器A杯Aの法量を受け継ぐものである。8期に出現する。23件の出土のものが最も古いものである。以後、15期まで確認できる。8期の23件では口径13.2cm、器高3.4cmである。以下、9期では口径12.2cm、器高3.3cm、10期では口径11.5cm、器高3.1cm、11期では口径10.5cm、器高2.9cm、12期では口径11.6cm、器高2.9cm、14期では口径9.8cm、器高2.23cm、15期では9.3cm、器高1.8cmである。時間の経過とともに口径、器高を減じていく。初期の杯A IIは薄手であるが14期以降はかなり厚手である。また15期の杯A IIの底部には回転糸切痕が不明瞭なものが多くみられる。体部に墨書きのあるもの（511、842）、体部内面にタール状の付着物のあるもの、底部に穿孔されるもの（565、566）がある。

杯A IIIは12期に出現する。口径平均13.6cm、器高平均3.9cmである。15期まで確認できる。14期までは各出土土器群で2点以上みられるものの15期では1点以下しかみられない。

皿A

ロクロ成形、底部回転糸切り、無高台の土師器である。17点図化した。皿A Iと皿A IIの2つの法量がある。形態には口縁端部を折り返すものと口縁部内面に沈線を巡らせるものがある（45、46、412、969）。

皿A Iは6点出土している。60件、63件で2点ずつ出土している。口径13.4～18.4cmである。器高のわかる個体はないが3cm前後である。

皿A IIは11点出土している。60件で3点出土している。口径9.2～11.0cm、器高1.35～1.75cmである。57件出土の645は内面に黒色処理がなされており黒色土器に分類されるものかもしれない。

椀

ロクロ成形、底部回転糸切、付高台の土師器である。9期～15期の土器群にみられる。口径12.4～16.5cm、器高3.4～6.45cmの椀と口径10cm前後の小椀もみられる。80点図化した。

9期では14住で4点、44住で8点、61住で6点出土している。いずれも体部の形態が直線的に立ち上がるものである。10期では9期と同様の形態を呈するものが多いが423のような体部に腰の張る形態がみられる。11～12期では高台の低いものが19住でみられる(258、259、261)。50住出土の椀には559のような体部が直線的に立ち上がる形態とともに558は体部に腰の張る形態がみられる。14期、15期では全体の分かれる資料は少ないが12件出土の134は体部が腰の張る形態である。小椀では620が腰の張る形態で初期のものである。14期、15期の小椀はすべて体部が直線的に立ち上がる形態を持つ。

盤

ロクロ成形、底部回転糸切、付高台の土師器である。身部が浅く足高の高台をもつ。口径20～30cmの盤Aと口径15cm(盤B I)、口径10cm(盤B II)の盤Bがある。盤A12点、盤B50点図化した。

盤Aは全体の分かれる資料がない。8期の21住に脚部がみられる(297)。高台側面に透かしがみられる。また9期には521、525がある。13～14期には口径20cm前後のものがみられる(80、93、247、569、675、737)。

盤Bは2法量に分かれる。盤B Iは8期の21住にみられるが(295、296)、おそらく混入であろう。10期の13件出土の156、35住出土の447が初期のものである。伴出する土師器椀とほぼ同じ形態である。13～14期には9住に3点、12住に4点と比較的多く出土している。10住出土の90は盤B Iの口縁部破片である。口縁部内面に2本の沈線が巡るもので12期の南栗遺跡SB192(文献1)に同じものがみられる。15期の52住、79住でも出土している。盤B Iの下限であろうか。盤B IIは10期の50住出土の557が初期のものである。14期の279、843、15期の589、906は身部が浅い形態になっている。

鉢

ロクロ成形、底部回転糸切、付高台の土師器である。盤Aは口径20cm前後で杯Aと相似形である。4点図化した(94、299、755、873)。

21住出土の299は8期に属する。口縁部が外反する形態である。土81出土の873も同様の形態である。69住出土の755は杯Aと相似形の形態である。

壺類

小型壺D、小型壺E、羽釜A、羽釜B、瓶、壺類がある。

小型壺Dはロクロ成形で体部にカキ目、ロクロ目がみられ、口径と器高の比が1:1になる壺である。今回調査の土器群での煮炊具の主体となっている。口径10.7～23.8cm、器高9.6～20.5cmである。34点図化した。

8期の小型壺Dは22住(328)と23住(351、352、353、354、356、359)で出土している。328は全体のわかるもので口径16.2cm、器高19.4cmである。23住では6点出土している。353と359には内面にカキ目がみられる。353は口径13.2cm、354は口径19.6cmと2つの法量がみられる。9期では14住(174、175)と44住(522、524)で出土している。175は口径12.2cm、522で15.6cmである。522では内面にカキ目がみられる。10期では13住(159、160)、15住(208)、16住(232)、35住(451、453)で出土している。内面のカキ目がみられなくなる。口径20cm前後の160、232、口径10～13cm前後の159、208、451の2法量ある。11～12期では7住(30、32)、73住(776、777)で出土している。7住、73住ともに2つの法量がある。13～14期では10住(97)、17住(248)、29住(410)、67住(747)で出土している。97、248は全体のわかる資料である。ともに口径、器高が10cm程度である。15期では全体の分かれるものはないが60住出土の704、705は口縁部の破片であり、口径20cm前後である。

小型壺Eはナデ調整の壺である。1点図化した。15期の79住で805が出土している。口径11.2cmである。内面にハケ目がみられる。14期の8住出土の57、58は外外面ナデ調整の壺である。口径27cm前後である。小型壺Eの系統の堀か。

羽釜は指ナデ、ハケ目、板状工具によるナデなどが器面にみられる壺で、鉢部が口縁部下にみられる。鉢部の全周する羽釜Aと鉢部が2箇所ある羽釜B(758)がある。11期から15期まで小型壺Dとともに煮炊具の主体となっている。全体のわかるものはない。羽釜Aは口径15.2～24.4cm、羽釜Bは1点のみ出土しており口径22.4cmである。10点図化した。

羽釜は11期に出現する。37住出土の472、45住出土の544、73住出土の779が初期のものである。472は口径24.4cm、779は口径20.9cmである。779には外面にハケ目がみられる。12期では19住出土の268がある。13～14期では67住(749)で1点、15期では60住(706)、79住(807)で1点ずつ出土している。口径は20cm前後が主体を占めるが23

住出土の355は口径15.2cmと小さいものである。

瓶は20住で1点(287)出土している。全体の分かるものである。体部に指圧痕、雜な板状工具ナデ痕がみられる。口縁部下に鉢部が付かない。口径26.4cm、器高21cmである。共伴する286、287も瓶の可能性がある。

不明壺類は54住(613)、67住(750)で出土している。613は足釜の脚部であろうか。750は獸脚の付く鍋の底部である。

黒色土器

内面および外外面に黒色処理をするロクロ成形の土器である。器形には杯A、碗がある。内面のみ黒色処理を行う黒色土器A、外外面とも黒色処理を行う黒色土器Bがある。底部は回転糸切り痕、ナデ痕を持つ。黒色処理前にはとんどの個体でミガキが施されるが、まれにミガキのないものもある。黒色土器Aは111点、黒色土器Bは11点図化した。

杯A

無高台の黒色土器である。黒色土器A、黒色土器B(131)がある。24点図化した。

8期の22住で4点(302、303、304、325)出土している。口径12.8~14cm(13.4cm)、器高3.6~4.1cm(平均3.9cm)であり、8期の上師器杯Aの法量とはほぼ一致する。302、303、304は内面にヘラ記号がみられる。9期以降の住居址覆土からも出土するが2点以下の出土しかなく混入したものと考えられる。57住出土の638、639は内面にミガキがない。131は黒色土器Bで14期の12住から出土した。外表面の黒色はみられないものの外外面にミガキが施される。

碗

付高台の黒色土器である。黒色土器A、黒色土器Bがある。口径12.3~16.4cm。器高4.15~7cm。口径10cm前後の小椀もみられる。73点図化した(A:65点、B:8点)。

黒色土器Aは8期の21住(288)22住(305、326)で出土している。305はやや丸みを帯びた形態の体部である。9期では14住、44住、61住で出土している。61住出土の708は直線的な立ち上がりの体部である。10期では13住、15住、16住、35住で出土している。体部は直線的な立ち上がりの形態がみられるとともに147のような腰の張る形態がみられるようになる。11~12期では小椀(249)もみられるようになる。14期では腰の張る形態が主体を占めている。15期には出土数も減り、全体の分かるものはない。

黒色土器Bは9期の44住で1点(491)がみられるが混入であろう。遺構にともなうのは14期からである。51住(568)、80住(834)で1点ずつみられる。15期では52住、79住で出土している。79住では碗、小椀がみられる。碗、小椀とともに体部が直線的に立ち上がる形態である。

須恵器

器形には壺類(469、881、954)、甌類(535、918、925)がある。6点図化した。469は11期の37住から出土した。短頸壺かもしれない。自然釉が器面にみられる。器形のわかるものには石列1から出土した甌D(925)がある。凸帶と耳部が外側にみられる。44住出土の535は甌類の一部である。外側にタクキ目がみられる。

灰釉陶器

ロクロ成形で器面に灰釉のかかる硬質の陶器である。器形には碗、皿類(皿、段皿)、瓶類(広口瓶、短頸瓶)がある。168点図化した。

碗

ロクロ成形、付高台、外面下半には回転ヘラ削りが施されるものもある。外面底部には回転ヘラ削り痕、ナデ痕、回転糸切り痕などがみられる。外外面底部には重ね焼きでの溶着を防ぐ目的で施釉されないものが多い。107点図化した。

8期では21住(300)、22住(327)で1点ずつ出土している。2点とも刷毛で施釉されている。327は高台外面に稜のある形態である。9期では14住(180)、44住(528、529、530、531、532、533)で出土している。特に44住では6点出土している。高台外面に稜があり、体部が緩やかに立ち上がる形態である。10期では13住、15住、16住、31住、35住、36住で出土している。157、426は刷毛で施釉しているが濁け掛け施釉のものが主体を占めている。口径13cm前後、器高3cm前後のもの(425、448、462)、口径13.8~16.85cm、器高5cmのものと2つの法量がある。11~12期では7住、19住、37住、50住、73住で出土している。7住出土の22、26はこれまでの緩やかに立ち上がる体部の形態とは違い、体部に腰の張る形態である。26は内面全面に施釉されている。高台の形態には外面に稜が不明瞭なものもみられてくる。10期と同様に24、265、770などの口径13cm前後、器高3cm前後のものもみられる。刷毛で施釉さ

れるものはみられない。13～14期では体部が緩やかに立ち上がる形態のものはみられない。高台の形態は高く直線的である。外反するものもみられてくる（109、283、796）。内面口縁部に沈線が巡るものもある（246、376、378）。口径12.8cm～16.85cm、器高5.3～6.8cmの範囲にある。15期では550、636などのように高台断面が三角形を呈するものがみられる。口径13～15.8cm、器高6.2～6.8cmの範囲にある。

皿類

クロコ成形、付高台、外面下半には回転ヘラ削りが施されるものがある。外面底部には回転ヘラ削り痕、ナデ痕、回転糸切り痕などがみられる。碗と同様に内外底部には施釉されない。皿と段皿がある。42点図化した。

8期では21住では皿が1点出土している（301）。口径13.1cmである。9期では14住と翌3にみられる。段皿は1点しかなく、内面の段は不明瞭である。皿の割合が高い。皿の口径は12.1～12.8cmである。11～12期では段皿がなく、すべて皿である。口径12.3～13.6cmである。13～14期では段皿の割合が大きく皿はほとんどみられない。15期では79住で段皿が1点みられるのみである。

瓶類

外面上半はクロコナデ痕、外面下半は底部まで回転ヘラケズリ痕、内面にはクロコナデ痕がみられる。高台は付高台である。刷毛で施釉されている。広口瓶と短頸瓶がある。全体のわかるものは少ない。18点図化した。

14住出土の181の短頸瓶である。外面の肩部に沈線がみられる。450、534、574、668は広口瓶の口縁部である。口径13cm前後と20cmの2つの法量がある。9期～15期にみられる。

縁釉陶器

小破片を含めて44点出土している。このうち15点を図化した。器形には碗、皿類（段皿、耳皿）がみられる。7住で5点、23住で2点、57住で4点、C検出面で17点出土している。分類は文献2に従った。

碗

碗には体部が緩やかに立ち上がる形態（349、350）とやや腰の張る形態（27、527）がある。口径10cm程度の碗（831、938）もみられる。高台はすべて付高台である。349は19住、23住、35住間で接合する。350は5類。半分以上が残存している。349、350とも8期に属する。27はe類の碗。体部は腰が張る形態である。11期に属する。29、953は体部下半の回転ヘラケズリ痕、高台底部の沈線などの調整が似ている。935はf類かもしれない。

皿類

皿類には段皿（205、662、953、1003、1018）、耳皿（1010、1014）がある。205は15住、31住、36住間で接合する。10期に属するもので口径15.2cmである。57住出土の662は口径12.8cmである。

14期に属する。耳皿の1010と1014は同一個体である。15期に属する。

輸入陶磁器

白磁、青白磁がみられる。

白磁のうち古代の遺構に伴うものは4点ある。4点図化した。51住（571）、54住（615）、67住（982）、84住（799）で出土している。分類できるものでは571が玉縁口縁のみられるV類、799は外面にヘラケズリ痕のあるIV類の可能性がある。11世紀代（14～15期）の遺構にみられる。

青白磁は15期の52住で1点出土している（599）。599は瓶子類の体部破片で外面には唐草文と蓮弁文がみられる。

（2）出土土器群

今次調査では古代8～15期まで土器群がみられる。以下では各期の土器群について組成と特徴をみていく。

8期の土器群

21住、22住、23住がある。

土師器、黒色土器A、灰釉陶器、綠釉陶器で構成される。

食器：土師器杯A、盤A、鉢A、黒色土器A杯A、碗、灰釉陶器碗、皿類、綠釉陶器碗がみられる。

煮炊具：小型壺Dがみられる。

貯蔵具：灰釉陶器瓶類がみられる。

土師器杯Aが出現する。23住で口径平均13.2cm、器高平均3.4cmである。土師器杯Aの割合が高く、黒色土器A杯Aもみられる。灰釉陶器碗は直線的に緩やかに立ち上がる形態で高台外面に接がみられる。すべて刷毛塗り施釉である。23住で綠釉陶器が2点出土している。煮炊具では小型壺Dがみられる。23住出土の353、359にはカキ目がみ

られる。貯蔵具は23住に灰釉陶器瓶類(360)がみられるものの11期以降に混入した可能性がある。

9期の土器群

14住、44住、61住がある。

土師器、黒色土器A、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器で構成される。

食器：土師器杯A、椀、盤A、黒色土器A杯A、椀、灰釉陶器椀、皿類、綠釉陶器椀がみられる。

煮炊具：小型壺Dがある。

貯蔵具：須恵器壺類、灰釉陶器広口瓶、短頸壺がある。

土師器椀が多くなる。土師器椀は直線的に立ち上がる形態を持つ。土師器杯Aは口径平均12.2cm、器高平均3.3cmである。61住ではみられないものの14住、44住では灰釉陶器の割合が高くなる。灰釉陶器椀は8期と形態は同じだが漬け掛け施釉のものが多い。灰釉陶器皿類は44住でまとまって出土しており、皿が多く段皿は少ない。煮炊具は小型壺Dがみられ、44住出土の522にはカキ目がみられる。貯蔵具は14住出土の181が全体のわかる資料である。44住では灰釉陶器瓶類とともに須恵器壺類がみられる。

10期の土器群

13住、15住、16住、31住、35住、36住がある。

土師器、黒色土器A、灰釉陶器、綠釉陶器で構成される。

食器：土師器杯A、椀、盤B、黒色土器A椀、灰釉陶器椀、綠釉陶器段皿がみられる。

煮炊具：小型壺Dがある。

貯蔵具：灰釉陶器広口瓶がある。

土師器盤Bが出現する(156、447)。土師器杯Aは口径平均11.5cm、器高平均3.1cmである。土師器椀と黒色土器A椀には腰の張る形態のものがみられてくる(147、423)。灰釉陶器は9期と同じ形態で漬け掛け施釉のものが多い。灰釉陶器椀は2法量みられる。煮炊具は小型壺Dがみられる。体部にカキ日のみられるものはなくなる。貯蔵具には灰釉陶器広口瓶がある。

11期の土器群

7住、37住、50住がある。

土師器、黒色土器A、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器で構成される。

食器：土師器杯A、椀、盤B、黒色土器A椀、灰釉陶器椀、皿類がある。

煮炊具：小型壺D、羽釜Aがある。

貯蔵具：灰釉陶器瓶類、須恵器壺類がある。

土師器杯Aは口径平均10.5cm、器高平均2.9cmである。灰釉陶器椀は体部に腰の張る形態が出現する。また9期と同じく2法量みられる。綠釉陶器は7住で5点出土している。煮炊具は小型壺Dある。羽釜Aが出現する。

12期の土器群

19住、73住がある。

土師器、黒色土器A、灰釉陶器で構成される。

食器：土師器杯A II、杯A III、椀、黒色土器A椀、灰釉陶器椀、皿類がある。

煮炊具：小型壺D、羽釜Aがある。

貯蔵具：みられない。

土師器杯AにA IIIが出現し、從来からのA IIと合わせて2つの法量がみられる。土師器杯A IIの口径平均11.6cm、器高平均2.9cmである。黒色土器Aに小椀がみられる。灰釉陶器椀は直線的に緩やかに立ち上がる形態であるが、高台に腰を持たないものもみられる。2法量みられる。灰釉陶器皿類は皿のみがみられる。煮炊具は小型壺Dと羽釜Aがある。73住では両方出土している。

13期の土器群

明瞭な土器群はみられない。おそらく67住が該当するとおもわれる。

土師器、黒色土器A、灰釉陶器、白磁がある。

食器：土師器杯A、土師器盤A、土師器盤B、黒色土器A椀、灰釉陶器椀、皿類(III、段III)、白磁がある。

煮炊具：小型壺D、羽釜Aがある。

貯蔵具：みられない。

土師器杯AにはA IIとA IIIの2法量みられる。土師器杯A IIIは3点のみ出土しており、口径9.1～11.05cm、器高1.6～2.65cmである。白磁は混入であろう。灰釉陶器皿類はほとんどが段皿である。煮炊具は小型壺Dと羽釜Aがみ

られる他、鍋の底部がある（750）。

14期の土器群

8住、9住、10住、11住、12住、17住、20住、26住、30住、51住、62住、57住、76住、80住がある。今回の調査で最も多くみられる土器群である。

土師器、黒色土器A、黒色土器B、灰釉陶器、綠釉陶器で構成される。

食器：土師器杯AⅡ、杯AⅢ、碗、盤A、盤B、皿A、黒色土器A碗、灰釉陶器碗、皿類（段皿）、綠釉陶器碗、段皿がある。

煮炊具：小型甕D、瓶、羽釜がある。

貯蔵具：灰釉陶器広口瓶、瓶類がある。

土師器杯AにはAⅡとAⅢの2つの法量がある。口径平均9.8cm、器高平均2.2cmである。皿A、黒色土器B碗、杯Aが出現する。土師器碗、黒色土器A碗は腰の張る形態が多い。土師器小碗はすべて直線的に立ち上がる形態である。灰釉陶器碗は直線的に緩やかに立ち上がる形態はみられない。内面口縁部に沈線の巡るもののがみられる。皿類は13点のうち段皿が12点みられる。輸入陶磁器がみられるが混入である。煮炊具は小型甕Dと羽釜の組み合わせであるが、20住では瓶がみられる。貯蔵具は灰釉陶器広口瓶で2法量みられる。

15期の土器群

49住、52住、54住、56住、60住、79住、溝12がある。

土師器、黒色土器A、黒色土器B、灰釉陶器、綠釉陶器、輸入陶磁器（青白磁、白磁）で構成される。

食器：土師器杯AⅡ、杯AⅢ、碗、盤B、皿A、黒色土器A碗、黒色土器B碗、灰釉陶器碗、段皿、綠釉陶器碗がある。

煮炊具：羽釜A、小型甕B、小型甕Eがある。

貯蔵具：灰釉陶器広口瓶、瓶類がある。

土師器杯AにはAⅡとAⅢの2つの法量がある。ひとつの土器群で杯AⅢが1点以下しかみられなくなる。土師器杯AⅡは口径平均9.3cm、器高平均1.8cmである。60住と63住では皿Aがみられる。土師器碗、黒色土器A碗がともに少なくなる。黒色土器Bの小碗が出現する。灰釉陶器碗には550、636のような高台断面形が三角形を呈するものがみられる。皿類は段皿が79住で1点しかみられない。52住で青白磁瓶子類、54住で白磁（615）がみられるなど輸入陶磁器が出現する。煮炊具は小型甕Eが79住で1点出土している（805）。

(3) 文字関係資料

17点出土している。いずれも平安時代の土器である。墨書（298、511、842）、刻書（410）、ヘラ記号（269、302、304、491、604）、墨痕のあるもの（108、107、110、266、345、471、636、865、910）などがある。

298は土師器杯または碗の口縁部に墨書きされている。511、842は土師器杯AⅡの外面墨書きされている。墨書き土器は8、9、14期にみられる。410は小型甕Dの外面底部に「金」と刻書きされている。ヘラ記号は黒色土器A杯A（302、303、304、491）、黒色土器A碗（269）、黒色土器B碗（491）、土師器杯A（604）がみられる。内面にヘラ記号されている場合が多いが491は外面底部にヘラ記号がみられる。器面上に墨痕のあるものは9点出土した。すべて灰釉陶器碗、皿類である。このうち朱墨の付着するものはみられない。23住出土の345は破断面にも墨痕がみられる。

(4) その他

遺構間で接合する個体が5点ある。

綠釉陶器碗（349）が19住、23住、35住間で接合する。綠釉陶器段皿（205）が15住、31住、36住間で接合する。灰釉陶器短頸甕（181）が14住、19住間で接合する。須恵器壺類（881）がP252、P254で接合する。土師器羽釜（749）が51住、67住、73住で接合する。

C 中世

(1) 器種・器形

器種には輸入陶磁器、土師器、陶器などがある。57点出土している。このうち32点図化した。5住、6住、25住、40住、堅2、土53で比較的まとまってみられる。

輸入陶磁器

青磁、青白磁、白磁がある。

青磁

小破片も含め29点出土している。このうち11点を図化した。時期が分かることはすべて13世紀代に属する。ほとんどの器形が碗であるが盤（966）、皿または杯（6）などもみられる。造構に伴うものはP15（978）、P51（883）、豊2（972、985、991）、土57（868）、6住（11、975、989）などで9点ある。残りは検出面などから出土している。碗には器面に蓮弁文、鑄蓮弁文、劃花文などの紋様がみられる。

青白磁

2点出土している。2点図化した。梅瓶（488）、瓶子類（350）がみられる。25住（350）、40住（488）で出土している。488は梅瓶の体部片である。外面は溝文、内面はロクロナデ痕がみられる。599は口縁部から頸部にかけての破片である。口縁が折り返されている。

白磁

6点出土している。このうち2点図化した（334、962）。造構にともなうものは6住（974、976）、25住（334）、土53（971）、残りは検出面から出土している（962、981）。分類できるもので974がV類、962はIV類である。

土師器

皿、内耳鍋がみられる。

皿は7点出土している。すべてI類（手捏ね成形）である。AとBの2法量ある。40住で3点出土している。法量から12世紀末葉～前葉、13世紀中葉～後葉の2時期に分けることができる。

内耳鍋（806）は1点出土している。79住の遺物となっているが位置から溝12に属するものと考えられる。口辺部片で耳部が継ぎ位に付けられている。口唇部に面取りがされ外面は横方向のナデ痕がみられる。断面形は直立し体部へ向かって広がっていくような形態である。文献1の分類ではみられないものである。13世紀代のものか？

陶器

11点出土した。山茶碗（860、882、929）、常滑系陶器（994）、古瀬戸系陶器（330、486、489）、須恵器（34、333、335）、東海系陶器（34、996）、不明品（995）がある。

929の高台には初期圧痕がみられる。古瀬戸系陶器には卸皿（330）、瓶子類（489）がある。34は捏鉢の口縁部片。端部中央に沈線が入る。VI類に分類される。333は底部片。335は擂鉢である。摺目が一組7本で2組みられる。

（2）土器群

文献1では在地系土器の土師器皿、内耳鍋を柱とした時期区分がされている。今次調査では土師器皿が7点出土しており、それを中心として土器群の時期をみていく。

土師器皿は手捏ねのI類のみがみられる。5住、6住、40住、76住、土53で出土している。このうち5住（4）、76住（793）は状況から混入と考えられる。造構に伴うものは6住、40住、土53がある。また25住には土師器皿はみられない。

6住出土土器群

6点出土した。土師器皿、青磁碗、白磁碗がある。土師器皿は法量から13世紀中葉～後葉に位置する。青磁は時期がわかるもので13世紀代。白磁にはV類がみられる。本址土器群は13世紀中葉～後葉中世1期第3段階に位置する。平安時代の混入がみられる。

25住出土土器群

5点出土した。須恵器（鉢、擂鉢）、古瀬戸系陶器卸皿、白磁碗、青白磁瓶子類がある。時期のわかる在地系の土器は須恵器鉢（333）、擂鉢（335）がある。333が13世紀代に属する可能性のあるものである。一方、335は14世紀代に位置する。古瀬戸系陶器の卸皿も14～15世紀代である。599は青白磁瓶子類である。13世紀代に位置する。時期にかなり幅があり時期を特定できない。13～14世紀代。

40住出土土器群

11点出土した。土師器皿（483、484、485、486）、古瀬戸系陶器（486）、青磁、青白磁梅瓶がある。土師器皿は4点出土しているがいずれも13世紀中葉～後葉（中世1期第3段階）に位置する。

土53出土土器群

2点出土している。土師器皿（876）、白磁碗（971）がある。土師器皿は1点出土している。13世紀中葉～後葉（中世1期第3段階）に位置する。

豊2出土土器群

3点出土している。青磁碗（972、985、991）がある。時期の分かるもので13世紀代のものがある。

まとめ

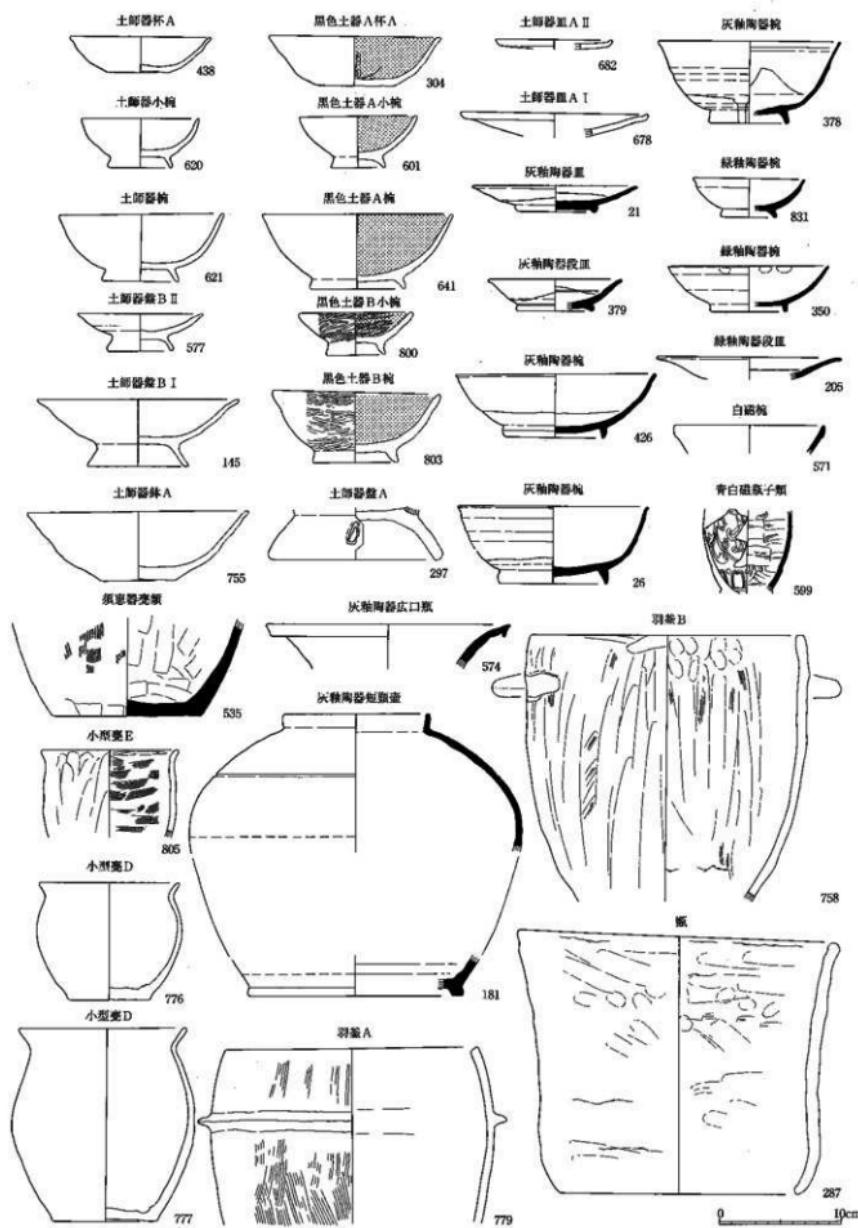
今回の調査では古墳時代中期、平安時代、中世の3時期の土器、陶磁器がみられる。

古墳時代中期の土器群は38住、土器集中3でみられる。1次調査でも該期の土器群がみられており周囲に集落の存在が予想される。平安時代の土器群は大部分の遺構からみられる。時期は8~15期がみられるが特に9期、10期、14期、15期の土器群が多くみられ、良好な資料といえる。中世は13世紀~14世紀代がみられるが特に13世紀中葉~後葉（中世1期第3段階）が比較的多くみられる。

平安時代では緑釉陶器が比較的多く出土しており、25住、40住、52住では青白磁瓶子類、梅瓶といった高級陶磁器が出土している点は集落の性格を示しているのでないだろうか。

文献1 長野県埋蔵文化財センター 1990 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4」松本市内その1 総論編

文献2 長野県埋蔵文化財センター 1989 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3」塩尻市内その2 吉田川西遺跡



第26図 器類・器形一覧（平安時代）

第6表1 土器観察表（古墳時代の土器）

番号	形	質	色	寸法	特徴	参考文献	
3	5形ベルト	古墳 高杯	土	口1.5	内面ナゲ	5 - 1	
329	25形	古墳 高杯	土	口1.5	内面ナゲ	25 - 0	
409	29形	古墳 ニュニユ	土	口1.5	内面ナゲ状。手持ちハレケヅリ。内面底付に高ナゲ	29 - 28	
414	35形No.31	古墳 高杯	土	口1.5	内面ナゲ	35 - 23	
473	38形No.5	古墳 高杯	(13.0)	口1.5	内面ナゲ	38 - 6	
474	38形No.6, 8, 9	古墳 高杯	(2.6)	直穴	内面ナゲハコ口。直穴ナゲ	38 - 9	
475	ク柱	古墳 小柄	土	口1.5	内面ナゲ	38 - 6	
476	38形No.23	古墳 高杯	土	口1.5	内面ナゲ	38 - 7	
477	38形No.7	古墳 高杯	土	口1.5	内面ナゲ	38 - 5	
478	38形No.6	古墳 高杯	土	口1.5	内面ナゲハコ口。直穴ナゲ	38 - 4	
479	38形	古墳 小柄	(8.0)	口1.5	内面ナゲ。外面ナゲハコ口。内面ナゲ	38 - 3	
480	38形No.3	古墳 小柄	土	口1.5	内面ナゲ	38 - 3	
482	38形No.1	古墳 小柄	(13.0)	口1.5	内面ナゲ	38 - 3	
490	43形No.1	古墳 高杯	土	口1.5	内面ナゲ	43 - 1	
525	52形No.1	古墳 高杯	土	口1.5	内面ナゲハコ口。内面ナゲ	44 - 27	
515	61形SW	古墳 高杯	土	口1.5	内面ナゲハコ口。内面ナゲ	61 - 4	
575	+55形No.1	古墳 高杯	土	2.8	内面ナゲ	上記6 - 1	
584	P78	古墳 高杯	土	7.6	直穴	内面ナゲココナ。外面ナゲハコ口。内面ナゲ	172 - 1
885	土集No.9	古墳 高杯	土	口1.5	内面ナゲ	小集3 - 4	
886	上集No.2	古墳 高杯	土	口1.5	内面ナゲ	土集3 - 5	
887	下集No.1	古墳 高杯	土	口1.5	内面ナゲ	土集3 - 17	
888	土集No.6	古墳 高杯	土	口1.5	内面ナゲ	土集3 - 8	
889	土集No.2	古墳 高杯	土	口1.5	内面ナゲ	土集3 - 9	
890	上集No.7	古墳 高杯	土	口1.5	内面ナゲ	土集3 - 10	
931	下集No.7	古墳 高杯	土	口1.5	内面ナゲ	土集3 - 11	
893	土集No.6	古墳 小柄丸	土	8	口3/4 略光	内面ナゲココナ。外面ナゲハコ口。内面ナゲ	土集3 - 1
893	土集No.7	古墳 小柄丸	土	8	口3/4 略光	内面ナゲココナ。外面ナゲハコ口。内面ナゲ	土集3 - 2
894	土集No.8	古墳 小柄	(12.0)	口1.5	内面ナゲ	土集3 - 3	
895	土集No.9	古墳 小柄	(17.0)	口1.5	内面ナゲ	土集3 - 7	
895	土集No.4	古墳 小柄	(17.0)	口1.5	内面ナゲ	土集3 - 14	
897	7集No.7, 下刷	古墳 小柄	土	16.5	(6.6) 21.7 口光 略光	内面ナゲココナ。外面ナゲハコ口。内面ナゲ	土集3 - 6
898	土集No.6, 下刷	古墳 小柄	土	14.0	口1.5	内面ナゲ	土集3 - 12
899	土集No.7	古墳 小柄	土	14.0	口1.5	内面ナゲ	土集3 - 15
900	上集No.7	古墳 小柄	土	15.0	口1.5	内面ナゲ	土集3 - 16
901	下集No.7	古墳 小柄	土	17.0	口1.5	内面ナゲ	土集3 - 13
914	熱田N	古墳 高杯	土	口1.5	内面ナゲ	A集 - 15	
926	グリットNo.1	古墳 高杯	土	口1.5	内面ナゲ	B - 9	
926	熱田N	古墳 高杯	土	口1.5	内面ナゲ	B - 10	

第6表2 土器観察表（平安時代の土器）

番号	形	質	色	寸法	特徴	参考文献		
1	5形ノ	古墳 高	土	7.0	高台1/6	ロクナゲ、村高台	5 - 4	
3	5形ノ	古墳 高	土	7.0	口1.5	ロクナゲ	5 - 3	
6	6形ノルト	古 壺	土	(10.0)	口1.5	ロクナゲ	5 - 5	
8	6形K2	古 壺	土	(3.0)	口1.5	ロクナゲ	5 - 3	
9	6形M3	古 壺	土	(7.0)	合合1/5, 直底1/4	ロクナゲ、村高台、脚輪ハケヅリ	6 - 3	
10	6形M4	古 壺	土	(7.0)	合合1/5, 直底1/4	ロクナゲ、村高台、脚輪ハケヅリ	6 - 2	
12	7形ノ	古 壺	土	(10.0)	口1.5	ロクナゲ	7 - 7	
13	7形N1	古 壺	土	(10.0)	口1.5	ロクナゲ	7 - 12	
14	7形S	古 壺	土	(11.0)	口1.5	ロクナゲ	7 - 15	
15	7形S	古 壺	土	5.6	直底	ロクナゲ、村高台	7 - 10	
16	7形P2	古 壺	土	5.6	直底	ロクナゲ、村高台	7 - 9	
17	7形N2	古 壺	土	(7)	高台1/2, 直底	ロクナゲ、村高台、脚輪ハケヅリ	7 - 11	
18	7形N	古 壺	土	(7)	高台1/2, 直底	ロクナゲ、村高台、脚輪ハケヅリ	7 - 12	
19	7形N	古 壺	土	(7.0)	高台1/4, 直底	ロクナゲ、村高台、脚輪ハケヅリ、内面ミガナギ付墨跡	7 - 13	
20	7形S	古 壺	土	(7.0)	高台1/2, 直底	ロクナゲ、村高台	7 - 14	
21	7E	古 壺	土	13.6	6.5 2.15 口1.5	ロクナゲ、村高台、脚輪ハケヅリ	内面墨跡に1条の伏筋、外面墨跡に1条で付けた墨跡	7 - 1
22	7E	古 壺	土	(4.0)	(6.0) (5.7) 口1.5 高台	ロクナゲ、村高台、脚輪ハケヅリ	内面墨跡墨跡	7 - 5
23	7E	古 壺	土	口1.5	ロクナゲ	直底	7 - 18	
24	7E	古 壺	土	(4.0)	(5.7) (3.7) 口1.5 高台	ロクナゲ、村高台、脚輪ハケヅリ	内面一墨痕	7 - 4
25	7E	古 壺	土	(4.0)	(4.8) (3.1) 口1.5 高台	ロクナゲ	7 - 3	
26	27形K2	古 壺	土	(5.0)	(6.0) (6.0) 口1.5 高台	ロクナゲ	7 - 2	
30	7E	古 壺	土	(5.0)	口1.5	ロクナゲ	7 - 13	
31	7E	古 壺	土	(7)	口1.5	ロクナゲ	7 - 16	
32	7E	古 壺	土	(7.0)	口1.5	ロクナゲ	7 - 17	
33	7E	古 壺	土	(7.0)	口1.5	ロクナゲ、村高台、脚輪ハケヅリ	外面墨跡1条ナギ、外面墨跡脚輪ハケヅリ、底無	7 - 20
35	7E	古 壺	土	(7.0)	口1.5	ロクナゲ、村高台	内面墨跡1条ナギ、外面墨跡脚輪ハケヅリ	7 - 8
36	7E	古 壺	土	9.1	4.2 2.25 口1.5 高台	ロクナゲ、四脚付	8 - 9	
37	7E	古 壺	土	9.1	2.8 口1.5 高台	ロクナゲ、四脚付	8 - 10	
38	7E	古 壺	土	9.5	4.8 2.3 口1.5 高台	ロクナゲ、四脚付	8 - 13	
39	7E	古 壺	土	9.5	4.4 2.15 口1.5 高台	ロクナゲ、四脚付	8 - 15	
40	7E	古 壺	土	10	3.7 1.95 口1.5 高台	ロクナゲ、四脚付	8 - 16	
41	8E	古 壺	土	9.8	4.7 2.45 口1.5 高台	ロクナゲ、四脚付	8 - 12	
42	8E	古 壺	土	10.0	4.6 2.45 口1.5 高台	ロクナゲ、四脚付	8 - 11	
43	8E	古 壺	土	10.0	4.6 2.45 口1.5 高台	ロクナゲ、四脚付	8 - 10	
44	8E	古 壺	土	10.0	4.6 2.45 口1.5 高台	ロクナゲ、四脚付	8 - 9	
45	8E	古 壺	土	10.0	4.6 2.45 口1.5 高台	ロクナゲ、四脚付	8 - 19	
46	8E	古 壺	土	10.0	4.6 2.45 口1.5 高台	ロクナゲ、四脚付	8 - 17	
47	8E	古 壺	土	10.0	4.6 2.45 口1.5 高台	ロクナゲ、四脚付	8 - 6	
48	8E	古 壺	土	10.0	4.6 2.45 口1.5 高台	ロクナゲ、四脚付	8 - 7	
49	8E	古 壺	土	10.0	4.6 2.45 口1.5 高台	ロクナゲ、四脚付	8 - 5	
50	8E	古 壺	土	10.0	4.6 2.45 口1.5 高台	ロクナゲ、四脚付	8 - 4	
51	8E	古 壺	土	10.0	4.6 2.45 口1.5 高台	ロクナゲ、四脚付	8 - 3	
52	8E	古 壺	土	10.0	4.6 2.45 口1.5 高台	ロクナゲ、四脚付	8 - 3	

番号	種類	品目	規格	単位	数量	備考	販売額		
							税込	税抜	
53	8往NE	灰	(13.4)	(7)	63.0	ローリー 高台1/3 施工			
54	8往	灰	(15)			ロクロナダ、付高台、回転ホイール	6,-	22	
55	8往SW	灰	後部 (12)	(6.0)	23.0	ロクロナダ、回転ヘッカズリ		23	
56	9往No.5	灰	後山 (小船)	(6.0)	14.0	ロクロナダ、付高台、回転ヘッカズリ		24	
57	9往No.2	土	小船 (5)	(27.0)	1.0	ロクロナダ、付高台		2	
58	8往SW、NW	土	小船 (5)	(26.4)	0.5	ロクロナダ、付高台		1	
59	9往No.21	灰	舟 (6)	6.5		ロクロナダ、付高台、内面高さ処理	6,-	16	
60	9往No.8	灰	舟 (6)	6.5		ロクロナダ、付高台、斜面低め、内面ミガキ施設色処理		16	
61	9往フ	土	舟 (5)	(9.2)		ロクロナダ、運搬搬手		21	
62	9往後	土	舟 (5)	(9.6)	4.6	1.7 □口/3 施工	ロクロナダ、舟高台	10	
63	9往後	土	舟 (5)	(9.6)	4.6	1.7 □口/3 施工	ロクロナダ、舟高台	10	
64	9往N	土	舟 (5)	(9.2)	(2)	1.0 □口/5 施工	ロクロナダ、舟高台	11	
65	9往N	土	舟 (5)	9.5	4.5	1.96 □口/5 施工	ロクロナダ、舟高台	8	
66	9往N	土	舟 (5)	9.5	2.0	0.72 □口/2 施工	ロクロナダ、舟高台	9	
67	9往N	土	舟 (5)	9.5	0.8	0.32 □口/5 施工	ロクロナダ、舟高台	9	
68	9往No.11	土	舟 (5)	(3.0)	1.0	□口/7 舟外側 施工	ロクロナダ、付高台、斜面低め	14	
69	9往No.12	土	舟 (5)	(3.0)	1.0	□口/7 舟外側 施工	ロクロナダ、付高台、斜面低め	6,-	
70	9往舟	土	舟 (5)	(2.0)	0.6	□口/3 底/2 施工	ロクロナダ、斜面低め	7	
71	9往No.1、No.9	土	舟 (5)	(2.0)	0.6	□口/3 底/2 施工	ロクロナダ、斜面低め	17	
72	9往No.20	土	舟 (5)	(1.8)	0.6	□口/3 底/5 施工	ロクロナダ、斜面低め	15	
73	9往	土	舟 (5)	(1.4)		□口/4 施工	ロクロナダ	15	
74	9往カワドヒ	新	B (14)	(7.0)	(4.8)	□口/3 施工	ロクロナダ、付高台	外側面にタル状物	19
75	9往No.6	土	舟 (5)	(7.5)		□口/3/2 施工	ロクロナダ、付高台、斜面低め	外側、高さにタル状物	6,-
76	9往No.5	灰	後底 (12.4)	(6)	23.0	□口/10 施工	ロクロナダ、付高台、斜面低め	15	
77	9往No.2、No.7	灰	舟 (6.4)	(7)	0.5	□口/15 施工	ロクロナダ、付高台、斜面低め切手	1	
78	9往K	灰	舟 (6.4)			□口/6 施工	ロクロナダ	4	
79	9往No.2、No.4	灰	舟 (6.4)	5.6	2.5	□口/5 施工	ロクロナダ、付高台、斜面低め	3	
80	9往No.16	舟	舟 (4.4)			□口/6 高台外 施工	ロクロナダ、斜面低め	22	
81	10往	舟	舟 (6)			□口/6 施工	ロクロナダ、斜面低め	5	
82	10往No.23	土	舟 (5)	(5.5)		舟底	ロクロナダ、斜面低め	6	
83	10往No.23	土	舟 (5)	(5)		舟底	ロクロナダ、斜面低め	7	
84	10往フタ土	土	舟 (5)	(4.8)		舟/2 施工	ロクロナダ、斜面低め	11	
85	10往No.5	土	舟 (5)	(6.2)		舟/2/2 施工	ロクロナダ、付高台、斜面低め	8	
86	10往No.18	土	舟 (5)	(7.4)		舟/2 施工	ロクロナダ、付高台、斜面低め、内面加工 施工上端	9	
87	10往No.9	土	舟 (5)	10	4.8	2.45 □口/3 施工	ロクロナダ、斜面低め	1	
88	10往No.11	土	舟 (5)	(8.2)	4.2	□口/2 舟底	ロクロナダ、斜面低め	2	
89	10往No.32	土	舟 (5)	(13.2)	0.8	□口/4 施工	ロクロナダ、付高台、斜面低め	4	
90	10往舟	土	舟 (5)	(7)		□口/4 施工	ロクロナダ、斜面低め	10	
91	10往舟フタ	土	舟 (5)	(1.8)		□口/10 施工	ロクロナダ、斜面低め	10,-	
92	10往No.23	土	舟 (5)	(5.5)		舟底	ロクロナダ、斜面低め	5	
93	10往No.13	土	舟 (5)	(5)		舟底	ロクロナダ、斜面低め	7	
94	10往No.8	土	舟 (5)	(5.5)		舟/2 施工	ロクロナダ、斜面低め	14	
95	10往No.9	土	舟 (5)	(5.5)		舟/2 施工	ロクロナダ、付高台、斜面低め	17	
96	10往No.1	土	舟 (5)	(6.8)		舟/2 施工	ロクロナダ、付高台、斜面低め	13	
97	10往No.6	土	舟 (5)	(7.5)		舟/2 施工	ロクロナダ、付高台、斜面低め	15	
98	10往No.29	舟	舟 (5)			舟/2/4 施工	ロクロナダ、付高台、斜面低め	15	
99	11往	舟	舟 (5)			舟底	ロクロナダ、斜面低め	13	
100	11往No.33	土	舟 (5)	(6.4)	2.6	□口/3 施工	ロクロナダ、斜面低め	12	
101	11往NE	土	舟 (5)	(6.4)	6	8.7 □口/5 施工	ロクロナダ、斜面低め	3	
102	11往NE	土	舟 (5)	(6.4)	6	8.7 □口/5 施工	ロクロナダ、斜面低め	6	
103	10往No.13	土	舟 (5)	(9.2)		舟/2 施工	ロクロナダ	16	
104	10往舟	土	舟 (5)	(9.4)		舟/2 施工	ロクロナダ	14	
105	10往舟	土	舟 (5)	(7.5)		舟/2 施工	ロクロナダ	17	
106	11往No.14	土	舟 (5)	(5.4)		舟底	ロクロナダ、斜面低め	12	
107	11往舟	土	舟 (5)	(4.2)		舟底	ロクロナダ、斜面低め	10	
108	11往舟、SW	土	舟 (5)	(4.2)		舟底	ロクロナダ、斜面低め	8	
109	11往舟	舟	舟 (5)	15.7	7	6.95 □口/5 施工	内面にタル状物	1	
110	11往舟、No.23	舟	舟 (5)	16.1	6.6	6.3 □口/2 施工	舟舟舟、舟底	3	
110	11往SW	舟	舟 (5)			□口/4 施工	舟舟舟	4	
111	11往舟	舟	舟 (5)			舟底	舟舟舟	4	
112	11往舟	舟	舟 (5)			舟底	舟舟舟	14	
113	11往舟	舟	舟 (5)			舟底	舟舟舟	16	
114	12往SWフ	舟	舟 (5)	9.5	4.2	1.85 □口/5 施工	舟舟舟、舟底	3	
115	12往NE	舟	舟 (5)	10.2	4.6	2.0 □口/5 施工	舟舟舟	6	
116	12往SE	舟	舟 (5)	(9.5)	4.6	2.0 □口/5 施工	舟舟舟	8	
117	11往No.26	舟	舟 (5)			舟底	舟舟舟	9	
118	11往No.16	舟	舟 (5)	10.6	5.2	3.3 □口/5 施工	舟舟舟	7	
119	11往No.14	舟	舟 (5)			舟底	舟舟舟	10	
120	11往舟	舟	舟 (5)			舟底	舟舟舟	12	
121	12往舟	舟	舟 (5)			舟底	舟舟舟	24	
122	12往舟	舟	舟 (5)			舟底	舟舟舟	29	
123	12往舟	舟	舟 (5)			舟底	舟舟舟	32	
124	12往舟	舟	舟 (5)			舟底	舟舟舟	4	
125	12往舟	舟	舟 (5)			舟底	舟舟舟	16	
126	12往舟	舟	舟 (5)			舟底	舟舟舟	24	
127	12往舟	舟	舟 (5)			舟底	舟舟舟	27	
128	12往舟	舟	舟 (5)			舟底	舟舟舟	37	
129	12往舟	舟	舟 (5)			舟底	舟舟舟	19	
130	12往舟	舟	舟 (5)			舟底	舟舟舟	29	
131	12往NE	舟	舟 (5)	(12.6)	0.8	3.9 □口/4 施工	舟舟舟、舟底	12,-	
132	12往SE	舟	舟 (5)	14	7.2	5.7 □口/5 高台1/3 施工	舟舟舟、舟底	9,-	
133	12往舟	舟	舟 (5)	(16.0)	7.0	8.85 □口/5 施工	舟舟舟、舟底	15	
134	12往舟	舟	舟 (5)	16.1	7.4	8.64 □口/5 高台1/4 施工	舟舟舟、舟底	35	
135	12往舟	舟	舟 (5)	14.7	7.6	6.1 □口/5 施工	舟舟舟、舟底	32	
136	12往舟	舟	舟 (5)	15.5	6.8	5.75 □口/5 施工	舟舟舟、舟底	28	
137	12往舟	舟	舟 (5)	12.8	6.9	4 □口/2 施工	舟舟舟、舟底	14	
138	12往SW	舟	舟 (5)	(6.4)	0.5	4 □口/5 施工	舟舟舟、舟底	17	
139	12往舟	舟	舟 (5)	(15.2)	7	4 □口/2 高台1/3 施工	舟舟舟、舟底	18,-	

種名	学名	分類	形態	生態		参考文献
				生長地	花期	
623 佐佳N2	土 假AT	9.2	鹿角7(赤色)	林地附近		85 - 9
624 佐佳SW	土 枝	1.62 (0.80)	2.4	鹿角7	鹿2/3	85 - 5
625 佐佳SW	土 枝	0.40	鹿角7	林地附近		85 - 5
626 佐佳No.2	木 枝八五	9.5	5.6	1.6	1/7 亂生	85 - 9
626 佐佳No.2	木 枝八五	9.5	5	2.6	1/7 亂生	85 - 6
629 佐佳M9n1	土 枝八	—	4.8	鹿8	—	85 - 10
630 佐佳SW	土 枝八	—	5	鹿8	—	85 - 12
631 佐佳No.4	土 枝八三	8.7	4.5	1.65	1/4 亂生	85 - 7
632 佐佳N2E	土 枝八三	(10.4)	(6.2)	2.3	1/4 鹿1/4	85 - 9
633 佐佳PE-T	土 枝八	(6.2)			鹿1/4	85 - 5
634 佐佳	枝	(14.0)			口1/8	85 - 3
635 佐佳NP	枝 枝	(14.4)			口1/8	85 - 4
65 佐佳No.1	木 枝	(7.0)	5.4	鹿1/4	—	85 - 1
637 佐佳No.5	木 枝	(7.2)	鹿1/4	—	—	85 - 2
638 佐佳No.5, ベトス	木 枝八	(14)	(2.2)	3.5	口1/8 鹿8	85 - 8
639 佐佳N1	木 枝八	(15.6)	(6)	4.4	鹿1/4 鹿一頭	85 - 4
640 57佐佳No.9, NE	鹿八 枝	(13.2)	(8.8)	6.1	1/1 鹿8	85 - 2
641 57佐佳No.3	鹿八 枝	(15.6)	(7.8)	8.1	口1/8 茶面8 高台 鹿8	85 - 1
642 57佐佳N29	鹿八 枝	(7.8)			鹿8	85 - 5
643 57佐佳No.3	鹿八 枝	—	6.6	鹿8	鹿8	85 - 3
644 57佐佳N2	鹿八 枝	—	6.6	鹿8	鹿8	85 - 2
645 57佐佳N4	鹿八 枝	—	6.6	鹿8	鹿8	85 - 2
646 57佐佳NE	鹿八 枝	(14.0)			鹿8 鹿8 鹿8	85 - 6
647 57佐佳N9	土 枝八五	(13.6)	(5.2)	8.9	1/8 鹿8	85 - 18
647 57佐佳N18	土 枝八五	(13.2)	(4.8)	4.3	1/4 鹿8	85 - 10
648 57佐佳N14	土 枝八五	(13.6)	(6)	4.4	1/8 鹿3/4 鹿8	85 - 9
649 57佐佳SW	土 枝八五	(14.0)	(3.8)	3.5	1/8 鹿1/4 鹿8	85 - 11
650 57佐佳N9	土 枝	(14.4)			口1/8 茶面8 茶面8	85 - 12
651 57佐佳N19	土 枝八五	9.8	4.6	1.75	口1/8 鹿8	85 - 19
652 57佐佳N5, PE-S	土 枝八五	9.8	4.1	1.75	口1/8 鹿8	85 - 23
653 57佐佳N6	土 枝八五	9.8	4.8	2.25	1/2/3 鹿8	85 - 17
654 57佐佳No.40	土 枝八五	(10.2)	(4.6)	1.9	1/8 鹿2/3	85 - 15
655 57佐佳B8	土 枝八五	(10)	(4.6)	1.7	1/2/3 鹿2/3	85 - 24
656 57佐佳SW	土 枝八五	(10.6)	(4)	1.9	1/8 鹿1/2	85 - 23
657 57佐佳N23, SE	土 枝八五	9.7	5.1	1.7	1/8 鹿8	85 - 20
658 57佐佳T	土 枝八五	9.8	4.4	2.4	1/8 鹿8 鹿8	85 - 14
659 57佐佳NE	土 枝八五	(9.2)	(3.6)	2.2	1/8 鹿8 鹿8	85 - 16
660 57佐佳N35	土 枝八五	(12.8)	(4.2)	2.1	1/8 鹿8	85 - 22
661 57佐佳NW	土 枝八五	(10.7)	(4.2)	2.75	1/8 鹿8 鹿8	85 - 18
665 57佐佳N1	土 枝	(11.6)			1/1/8 鹿8	85 - 26
666 57佐佳N2	土 枝	—			—	85 - 26
667 57佐佳N3	土 枝	—			—	85 - 27
668 57佐佳N4	土 枝	—			—	85 - 28
669 57佐佳N26	鹿 八	(15.6)	(7.4)	5.8	1/6 鹿8 鹿8 鹿8	85 - 25
670 57佐佳N8	鹿 口8	(14)			—	85 - 29
669 62佐佳N2	土 枝八五	(8.2)	(5)	1.7	1/8 鹿1/3 鹿8	85 - 4
670 62佐佳SW	土 枝八五	(10.8)	(5.2)	1.7	1/8 鹿8 鹿8	85 - 5
671 62佐佳N5	土 枝八五	(9.6)	(5)	2.5	1/1/8 鹿8	85 - 3
672 53佐佳	鹿八 枝	(6.6)			—	85 - 6
673 62佐佳	鹿八 枝	(6.6)			—	85 - 5
674 59佐佳SK	土 枝八五	(12.8)	(6.4)	3.2	1/2/3 鹿1/4 鹿8	85 - 7
675 62佐佳SK	土 枝八五?	(2.0)			—	85 - 8
676 52(L)SW, SE	土 枝	(6.4)			—	85 - 1
677 53佐佳P220N	鹿八 枝	(14.2)			—	85 - 7
686 53佐佳N7	土 枝八五	(6.2)			—	85 - 6
687 53佐佳N8	土 枝	(5.8)			—	85 - 6
688 53佐佳N9	土 枝	(5.8)			—	85 - 6
689 53佐佳N10	土 枝	(6.2)			—	85 - 6
690 54佐佳N7	土 枝	(6.2)			—	85 - 6
691 54佐佳N8	土 枝	(6.6)			—	85 - 6
692 54佐佳N9	土 枝	(6.6)			—	85 - 6
693 54佐佳N10	土 枝	(6.6)			—	85 - 6
694 54佐佳N11	土 枝	(6.6)			—	85 - 6
695 54佐佳N12	土 枝	(6.6)			—	85 - 6
696 55佐佳N9	鹿八 枝	—	6.4	鹿8	—	85 - 18
697 60佐佳N7	土 枝八五	(15.2)	(6.2)	4	1/2/3 鹿1/5	85 - 10
698 60佐佳N10	土 枝八五	9.8	5.2	1.65	鹿8	85 - 6
699 60佐佳N15	土 枝八五	9.8	4	1.8	1/1/8 鹿8	85 - 5
700 60佐佳N31	土 枝八五	(9.6)	(4.8)	1.7	1/2/3 鹿2/3	85 - 7
701 60佐佳N10	土 枝八五	9.4	4.2	1.95	口1/8 鹿8 鹿8	85 - 4
704 64佐佳N23	土 枝八五	8.2	2.2	1/2/3 鹿8	85 - 9	
706 66佐佳N-B	土 枝八五	9.8	5	2.1	1/2/3 鹿8	85 - 8
669 60佐佳N9	土 枝	10.2	6	3.5	1/8 鹿8 鹿8	85 - 12
709 66佐佳N7	土 枝八	—	8	鹿1/4 鹿8	85 - 41	
701 66佐佳N4	鹿八 枝	(14.6)	—		口1/1/2 鹿8	85 - 3
708 66佐佳N, N5, B	枝 枝	(14.4)	—		(1/1/3)	—
703 66佐佳N9, No.2	鹿 八	14.6	7.3	6.2	口2/3 鹿1/4 鹿8	85 - 2
704 66佐佳N7	小細D	(2.24)			口1/1/2	85 - 21
705 66佐佳N, NE, NW	小細D	(2.12)			口1/1/2	85 - 20
706 66佐佳N13	小細D	(2.0)			口1/1/2	85 - 22
707 65佐佳N31	土 枝八五	(6.6)			口1/2/3 鹿2/3	85 - 1
708 65佐佳N1	土 枝八五	(6.6)			口1/2/3 鹿2/3	85 - 17
709 61佐佳N, No.4	鹿八 枝	(4.7)	7.5	4.15	1/1/2 鹿8	85 - 14
709 61佐佳N5	鹿八 枝	(7)			鹿2/3	—
710 61佐佳N12	鹿八 枝	(7.2)			—	85 - 15
711 61佐佳N14	土 枝八五	11.2	6.15	3	口1/8 鹿8	85 - 12
712 61佐佳N10	土 枝八五	(11)	(2)	2.7	1/2/3 鹿1/5 鹿8	85 - 5
713 61佐佳N2	土 枝八五	12.05	5.5	3.15	1/2/3 鹿8	85 - 3
714 61佐佳N5	鹿八 枝	12.1	5	3.1	1/2/2 鹿8	85 - 1
715 61佐佳N10	鹿八 枝	(12.4)			口1/2/3 鹿2/3, 鹿8	85 - 6
717 61佐佳N4	鹿八 枝	(14.6)	(4.8)	4.85	1/2/3 鹿8	85 - 7
715 61佐佳N5, NW	鹿八 枝	(14.6)	(6)	4	1/2/3 鹿8	85 - 7
719 61佐佳N13	鹿八 枝	(13.9)	(7.2)	4.65	1/2/3 鹿1/2 鹿8	85 - 8
721 61佐佳N3	鹿 八	(14.45)	(6)	4.7	1/2/3 鹿1/5 鹿8	85 - 19
721 61佐佳N3, NW	鹿 八	(14.2)	(6)	5	1/2/3 鹿8	85 - 9

722	61在No11	上 條	16.5		口一頭大 頭面丸 合合	クロナヂ、頭顎形	61 - 16	
723	61在No11	七 條	(6.7)		口一頭大 頭面丸 合合	クロナヂ、付舌形、頭顎形吸啜テナ	61 - 12	
724	61在No11	七 條	(1.8)		口一頭大 頭面丸 合合	クロナヂ、付舌形、頭顎形吸啜テナ	61 - 11	
725	67在No27	前 伸	(13.0)	5.4	口1/8 死光	クロナヂ、付舌形、頭顎形、内側ミキナギ染黒色顔	67 - 14	
726	67在No27	前 伸	(13.0)		口1/8 死光	クロナヂ、内側ミキナギ染黒色顔	67 - 13	
727	67在No27	前 伸	(13.0)		口1/8 死光	クロナヂ、内側ミキナギ染黒色顔	67 - 12	
728	67ベルト	前 伸	(7)		口1/4 死光	クロナヂ、付舌形、頭顎形、内側ミキナギ染黒色顔	67 - 9	
729	67在No17	九 扇八	12.95	6.5	口1/2 死光	クロナヂ、付舌形、頭顎形	67 - 4	
730	67在No29	上 條	13.4	8.1	口1/4 死光	クロナヂ、付舌形、頭顎形	67 - 5	
731	67在ノフ	上 條	(6.1)	4.0	口1/2 死光	クロナヂ、付舌形、頭顎形	67 - 1	
732	67在No18	七 條八	10	3.8	口1/4 死光	クロナヂ、頭顎形	67 - 2	
733	67在No18	七 條八	11.03	4.4	口1/4 死光	クロナヂ、頭顎形	67 - 3	
734	67在No20	七 條八	(7.9)		口1/4 死光	クロナヂ、付舌形、頭顎形吸啜テナ	67 - 6	
735	67在No20	七 條八	(13.2)	5.38	口1/8 死光	クロナヂ、付舌形、頭顎形吸啜	67 - 8	
736	67在No2	七 條八	(14.2)	7.8	口1/4 死光	クロナヂ、付舌形、頭顎形	67 - 7	
737	67在No41, No36	上 條	(14.2)	7.8	口1/4 死光	クロナヂ、付舌形、頭顎形	67 - 7	
738	67在No4, No35, No19, No5, ベルト, 伸3W	腰 A?	(14.05)		口1/2 肩面2/3 合合	クロナヂ、頭顎形吸啜テナ	67 - 10	
739	67在No17	死 光	(10.6)	5.6	2.15	口1/6 死光1/2	クロナヂ、付舌形、頭顎ヘタケリ	67 - 15
740	67在No17	死 光	11.7	6.3	2.6	口1/6 死光	クロナヂ、付舌形、頭顎形	67 - 16
741	67在SSE, S3在	死 光	(11.85)	4.6	2.6	口1/4 死光1/2	クロナヂ、付舌形、頭顎形	67 - 17
742	67在No26	死 光	12.7	6.75	2.65	口1/7 死光	クロナヂ、付舌形、頭顎形	67 - 13
743	67在No26	死 光	11.8	5.5	2.20	口1/2 死光	クロナヂ、付舌形、頭顎形	67 - 16
744	67在SSE	死 光	14.6	7.7	2.65	口1/2 死光	クロナヂ、付舌形、頭顎ヘタケリ	67 - 21
745	67在SSE	死 光	(6.5)		2.65	口1/2 死光1/2	クロナヂ、付舌形、頭顎ヘタケリ	67 - 22
746	67在SW	死 光	(7.8)		2.65	口1/4 死光	クロナヂ、付舌形、頭顎形	67 - 20
747	67在SW, ベルト	小型翼D	(16.85)		口1/5	口1/6	クロナヂ	67 - 11
748	67在SW, NE	-2 翼D?	(10.65)		口1/2	ナデ	死面内面に化粧木村筋	67 - 24
749	67在	上 條A	2LB		口1/10	口1/6 死光	クロナヂ、内面テナ、頭顎吸啜付後ヨコナヂ	67 - 25
750	67在N+ベルト, 納合5W	土 Y	10		口面1/3	ナデ、頭顎吸啜付テナ	脚部S部位?	67 - 26
751	67在AII	上 條A	(11)	4.0	3.5	口1/4 死光1/2	シカナヂ、付舌形	66 - 1
752	67在No1	上 條A	(11)	4.0	3.5	口1/4 死光	シカナヂ、付舌形、頭顎形	66 - 2
753	67在No5	上 條A	(6.2)		3.5	口1/5	シカナヂ、付舌形、内側ミキナギ染黒色顔	66 - 3
754	67在No3	土 Y	(5.4)		3.5	口1/2	ナデ	66 - 3
755	67在No2	土 條A	(13.8)	5.6	口1/2 死光	シカナヂ、頭顎形	66 - 6	
756	67在No17, No24, No28	土 條A	(15.8)		口1/2 死光一部	シカナヂ、頭顎形	66 - 4	
757	67在No14, No18	土 條	14.9	8	6 口1/4 死光1/5	シカナヂ、付舌形	66 - 6	
758	67在No4, No14, No18	上 條B	(24.2)		口1-部	シカナヂ、付舌形、頭顎形	内面コナヂ上部側吸啜テナ、脚部2草付後ヨコナヂ	66 - 7
759	73在No3	死 光	13.8		口1/5 死光 高面	シカナヂ、付舌形、頭顎形	内面下部分化粧木村筋	73 - 6
760	73在No10, No13	死 光	(15.4)		口1/5	シカナヂ、付舌形	シカナヂ、内側ミキナギ染黒色顔	73 - 8
761	73在No17	死 光	(7.2)		口1/6 死光	シカナヂ、付舌形、頭顎形	シカナヂ、内側ミキナギ染黒色顔	73 - 7
762	73在No22	死 光	(11.8)		口1/6 死光	シカナヂ	73 - 10	
763	73在No16	上 條A	(12)	5.6	3.2	口1/4 死光	シカナヂ、頭顎吸啜テナ	73 - 9
764	73在No27	上 條A	(11.7)	3.6	2.95	口1/6 死光	シカナヂ、頭顎吸啜テナ	73 - 10
765	73在NW	土 HCA	(6.5)		口1/2 死光	シカナヂ、頭顎吸啜	73 - 14	
766	73在No14	土 條A	(6)		口1/4 死光	シカナヂ、付舌形	73 - 19	
767	73在No22	上 條	6.3		口1/4 死光	シカナヂ、付舌形、頭顎形	73 - 11	
768	73在GU22	上 條	7.3		口1/4 死光	シカナヂ、付舌形、付舌形、頭顎形	73 - 12	
769	73在No26	上 條H 1?	17.3		口1/4 死光4/5 背筋	シカナヂ、付舌形	内面クーパー状の背筋	73 - 5
770	73在No3	死 光	11.8	6.8	2.5 口1/4 死光	シカナヂ、付舌形、頭顎形	73 - 18	
771	73在No1	死 光	12.3	6.2	2.1 口1-部 死光	シカナヂ、付舌形、頭顎形	73 - 17	
772	73在No33	死 光	(9.8)		口1/5 死光	シカナヂ、付舌形、頭顎形	73 - 19	
773	73在79	死 光	(6.4)		口1/3 死光	シカナヂ、付舌形、頭顎形	73 - 22	
774	73在No26	死 光	(7.5)		口1/5 死光	シカナヂ、付舌形、頭顎形	73 - 21	
775	73在No7	死 光	(7.6)	9.6	9.5 口1-部 死光	シカナヂ、付舌形、頭顎形	73 - 20	
776	73在No15	上 小型翼D	(11.4)	9.6	9.5 口1-部 死光	シカナヂ、ロゴロジ、頭顎形	73 - 4	
777	73在No9, NW, No18, No25	上 小型翼D	13.7	8.6	16.8 口1/3 死光	シカナヂ、ロゴロジ、ロゴロジ、頭顎形	73 - 3	
778	73在No15, NW, No18	土 條A	(23.6)		口1/5	シカナヂ、ロゴロジ、ロゴロジ、頭顎形吸啜テナ	73 - 16	
779	73在No33, NW, No21, No25, No26, No27	上 條羽	(20.0)		口1/4 死光	シカナヂ、ロゴロジ、ロゴロジ、内側ミキナギ染、脚顎吸啜付材	73 - 3	
780	73在No16, No18	土 小型翼D?	(21.8)		口1/2	シカナヂ、内側ミキナギ、内面ナデ	73 - 1	
781	73在No1	土 條	(6.8)		死光	シカナヂ、付舌形、頭顎形吸啜テナ	75 - 1	
782	73在	土 條	(7.4)		死光1/2	シカナヂ、付舌形、頭顎形	75 - 5	
783	73 77	土 條 AII	(12.0)		口1/12	シカナヂ	77 - 1	
784	73 78	土 條 AII	(9.6)	2.5	1.3	シカナヂ、付舌形、頭顎形	78 - 2	
785	73 78	土 條 AII	(9.6)	4.6	1.2	シカナヂ、付舌形、頭顎形	78 - 3	
786	73 78	土 條 AII	(7.4)		口1/4 死光	シカナヂ、付舌形、頭顎形	78 - 4	
787	73 78	土 條	(7.4)		口1/4 死光	シカナヂ、付舌形、頭顎形	78 - 4	
788	73 78 No22	死 光	(13.2)		口1/4 死光	シカナヂ、付舌形、頭顎形	78 - 7	
789	73 78 No7	死 光	(14.1)	9.7	4.75 口1/2 死光	シカナヂ、付舌形、頭顎形	78 - 6	
790	73 78 No32	死 光	11.2	5.6	3.9 口1-部 死光 高面	シカナヂ、付舌形、頭顎形	78 - 5	
791	73 78 No3	死 光	(9.4)	4.4	1.8 口1/4 死光	シカナヂ、付舌形、頭顎形	78 - 4	
792	73 78 No14	死 光	(9.4)	3.8	1.8 口1-部 死光 高面	シカナヂ、付舌形、頭顎形	78 - 3	
793	73 78 No4	死 光	(6.6)		死3/4 口1/4 死光	シカナヂ、付舌形、頭顎形	78 - 9	
794	73 78 No5	死 光	(7.2)		死1/2 口1/4 死光	シカナヂ、付舌形、頭顎形	78 - 2	
795	73 78 NW	死 光	(7.2)		死1/2 口1/4 死光	シカナヂ、付舌形、頭顎形	78 - 1	
796	73 78 No3	死 光	(7.2)		口1-部 死光	シカナヂ、付舌形、頭顎形	84 - 2	
797	73 78	土 條 A	(9.2)		口1/2 死光	シカナヂ、頭顎吸啜	84 - 1	
798	73 78 No16	土 條 A	(9.2)		口1/2 死光	シカナヂ、頭顎吸啜	84 - 1	
799	73 78 No48	土 條	9.3	4.8	3.45	シカナヂ、付舌形	84 - 1	
800	73 78 No38	土 條	(10.1)		—	シカナヂ、付舌形吸啜テナ、内側ミキナギ染黒色顔、外側一部にミキナギ	84 - 1	
801	73 78 No50	黑P 條	9.35	5	3.6	シカナヂ、付舌形、付舌形吸啜テナ、内側ミキナギ染黒色顔	84 - 17	
802	73 78 No14	土 條	13.65	7	5.7	シカナヂ、付舌形、付舌形吸啜テナ、内側ミキナギ染黒色顔	84 - 19	
803	73 78 No17, No28	土 條	(14.2)	(8.8)	4	シカナヂ、付舌形、付舌形吸啜テナ、内側ミキナギ染黒色顔	84 - 18	
804	73 78 No21	土 條 AII	(12.0)		—	シカナヂ、付舌形、付舌形吸啜	84 - 31	
805	73 78 No17, No28	土 小型翼D	(12.0)		—	シカナヂ、付舌形、付舌形吸啜テナ	84 - 32	
806	73 78 No71	土 條AII	(20.4)		—	シカナヂ、付舌形吸啜付後ヨコナヂ	84 - 32	

929	グリット	灰 瓦	(16.0)	(6.4)	3	ロクロナヂ、付高台	G - 6
930	グリット	灰 瓦	(16.0)	(6.2)	2.7	ロクロナヂ、付高台、表面ヘタケズリ	G - 3
931	グリット	灰 瓦	(15.2)	(7.4)	4.6	ロクロナヂ、表面ヘタケズリ、付高台	G - 4
933	グリット	灰 瓦	(16.0)			ロクロナヂ、付高台、表面ヘタケズリ 内面ミガキ表面化粧	G - 4
934	グリット	灰 瓦	(14.0)	(6)	2.5	ロクロナヂ、付高台、表面ヘタケズリ	G - 3
935	灰瓦N	灰 瓦	(14.0)	(7.0)	3.5	表面ヘタケズリ、高台1/2	A種- 11
936	灰瓦N	灰 瓦	(14.0)	(7.0)	3.5	表面ヘタケズリ、高台1/2	A種- 10
937	灰瓦N	灰 瓦	(14.0)	(7.0)	3.5	表面ヘタケズリ、付高台、内面ミガキ表面化粧	C種- 1
938	灰瓦N	灰 瓦	(14.0)	(7.0)	3.5	表面ヘタケズリ、付高台、内面ミガキ表面化粧	A種- 9
939	灰瓦N	灰 瓦	(14.0)	(7.0)	3.5	表面ヘタケズリ、付高台、内面ミガキ表面化粧	A種- 12
940	灰瓦N	灰 瓦	(14.0)	(7.0)	3.5	表面ヘタケズリ、付高台、内面ミガキ表面化粧	A種- 6
941	灰瓦N	灰 瓦	(14.0)	(7.0)	3.5	表面ヘタケズリ、付高台、内面ミガキ表面化粧	A種- 5
945	砂利N	土 砂利	(5.8)	(5)	2.4	ロクロナヂ、付高台	A種- 13
947	砂利N	土 砂利	(12.0)	(7.2)	3.1	表面ヘタケズリ、高台1/2	A種- 13
948	砂利N	土 砂利	(14.0)			ロクロナヂ、付高台	A種- 8
949	砂利N	土 砂利	(16.0)			ロクロナヂ、付高台	C種- 2
950	砂利N	土 砂利	(16.0)			ロクロナヂ、付高台、表面ヘタケズリ	A種- 9
951	ケン	灰 瓦	(17)			ロクロナヂ、付高台	A種- 12
952	ケン	灰 瓦	(7.0)			ロクロナヂ、付高台	A種- 6
964	灰陶器	灰 陶	(7.0)			外面ヘタケズリ、内面ロクロナヂ、付高台、表面ヘタケズリ	C種- 3
965	ケン	灰 陶	(7)			外面ヘタケズリ、表面化粧、内面ロクロナヂ	A種- 7
966	陶	灰 陶	(13.0)			表面ヘタケズリ	B種- 1
967	ケン	灰 陶	(6.0)			ロクロナヂ、表面化粧	A種- 4
968	ケン	灰 陶	(7.0)			ロクロナヂ、付高台	A種- 2
969	ケン	灰 陶	(7.0)			ロクロナヂ、付高台、表面化粧	A種- 1
970	ケン	灰 陶	(7.0)			ロクロナヂ、付高台、表面ヘタケズリ	A種- 3
971	グリット焼出	灰 陶	(3.0)			ロクロナヂ、付高台	C種- 3
972	灰陶器	灰 陶	(7.0)			外面ヘタケズリ、内面ロクロナヂ、付高台、表面ヘタケズリ	A種- 2
973	灰陶器	土 灰陶器	(5.5)	2	1.6	内面ロクロナヂ、付高台、内面ミガキ表面化粧	赤B種- 2
974	灰陶器	土 灰陶器	(5.5)			ロクロナヂ、付高台	赤B種- 1
975	灰陶器	土 灰陶器	(15.0)			ロクロナヂ、付高台	赤B種- 1
976	ケン	灰 陶	(7.0)			ロクロナヂ、付高台、内面ロクロナヂ	赤B種- 1
977	ケン	灰 陶	(7.0)			ロクロナヂ、付高台、表面化粧	赤B種- 1
978	ケン	灰 陶	(7.0)			ロクロナヂ、付高台、表面ヘタケズリ	赤B種- 1
979	ケン	灰 陶	(7.0)			ロクロナヂ、付高台、内面ミガキ表面化粧	赤B種- 1
980	ケン	灰 陶	(7.0)			ロクロナヂ、付高台、内面ミガキ表面化粧	赤B種- 1
981	ケン	灰 陶	(7.0)			ロクロナヂ、付高台、内面ミガキ表面化粧	赤B種- 1
982	ケン	灰 陶	(7.0)			ロクロナヂ、付高台、内面ミガキ表面化粧	赤B種- 1

第6表3 土器観察表（平安時代の土器 緑釉陶器）

27	7位N	縦 縞	(3.0)			ロクロナヂ、高台1/4、底1/4	合掌式の縦縞、表面は緑釉、内面は白釉、内面の底端は少し、白色の巻土。内面に付高台、巻土。	経-3
28	7位Nフクエ	縦 縞	(2.0)			ロクロナヂ、ロクロナヂ	939と同一形状	経-3
29	7位No.1	縦 縞	(7.0)			ロクロナヂ、付高台、内面ヘタケギキ、外側体断下から底面にかけて前部ヘタケズリ。	全体的に緑釉、外側底端は特別剥落から黒褐色が目立つ。底端色は黒褐色のみならず、高台底端には黒褐色、内面は付高台の下から一部が剥落する。1/2の位置で横縞があり、1/2が剥落する。	経-6
305	15位No.1, 91Q, 35位E	縦 縞	(15.0)			ロクロナヂ、内面ヘタケギキ	全体底端剥落、付高台底端、底端色は黒褐色のみならず、19位E、35位E、35位No.1	経-1
349	22位No.1, 19位N	縦 縞	(15.0)			ロクロナヂ、内面ヘタケギキ	全体底端剥落、付高台底端、底端色は黒褐色のみならず、19位N、22位No.1の位置で横縞があり、1/2が剥落する。	経-2
350	23位No.1	縦 縞	(13.0)	(6.0)	3.7	ロクロナヂ、底1/2	全体底端剥落、付高台底端、底端色は黒褐色のみならず、19位N、23位No.1	経-1
327	44位No.1	縦 縞	(16.0)			ロクロナヂ、内面ヘタケギキ	全体底端剥落、付高台底端、底端色は黒褐色のみならず、31位、36位E、36位E	経-12
642	57位No.12	縦 縞	(12.0)			ロクロナヂ、付高台、内面ヘタケギキ	全体底端剥落、付高台底端、底端色は黒褐色のみならず、31位、36位E、36位E	経-10
831	75位Nフクタ	縦 縞	(3.0)	(4.0)	3.2	ロクロナヂ、底1/3、内面ヘタケギキ	全体底端剥落、付高台底端、底端色は黒褐色のみならず、31位、36位E、36位E	経-11
835	N54W20より90位N	縦 縞	(3.0)			ロクロナヂ	全体底端剥落、2片が残る。P型?	経-15
836	N18E20W	縦 縞	(14.0)			ロクロナヂ	全体底端剥落、底端色	経-9
837	N18E20W	縦 縞	(12.0)			ロクロナヂ	ロクロナヂ、底端色	経-15
838	N38W20	縦 縞	(10.0)			ロクロナヂ	全体底端剥落、内面は白釉	経-14
839	N37W20、N38N2	縦 縞	(7.0)			ロクロナヂ、外側ロクロナヂ、付高台、表面ヘタケズリ	全体底端剥落、内面は白釉	経-14
840	N42W20	縦 縞	(8.0)			ロクロナヂ、付高台	全体底端剥落、内面は白釉	経-14
853	C横山頭	縦 縞	(9.1)			ロクロナヂ、内面ヘタケギキ	全体底端剥落、付高台底端、上部、内面は白釉	経-13
997	36位Nフク	縦 縞				ロクロナヂ	全体底端剥落、底端色は黒褐色のみならず、27位N	経-11
998	7位	縦 ?				ヨコナヂ	剥落している。939と同一形状か?	経-15
999	7位N	縦 ?				-	205と同一形状か?	経-12
1000	N51W30 981221	縦 紺				-	937と同一形状か? 内面に黒斑。	経-12
1001	N51W30より50位N	縦 ?				内面ロクロナヂ	全体底端剥落、内面に付高台が残る。939と同一形状か? P型?	経-7
1002	N54W30 990112	縦 ?				内面ロクロナヂ	全体底端剥落。	経-7
1003	第1位出窯フクタ	縦 紺				内面ロクロナヂ、内面ヘタケギキ	全体底端剥落。	経-13
1004	N54W30 581221	縦 紺				ロクロナヂ	全体底端剥落。937と同一形状か? P型?	経-7
1005	右側横頭レンチ A 中央付	縦 ?				-	内面剥落。底端色	経-7
1010	43位NEフクタ	縦 花瓶				ロクロナヂ	全体底端剥落、内面は白釉、剥落している。1014と同一形状。	経-7
1011	61位N 981680	縦 ?				-	全体底端剥落。壁面が剥落する。	経-7
1012	107位N SW	縦 ?				-	わざかに剥落がある。	経-7
1013	69位 N 57位の可逆性	縦 ?				-	全体底端剥落。	経-7
1014	NEフクタ 981006	縦 花瓶				ロクロナヂ	全体底端剥落。剥落している。1010と同一形状。	経-7
1015	11位No.4	縦 ?				-	全体底端剥落。白色の底端。	経-7
1016	57位N	縦 紺				内面ロクロナヂ	全体底端剥落。内面は白釉。	経-7
1018	57位N	縦 紺				-	全体底端剥落。内面は白釉。	経-7
1019	57位N	縦 紺				内面ヘタケギキ	全体底端剥落。内面は白釉。	経-7
1020	109位N W2	縦 紺				-	全体底端剥落。内面は白釉。	経-7
1021	N54W30 981221	縦 紺				内面ロクロナヂ	全体底端剥落。内面は白釉。	経-7
1024	980220	縦 ?				-	全体底端剥落。内面は白釉。	経-7

1009	58位の外	北斜面部	縫?								山越前片、輪郭線跡。
------	-------	------	----	--	--	--	--	--	--	--	------------

第6表4 土器観察表（中世の土器・陶磁器）

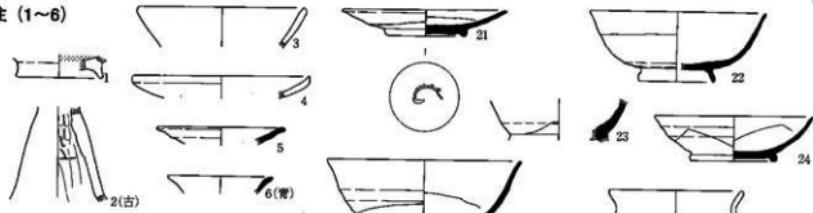
位	名	種類	形態	寸法	特徴	出所	備考
4	5位ペルト	土 磁	(14.6)	口1/12	青口クロ断面	12世紀末～13世紀初葉。内壁にテラコッタ付着。	5-2
6	6位	方盤 縫合付は所	(3.4)	11 細		墨塗たほりやや手付する。	6-6
7	6位NR	土 磁	(7)	(8) (1.3)	口1/8	青口クロ断面	13世紀中期～後葉 8-1
11	6位SE	青磁 瓶	(14.6)	口一頭	青口クロ断面	13世紀中期～後葉 12	
34	7位	角盤 脊付	(28.2)	口1/12	白口ヨコナデ、ロクロナデ	青磁青釉器。底、足、入、7-19	
350	25位SW	角盤 前頭	(7.2)	底1/8		青磁青釉器。内面のみ釉化。	25-2
351	25位N2	青白 扁丁腹	(6.6)	口1/6	口縁部から底部、口断面が折り返されている。	12～13世紀(3世紀の可能性大) 13-13	
352	25位NW	角盤 付	(11)	底1/8	外曲腹ナデ、内肉ナデ、輪脚ナデ	青磁青釉器。13世紀末であるか。 25-4	
354	25位ペルトW	白磁 瓶	—	—	外直腹ロクロナデ	白磁(?)、12世紀後半 25-5	
355	25位N3	角盤 檻付	(25.2)	口1/5	口縁部折れり、外腹ナデ。唇付7本。	青磁青釉器。唇部に凹字がある。 14-14	
483	8位東フクサ	青磁 地	(1.8)	口一頭	ロクロコロ、ロクロナデ	東平安 38-19	
484	40位Fクサ	土 磁	7.55 6.9	L1 底3/4	ロクロコロ	12世紀中葉～後葉 42-1	
484	40位フクサ	上 盆	(6)	(7) 1.15	口1/2	青口クロ断面	13世紀中期～後葉 42-2
485	40位Dフクサ	下 盆	(6.2)	底	青口	13世紀中期～後葉 42-3	
486	40位Dフクサ	脚付 ?	(3.8)	底一頭	ロクロナデ、斜板断面。内面底部に灰釉が施されている。	古墳? 青磁器。13世紀後半。 42-4	
487	40位ペルト	青磁 瓶	(13)	口1/10		13世紀中期。内面に凹字の底跡。 42-5	
488	40位Wフクサ	青白 地	—	—	外腹凸文。内面ロクロナデ	13世紀後半～14世紀後葉。 42-6	
489	40位Wフクサ	角盤 五瓣	(8)	底1/4	ロクロコロ、底面ナデ、内腹に施釉	古墳? 青磁器 42-7	
871	91位東	白磁 瓶	(24.0)	口1/14	L1底5cm	青磁口沿、一部	874
599	52位N	青白 地	—	—	外腹凸文と達背文。内面ナデとケズリ	12～13世紀 43-14	
616	1位ホ・A	白磁 瓶	(16.2)	口一頭	口縁部折	青磁 7	
793	7位カマド	土 磅	(10)	口1/6	青口クロ断面	12世紀末～13世紀初葉。唇ナダ。底入 78-5	
799	54位No1	白磁 瓶	(6.7)	底1/2	底面が削り、高台付近には施釉されない。	左側 11	
806	7位No46	土 内河原	—	—	口縁部折面。外腹偏方向ナデ	中世中期の内河原は異なる否認をされていて、半島中央部の可動性も、更に12世紀の遺物。口付付近 79-39	
866	土2位	青白 地	(14.8)	L1口1/2		東平安 8-2	
876	土53	土 里	(8.6)	1.1 L1口1/4 底3/4	青口クロ断面	12世紀中期～後葉 1.83-1	
882	P73	角盤 瓶	(4)	内腹1/5 美白一部	ロクロナデ、付窓台、窓台切	山越前。12世紀後半～14世紀初葉。明治1号墓式作行か。 P73-1	
883	P51	青磁 瓶	(5.8)	口一頭	ロクロナデ。取り出し窓台	源光寺 ? 1951-1	
924	石54	青磁 瓶	(12.4)	—		13世紀中期	
932	4位ペルトNo1	青磁 瓶	(7)	底	ロクロナデ。付窓台付近施釉	山越前。青磁に特徴的なG-8	
933	4位東	青磁 瓶	(6)	底1/2	外腹へとケズリ。内面に沈痕。体縮半径は施釉されない。	別所? 9-2	
935	4位	青磁 瓶	—	—		別所? 青磁器。刻文。 9-10	
943	6位	青磁 瓶	—	—		別所? 青磁器。刻文。 9-1	
944	6位東	青磁 瓶	(13.8)	口1/10	内腹面にロクロナデ	13世紀中期	
945	C-2位両瓶	青磁 瓶	(15.0)	口1/2		東平安。13世紀 8-6	
966	6位	青磁 瓶	(8.4)	口一頭		13世紀	8-5
971	7-53フ	白磁 瓶	—	—		福井? 文化	
972	4位フ980506	青磁 瓶	—	—		内曲面に施釉。13世紀後葉。 9-1	
973	NSW24N2nJ2	青磁 瓶?	—	—		内曲面に施釉。13世紀後葉。 9-2	
974	6位灰	白磁 瓶?	—	—	口縁部折片。V瓶。	内曲面に施釉。13世紀後葉。 9-3	
975	6位東	青磁 瓶?	—	—		内曲面に施釉。13世紀後葉。 9-4	
977	7位NWP	青磁 瓶	—	—		内曲面に施釉。13世紀後葉。 9-5	
978	P15	青磁 瓶	—	—		内曲面に施釉。13世紀後葉。 9-6	
979	7位	青磁 瓶	—	—		内曲面に施釉。13世紀後葉。 9-7	
980	上北1 王室御ケン	青磁 瓶	—	—		内曲面に施釉。13世紀後葉。 9-8	
990	EWON14	青磁 瓶	—	—		内曲面に施釉。13世紀後葉。 9-9	
991	ケン	白磁 袋物	—	—		内曲面に施釉。13世紀後葉。 9-10	
992	67位前	白磁 瓶	—	—	口縁部折	内曲面に施釉。13世紀後葉。 9-11	
993	4位W	青磁 瓶?	—	—		内曲面に施釉。13世紀後葉。 9-12	
994	4位東和鏡	青磁 瓶	—	—		内曲面に施釉。13世紀後葉。 9-13	
995	6位フ	青磁 瓶?	—	—		内曲面に施釉。13世紀後葉。 9-14	
996	5位No1	青磁 瓶?	—	—		内曲面に施釉。13世紀後葉。 9-15	
997	6位H	青磁 瓶?	—	—		内曲面に施釉。13世紀後葉。 9-16	
998	4位ペルト	青磁 瓶	—	—	口縁部折片。13世紀後葉。808と同一形状か?	内曲面に施釉。13世紀後葉。 9-17	
999	6位	青磁 瓶	—	—		口縁部折片。刻文。	
1000	NSW24N2nJ1	青磁 瓶?	—	—			
1001	7位	青磁 瓶	—	—			
993	GT1-SE	青磁 瓶?	—	—			
994	7位	青磁 瓶?	—	—	外腹吹拂と施釉。内面ナデ	青磁青釉器	
995	6位ワツ	青磁 瓶	—	—	内面ロクロナデ	青磁青釉器	
996	7位	青磁 瓶	—	—		青磁青釉器	

第6表5 土器観察表(層序別)

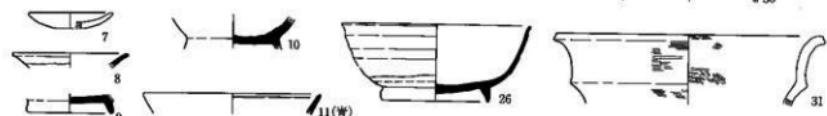
層序	層位番号	層位名	層厚(cm)	土質	特徴	層位番号	層位名	層厚(cm)	土質	特徴
51	I		1			52		1		
	II		2					2		
	III		562					3	(D) 9.4cm, (R) 2.2cm	
	IV									
	V									
	VI									
	VII									
	VIII									
	住跡地覆土	Ⅲ								
	ビット1層七	IV								
	計									
52	1号位番号	I	1	576 - 578 + 581 - 597		1		1		
	住跡地覆土	II	2	577 - 585 + 586 - 588 + 590 - 591 - 592 - 593 - 594 - 595	11	口幅: 7.2~8.7cm (0.20cm), 高さ: 1.3~1.75cm (1.55cm)	2	4.0cm	7.2~8.7cm (0.20cm), 高さ: 1.3~1.75cm (1.55cm)	3
	ビット3層七	III								
	ビット4層上	IV								
	電線地土	V								
	VI									
	壁	VII								
	壁	VIII								
	住跡地覆土	Ⅲ								
	ビット5層土	Ⅳ								
	計									
53	2号位番号	I	1	616		1		1		
	住跡地覆土	II	2							
	計									
54	3号位番号	I	1	626 - 628 - 631 - 635 - 636		1		1		
	II	2								
	III	3								
	住跡地覆土	Ⅳ								
	計									
55	4号位番号	I	1	685 - 686 - 691 - 692 - 693 - 695 - 700 - 701 - 702		5		5		
	住跡地覆土	II	2	693 - 699 - 703 - 704 - 705		9	口幅: 9.4~9.8cm (0.67cm), 高さ: 1.7~1.94cm (1.83cm)	3		
	ビット5層土	III		694		5.1	口幅: 9.8cm, 高さ: 1.46cm	1		
	電線地土	IV				1	口幅: 9.8cm, 高さ: 2.1cm	1		
	計									
56	1号位番号	I	1	710		1		1		
	I (中段)	1	711 - 717			2	口幅: 11.3~14.45cm (12.8cm), 高さ: 3~4cm (3.5cm)	2		
	I (下段)	2								
	住跡地覆土	III	3	712		1	口幅: 11.0cm, 高さ: 3.7cm	1		
	壁	IV		706 - 709 - 713 - 714 - 718 - 719 - 720 - 721 - 722 - 723		10	口幅: 12.0~13.1cm (13.1cm), 高さ: 3.1~3.13cm (3.13cm)	2		
	計					14				
57	2号位番号	I	1	679 - 680		2				
	II	2								
	III	3								
	住跡地覆土	IV,V		677		1				
	ビット2層土	V								
	電線地土	VI								
	壁	VII								
	計									
58	3号位番号	I	1	735		1		1		
	II	2								
	III	3								
	住跡地覆土	IV		726 - 729 - 730 - 732 - 739 - 742		6	口幅: 10cm, 高さ: 2.4cm	1		
	ビット3層土	V		738 - 733 - 734 - 736 - 737 - 741 - 746		7	口幅: 11.65cm, 高さ: 2.66cm	1		
	計					14				
59	73号位番号	I	1			18				
	II	2								
	III	3								
	住跡地覆土	IV		761 - 764 - 767 - 772		4	口幅: 12cm, 高さ: 3.3cm	1		
		V		759 - 769 - 762 - 763 - 766 - 769 - 770 - 771 - 774 - 776 - 777 - 779 - 780		14	口幅: 11.7cm, 高さ: 2.95cm	1		
	電線地土	VI								
	壁	VII								
	計									
60	79号位番号	I	1	800 - 802 - 803 - 804 - 813 - 823 - 824 - 827		8	口幅: 8.8cm, 高さ: 3.3cm	1		
	II	2		809 - 829		2	口幅: 8.4cm, 高さ: 1.7cm	1		
	III	3								
	住跡地覆土	IV		801 - 806 - 807 - 810 - 814 - 815 - 817 - 820 - 832 - 833		10	口幅: 8.8~9.5cm (0.3cm), 高さ: 1.7~2.5cm (2.04cm)	6		
	壁	V								
	壁	VI								
	壁	VII								
	計									
61	80号位番号	I	1			20				
	II	2								
	III	3								
	住跡地覆土	IV		833 - 836 - 841 - 843 - 843 - 844 - 846 - 853		8	口幅: 8.8~11.3cm (10.4cm), 高さ: 2.45~3cm (2.73cm)	2		
		V								
	電線地土	VI								
	壁	VII								
	計									
62	81号位番号	I	1			24				
	II	2								
	III	3								
	住跡地覆土	IV								
	ビット2層土	V								
	電線地土	VI								
	壁	VII								
	計									
63	64号位番号	I	1			127				
	II	2								
	III	3								
	住跡地覆土	IV								
	ビット3層土	V								
	電線地土	VI								
	壁	VII								
	計									

(注) 土器観察表(層序別)は、51住、52住、54住、56住、60住、61住、63住、67住、73住、79住、80住の出土遺物についてのみ作成した。

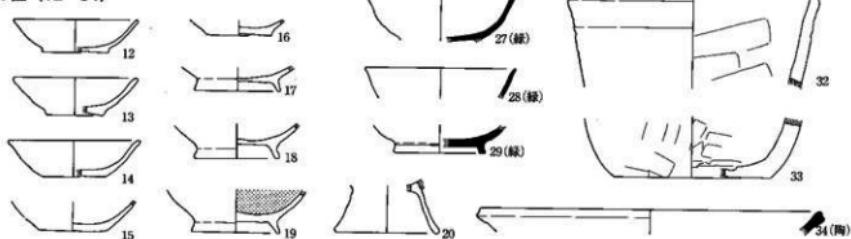
5住 (1~6)



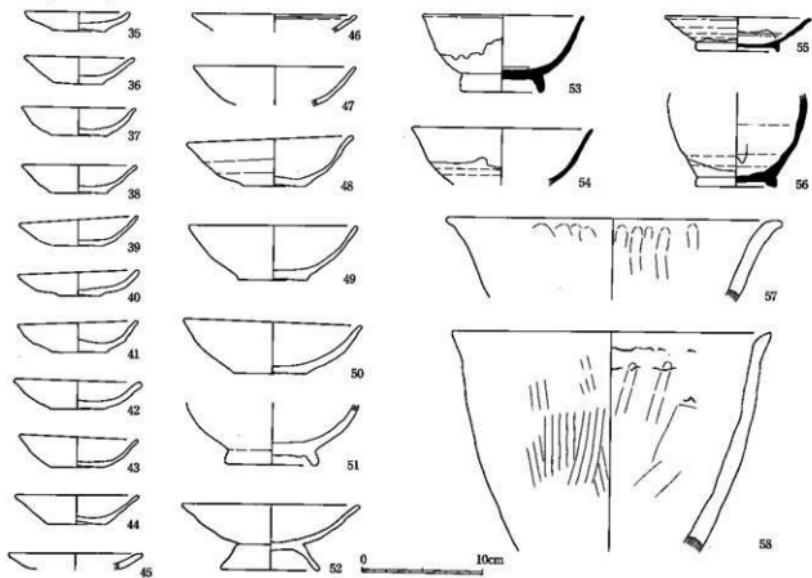
6住 (7~11)



7住 (12~34)

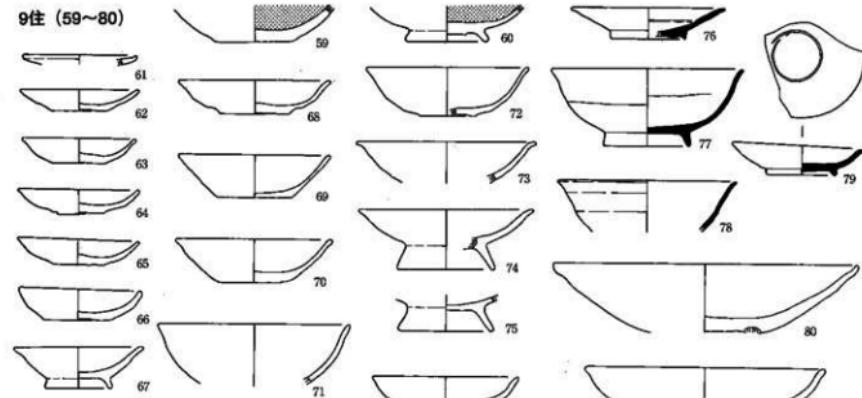


8住 (35~58)

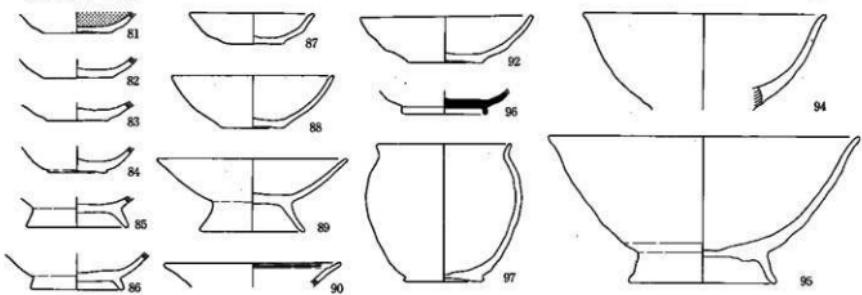


第27図 土器・陶磁器 (1)

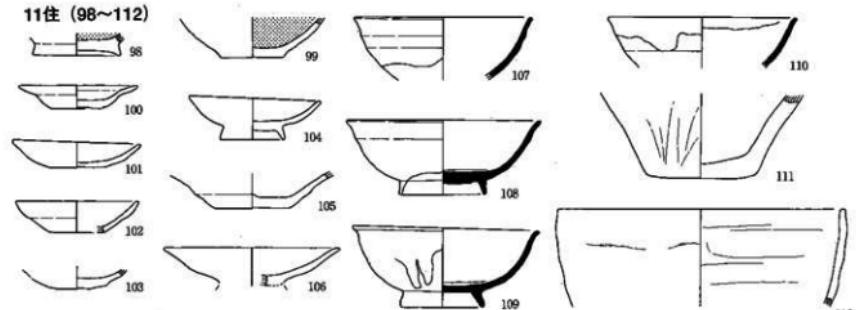
9住 (59~80)



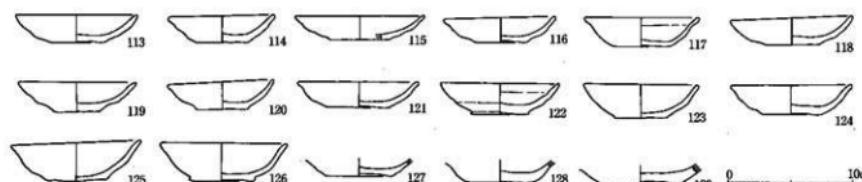
10住 (81~97)



11住 (98~112)

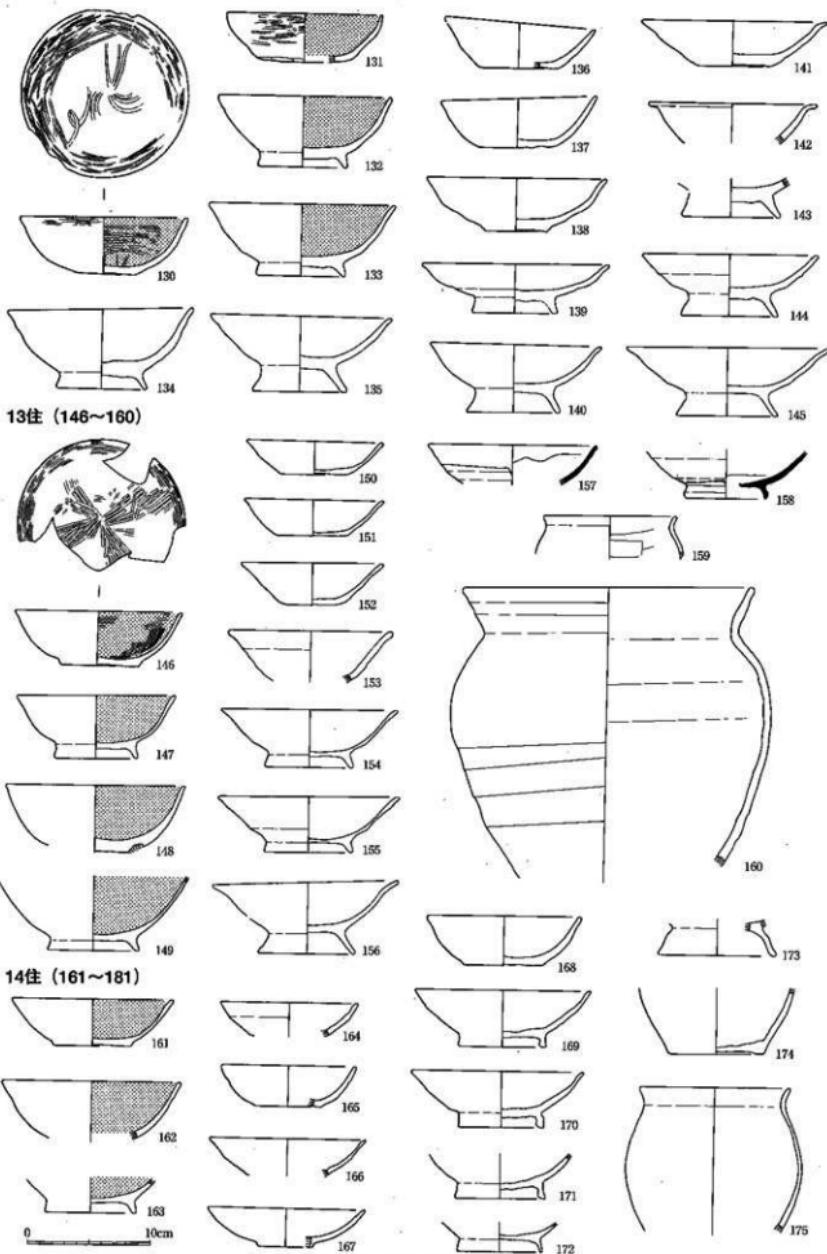


12住 (113~145)

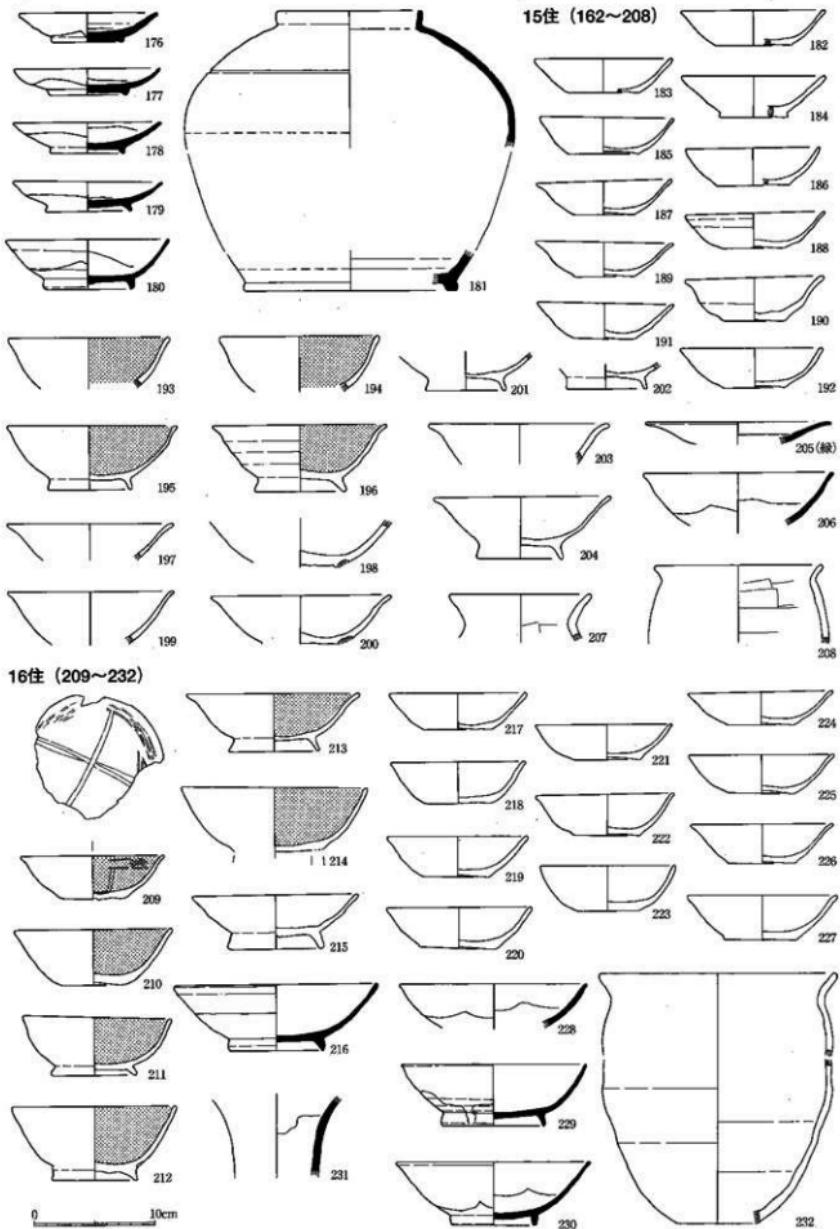


10cm

第26図 土器・陶磁器 (2)

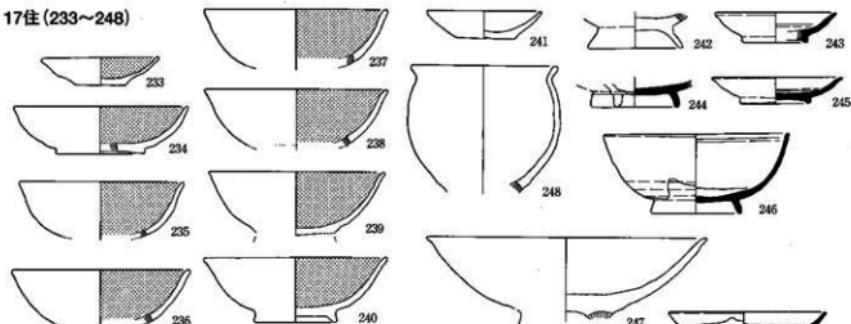


第29図 土器・陶磁器 (3)

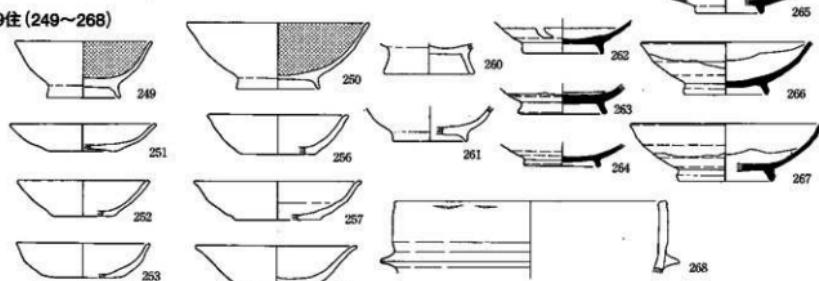


第30図 土器・陶磁器 (4)

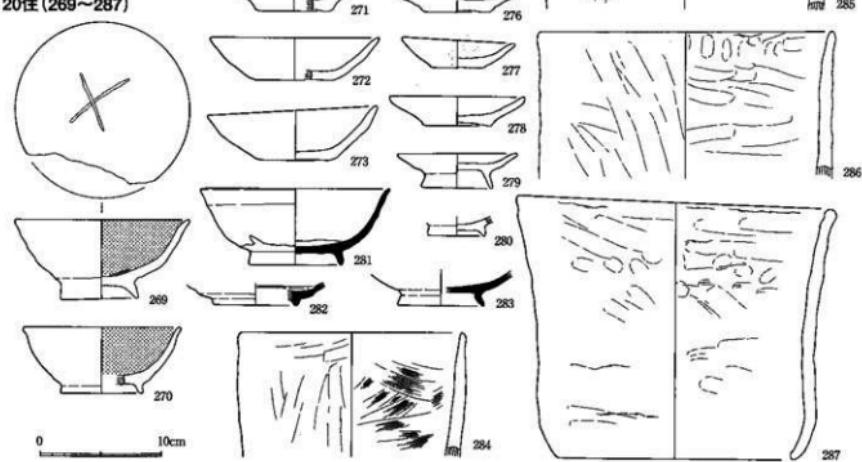
17住(233~248)



19住(249~268)

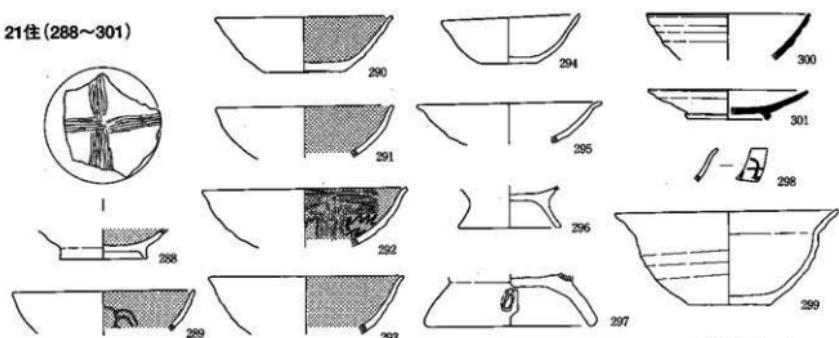


20住(269~287)

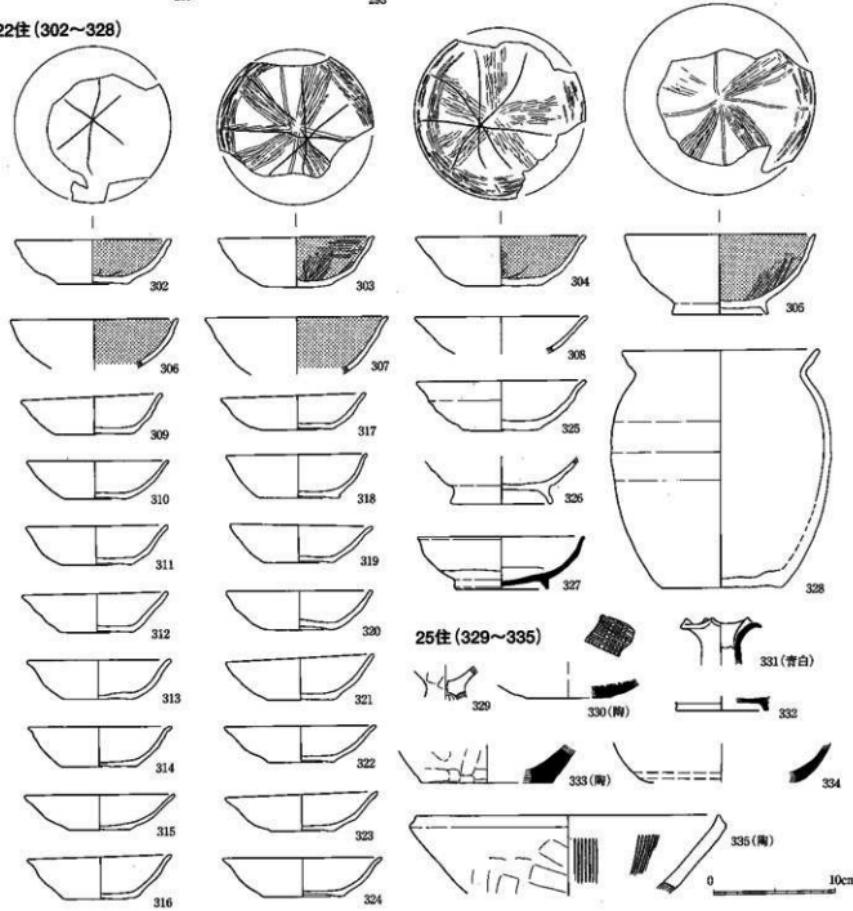


第31図 土器・陶磁器(5)

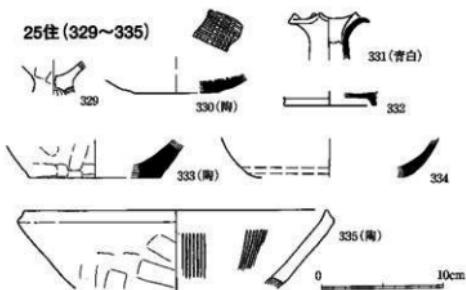
21住 (288~301)



22住 (302~328)

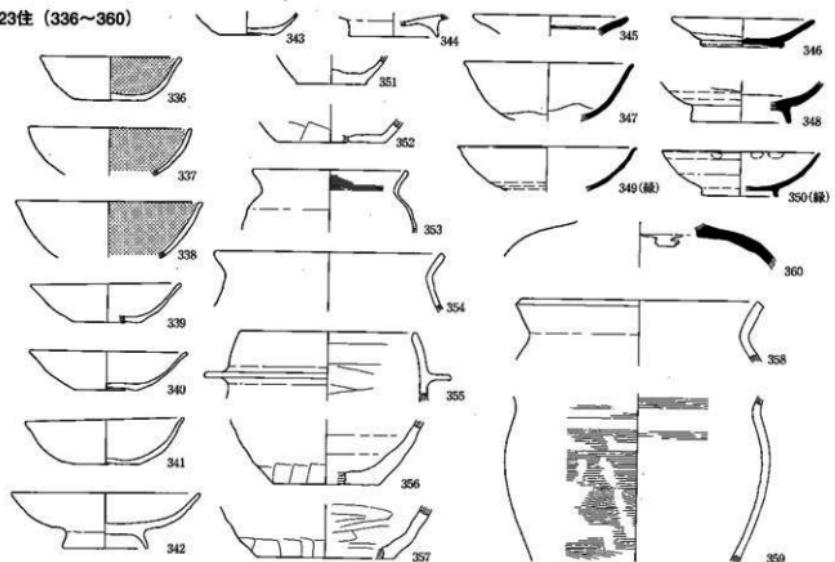


25住 (329~335)

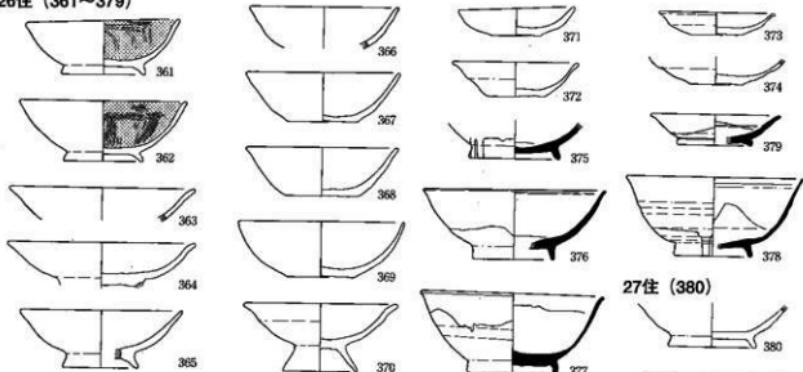


第32図 土器・陶磁器 (6)

23住 (336~360)

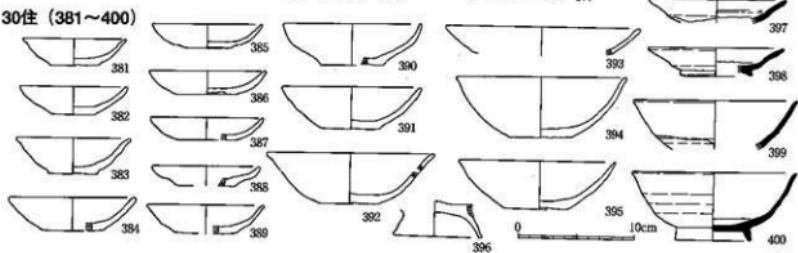


26住 (361~379)

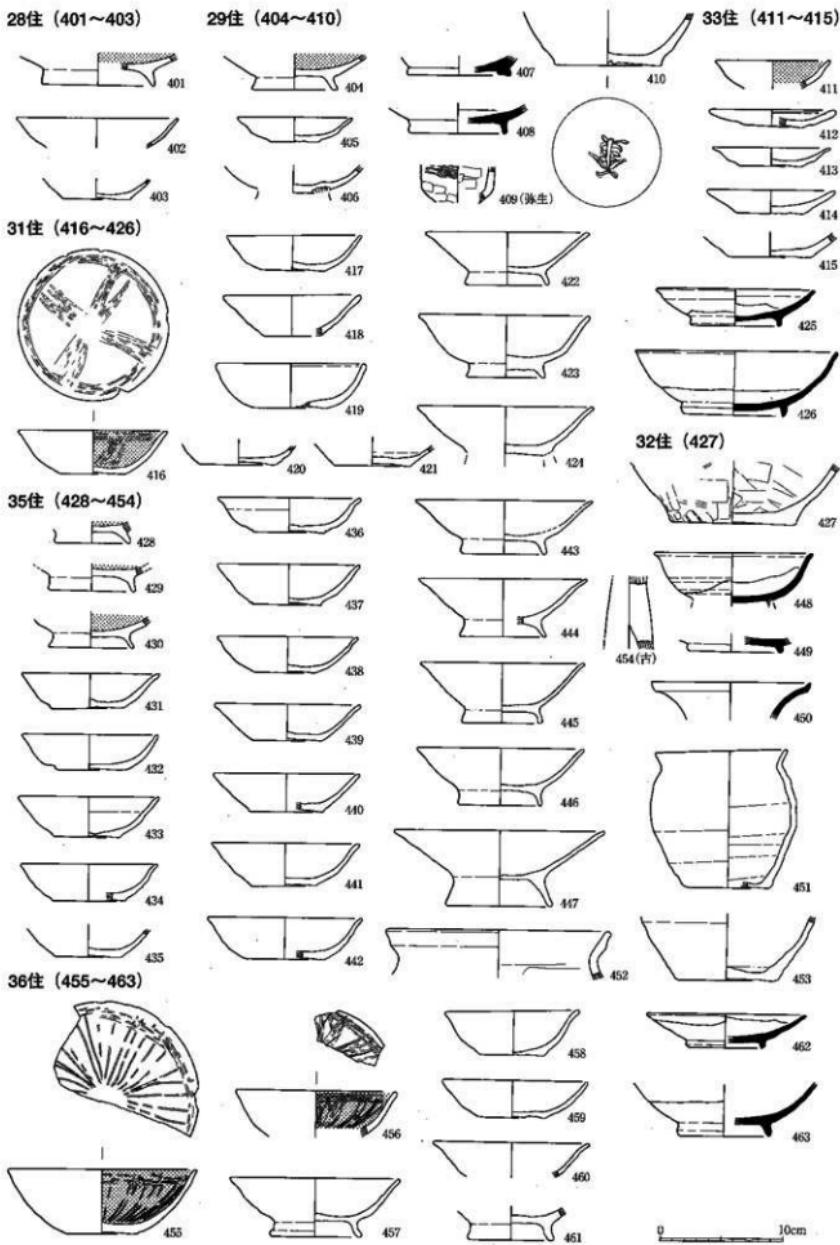


27住 (380)

30住 (381~400)

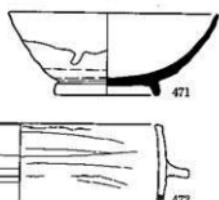
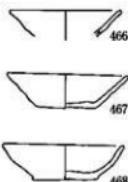
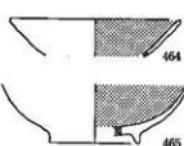


第33図 土器・陶磁器 (7)

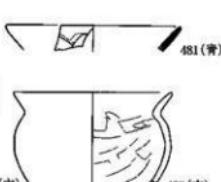
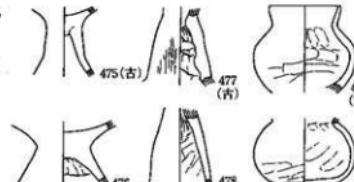
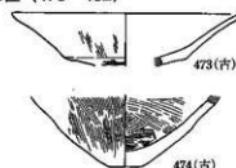


第34図 土器・陶磁器 (8)

37住 (464~472)

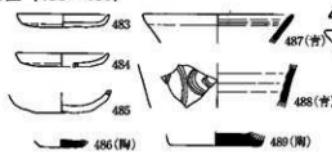


38住 (473~482)

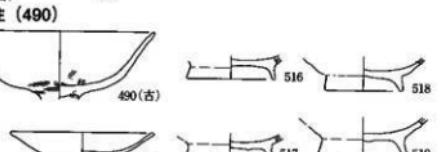


(青)

40住 (483~489)

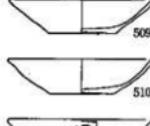
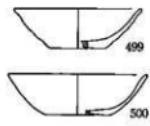
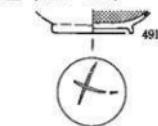


43住 (490)



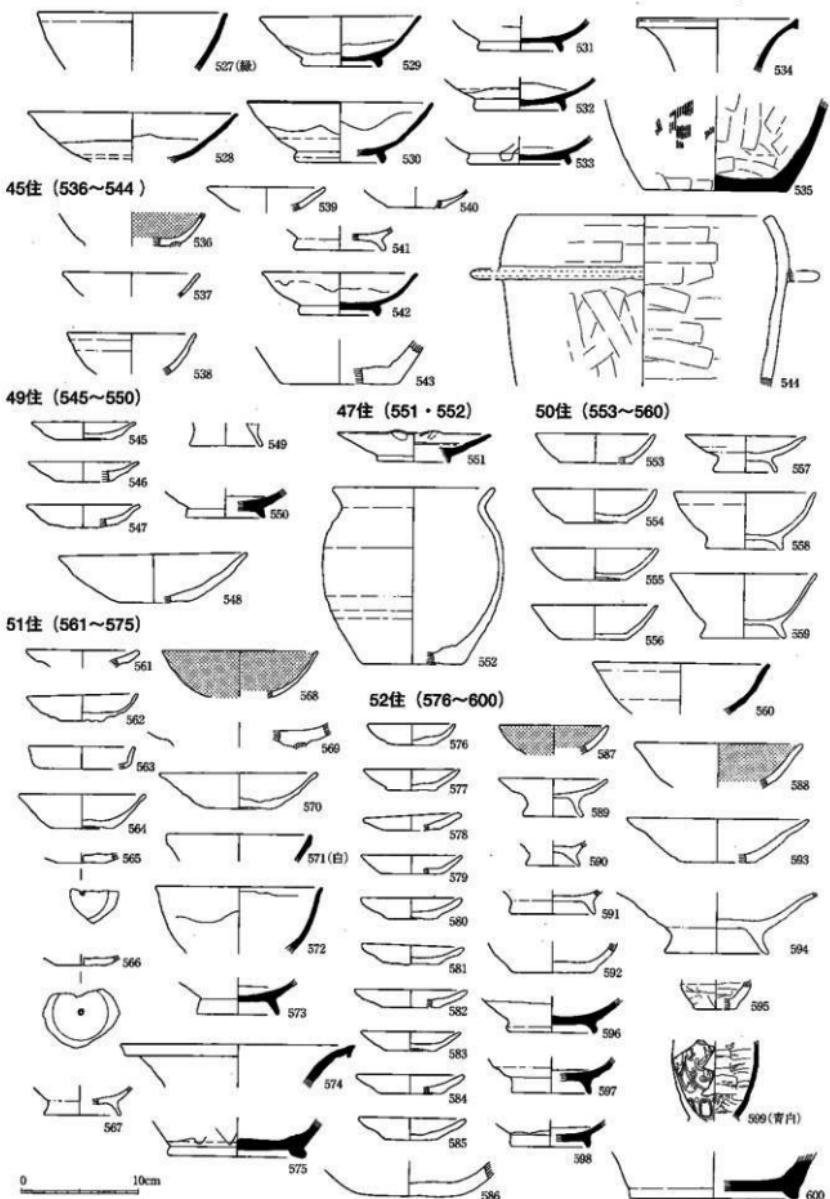
(青)

44住 (491~535)



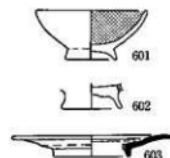
(青)

第35図 土器・陶磁器 (9)

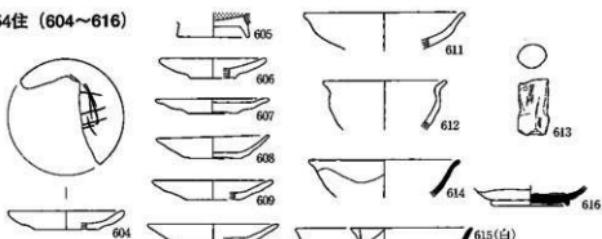


第36図 土器・陶磁器 (10)

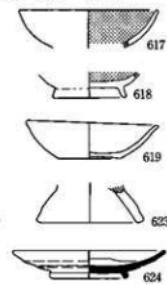
53住 (601~603)



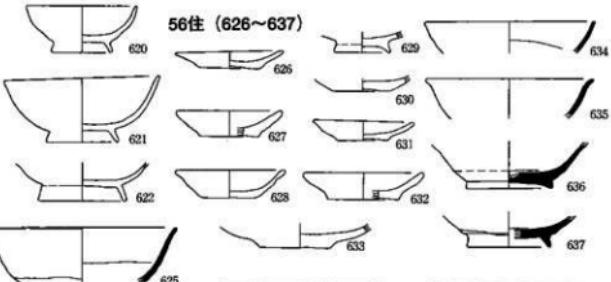
54住 (604~616)



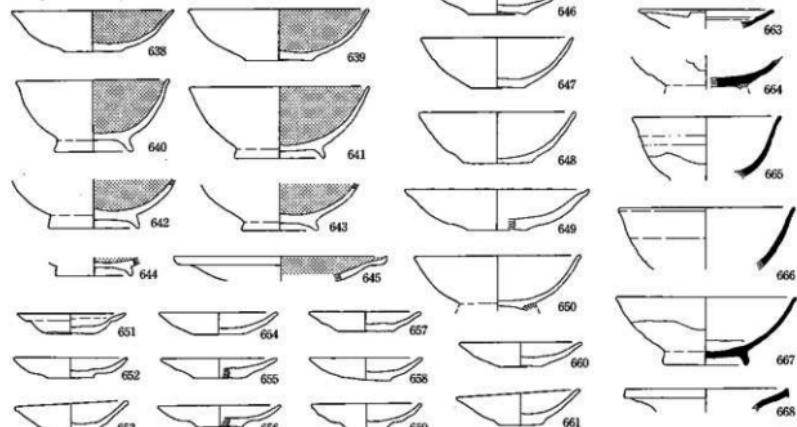
55住 (617~625)



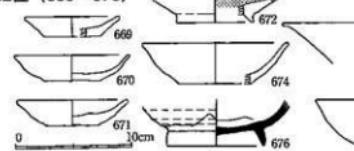
56住 (626~637)



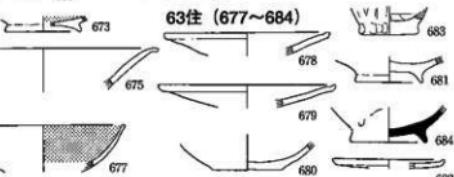
57住 (638~668)



62住 (669~676)

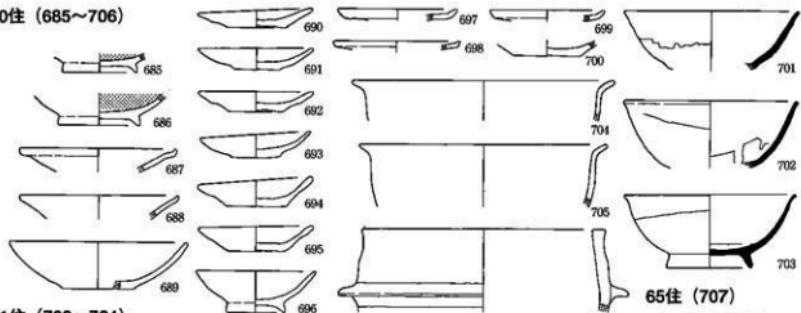


63住 (677~684)

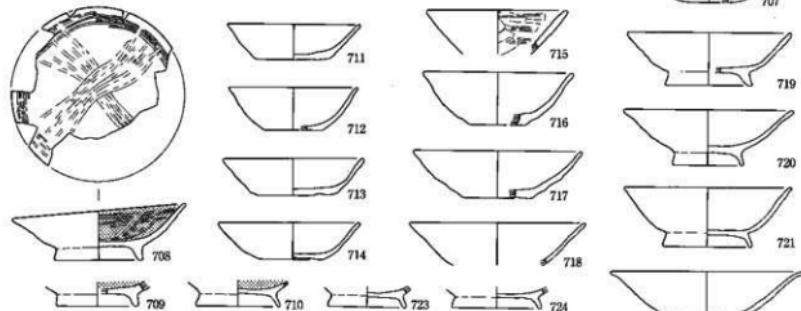


第37図 土器・陶磁器 (11)

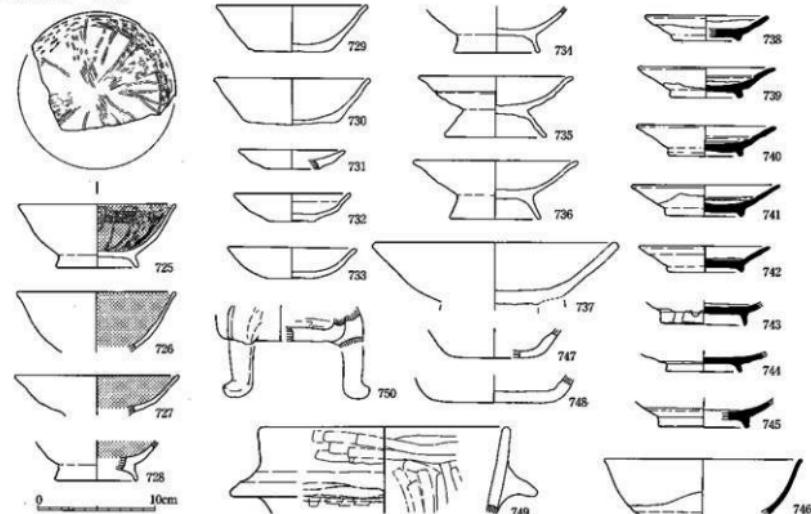
60住 (685~706)



61住 (708~724)

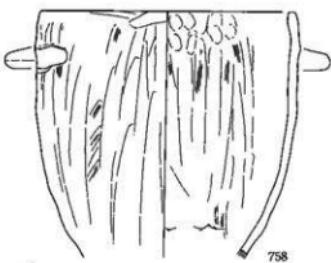
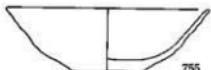
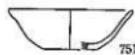


67住 (725~750)

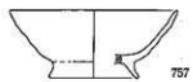
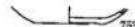
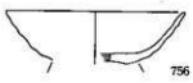


第38図 土器・陶磁器 (12)

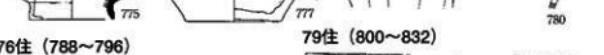
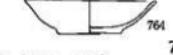
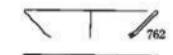
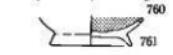
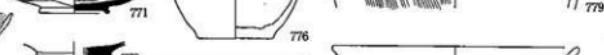
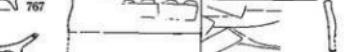
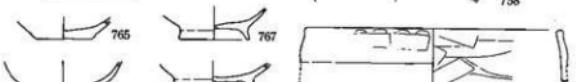
68住 (751)



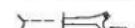
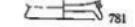
69住 (752~758)



73住 (759~780)



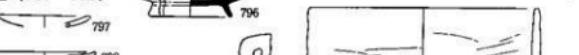
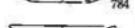
75住 (781・782)



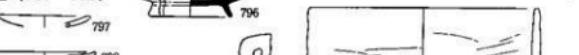
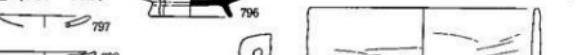
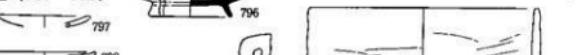
77住 (783)



78住 (784~787)

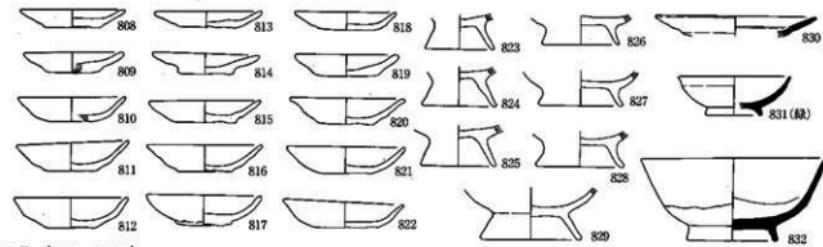


84住 (797~799)

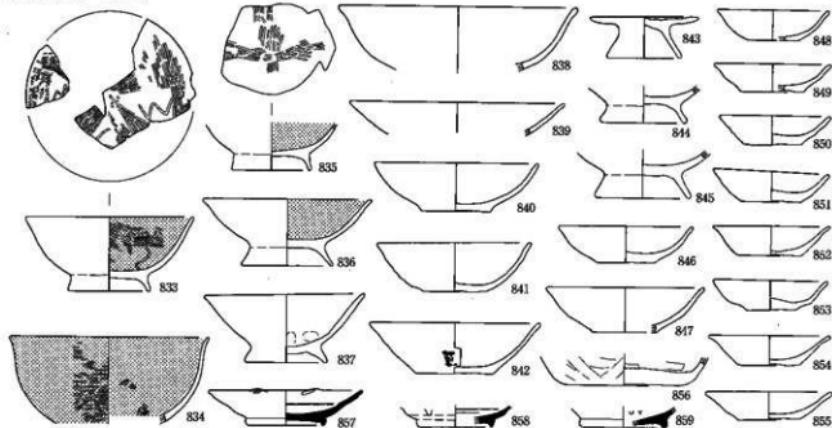


799(白)

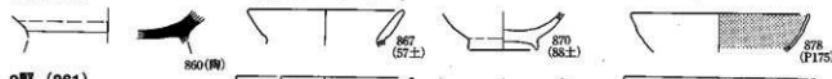
第39図 土器・陶磁器 (13)



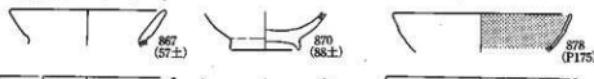
80住 (833~859)



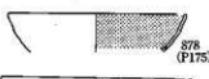
1型 (860)



土坑 (867~877)



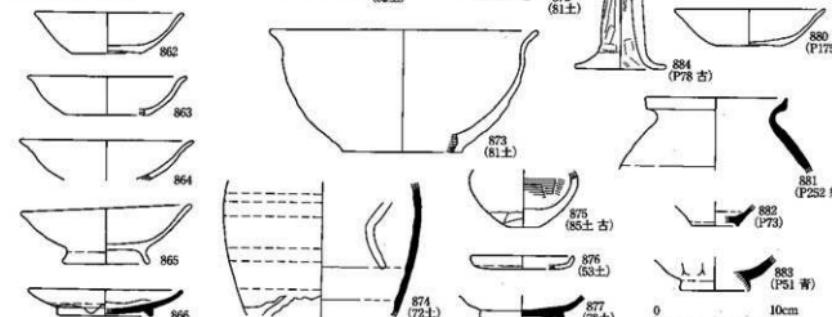
ピット (878~884)



2型 (861)



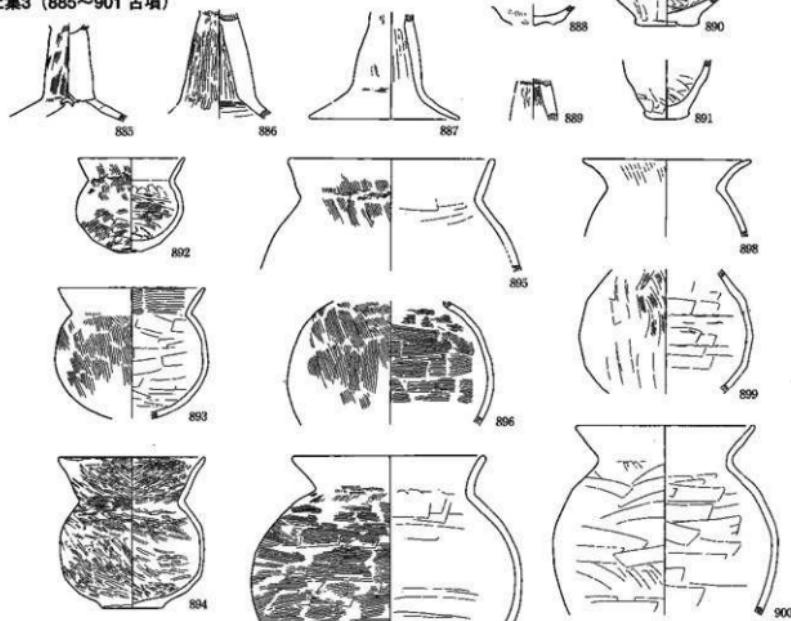
3型 (862~866)



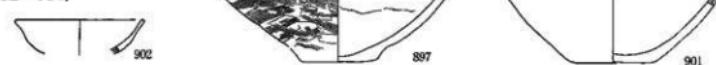
0 10cm

第40図 土器・陶磁器 (14)

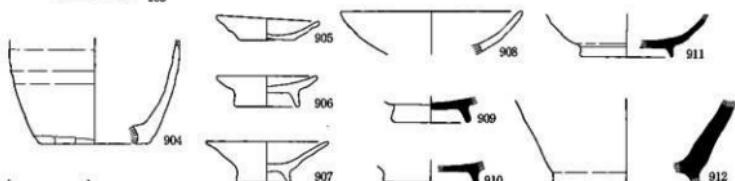
土集3 (885~901 古墳)



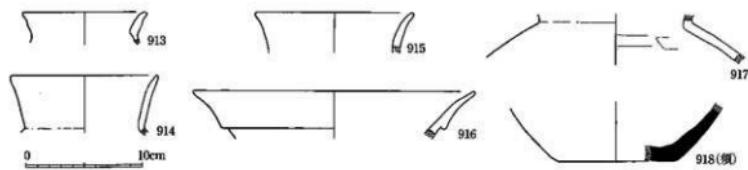
11溝 (902~904)



12溝 (905~912)

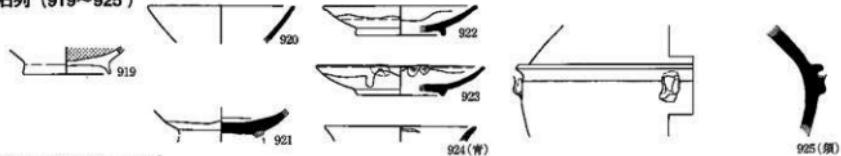


流路3 (913~918)

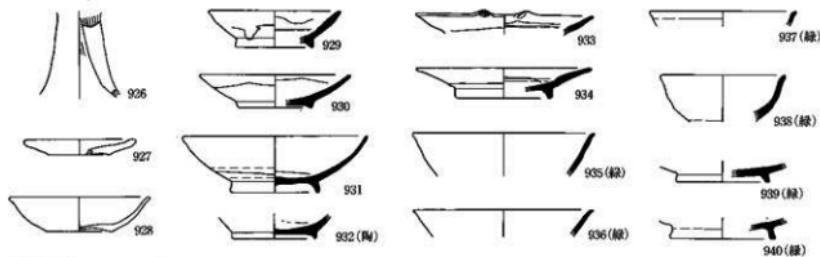


第41図 土器・陶磁器 (15)

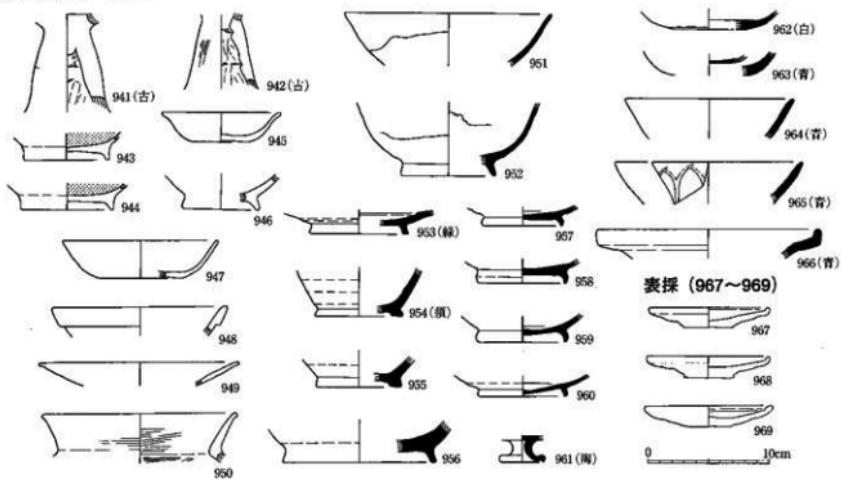
石列 (919~925)



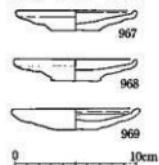
グリッド (926~940)



横出面 (941~966)



表採 (967~969)



第42図 土器・陶磁器 (16)

2 瓦（第43図）

今回の調査では、総数で16点出土している。種類別では平瓦が11点、丸瓦が5点である。軒平瓦、軒丸瓦等はみられなかった。出土地点は、遺構別では12溝が3点、80住が2点、11住、25住、30住、52住、55住、57住から1点ずつ、他に検出面等から5点となっている。これらの内、80住の2点、12溝の1点、それとC地区南西部検出面の1点の計4点が遺構間接合をし得た。その他のものは全て別個体とみられるので、13点ということになる。ほとんどの瓦は凸面がタタキ目、凹面は布目痕がみられる。圓化し得たものは4点である。

丸瓦 5点の出土がみられたが、長さはすべて不明である。幅は推定できるものは端部が残存する検出面の3のみで、14cmを測るとみられる。厚さは2cmを測る。他の4点は不明である。調整は、いずれも凸面がヘラ状工具によるナデ、ケズリで、凹面には布目痕が残り、端部はヨコナデ、ケズリが施される。

平瓦 11点の出土がみられたが、いずれも長さは不明で、幅は推定で25cm前後を測るとみられる。厚さは平均2.2cmで大きなばらつきはない。調整は、いずれも凸面がタタキ目で、凹面は布目痕が残り、端部はヨコナデ後ヘラケズリが施される。圓化したものは接合資料である80住出土の1と溝12出土の2、及び参考資料として、第1次調査第3住出土品である4の3点である。

3 金属製品（第46、47図、銭貨のみ第45図）

鉄製品、銅製品合わせて、住居址出土資料を中心に92点を図化提示した。器種は動・鍬・鎌・苧引鉄・紡錘車・刀子・鋸・鑿・釘・鎧・馬具・鎧・短刀・鐸・鎖・他がある。時期的には大半が平安時代で、中世までのものが含まれよう。

(1) 鉄製品

鍬・鍬は9・30住で完形品が得られている(10・38)。ともにU字形鍬・鍬であるが刃先部が尖り気味でV字状に近い形態である。38は内縁形もV字に近くなっている。鎌は7住より完形品1点が出土した(7)。吉田川西遺跡報文の分類ではV類に含まれるものである。苧引鉄は17住と51住から破片が出土している(20・46)。2点とも肩の丸いタイプである。紡錘車は紡輪を伴う確実なものは3点あり(12・18・51)、紡輪の直径4.7~5.5cmを測る。その他丸棒状の断片が6点出土するが大半が紡輪と推定される。刀子は13点得られたが、全形の判明するものは29住出土品(35)1点のみである。緩く両側を有しているが、他の個体を見ると、極が無闇となるものが多いである。あるいは鉄の破片も含まれるかもしれない。57住からは鍛が出土した(55)。茎部を欠いているが、身部が完存する優品である。釘は最も出土量が多い。頭部の形態に上端を單に折り曲げたものや叩き伸ばした後に折り曲げるものが多いが、方頭を呈するものも見られる。馬具は11住より轡の一部が得られた(14)。鎧は身部を残すもの3点が得られた。11住(15)および63住(69)出土品はともに長三角形身部形態で前者が撥状の闇、後者は角状の闇となる。29住のもの(36)は雁股鎧で、刃部は短い。44土より身部長が22.3cmある短刀が得られている(79)。身部幅は最大で2.6cm内外を測る。身部の中程には鞘の木質が厚く残存するため細部の形態がつかめない。鐸は破片も含め8点が得られた(67・72~75・78)。80住出土品(78)は直径が大きく別物かもしれない。他は上部直径1~1.2cm、下部直径1.1~1.5cmを測り、4~6cm程の全長を有する。角の丸い鐵板を用いるものと、角張ったものがある。63住と79住からまとめて出土した点が注意される。76住出土の鎖(71)は長さ2.5cm内外のO字型の環7個が絡まるもので、他に1点同一個体の環部片がある。馬具の一部であろうか。その他、建築金具の一部(93)や不明品が出土している。

(2) 銅製品

A区の検出面より、外面に花弁状に刻みを施した環状の銅製品が出土している(98)。推定直径は7.5cmを測る。他に錢5点が住居址や検出面から出土している(30・31・87~89)。北宋銭では「淳化元寶」(初銘990年)・「皇宋通寶」(1038年)・「熙寧元寶」(1068年)・「紹聖元寶」(1094年)、明銭では「洪武通寶」(1368年)がある。

(3) その他

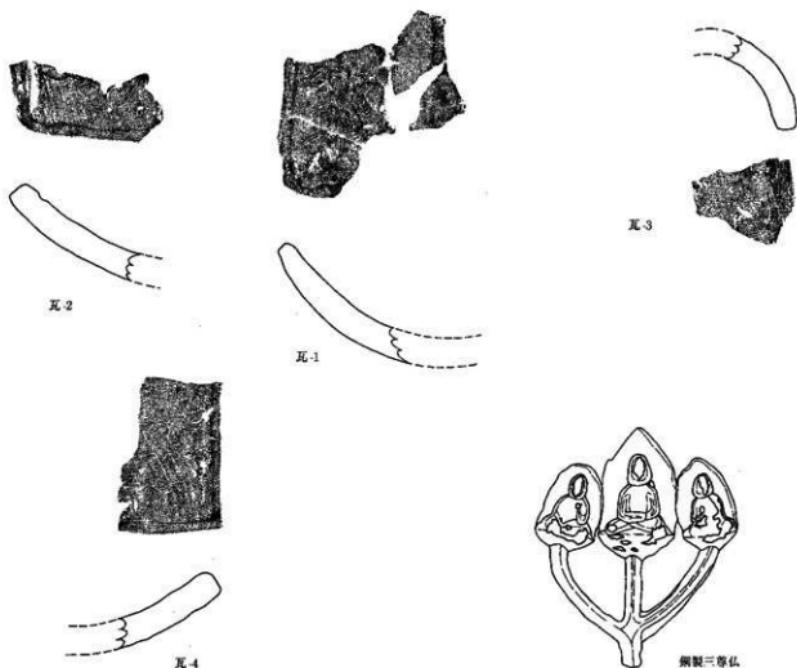
参考資料として第1次調査で出土した銅製三尊仏を掲載した(図版1、略測図: 第44図)。高さ9.8cm、幅8.2cmの銅製三尊像で、1本の茎から3本に分かれた茎上部に像が作られている。像容は磨耗しており不明である。当初は錫杖頭部の裝飾と考えたが、上田市立信濃國分寺資料館学芸員倉澤正幸氏より、錫杖頭部とするには円形の輪形がなく、類例はみられないことから、可能性としては念持仏として台上に安置したものではないか、また当時は金銅仏であったのではないかとの教示を受けた。同市太田法楽寺遺跡においても小型の金銅製三尊仏が出土しているが、全国的にみてもこうした小型仏は伝世品等として知られるものが多く、考古学上発見されたものは少ないとのことである。そうした例も含めて、今後他例と比較検討をし、明らかにしていきたい。

第7表 平瀬遺跡金属製品一覧

単位(長さ・幅・厚さ: mm、重量:g)、現存値、()は推定値

品種	形態	第二物	第三物	第四物	第五物	第六物	第七物	第八物
1	5往 47	不明 銅状鉄製品	34	7	-	8.40	- 5往 - 1	
2	6往 47	釘	31	4	5	1.63	- 5往 - 2	
3	5往 47	釘	25	5	4	1.25	- 5往 - 3	
4	5往 47	釘	45	6	6	6.15	29 5往 - 5	
5	6往 47	釘	69	6	5	4.46	29 6往 - 4	
6	7往 47	釘	53	9	10	9.76	29 7往 - 5	
7	7往 47	鍵	161	40	5	90.94	28 7往 - 7	
8	7往 47	釘か	59	11	8	12.68	29 7往 - 8	
9	8往 47	釘	116	6	7	23.30	29 8往 - 7	
10	9往 47	鍵・環	198	161	17	614.60	28 9往 - 18	
11	10往 47	鍵	69	6	6	12.00	29 10往 - 2	
12	10往 47	前鋸車	129	49	6	26.93	28 10往 - 7	
13	10往 47	前鋸車(筋輪)	32	5	5	1.94	28 10往 東	
14	11往 47	馬具(馬)	151	11	11	75.69	29 11往 - 1	
15	11往 47	鉄輪	167	22	7	24.54	29 11往 - 2	
16	11往 47	釘	76	10	8	12.78	29 11往 - 15	
17	11往 47	釘	56	5	5	4.38	29 11往 西	
18	13往 47	前鋸車(筋輪)	56	-	2	12.87	28 13往 - 2	
19	15往 47	釘	64	4	5	4.57	29 15往 - 4	
20	17往 47	学引金具2片	(62)	19	2	8.80	- 17往 北	
21	19往 47	不明	23	30	6	7.23	- 19往 - 23	
22	20往 47	釘	93	6	6	15.56	29 20往 - 1	
23	20往 47	釘	65	7	4	4.15	29 20往 西	
24	20往 47	釘	49	8	8	5.67	29 20往 機	
25	23往 47	刀子	101	16	5	12.64	28 23往 - 2	
26	23往 47	不明	109	9	7	15.51	29 23往 - 3	
27	23往 47	釘	88	8	6	12.43	29 23往 - 6	
28	23往 47	刀子	35	9	4	2.27	- 23往 - 9	
29	23往 47	刀子	47	15	3	6.27	28 23往 東	
30	25往 46	鍔(皇室賞賜)	-	24	1	1.70	46 25往 - 1	
31	25往 46	鍔(結婚式用)	-	22	-	2.65	46 25往 - 5	
32	25往 47	釘	91	7	5	9.80	29 25往 東	
33	25往 47	釘	44	4	4	2.63	29 25往 西	
34	28往 47	刀子	90	12	3	7.72	28 28往 - 1	
35	29往 47	刀子	(204)	16	5	19.96	28 29往 - 2	
36	29往 47	鉄鍔	92	42	7	32.06	29 29往 機	
37	29往 47	釘	6	5	3	3.17	29 29往 西	
38	30往 47	鍔・環	34	21	1	1.70	28 30往 - 14	
39	30往 47	釘	25	7	5	4.82	29 30往 - 19	
40	33往 47	釘	45	4	4	2.99	- 33往 錫	
41	37往 48	釘	33	4	4	1.62	- 37往 錫	
42	40往 48	釘	52	5	7	9.04	- 40往 錫	
43	40往 48	不明	66	38	5	29.94	- 40往 錫	
44	45往 48	釘か	(49)	5	6	5.22	- 45往	
45	51往 48	釘	67	7	5	6.28	29 51往 - 7	
46	51往 48	釘	25	30	2	3.87	- 51往 錫	
47	52往 48	釘か	53	9	5	12.00	- 52往 - 6	
48	52往 48	鉄鍔車(筋輪)	50	5	5	4.47	28 52往 西	
49	54往 48	釘	46	9	6	7.42	29 54往 - 4	
50	54往 48	釘	37	8	5	4.54	29 54往 東	
51	55往 48	鉄鍔車(筋輪)	47	-	10	16.38	28 56往 西	
52	56往 48	釘	61	7	6	5.62	29 56往 東	
53	57往 48	不明	77	7	4	5.58	- 57往 - 25	
54	57往 48	釘か	51	9	7	8.43	- 57往 東	
55	57往 48	鍔	73	16	5	13.46	29 57往 南	
56	58往 48	曲輪	99	21	3	18.21	29 58往 東	
57	60往 48	不明	39	11	4	4.36	- 60往 - 3	
58	60往 48	釘	65	6	5	5.24	29 60往 - 11	
59	60往 48	刀子	75	15	5	12.29	28 60往 - 27	
60	60往 48	釘か	(66)	7	6	7.00	- 60往 - 32	
61	60往 48	釘	86	19	10	27.35	29 60往 - 36	
62	60往 48	釘	52	7	7	6.29	29 60往 東	
63	60往 48	鍐	36	21	3	4.23	- 60往 北	
64	60往 48	釘	32	8	6	10.24	- 62往 西	
65	62往 48	釘	64	9	6	12.27	- 62往 东	
66	62往 48	鉄鍔車(筋輪)か	56	5	5	2.87	- 62往 东	
67	63往 48	鉄鍔2点	小44.大66	小11.大11	小10.大9	小6.84 大12.38	28 63往 - 8	
68	63往 48	鍔	45	15	6	15.69	- 63往 - 10	
69	63往 48	鉄鍔	147	25	7	30.38	29 63往 - 13	
70	76往 45	前鋸車(筋輪)	146	7	6	9.98	28 76往 - 13	
71	76往 48	鍔	22~27	11~13	3~4	17.25	29 76往 对 5個つながる	
72	79往 48	釘	59	7	7	8.34	28 79往 - 16	
73	79往 48	鉄鍔2点	38	10	8	3.21	28 79往 - 18	
74	79往 48	鉄鍔2点	小40.大53	小15.大11	小14.大11	小3.90 大11.14	28 79往 - 16	
75	79往 48	鉄鍔2点	小38.大42	小11.大12	小10.大10	小3.84 大7.07	28 79往 - 49	
76	79往 48	鍔	53	5	6	11.77	29 79往 南	
77	79往 48	刀子	51	13	4	2.14	- 79往 南	
78	80往 48	鉄鍔か	27	16	1	1.21	- 80往 - 15	
79	44土	鐵刀	333	34	7	150.68	29 44土	
80	53土	釘	33	5	5	1.50	29 53土	
81	57土	釘	69	5	4	3.96	29 57土	
82	59土	釘	75	7	7	13.43	- 59土	
83	88土	釘	85	7	6	9.88	29 88土 - 1	
84	1%往	釘	45	6	4	3.99	29 1%往 - 2	

品目	番号	種類	高さ	幅	厚さ	重さ	寸法	備考
85	14漢	刀子	30	4	3	1.10	-	14漢-1
86	グリッド	刀子か	73	9	3	5.57	-	N54-W30-1
87	グリッド	鏡(淳化元寶)	-	24	1	2.35	28	N24-W3-1
88	檢出面	鏡(洪武通寶)	-	21	1	3.01	28	檢山面
89	檢出面	鏡(洪武通寶)	-	22	1	2.73	28	檢山面
90	檢出面	刀子	64	9	9	13.94	29	檢山面
91	檢出面	刀子	53	13	4	8.29	28	2枚覆土
92	檢出面	防震革(防輪)	53	5	6	3.58	28	P45付近検
93	檢出面	達施金具か	44	20	2	5.89	29	検出面 2ヶ所穿孔、鉢状器品付
94	檢出面	不明	62	5	5	3.44	29	検出面
95	檢出面	刀子	30	12	4	5.47	-	檢山面
96	檢出面	防震革(防輪)か	39	5	5	5.50	-	北東検出面
97	檢出面	刀子か	71	15	5	9.38	28	2B検出面
98	檢出面	不明 鉢状器品	(74)	6	7	3.00	-	検出面北東

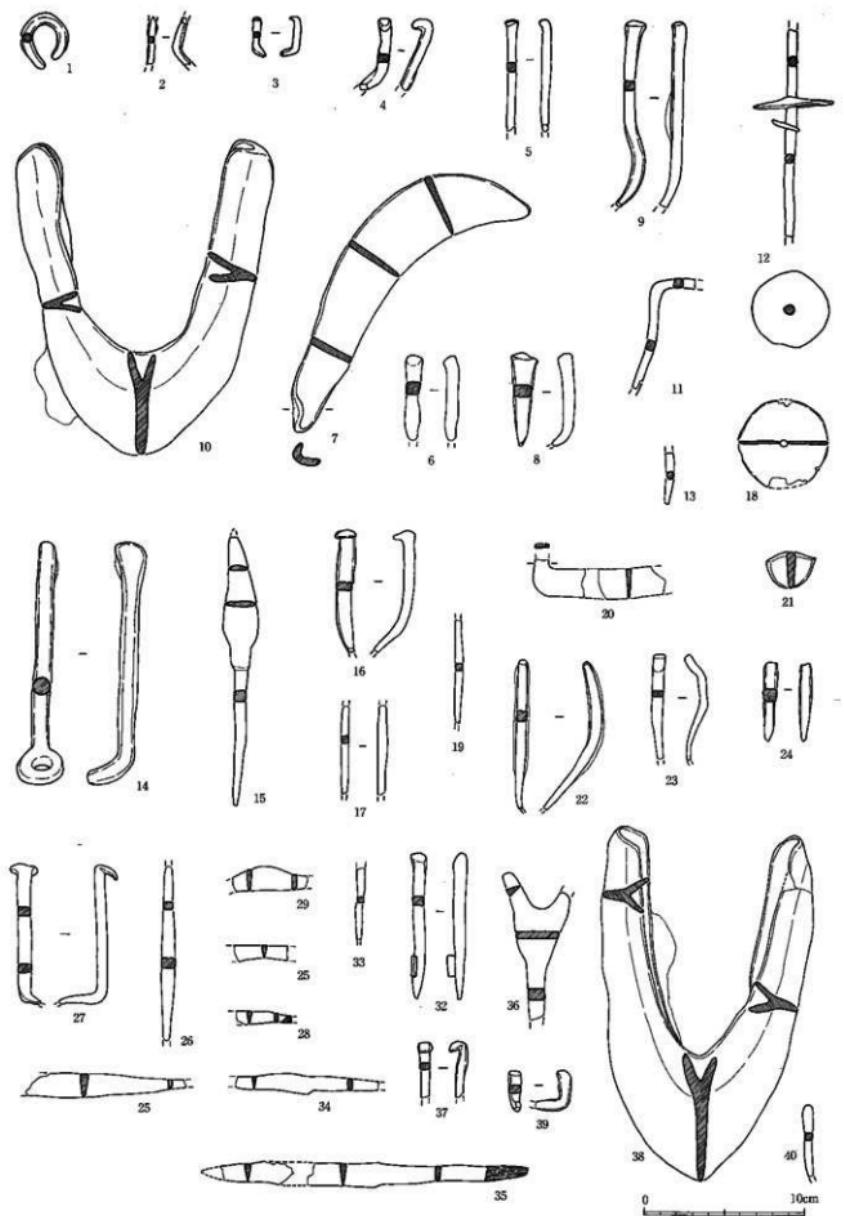


第43図 遺物拓影 実測図 瓦

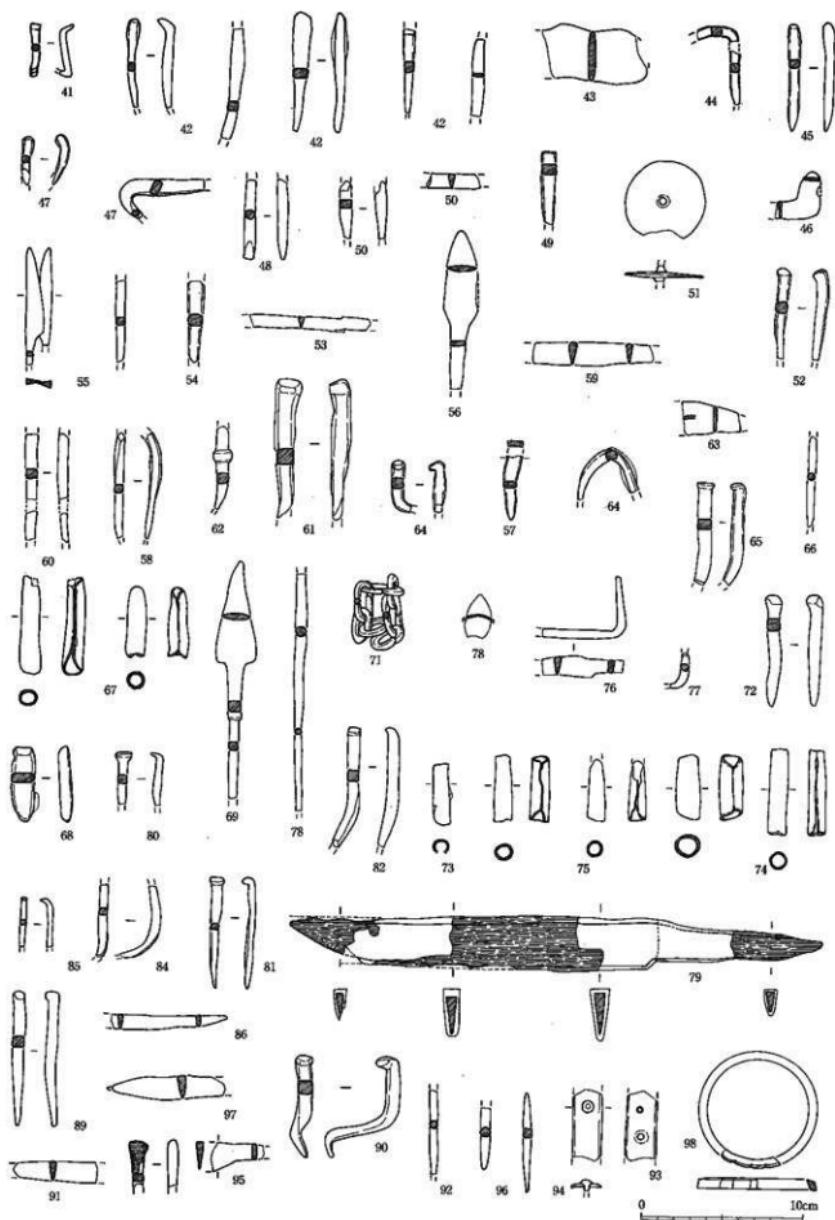
第44図 銅製三尊仏略測図（参考資料）



第45図 遺物拓影 錢貨（实物大）



第46図 金属製品 (1)



第47図 金属製品 (2)

4 石器

① 石器群の概要

平瀬遺跡第II次調査では総点数347点、総重量421,371.8gを測る石器群を回収した。II AB区では埠仏押型転用硯形石器等が出土し注目されるものの、II AB区及びII C区の一部では石器の認定基準、回収基準及び回収精度に若干の問題があった。母岩識別・接合作業により得られる接合・同一母岩関係は石器の回収精度に直接的影響を受ける為、本項では以下平瀬遺跡II石器群の中でも平瀬遺跡II C石器群(総点数267点、総重量385,717.6g)を主な対象とし、平瀬遺跡II C石器群の中でも特に回収率の高い対象区の石器群を平瀬遺跡II C対象区石器群として区別して扱う¹⁰⁾。

主として平安時代に帰属すると考えられる堅穴住居址等より出土した、竈構築材と考えられる礫片を主体とする平瀬遺跡II C石器群に対して母岩識別・接合作業を実施したところ、接合資料31例、縦接合個体数78点及び、同一母岩資料11例、総同一母岩個体数19点、母岩別資料38母岩、総母岩別資料個体数97点を確認し得た¹¹⁾。母岩別資料を構成する器種は多くが竈構築材と考えられる礫片類であり、從来石器として認識され、回収されることはなかったものと考えられる。それら母岩別資料の分布は單一遺構内であっても複数の層位に分布する場合や遺構間に分布する場合等、様々な状況が認められることが明らかとなった。また、單一遺構内においてのみならずII C対象区石器群としても同一母岩関係が認められない単独資料を多数確認した。単独資料はその個体数(母岩数)分の接合関係をII C対象区外からもしくは遺跡外と有していたものと考えられる。さらに、母岩別資料の分布を遺構間の土層単位で対比した結果、より詳細な共時性の把握が可能となった。

② 枠組の提示

石器の認定

本項では、從来使用してきた機能名称は用いずに、なおかつそれぞれのタクソノンについての分類基準、すなわちクライテリオンを明示するように努めた。広義の石器については「素材獲得技術痕跡の認められる個体」もしくは「人為的加工痕跡は認められないが出土状況等から人為的意図の想定し得る個体」と仮設した。竈という人為的構造物が竈構築土及び竈構築材から構成されているものとすれば、竈構築土に含まれる自然礫及び礫片等も竈構築段階に素材採取地において竈構築材として人為的に選択され、人為的に搬入された、すなわち広義の石器ということになる。同様に、住居址覆土上層に含まれる自然礫を含む個体も住居址覆土が供氷性疊層である場合等を除いては、人為的に搬入された可能性が高いものと考えられる。なお、本項では変色範囲が認められた個体は竈構築材であったものとして扱っている¹²⁾。

狭義の石器については「素材獲得技術痕跡及び二次加工技術痕跡の複合体」と仮設した。そして、二次加工の有無という定性的クライテリオンにより分離し得る、素材獲得技術構造及び二次加工技術構造というレベルの異なる構造の関係、すなわち構造間構造を石器製作技術システムと仮設した¹³⁾。

單位石器群の設定

時間的に限定された調査区内における遺構-遺物関係論としての遺跡構造論的把握を目的とし、資料操作の基本的単位を遺構内より出土した個体群すなわち遺構単位石器群とした。そして遺構単位石器群により構成される構造体を、平瀬遺跡II C石器群とした。遺物出土状況図を提示し得た遺構単位石器群については遺物取り上げ時に記録した標高最高値及び標高最低値を任意の断面図に投影し、原則として標高中央値で帰属層準を推定し、遺構単位の下位レベルとして遺構内土層単位石器群として扱った。下位レベルから遺構内土層単位-遺構単位-調査区単位-遺跡単位-遺跡群単位の順となる。

剥離面及び剥離痕等の分類

本項では通常剥離痕跡を「バルブ及びバルバースカーフが最も発達すると考えられる、剥片剥離を目的とする加擊痕跡」、両極剥離痕跡を「リンク及び潰れ状を呈する剥離痕が最も発達すると考えられる、台石上でなされたと考えられる剥片剥離を目的とする加擊痕跡」、分割痕跡を「剥片剥離を目的としないと考えられる、対象物をばら等分に剥離した痕跡」と仮設した。また、敲打痕跡を「剥片剥離を目的としないと考えられる、対象物に対して垂直になされたと考えられる加撃痕跡」とし、研磨痕跡を「加撃行為とは定性的に区別し得る、対象物を磨いた行為の痕跡」と仮設した。以上を明確な人為的加工痕跡とした。剥落痕跡については「明確な打点が認められない、礫片が分離した痕跡」と仮設した。

③ 器種・石材概観 (第8~15表)

ここではII C対象区石器群の中でもSB51~80石器群に对象を限定し、器種・石材組成について概観しておきたい¹⁴⁾。

住居址単位石器群における器種平均組成率は石核1%未満、剥片1%未満、礫石器Ⅱ類2%、砾石器Ⅲ類1%未満、砾石器複合1%未満、礫片18%、礫片Ⅰ類17%、礫片Ⅱ類19%、砾片複合31%、砥石状石器12%となる。狭義の石器(砾石器類及び砥石状石器)の平均組成率の合計は14%、広義の石器の平均組成率の合計は86%であった。

同じく石材平均組成率は流紋岩8%、安山岩1%、閃綠岩1%未満、石英斑岩2%、花崗岩10%、硬砂岩58%、砂岩13%、頁岩2%、珪質凝灰岩1%未満、粘板岩1%、チャート2%、ホルンフェルス1%、珪岩1%となる。接合資料が認められた石材は流紋岩、石英斑岩、花崗岩、硬砂岩、砂岩、チャートであり、II C石器群としての石材単位平均接合率は12%となる。

原産地が限定される黒曜岩及びホルンフェルスを除いては、平瀬遺跡東側を北流していたと考えられる奈良井川か、もしくはその氾濫原であると考えられる基盤層において採集可能な石材を利用していたものと考えられる。

④ 石器群概観 (第17表、第49~54図)

平瀬跡II C石器群は、主に平安時代に帰属すると考えられる住居址等の遺構への帰属性は87%、住居址に帰属する個体の三次元座標記録率は79%であった。ここでは組成論同様、石器群としての議論に耐え得ないII AB石器群及びII C対象区外石器群は割愛し、II C対象区内において検出した遺構より出土した石器群を遺構単位で概観しておきたい。⁴⁶

SB51石器群 SB51はSB65を切りSB66に切られる。I~Ⅴ層が住居址埋没段階に、Ⅵ層が床面施設埋没段階に相当し、Ⅶ層及びⅧ層においてそれぞれ1点が出土したがいずれも単独資料である。調査区外にかかる為詳細は不明である。

SB52石器群(第49図) SB52はSB67-73(80)を切りSB79・SD12に切られる。I・II層が住居址埋没段階、III~V層が床面施設埋没段階、VI~VII層が竈構築段階に相当する。VI層(ピット6覆土)は竈構築上であるVI~VII層がのる為竈構築段階とした。竈構築段階に相当するⅧ層石器群は接合資料8点、同一母岩資料1点、単独資料1点の他、自然縫8点により構成される。Ⅸ層石器群は単独資料4点の他、自然縫7点により構成される。Ⅹ層石器群は接合資料1点の他、自然縫1点により構成される。VI層石器群は自然縫1点のみである。竈構築段階石器群としてみると接合資料9点、同一母岩資料1点、単独資料5点の他、17点の自然縫により構成される。竈は天井部及び袖部が一部破壊されていると考えられるものの、石器含有率47%、接合率60%、単独率19%であることから、すでに割れたものの、すなわち母岩状態ではない単独資料が竈構築材として19%程度は含まれていたことになる。床面施設埋没段階に相当するII層石器群は接合資料8点、単独資料2点の他、自然縫9点により構成される。I層石器群は接合資料9点、単独資料10点の他、自然縫18点により構成される。石器及び自然縫の標高はII層としたものでも床面に接する側体はほとんどなく、I層とII層の層面理面付近にピークがあることから、SB52廃絶後の跡地に搬入され、備蓄されたものと考えられる。多少の搬出入はあったと考えられるが住居址埋没段階石器群としてみると、接合資料17点、単独資料12点の他、自然縫27点により構成され、石器含有率52%、接合率50%、単独率21%となることから、単独資料が21%程度は含まれていたことになる。

母岩別資料の分布が竈構築材と関係を有する個体群と、SB52南東部覆土中層に集中分布する個体群とに分離し得ることからも、竈構築段階石器群と住居址埋没段階石器群の形成時期に時差があったものと考えられる。

SB53石器群 SB53は住居址と認定し難い為対象外とした。SB52-67-73覆土上部を別の住居址と認証した可能性がある。

SB54石器群 SB54はSB64を切りSB56-78に切られる。I・II層共に住居址埋没段階に相当する。II層では石器、自然縫共に出土していないが、I層石器群は単独資料4点の他、自然縫10点より構成される。調査区外にかかる為詳細は不明である。

SB55石器群(第53図) SB55は住居址と認定し難いものであるが、母岩別資料が含まれる為、層毎に概観しておく。II層石器群は接合資料2点、同一母岩資料1点の他、自然縫8点により構成される。I層では石器、自然縫共に出土していない。造構接合関係はSB67に認められた。石器、自然縫の回収精度にも問題があった為、石器群の信頼度は低く、対象外とした。

SB56石器群 SB56はSB54-68-78を切り。住居址埋没段階に相当するI・II・III層が認められた。同一母岩資料1点、単独資料1点の他、自然縫25点により構成される。HSa07は78とSB52 IX層石器群の33との同一母岩関係である。78が長期間にわたって使用された個体でないとするならばSB52竈構築段階にはSB56はすでに廃絶しており、II層もしくはI層が堆積中にSB56跡地に搬入されたか、逆に33を搬出したものと考えられる。調査区外にかかる為詳細は不明である。

SB57石器群 SB57はSB76を切り。石器及び土器は出土しているが竈の痕跡すら認められず、住居址として認定し難い為対象外とした。SB76覆土上部を別の住居址として認証した可能性もある。石器及び自然縫の回収基準が対象区とは異なる為、遺構単位行石器群としての信頼度は低い。

SB58 SB58はSB64-56を切り。石器、自然縫共に出土していない。調査区外にかかる為詳細は不明である。

SB60石器群(第51図) SB60はSB61-63-77を切り。竈構築段階に相当するV層石器群は接合資料2点、自然縫1点より構成される。竈は天井部及び南北両袖部が破壊されたと考えられる。石器含有率67%、接合率100%、単独率0%となる。床面施設埋没段階に相当するIII層(ピット5覆土)石器群は同一母岩資料1点により構成される。住居址埋没段階に相当するII層石器群は接合資料2点、単独資料2点の他、自然縫8点により構成される。同じく、I層石器群は接合資料2点の他、自然縫8点により構成される。II層石器群にはSB60中央部に床面に接して分布する個体が多い。I層石器群にはSB60東半部において中層に分布するものと上層に分布するものに分離し得ると言われる。V層石器群とII層石器群にHSa15 R18が分布することから、竈構築材として用いられた石器及び自然縫が竈破壊時に床面中央部に遺棄されたものと考えられる。

SB61石器群(第52図) SB61はSB68を切りSB60-63-(77)に切られる。竈の痕跡は認められなかった。住居址埋没段階に相当するI・II層が認められ、II層石器群は自然縫2点より、I層石器群は単独資料1点の他、自然縫22点より構成される。住居址埋没段階石器群としてみると、石器含有率4%、接合率0%、単独率4%となる。I・II層石器群共に住居址中央部において床面に接するか、もしくは床面に近い側体が多く、SB61竈破壊時に床面に遺棄されたか、もしくはSB61廃絶後覆土形成以前に搬入されたものと考えられる。II C対象区において接合・同一母岩関係が認められない孤立した住居址である。

SB63石器群(第51図) SB63はSB61-77を切りSB60に切られる。竈は東壁北側に袖部が一部残存し、竈構築材を抜き取ったと考えられるピット及び焼土範囲が認められた。竈構築段階に相当するV層(覆土)石器群は自然縫1点のみにより構成される。VI層(ピット22覆土)石器群は同一母岩資料1点により構成される。HSa19はN27-30EWグリッド回収個体との同一母岩関係である。住居址埋没段階に相当するIII・IV・V層は石器、自然縫共に出土していない。II層石器群は自然縫1点、I層石器群は同一母岩資料1点、単独資料1点の他、自然

礫1点より構成される。Gr01はSB52 IX層石器群21・22との同一母岩関係である。覆土中層以上をSB60に切られるが詳細は不明であるが、竈庵廃後に竈構築材がほとんどすべて住居址外に搬出されたものと考えられる。

SB64石器群 SB64はSB64・78に切られる。住居址埋没段階に相当するI・II層が認められたが、I層より単独資料1点が出土したのみである。調査区外にかかる為詳細は不明である。

SB65石器群 SB65はSB51・66に切られる。住居址埋没段階に相当するI層及び床面施設埋没段階に相当するII層が認められたが三次元座標不明の単独資料が1点出土したのみである。調査区外にかかる為詳細は不明である。

SB66 SB66はSB51を切る。石器、自然礫共に出土していない。調査区外にかかる為詳細は不明である。

SB67石器群(第53図) SB67はSB73・74を切りSB52に切られる。SB67覆土上部はSB54・55として誤認された可能性がある。西壁中央には竈の痕跡と考えられる張り出し部及び焼土範囲が認められる。床面施設埋没段階に相当するIII層(ピット3)覆土石器群は単独資料2点の他、自然礫1点により構成される。住居址埋没段階に相当するII層石器群は、接合資料1点の他、自然礫6点により構成される。I層石器群は接合資料1点、単独資料1点の他、自然礫1点により構成される。住居址埋没段階石器群としてみると、接合資料2点、単独資料1点の他、自然礫7点により構成され、石器含有率33%、接合率67%、単独率11%となる。HSa20 R21は床面焼土範囲に接する10と覆土中層に分布する112との接合資料である。

SB68(第52図) SB68はSB61に切られる。住居址埋没段階に相当するI層及び床面施設埋没段階に相当するII・III層(ピット4覆土)が認められた。I層には自然礫22点がSB68南西部に集中して分布する。調査区外にかかる為詳細は不明である。

SB69石器群(第54図) II-C対象区内において唯一切り合い関係が認められない孤立した住居址である。竈構築段階に相当するVI層石器群は単独資料1点の他、自然礫5点により構成される。V層石器群は接合資料6点の他、自然礫6点より構成される。竈構築段階石器群としてみると接合資料6点、単独資料1点の他、自然礫11点により構成される。竈は天井部が破壊されたと考えられる。石器含有率は39%、接合率86%、単独率5%となる。HSa09 R13は6点が接合しほぼ母岩形状にまで復元されたことから、竈構築段階には1点の自然礫であったものが電使用時かもしくは竈破壊時に6点に分離したものと考えられ、竈構築段階の石器含有率及び接合率はさらに低率を示すことになる。床面施設埋没段階に相当するIV層(竈覆土)石器群は自然礫2点により構成される。天井部に含まれていた構築材が落としたものとも考えられる。III層(ピット1・3覆土)石器群は自然礫2点により構成される。住居址埋没段階に相当するII層石器群は単独資料1点の他、自然礫36点により構成される。I層石器群は接合資料2点、単独資料4点の他、自然礫27点により構成される。住居址埋没段階石器群としてみると接合資料2点、単独資料5点の他、自然礫63点により構成され、石器含有率10%、接合率29%、単独率7%となる。断面投影図からは塊状に石器及び自然礫の含まれない空間があり、所謂三角堆積土を見逃している可能性がある。崖壁を除いては床面から住居址覆土上層まで個体の分布が認められ、織維的な跡地利用がなされたものと考えられる。

SB73石器群(第53図) SB73はSB74・75を切りSB67・52に切られる。I・II層が住居址埋没段階に、III・IV層が竈構築段階に相当する。竈は東壁中央部において、ほぼ完存状態で確認した。竈構築段階に相当するIV層は石器、自然礫共に出土していない。III層石器群は接合資料1点、単独資料3点の他、自然礫30点により構成される。竈構築段階石器群は石器含有率12%、接合率25%、単独率9%となる。HSa05 R07はSB52 竈構築段階石器群構成個体である24との接合資料である。住居址埋没段階に相当するII層石器群は自然礫1点により構成される。I層石器群は石器、自然礫共に出土していない。住居址埋没段階石器群としてみても床面に接する自然礫1点のみにより構成されることになり、住居址廃絶後の跡地利用がほとんどなされなかつたものと考えられる。

SB74(第53図) SB74はSB73に切られる。住居址埋没段階に相当するI層より自然礫2点が出土したのみである。

SB75(第53図) SB75はSB73に切られる。住居址埋没段階に相当するI・II層が認められたが石器、自然礫共に出土していない。SB73の段状施設を別の住居址と誤認している可能性がある。

SB76石器群(第54図) SB76はSB57に切られる。ただしSB57は住居址と認定し難いものであり、SB76覆土上部がSB57と誤認された可能性がある。竈は西壁南部に認められた。竈構築段階に相当するVI層石器群は単独資料2点の他、自然礫17点により構成される。石器含有率11%、接合率0%、単独率11%となる。竈両袖部先端付近にそれぞれ1点ずつ単独資料が竈構築材として用いられている。床面施設埋没段階に相当するV層(竈覆土)では石器、自然礫共に出土していない。IV層(竈覆土石器群)は自然礫1点により構成される。III層(竈覆土)石器群は自然礫2点により構成される。II層(ピット2覆土)石器群は自然礫1点により構成される。床面施設埋没段階石器群としてみると単独資料1点の他、自然礫7点により構成され、石器含有率13%、接合率0%、単独率13%となる。住居址埋没段階に相当するI層石器群は接合資料2点、単独資料5点の他、自然礫56点により構成され、石器含有率11%、接合率29%、単独率8%となる。床面に接する個体が多いことから、竈破壊後跡地利用がなされなかつたか、もしくは住居址廃絶直後から跡地利用がなされたものと考えられる。

SB77(第51図) SB77はSB79 竈煙道部を切り、SB63・60に切られる。石器、自然礫共に出土していない。

SB78石器群 SB78はSB54・64を切りSB56に切られる。住居址埋没段階に相当するI～IV層が認められたがIII層より単独資料1点の他、自然礫1点が出土したのみである。調査区外にかかる為詳細は不明である。

SB79石器群(第50図) SB79はSB80・52を切りSB77に竈煙道部を切られる。覆土中層(I・II層層理面付近)に焼土範囲及び炭化物が検出されたことから所調焼失住居址とも考えられる。竈は西壁南部に認められた。竈構築段階に相当するV～Ⅳ層石器群は接合資料3点、同一母岩資料1点、単独資料2点の他、自然礫5点により構成され、石器含有率55%、接合率50%、単独率28%となる。床面施設埋没段階に相当するIV層(竈覆土)石器群は接合資料7点の他、自然礫2点より構成され、石器

含有率78%、接合率100%、単独率0%となる。住居址埋没段階に相当するⅢ層石器群は接合資料3点、単独資料2点の他、自然縫4点により構成される。Ⅱ層石器群は接合資料1点、同一母岩資料1点の他、自然縫2点により構成される。Ⅰ層石器群は単独資料1点の他、自然縫4点により構成される。住居址埋没段階石器群としてみると接合資料4点、同一母岩資料1点、単独資料3点の他、自然縫10点により構成され、石器含有率44%、接合率50%、単独率22%となる。HSa26 R27は竪覆土石器群構成個体とⅢ層石器群の中でも床面に接する個体の接合資料であり、SB79竪破壊時にSB79南東部に多くの個体が遺棄されたものと考えられる。

SB80石器群(第50図) SB80はSB79に切られる。竪は痕跡として西壁中央北よりに確認された。床面施設埋没段階に相当するⅥ層(竪覆土石器群)は同一母岩資料1点及び単独資料1点の他、自然縫4点により構成される。V層(ピット2覆土石器群)は自然縫2点により構成される。床面施設埋没段階石器群としてみると同一母岩資料1点及び単独資料1点の他、自然縫6点により構成され、石器含有率25%、接合率0%、単独率25%となる。住居址埋没段階に相当するⅠ～IV層石器群は接合資料1点、同一母岩資料1点、単独資料2点の他、自然縫3点により構成され、石器含有率57%、接合率25%、単独率43%となる。接合資料の切り合いから本来SB79に帰属する個体の一一部が混入した可能性が判明している。竪は焼土面(所謂火床)が確認されたのみであり、SB80廃絶段階後竪は破壊され、竪構築材の多くが住居址外に搬出されたものと考えられる。

第12号溝石器群(第49-53図) SD12はSB52-79を切る。住居址との切り合い部付近では本来SB52-79に帰属すると考えられる変色範囲の認められる縫片類が多く組成され、切り合いを持たない部分では自然縫が多く組成された。

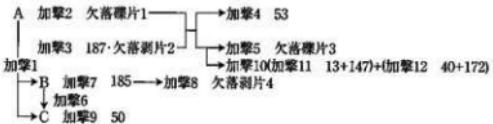
以上、ⅡC対象区内の遺構単位石器群について概観してきた。竪袖部構築土及び竪袖部構築材が残存する住居址では床面も含め住居址埋没段階に石器及び自然縫がより多く搬入され積極的かつ継続的な跡地利用が多く認められ、竪袖部構築土及び竪袖部構築材が残存しない住居址ほど住居址埋没段階の跡地利用が少ないとといったように、竪残存状況と住居址跡地利用状況には相関傾向が認められた。なお竪天井部が残存するSB73では跡地利用の痕跡は認められなかった。

⑤ 母岩別資料概観 (第16表、第55～62図)

平漸跡ⅡC対象区石器群に対し母岩識別・接合作業を実施したところ接合資料31例、総接合個体数78点及び、同一母岩資料11例、総同一母岩個体数19点を確認した。法量が大きく、疊面残存率の高い個体が多く、容易に母岩形状が推定し得た為、若干不安の残る個体についてもすべて単独資料としてはいるものの、母岩識別率はほぼ100%に近いものと考えられる。ここでは母岩別資料を概観した後、単独資料についても概観しておきたい¹⁰⁾¹¹⁾。

第1号母岩(HSa01 R01)

接合資料10点及び、同一母岩資料2点(100,238)により構成される。分布は接合資料がSB52 I・II層、SB79 II層及びSD12に、同一母岩資料がSB79及びSD12に認められた。推定最大長552mm、現存重量34,895.0gを測る偏平縫



素材としており、残存半は7/8程度である。剥離・分割面と変色範囲との切り合いから母岩状態すでに変色しており、他の住居址において竪構成縫として用いられていたものが、すでに廃絶していたSB52跡地に母岩状態で搬入されたと考えられる。搬入後まもなく、兩面剥離とと考えられる加擊1でAと(B+C)に分離している。Aは加擊2-3の前後関係が不明であるが、加擊2により欠落縫片1が分離し、加擊3により187及び欠落縫片2を同時剥離している。続いて加擊4-5の前後関係は不明であるが、加擊4により53を剥離し、加擊5により欠落縫片3を分離し、打面を転移して加擊10により(13+147)と(40+172)に分離している。(13+147)は欠落縫片1との接合面を切り欠落縫片3との接合面に切られる変色範囲が認められることから、Aは欠落縫片1が分離した段階から53が分離した段階までに一度他の住居址に搬出され、竪構築材として用いられたと考えられる。欠落縫片3はおそらくは対象区外であろう搬出先において加擊5により分離し、回取されなかつたものと考えられる。

(B+C)は加擊6によりBとCに分離される。Bは加擊6-7の前後関係は不明であるが、加擊7により185を剥離し、加擊8により欠落縫片4を剥離し51が残骸となる。Cは加擊6の前面面を打面とし、加擊9により50を剥離し49が残骸となる。

以上の加擊1-3-4-6-7-8-9により形成された個体の多くはSB52南東部I・II層に集中分布していることから、SB52跡地南東部において展開された作業段階であると考えられる。しかし(13+147)及び(40+172)は、この段階で形成された剥離・分割面を切る変色範囲が認められることから、剥離面の切り合い関係のみからでは知り得ない次なる段階の存在が浮かび上がる。

(13+147)は加擊5により欠落縫片3が分離する以前に他の住居址に搬出され竪構築材として用いられたと考えられ、その後加擊11により13と147とに分離している。加擊11が搬出先において行われたのかSB52跡地において行われたかは不明であるが、13は分離した後に再びSB52跡地に搬入され、147は13との接合面を切る変色範囲が認められることから、さらに他の住居址に搬出され竪構築材として用いられ、最終的に廃絶していたSB79跡地西北部に搬入されたものと考えられる。

(40+172)は加擊12により40と172とに分離している。前段階に形成された剥離・分割面及び、加擊12により形成された40-172接合面を切る変色範囲が認められることから、他の住居址に搬出され竪構築材として使用され、その後40はSB52跡地中央部に、172はSB79跡地南東部に搬入されたものと考えられる。

以上の剥離・分割面及び変色範囲の切り合い関係から復元した搬出及び搬入の関係は、40の標高がやや低いことを除いては、SB52がSB79に切られるという遺構の切り合い関係とも整合する。

第2号母岩(HSa02 R02) [173→(14+17)] 接合資料3点により構成される。分布はSB52 IX層及びSB79に認められた。残存率は1/8程度である。右側面の分割面に変色範囲が切られることから173分離以前に他の住居址において竪構築材として用いられた後に、接合状態が分離状態かは不明であるがSB52に搬入され、14は竪南側袖構築材に、17は竪南側袖構築材に用いられたと考えられる。剥離面及び分割面の切り合い関係からは173は14+17分離以前に分離しており、SB52を切るSB79に173が含まれること自体が矛盾することから、他の住居址に搬出され、最終的にSB79に搬入されたものと考えられる。

第3号母岩(HSa03 R03) [171→(272+15)] 接合資料3点により構成される。分布はSB55 II層、SB79 IV層及び堆土に認められた。残存率は1/8程度である。接合状態右側面の分割面に変色範囲が切られることから、171分離以前に他の住居址において竪構築材として使用されていたと考えられる。剥離・分割面の切り合いからは171分離後欠落断片が分離し、その後272と15に分離したことになり、それぞれ分離した状態で搬入されたものと考えられる。

第4号母岩(HSa04 R04) [16+18] 接合資料2点より構成される。分布はSB52 IX層に認められた。残存率は7/8程度である。16は竪構築材に含めたが袖部推定範囲よりやや外れており、上端部→左側面の順に欠落断片が4点以上分離しその後16と18が分離していることからSB52竪構築段階には接合状態であったと考えられ、竪破壊段階に分離し、欠落断片は他の住居址に搬出されたものと考えられる。

第5号母岩(HSa01 R05) [19+22] 接合資料2点より構成される。分布はSB52 IX層及びSD12に認められた。残存率は1/4程度である。19はSB52竪構築材に用いられていることから竪構築段階には分離していたことになる。22は分離後おそらく廃絶していたであろうSB52跡地もしくはSB79跡地に搬入され、その後SD12構築段階に人为的に移動したものと考えられる。

第6号母岩(Gr01 R06) [21+23] 接合資料2点及び同一母岩資料1点(103)により構成される。接合資料の分布はSB52 IX層に、同一母岩資料の分布はSB63 I層に認められた。残存率は1/4程度である。接合面が変色範囲を切ることから、SB52竪構築段階ですべて分離していたものと考えられる。103はSB52を間接的に切るSB63 I層に分布していることから、SB63完絶後に搬入されたものと考えられる。

第7号母岩(HSa05 R07) [24+128] 接合資料2点より構成される。分布はSB52 VII層及びSB73 III層に認められた。残存率はほぼ1/1である。接合面が変色範囲を切ることから母岩状態で他の住居址において竪構成織として使用されていたと考えられる。分離後128はSB73竪構築材、24はSB52竪構築材として用いられたものと考えられる。土器型式期ではSB73は11～12期、SB52は15期に帰属すると考えられることから、少なくとも2型式期以上の時間差がある。

第8号母岩(HSa06 R08) [27+36] 接合資料2点より構成される。分布はSB52 I・IX層に認められた。残存率は1/8程度である。接合面が変色範囲に切られることから、SB52構築段階にはすでに分離しており、36はSB52竪構築材として使用されている。27は分離後他の住居址に搬出され変色し、最終的にすでに廃絶していたSB52跡地に搬入されたものと考えられる。

第9号母岩(HSa07) 同一母岩資料2点(33,78)より構成される。分布はSB52 IX層及びSB56 I層に認められた。接合資料ではない為信頼度は劣るが、33と78はSB52竪構築段階には分離しており、33はSB52竪構築材として使用され、78はすでに廃絶していたSB56跡地に搬入されたものと考えられる。

第10号母岩(Rh01 R09) [42+43] 接合資料2点及び同一母岩資料1点(186)より構成される。分布はSB52 II層及びSD12に認められた。残存率は1/2程度である。

第11号母岩(Gr02 R10) [45+52] 接合資料2点より構成される。分布はSB52 II層に認められた。残存率は7/8程度である。母岩状態ですべて変色しており、52分離後欠落断片が分離し、45が残骸となる。他の住居址において竪構築織として用いられていたものが、すでに廃絶していたSB52跡地に搬入されたものと考えられる。

第12号母岩(Sa01 R11) [46+47] 接合資料2点より構成される。分布はSB52 I層に認められた。残存率は1/6程度である。砥石状石器より分割されたものであるが、研磨面を切る変色範囲が認められ、さらに接合面である分割面に切られている。

第13号母岩(HSa08 R12) [54+59] 接合資料2点により構成される。分布はSB52 I層に認められた。残存率は3/8程度である。接合面が変色範囲を切ることから接合状態ですべて変色していたと考えられ、分離後少なくとも2点以上の欠落断片及び欠落断片が分離していることから、SB52跡地に搬入される段階ですべて分離していたものと考えられる。

第14号母岩(HSa09 R13) [58+124+(56+57)+(122+123)] 接合資料6点により構成される。分布はSB69 V層に認められた。残存率はほぼ1/1である。接合面は変色範囲を切ることから接合状態ですべて変色しており、SB69竪構築段階には母岩状態で搬入され、構築材として使用されたものが分離したものと考えられる。

第15号母岩(HSa10 R14) [61+63] 接合資料2点により構成される。分布はSB52 I層に認められた。残存率は7/8程度である。接合面が変色範囲を切ることから母岩状態で他の住居址において竪構成織として用いられたと考えられる。その後少なくとも欠落断片2点及び欠落断片1点が分離し、接合状態が分離状態か不明であるがSB52跡地に搬入されたと考えられる。

第16号母岩(Gr03 R15) [62+235] 接合資料2点により構成される。分布はSB52 II層及びSD12に認められた。残存率は1/4程度である。接合面が変色範囲に切られることから分離状態で他の住居址において竪構成織として用いられたと考えられ、62は分離状態でSB52跡地に搬入されたものと考えられる。

第17号母岩(HSa11 R16) [64+233] 接合資料2点により構成される。分布はSB52 III層及びSD12に認められた。残存率は1/4程度である。接合面が変色範囲を切ることから母岩状態で他の住居址において竪構成織として使用されていたと考えられ、下端の欠落断片が分離した後、64は分離状態でSB52跡地に搬入されたものと考えられる。

第18号母岩(HSa12) 同一母岩資料2点(71,75)より構成される。分布はSB55及び堆土に認められた。

- 第19号母岩(HSa13) 同一母岩資料2点(7279)より構成される。分布はSB55 II層に認められた。
- 第20号母岩(HSa14 R17) [74+106] 接合資料2点より構成される。分布はSB55 II層及びSB67に認められた。
- 第21号母岩(HSa15 R18) [87+89+94] 接合資料3点により構成される。分布はSB60 II・V層に認められた。接合面が変色範囲に切られるから、SB60 痕構築段階にはすでに3点に分離しており、87と89はSB60 痕構築材として使用されている。94はSB60 底面に接した状態で出土しており、住居址魔羅段階に窓が破壊され、運営されたものと考えられる。
- 第22号母岩(HSa16 R19) [91+188] 接合資料2点及び同一母岩資料1点(159)より構成される。分布は接合資料がSB60 II層及びSD12に、同一母岩資料がSB79 V~Ⅵ層に認められた。残存率は1/2程度である。
- 第23号母岩(Ch01 R20) [93+92] 接合資料2点により構成される。分布はSB60 I層に認められた。残存率は1/1である。接合面が変色範囲を切ることから、母岩状態での住居址において竈構成材として使用されていたものと考えられる。母岩状態か分離状態かは不明であるが、共に廃絶していたSB60 跡地に搬入されたものと考えられる。
- 第24号母岩(HSa17) 同一母岩資料2点(95,152)より構成される。分布はSB60 III層及びSB79 II層に認められた。接合資料ではない為信頼度は劣るが、95がSB60 III層、すなわち床面施設段階に、152が廃絶していたSB79 跡地に搬入されたものと考えられる。この関係は構造の切り合い関係と整合する。
- 第25号母岩(HSa18) 同一母岩資料2点(99,177)により構成される。分布はSB79及びSB80 IV層に認められた。
- 第26号母岩(HSa19) 同一母岩資料2点(104,242)により構成される。分布はSB63 VI層及びNZ730EW0グリッドに認められた。
- 第27号母岩(HSa20 R21) [109+112] 接合資料2点より構成される。分布はSB67 I・II層に認められた。残存率は1/2程度である。109はSB67 窓の痕跡と考えられる焼上範囲に接した状態で、112はSB67 北部I層より出土しており、接合面が変色範囲を切ることからも接合状態でSB67において竈構築材として使用されていたものと考えられる。
- 第28号母岩(HSa21 R22) [116+120] 接合資料2点により構成される。分布はSB66 I層に認められた。残存率は7/8程度である。接合面が変色範囲を切るが、接合状態因背面左側縫に変色範囲に切られる剥離痕が認められることから、まず欠落剥片が剥離され、他の住居址において接合状態で竈構築材として用いられ、接合状態か分離状態かは不明であるが最終的にすでに廃絶していたSB69 跡地に搬入されたものと考えられる。
- 第29号母岩(HSa22 R23) [133+134] 接合資料2点により構成される。分布はSB76 I層に認められた。残存率は3/4程度である。接合面が変色範囲を切るが、接合状態因背面に変色範囲に切られる剥離・欠落面が認められることから、SB76 もしくは他の住居址において接合状態で竈構築材として用いられたものが、SB76 跡地に搬入されたものと考えられる。
- 第30号母岩(HSa23 R24) [143+168] 接合資料2点により構成される。分布はSB79 V~Ⅵ層に認められた。残存率は5/8程度である。接合面は変色範囲に切られることから、SB79 痕構築段階には分離しており、168は竈構築材に用いられている。143は標高は低いがSB79 南東より出土している。変色は認められない。
- 第31号母岩(HSa24 R25) [149+150] 接合資料2点により構成される。分布はSB79 IV層に認められた。残存率は1/2程度である。接合面が変色範囲を切ることから、接合状態で竈構築材に用いられていたと考えられる。近接状態で出土しており、SB79 痕破壊段階の加熱によりクラックが生じていたものが遺物取り上げ時に分離したものとも考えられる。
- 第32号母岩(HSa25 R26) [151+160] 接合資料2点により構成される。分布はSB79 III・IV層に認められた。残存率は1/1である。接合面が変色範囲を切ることから母岩状態で竈構築材に用いられていたと考えられる。160はSB79 痕覆土に、151はSB79 痕周辺において床面に接した状態で出土していることから、SB79 痕破壊段階に分離したものとも考えられる。
- 第33号母岩(HSa26 R27) [153+165] 接合資料2点により構成される。分布はSB79 III・IV層に認められた。残存率は3/16程度である。接合面が変色範囲を切ることから母岩状態で竈構築材に用いられていたと考えられる。165はSB79 痕覆土に、153はSB79 南東部床面より出土していることから、SB79 痕破壊段階に分離したものとも考えられる。
- 第34号母岩(HSa27 R28) [166~167+154+157] 接合資料3点により構成される。分布はSB79 IV・V~Ⅵ層及びSB80 IV層に認められた。残存率は1/1である。接合面が変色範囲を切ることから母岩状態で竈構築材に用いられていたと考えられる。剥離・分割面の切り合いかはまず166が分離し、その後154・157が分離したことになる。166はSB79 痕構築土に、157はSB79 痕構築土に含まれており、166分離以前すなわちSB79 痕構築段階以前には分離し得ない154がSB80 覆土に含まれることはあり得ない。ゆえに154はSB79 の床面施設に伴っていたものであるが検出の失敗によりSB80 に混入したものとも考えられる。
- 第35号母岩(HSa28 R29) [156+174] 接合資料2点より構成される。分布はSB79 III層に認められた。残存率は7/8程度である。接合面が変色範囲を切ることから母岩状態で竈構築材に用いられていたと考えられる。
- 第36号母岩(HSa29 R30) [169+170] 接合資料2点より構成される。分布はSB79 IV・V~Ⅵ層に認められた。残存率はほぼ1/1である。接合面が変色範囲を切ることから母岩状態で竈構築材に用いられていたと考えられる。170はSB79 痕構築土に、169はSB79 痕覆土より出土していることから、SB79 痕破壊段階に分離したものとも考えられる。
- 第37号母岩(Gr04) 同一母岩資料2点(180,230)より構成される。分布はSB80 VI層及びSD12に認められた。接合資料ではない為信頼度は劣るが、180はSB80 IV層すなわち竝覆土より、230はSD12より出土している。
- 第38号母岩(HSa30 R31) [197+198] 接合資料2点より構成される。分布はSD12に認められた。変色範囲は認められない。
- 単独資料161 161はSB79 痕構築土に含まれていた個体が取り上げ時に6点に分離したものである。背面上半に認められる剥離面が変色範囲に切られ、すべての接合面が変色範囲に切られることから、他の住居址において竈構築材として用いられていた個体が、SB79 痕構築段階に接合状態で搬入され、再度竈構築材に用いられたものと考えられる。

⑥ 小結（第17表、第63図）

本項では遺跡を遺構と遺物により構成される構造体と仮設し、調査し得た範囲内、すなわち時空間的に限定された調査区内における、遺構と遺物の関係論から成立する遺跡構造論的把握を試みた。ここでは平瀬遺跡II-C対象区内において確認し得た遺構と遺物の関係について概観しておきたい。

対象区内においては住居址と認定し得る遺構を20程度確認したが、竪構築材と考えられる礫片類を主体とする石器群に対し母岩識別・接合作業を実施した結果、住居址間に分布する母岩別資料が存在し、また単一住居址内において接合・同一・母岩関係が認められない、すなわち遺構外との関係を想定し得る単独資料が竪構築段階石器群においても存在することが明らかとなった。從来織の破壊行為は竪神を封じる為等の祭祀的行為とされてきたが、单一遺構内で完結しない母岩別資料の存在から、廃絶した住居址において竪構築材としての石器を收回し、構築段階の住居址へ搬入し再利用した結果、竪が破壊されたものと考えられる。さらに竪構築段階石器群と住居址埋没段階石器群に分布する母岩別資料の存在及び、住居址への石器帰属率が高率を呈したこと等から、住居址廃絶後の住居址跡地においても竪構築材を備蓄していたものとも考えられる。

また、住居址の集中分布を住居址ブロックと仮設したなら、起点となる住居址の竪構築段階には竪構築材としての石器は自然礫のみに限定されるかもしくは自然礫が多く組成され、展開期には廃絶段階(再利用材)かもしくはすでに廃絶していた(備蓄再利用材)住居址から搬入された礫片類がより多く組成されるものと想定し得る。起点住居址の竪構築段階に自然礫を分割して竪構築材に用いた可能性も排除し切らず、竪の残存状況などにも影響を受けるものの、竪構築段階石器群の石器含有率が10%数に止まるSB69-73-76等は住居址ブロックの起点に近い段階に構築された住居址と考えられ、竪構築段階石器群の石器含有率が50%を上回るSB52-60-7等は住居址ブロックの展開期以降に構築された住居址と考えられる。

遺跡を遺構と遺物により構成される構造体と仮設したならば、その構造体内において生じ得る関係とはいうまでもなく、1)遺構-遺構関係、2)遺構-遺物関係、3)遺物-遺物関係である。從来構造体内における共時性の設定は、土器型式という高度に抽象的な仮設に依存してきた感が強いが、その仮設が検証されることは少なかったものと考えられる。しかしながら遺構間接合・同一・母岩資料という共時性内における通時的关系の把握から可能となる遺構間土層対比を実施することにより、その土器型式という仮設は検証されることになり、さらには同一土器型式内においてより詳細な共時性の設定が可能となるものと考えられる^{※8}。

[註釈]

註1 II-C区内においてもSB44-50及びSB81-86については石器の回収基準が異なることから対象から除外する。またSB53-55-57-73については横積的には住居址と難し難いことから、横積の石器群として扱っているものと想定する部分もある。すなわち、第4級より除外対象とした住居址を除いた範囲を対象区とする。なお対象区内においては石器、自然礫に可能な限り三次元面を記録し、人為・自然的の区別なく「削り出している」個体はすべて記録した。逆に、常に個体面に記録していた個体は1/2平面面を削出し、複数基盤で標準化を記録した段階で、変色範囲が認められた個体も標準化上に含まれていた個体すべてを現場段階において廃棄処分した。人の意願が想定し得る、すなわち既成の石器と含まれる自然礫についての石材、法量、礫形状、赤色範囲の有無等のデータを取った後に廃棄する等の作業を兼ねて記録すべきであったが、複数の個体が標準化されてしまうことから不可能である。註2 平瀬遺跡II-C対象区石器群において確認した接合・同一・母岩関係は、対象区外ではそれらに帰属する個体が回収されなかつた可能性が残る為、対象区外石器群においても効率があるとは限らない。対象区の遺構単位石器群において既成資料が多數確認されていることからすれば、むしろ回収されなかつた可能性が高いとの考えられる。

註3 本項では皮膜を熱風によると考えられるものに限定したが、竪構築材に含まれる個体を除き、すべて竪構築材として用いられた結果生じたものとはいい切れないと。しかしながら熱風によるものと住居址での発掘率が著しく高く、竪構築材との接合関係がよく認められ、なおかつ所謂既成石器がSB76のみであったことから、上層構造物であった場合は必ずも含めるものの、多くの個体が竪構築材としての使用の結果変色したものをと考えられる。

註4 平瀬遺跡II-C対象区石器群においては複数基盤及び複数石器群が発現した石器であり、複数石器群研究・敲打系という石器製作技術システムに該当する。

註5 石器鑑定においては森 哲氏より有益な御教唆を頂いた。記して御礼申し上げます。なお自然礫については点数のみの把握に止まる為、詳細は第17表に譲りこでは割愛する。

註6 この個体は竪構築材：横構築材・壁面土中にビット覆土：床面施設性段階、住居址埋土住居址埋土段階に相当するものとした。三次元座標が不明な個体は石器小片にのみ記載。石器含有率：石器点数/立点数、合接合：複数個体/石器点数、单接合：石器含有率×(1-接合率)として算出している。

註7 単純資料については縫合部の接合から実測距離はほとんど提示して得なかった。なお既成においては母岩IDに行かず、回収IDにおいては母岩番号及び接合番号のみ記載している。対応関係については表16を参照して顶いた。

註8 上層についての後合・同一個体間の分布から後埋土層対比可能な状況では、土器は被損段階で機能停止状態となる場合が多く、被損状態で転用される可能性が高かったと考えられるからこそ、より詳細な共時性の関係が追查し得るものと考えられる。それに對し竪構築材としての石器は被損段階以降も機能停止状態となることは少なく、特に竪構築材に含まれた状態で、すなわち竪構築段階から住居址に隣接して置くと認定し得る状態で機能停止される可能性が高く、より詳細な通時的关系をも追及し得るものと考えられる。なお石器では後埋土層の接合と共に廻済部及び分離部の切り合いで両側から個体の分離順序を把握するが困難であるが、特ににおいては單に実測距離を取る為に接合操作を行ってきた感が否めない。土器においても接合面が2面以上「丁」字形に切り合う状況等では分離順序の把握が可能な場合があり、今後は分離順序の把握及び接合面対比が重要ななるものと考えられる。

[参考文献]

- 安藤敏雄 1978 「先上器時代の研究」[日本考古学会学报]39
五十嵐彰 1999 「石器資料学的の現状」(1) -地下遺跡の分析を通して-『日東考古』17
福田孝司 1969 「先頭器文化の出現と旧石器的石器製作の解体」[考古学研究] 第15巻第3号
大田忠志 1998 「石器・石製品」[JR境北遺跡・川西園田遺跡I・II] 松本市教育委員会
鶴生直彦 1995 「出土出現頻度による堅牢住居場内の遺物出土状態をめぐる問題」[山梨県考古学協会誌] 第7号
島義明義 1988 「[山石器時代後丘と遺物分布について(上)]」[山石考古] 第14号
黒毛和久 1988 「堅牢住居所出土遺物の「一枚岩」について」[「堅牢パターン」の資料論的検討を中心に-]
小林謙一 1997 「堅牢住居所の諸問題」三河考古先生紀念考古学文集
佐藤義一郎 1995 「堅牢の発見」[山石器考古学論集] 第7号
十井義夫 1985 「[縫合部]の初期の構造の変遷」-縫合部の二つのあり方をめぐって-『日東考古』3
森下雅典 1989 「第三章」まで「[高古遺物]」[松本市教育委員会
保坂康夫 1993 「[縫合部]の構成構造の割れ(崩壊)」[山石器の研究]考古論集、-瀧見 浩先生追念記念集-』
野口淳 1995 「[武藏野台地下]・V上層埋土の遺物群」-石器群の工程配列と連鎖の体系-『日石器考古学』51
水野正野 1992 「[縫合部]の初期の構造の変遷」[山石考古] 第22巻第3-4号
三井義典 1999 「[20世紀遺物の解釈以前] [長野遺跡]」愛知県教育委員会

凡例

- ①平瀬遺跡 II より出土した石器及び自然縫は II AB と II C にて二群に分け、それぞれ ID (個体識別番号) を与えて管理している。
 ②本項では例言において示された遺構略号の他に便宜上、住居址: SB、溝址: SD の等の遺構略号が混在する。
 ③本項の層序及び層準は、第 17 ~ 22 図での呼称と異なるものがある。対応関係については第 17 表中の層序遺構編を参照して頂きたい。
 ④グリッドの座標は NSOEWO を基準点とする。すべて m 単位で NS が南北方向、EW が東西方向を表す。
 ⑤住居址等の遺構が帰属すると考えられる土器型式期についても、第 3 章第 3 部第 3 項の成果を用いている。
 ⑥第 10 ~ 15 戻においては自然縫のみが出土した遺構単位石器群については除外し、石器の出土した遺構単位石器群のみを提示してある。
 ⑦第 48 ~ 54 図において用いた記号は以下の通りである。なお三次元座標が不明な単独資料は削除した。第 48 図では対象区内において確認した遺構間接合・同一母岩関係を示すため、住居址と認定するには不安の残るものについても提示してある。第 49 ~ 54 図遺物出土状況図は対象区内に位置し、接合・同一母岩資料が確認された住居址、それらと切り合い関係を持つ住居址、もしくは竪が検出された住居址を対象とした。

接合関係	同一母岩関係
— — —	— — —

遺構間接合関係	三次元座標不明	遺構間同一母岩関係	三次元座標不明
— →	— →	— — — *	— — — *

接合資料	■
三次元座標不明	□
同一母岩資料	▲
三次元座標不明	△
単独資料	*
三次元座標不明	△

平面	石器		自然縫
	接合資料	同一母岩資料	
平面	ID 沿岩番号 接合番号	ID 母岩番号	ID 母岩番号
断面	ID 母岩番号 層面番号	ID 母岩番号 層面番号	ID 母岩番号 層面番号

⑧第 55 ~ 62 図において用いた記号は以下の通りである。接合資料については全点提示したが同一母岩資料のみより構成される母岩別資料及び単独資料については諸般の制約からほとんど提示しなかった。なお原則として実測図の 2/3 で模式図を付してある。

<input checked="" type="checkbox"/> ポジティブ面打点
<input type="checkbox"/> ナガティブ面打点

書き文字 (板塗化)	文字 (墨化)	やや文字 (赤化)
●	●	●

⑨第 17 図においては石器及び自然縫が全く出土しなかった対象区内の住居址も提示した。また、第 55 ~ 57・58・75 号住居址については削除した。なお石器含有率及び接合率はそれぞれ、石器含有率石器小計 / 総計、接合率・接合資料点数 / 石器小計として算出した。

⑩第 63 図においては遺構内において完結する接合関係及び同一母岩関係は削除した。第 55 ~ 57・58 号住居址についても削除した。

⑪第 18 ~ 19 戻において用いた略号及び属性の詳細は以下の通りである。

ID 平瀬遺跡 II より出土した石器のすべてに対して与えた個体識別番号である。II AB 石器群については ID の前に「II AB」を付した。出土遺構 1 その石器の出土した遺構である。

出土遺構 2 原則として、その石器の出土した遺構内における出土位置もしくは取り上げ番号を示す。

層序 対象区内の住居址より出土した個体については断面図に投影し帰属層準を推定した。第 3 章第 2 部遺構編との対応関係については第 17 表中の層序遺構編を参照して頂きたい。

XYZ 三次元座標記録の成された個体については○を、三次元座標記録の不明な個体については×を記した。

器種 第 8 戻の通りである。

最大長・最大幅・最大厚 原則として最大長 > 最大幅 > 最大厚となるように方眼紙上に据え、それぞれ最大部を mm 単位で小数点以下第 1 位まで計測した。しかし縫面、形状等から母岩形状を推定し得た個体についてはその限りではない。

重量 311g 未満の個体については g 単位で小数点以下第 1 位まで計測し、311g 以上 2500g 未満の個体については 2g 単位、2500g 以上 5000g 未満の個体については 5g 単位、5000g 以上の個体については 500g 単位で重量の計測を行った。なお 0.1g に満たない個体についてはすべて 0.1g と表記した。

彫形狀 母岩形状を推定した個体については大きな彫形狀を記した。

分割面 測量面を除く、剥離面及び分割面の面数を記した。

残存率 母岩形状を推定した個体についてはその大きな残存率を記した。

縫面 縫面の残存率を大まかに記した。

石材 第 9 戻の通りである。

母岩 同一母岩資料については母岩番号を記した (第 16 表参照)。単独資料については単独と記した。

接合 接合資料については接合番号 (R-) を記した (第 16 表参照)。

圓面 実測図を掲載し得た個体については○を、掲載し得なかった個体については-を記した。

器種名	器種略号	仮設定義
石核	C	剥離技術の痕跡としての剥離痕が認められる個体
剥片	F	剥離技術の痕跡としての剥離面が認められる個体
二次加工のある剥片	RF	二次加工が認められる剥片
微細剥離痕のある剥片	MF	連続する微細剥離痕が認められる剥片
自然縫	P	剥離・分離・剥落・研磨・敲打・折れのいずれの痕跡も認められない個体
縫片	PT	自然によると考えられる剥離痕が認められる個体
縫片 I 類	PT I	分割しにくくは折れの痕跡が認められる個体
縫片 II 類	PT II	被削によると考えられる剥離痕の痕跡が認められる個体
縫片複合	PTC	PT I と PT II が複合して認められる個体
縫石器 I 類	P I	凸面に敲打痕が認められるか、もしくは敲打により凸面の形成された個体
縫石器 II 類	P II	凹面に研磨痕が認められるか、もしくは研磨により凹面の形成された個体
縫石器 III 類	P III	凹面に敲打痕が認められるか、もしくは敲打により凹面の形成された個体
縫石器複合	PC	研磨痕・敲打痕・剥離痕が複合して認められる個体
鉢状石器	Ws	平坦面に研磨痕が認められるか、もしくは研磨により平坦面の形成された個体
鉢状石器 II 類	KW	製作・使用痕跡が認められないが出土状況等から石器としたもの (ごもや石)
鏡形石器	Su	所謂鏡

第 8 表 器種一覧

石材名	石材略号
黒曜岩	Ob
流紋岩	Rb
安山岩	An
閃緑岩	Di
石英斑岩	QPo
花崗岩	Gr
矽砂岩	HSa
砂岩	Sa
頁岩	Sh
珪質頁岩灰岩	STu
凝灰岩	Tu
粘板岩	Sl
チャート	Ch
ホルンフェルス	Ho
珪岩	Qu

第 9 表 石材一覧

出土遺構	F	MF	P	PT	PT I	PTC	P I	P II	Ws	KW	Su	計
第05号住居址					2				1			2
第06号住居址									1			2
第07号住居址	1		3	2	1		2		9			9
第08号住居址	1			1	1		2		5			5
第09号住居址	1							1		2		2
第10号住居址					1		2	1		4		4
第11号住居址	1		1				1	1	4			4
第13号住居址			1		2				3			3
第15号住居址	1			1				2				2
第19号住居址	1	1	1	1					4			4
第20号住居址		1	1	2					4			4
第23号住居址							1		1			1
第25号住居址				1	1				2			2
第28号住居址						2			1			1
第30号住居址					1				1			1
第35号住居址						1			1			1
第37号住居址	1	1				7		9				9
第40号住居址		2	1	1				4				4
第54号土坑									1	1		1
第70号ビット			1									1
八区検出面	1	1	1			2		5				5
	1	1	7	6	13	4	5	21	9	1	80	計

第10表 平瀬遺跡Ⅱ AB遺構単位器種組成

第11表 平瀬遺跡Ⅱ AB遺構単位石材組成

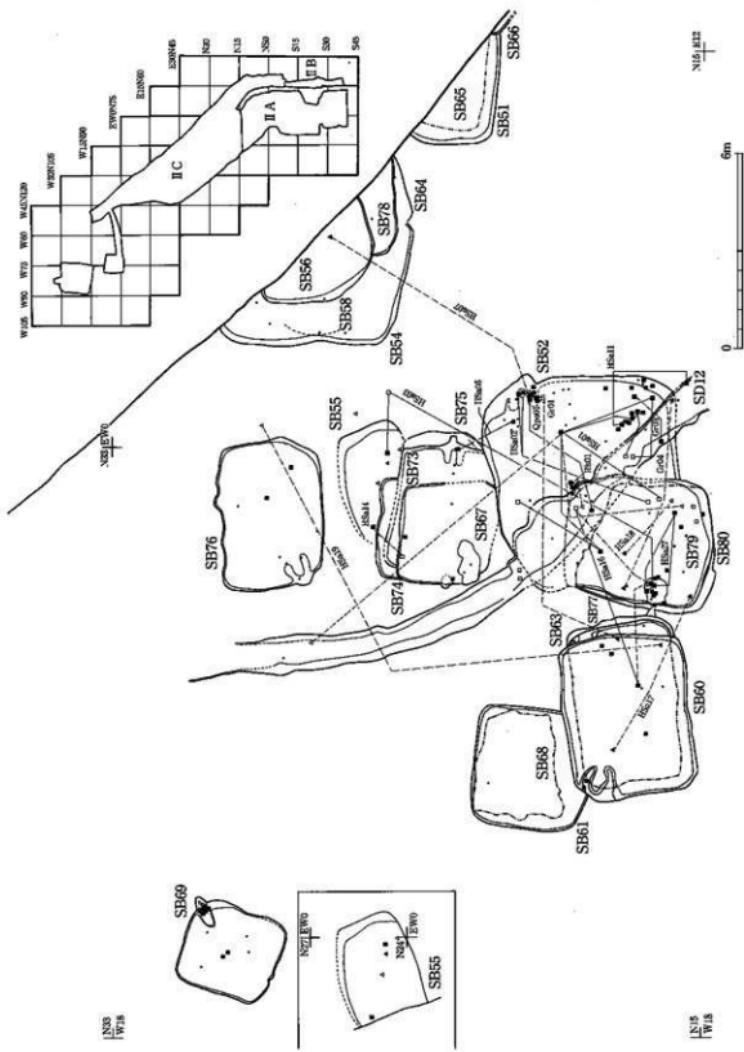
出土遺構	C	RF	MF	P	PT	PT I	PC	PT	PT I	PT II	PTC	Ws	計
第44号住居址						1						1	1
第45号住居址					2			2					2
第47号住居址	1					2		3		2			3
第49号住居址					1			1	2		第49号住居址		2
第51号住居址						1		2			第51号住居址		2
第52号住居址	2	1		8	1	14	5	19	4	49	第52号住居址	2	1
第54号住居址						1	2	1		4	第54号住居址		4
第55号住居址					1	2	3		4		第55号住居址		4
第56号住居址					1	2	1		4		第56号住居址		4
第57号住居址		1			2	1	2	1		7	第57号住居址	1	7
第60号住居址					1	2	5	1		9	第60号住居址		9
第61号住居址						1		1		2	第61号住居址		2
第63号住居址					2		1		3		第63号住居址		3
第64号住居址							1	1			第64号住居址		1
第65号住居址						1					第65号住居址		1
第67号住居址					4	3	2		9		第67号住居址	1	9
第69号住居址		1			2	5	6		14		第69号住居址		14
第73号住居址	1					1	3	4			第73号住居址	1	4
第76号住居址					5		6	1	12		第76号住居址		12
第78号住居址						1		1			第78号住居址		1
第79号住居址	1		7	1	15	7		31			第79号住居址	1	27
第80号住居址			3	2	2			7			第80号住居址	1	7
第255号ビット					1					1	第255号ビット		1
第1号機集中				1							第1号機集中		1
第12号溝	2	1			1	28	13	6	5	56	第12号溝	2	56
第2号走路							1				第2号走路		1
グリッド	2	1	1		1	10	2	3	2	22	グリッド	1	22
検出面						2	2	1	1	7	検出面		7
土						1		3		6	土		6
計	2	6	4	21	3	1	5	74	44	51	66	9	267

第12表 平瀬遺跡Ⅱ C遺構単位器種組成

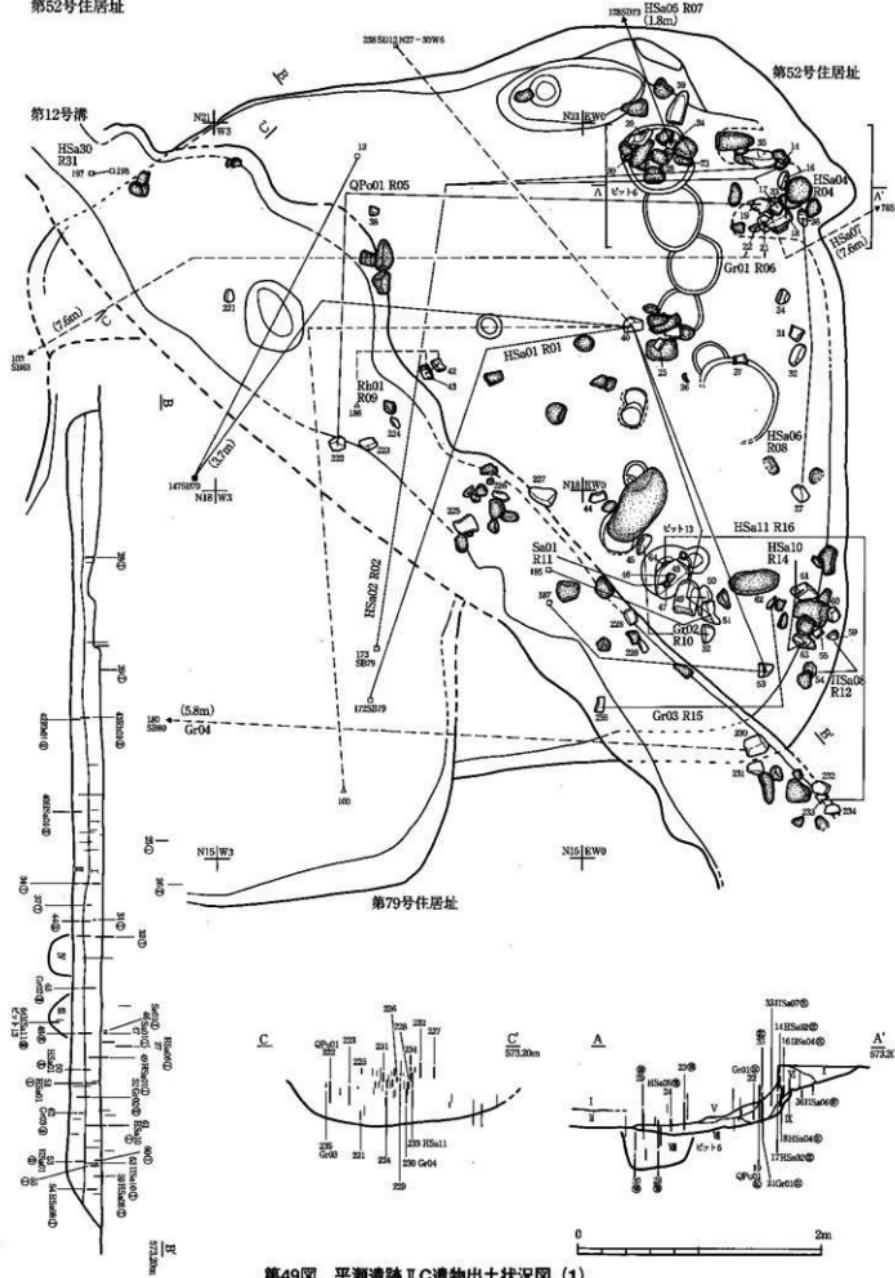
第13表 平瀬遺跡Ⅱ C遺構単位石材組成

石材	F	MF	P	I	P II	PT	PT I	PT II	PTC	Ws	計	接合個数	総合率
Ob	1					1				2		0	0%
An		1	3	2	1	7	Rh			3	2	2	28.6%
Gr					1		An			1	1	3	0.0%
Hs	6	2	1	2	3	12	1	9	36	Dt		1	0.0%
Sa		1	2	1	1	6	Qf				5	5	40.0%
Sh					6		Gr			1	9	10	30.0%
Tu						13	Hs	2	5	1	27	49	32.2%
Sl						13	Sa			2		10	20.0%
Ch	1	1	1	1	1	1	Sh			1	4	1	0.0%
計	1	1	7	4	5	5	Stu			1		6	0.0%
第14表 平瀬遺跡Ⅱ AB石材単位器種組成	2	6	4	2	3	1	Tu			1		0	0.0%
第15表 平瀬遺跡Ⅱ C石材単位器種組成	5	1	51	74	44	51	Ch			1		0	0.0%
	56	9	267				Ho			2		0	0.0%
	78	39.2%					Qu			3		0	0.0%

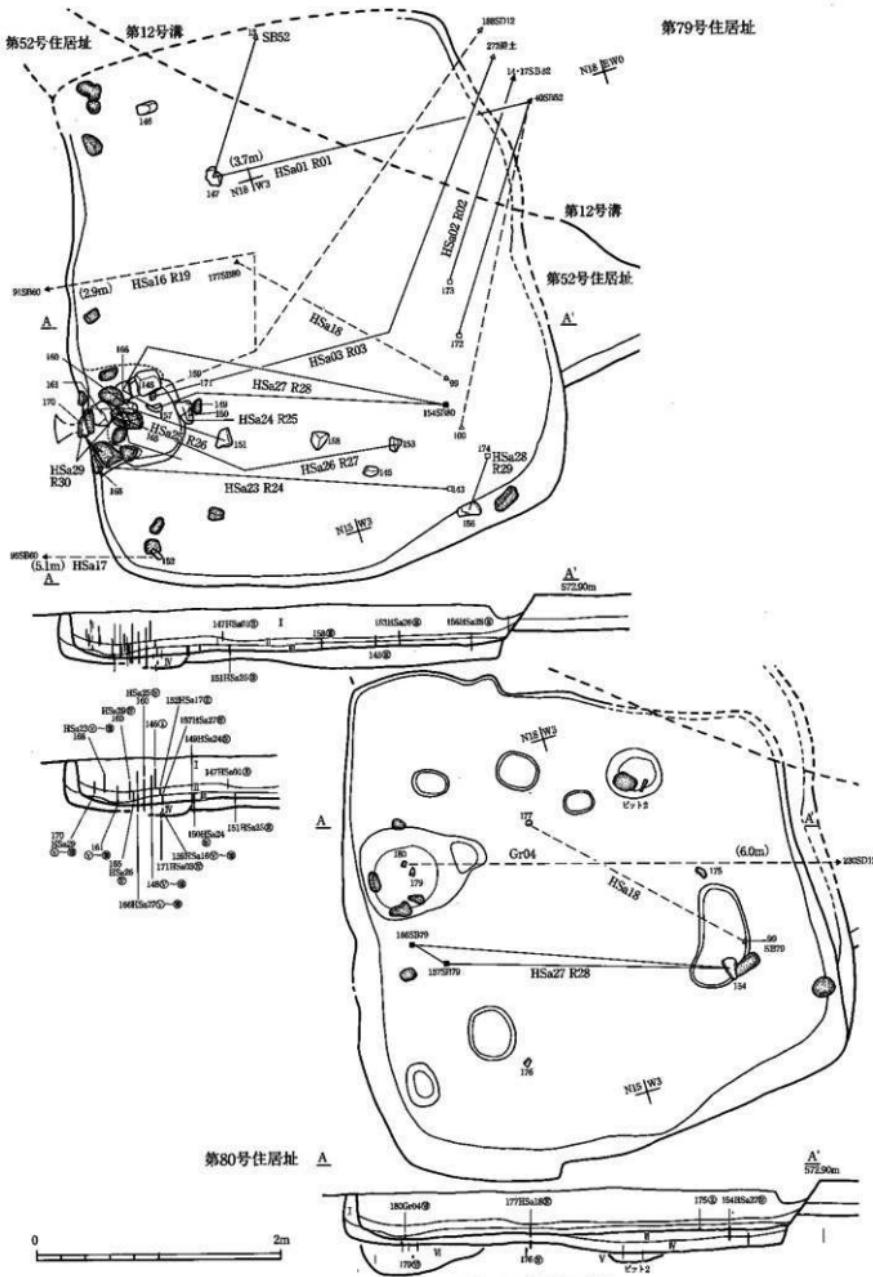
第48図 平瀬遺跡 II C遺構間接合資料分布図



第52号住居址

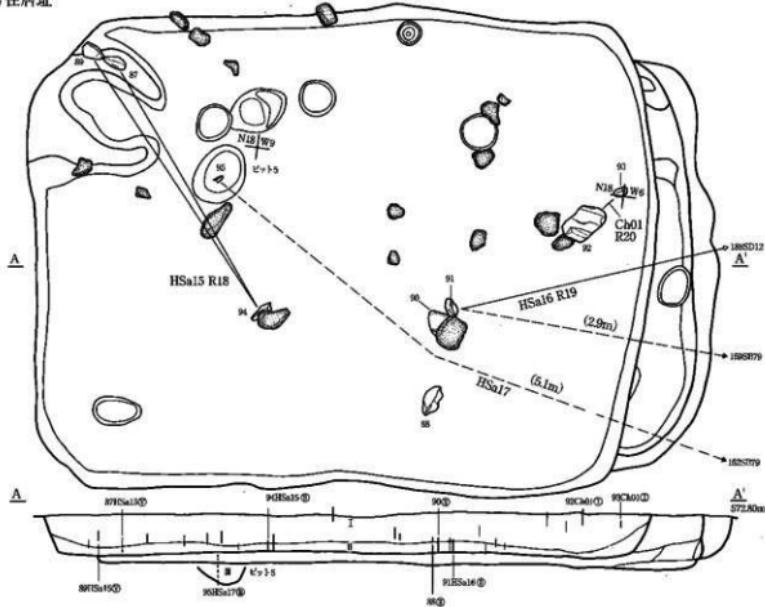


第49図 平瀬遺跡 II-C 遺物出土状況図 (1)

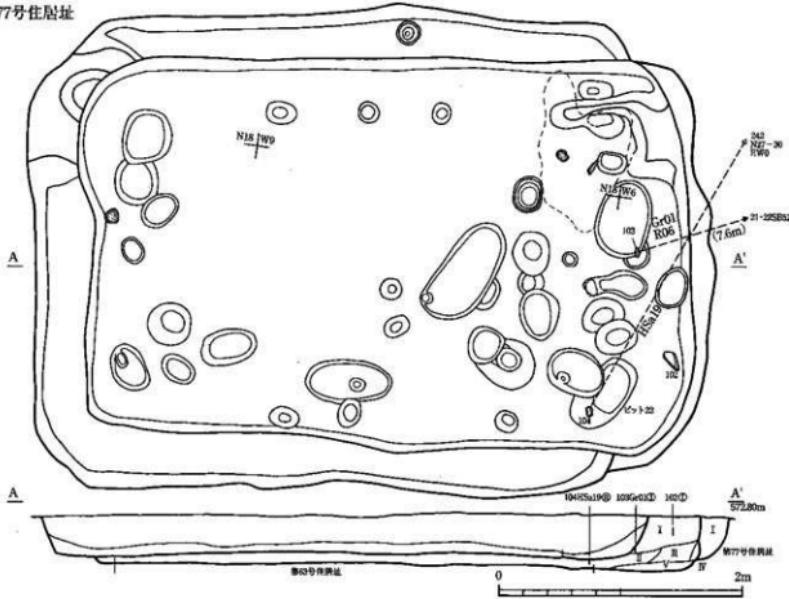


第50図 平瀬遺跡 II-C 遺物出土状況図 (2)

第60号住居址

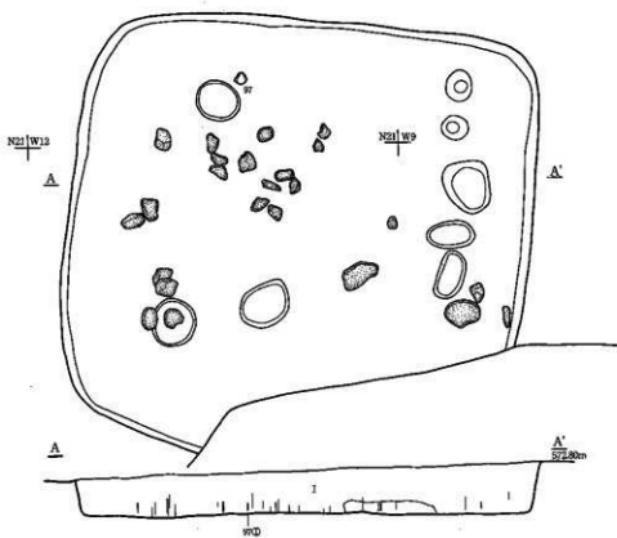


第63・77号住居址

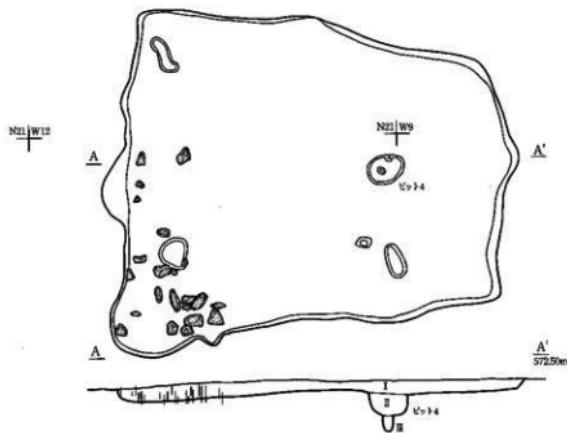


第51図 平瀬遺跡 II C 遺物出土状況図 (3)

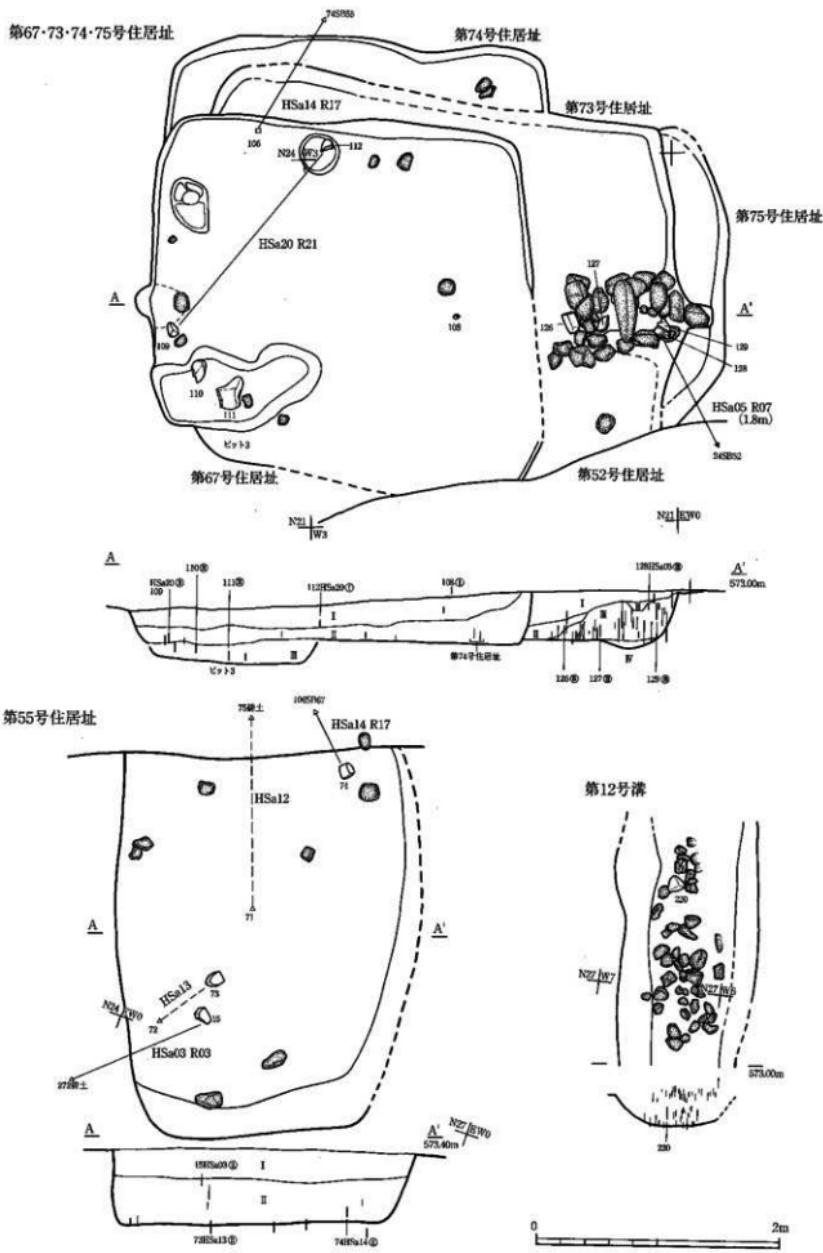
第61号住居址



第68号住居址

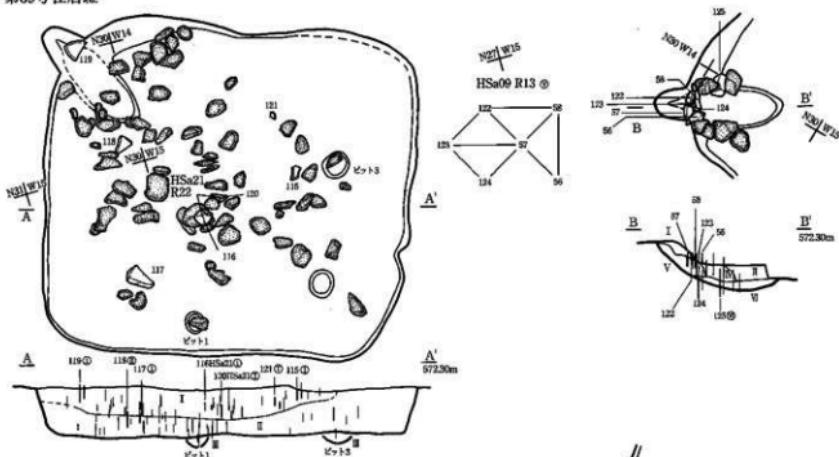


第52図 平瀬遺跡 II C 遺物出土状況図 (4)

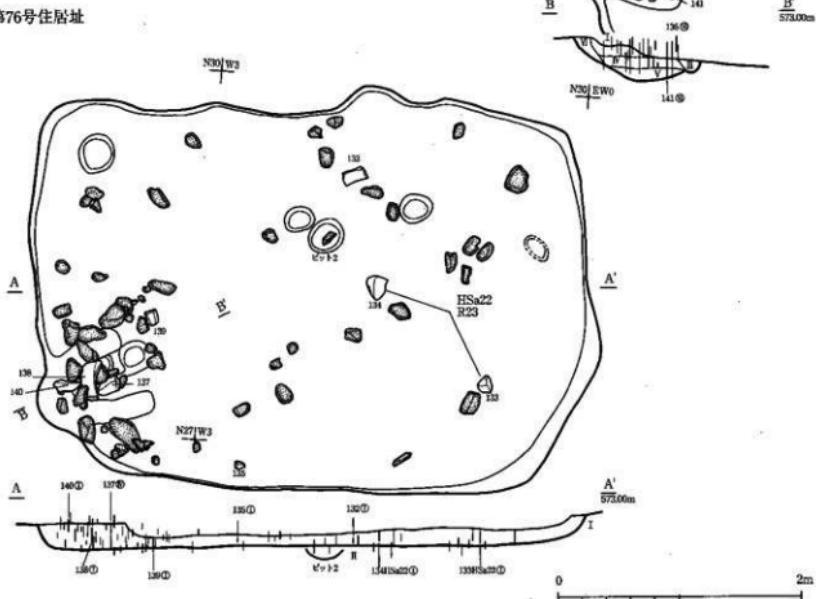


第53図 平潭遺跡 II C 遺物出土状況図 (5)

第69号住居址

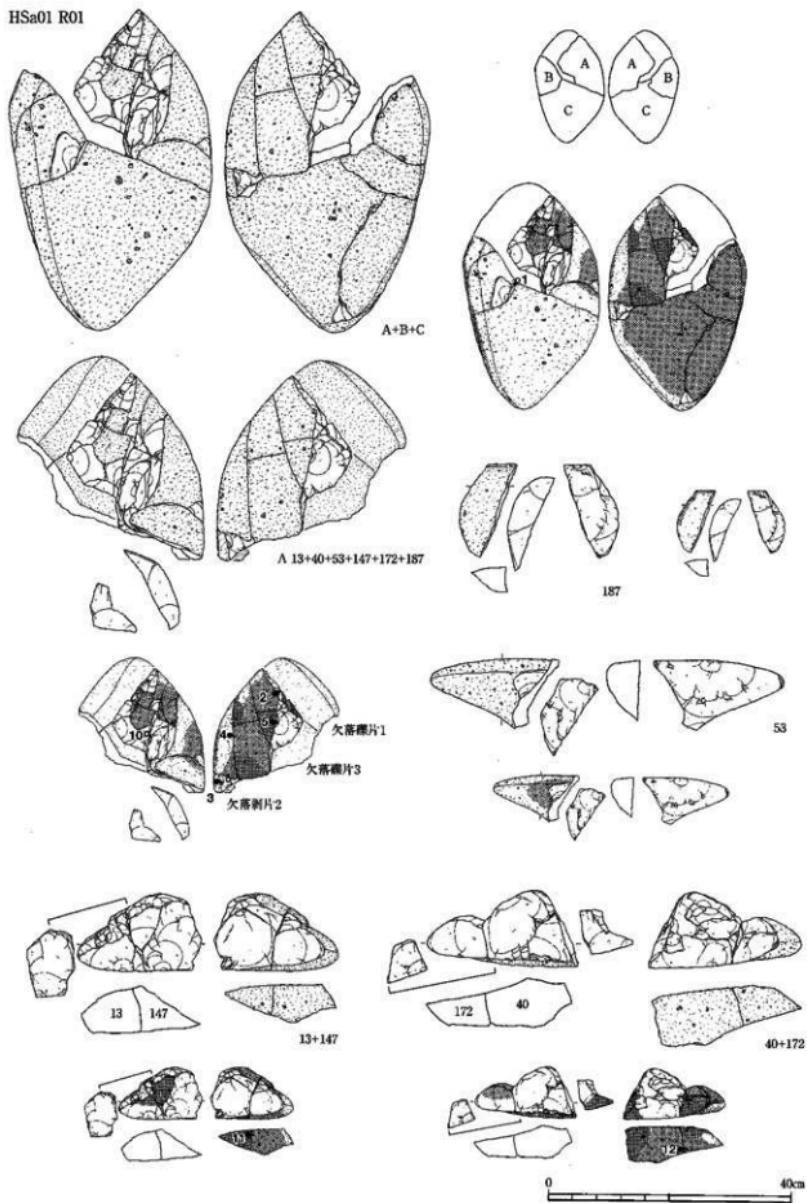


第76号住居址

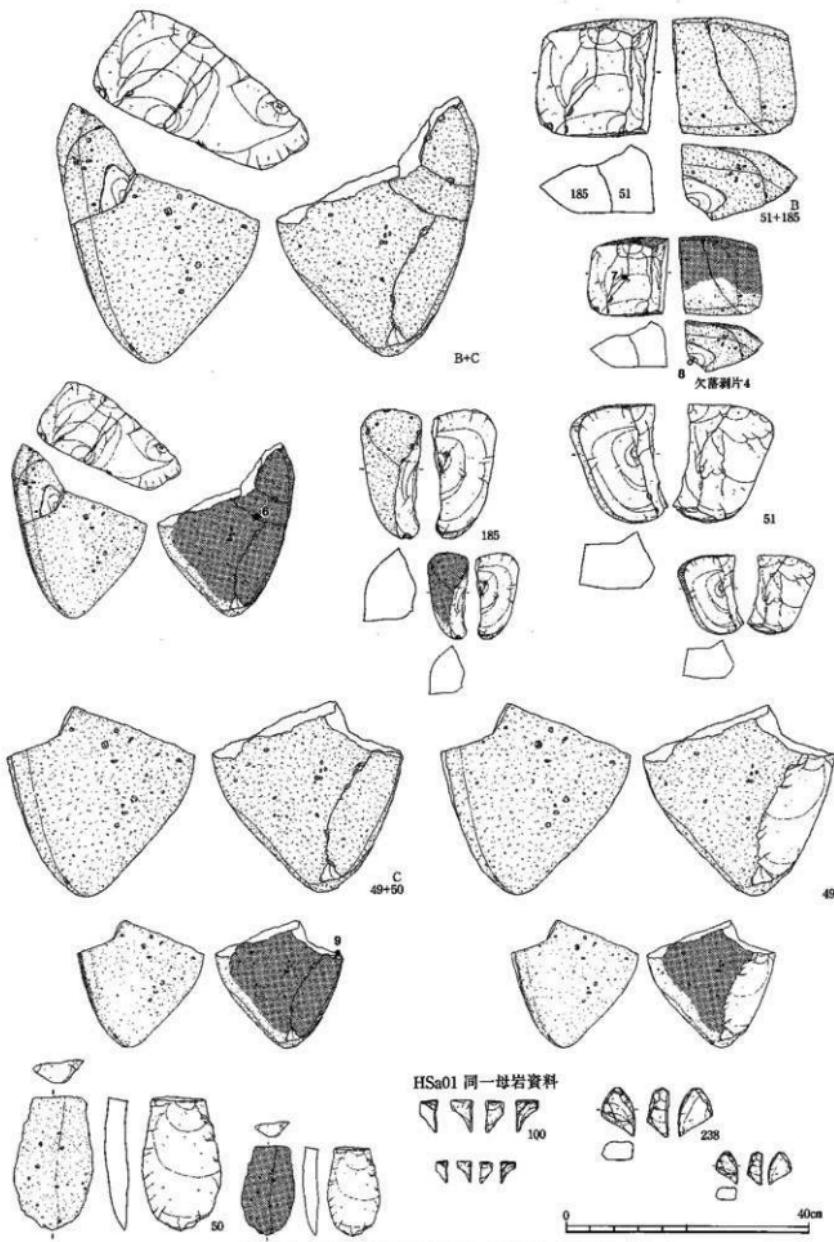


第54図 平瀬遺跡 II C 遺物出土状況図 (6)

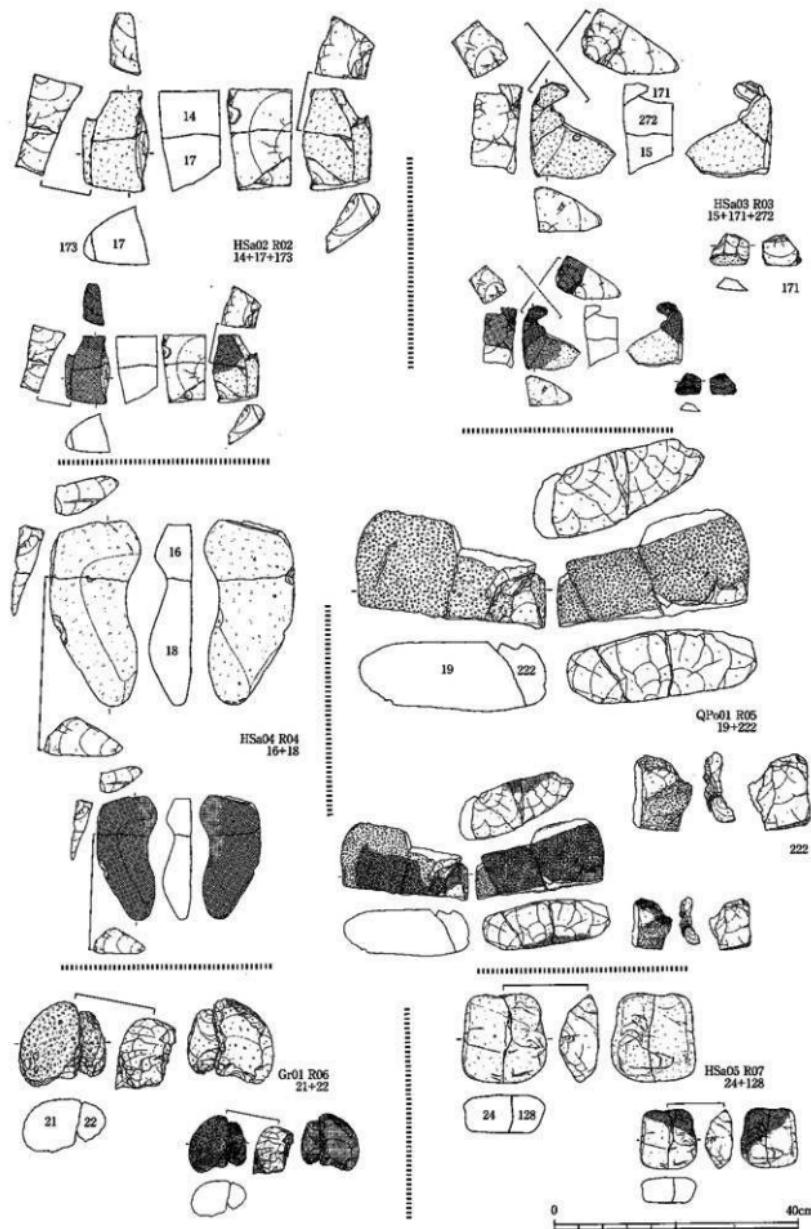
HSa01 R01



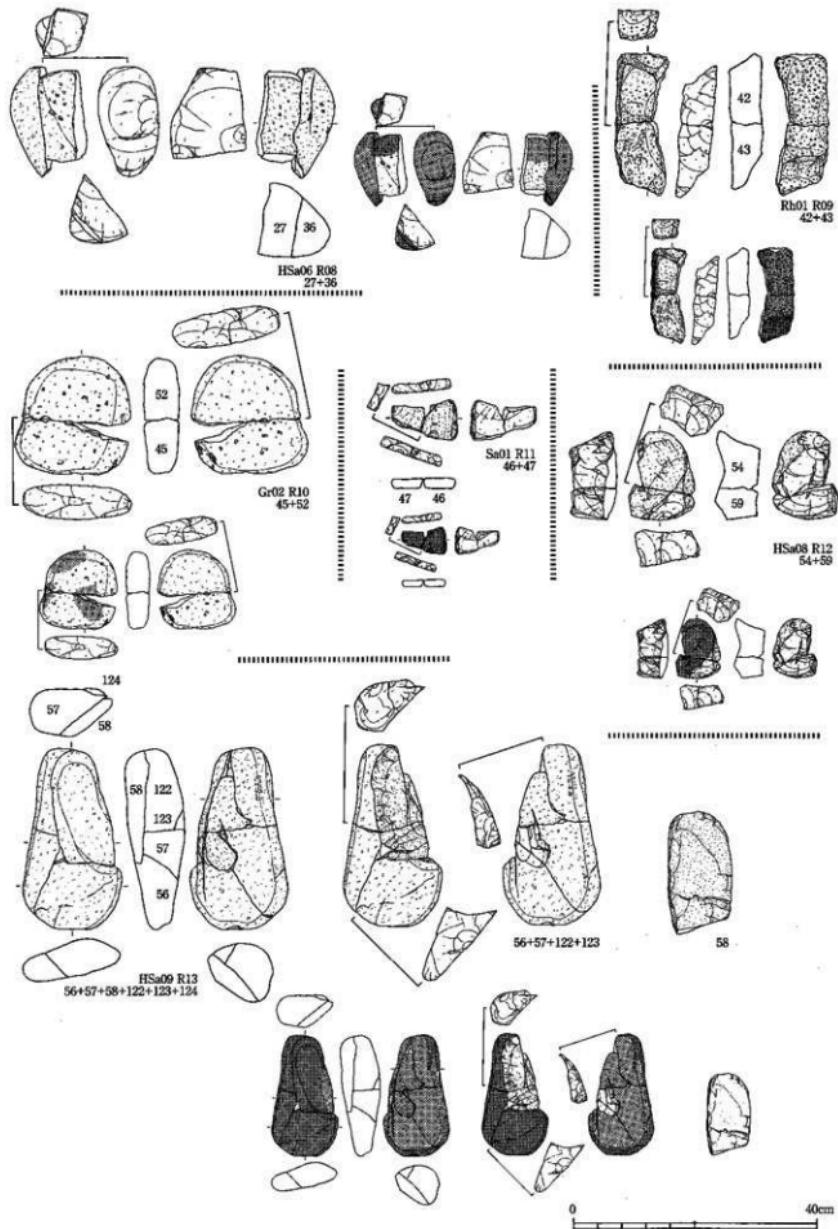
第55図 平瀬遺跡 II C出土石器 (1) HSa01 R01



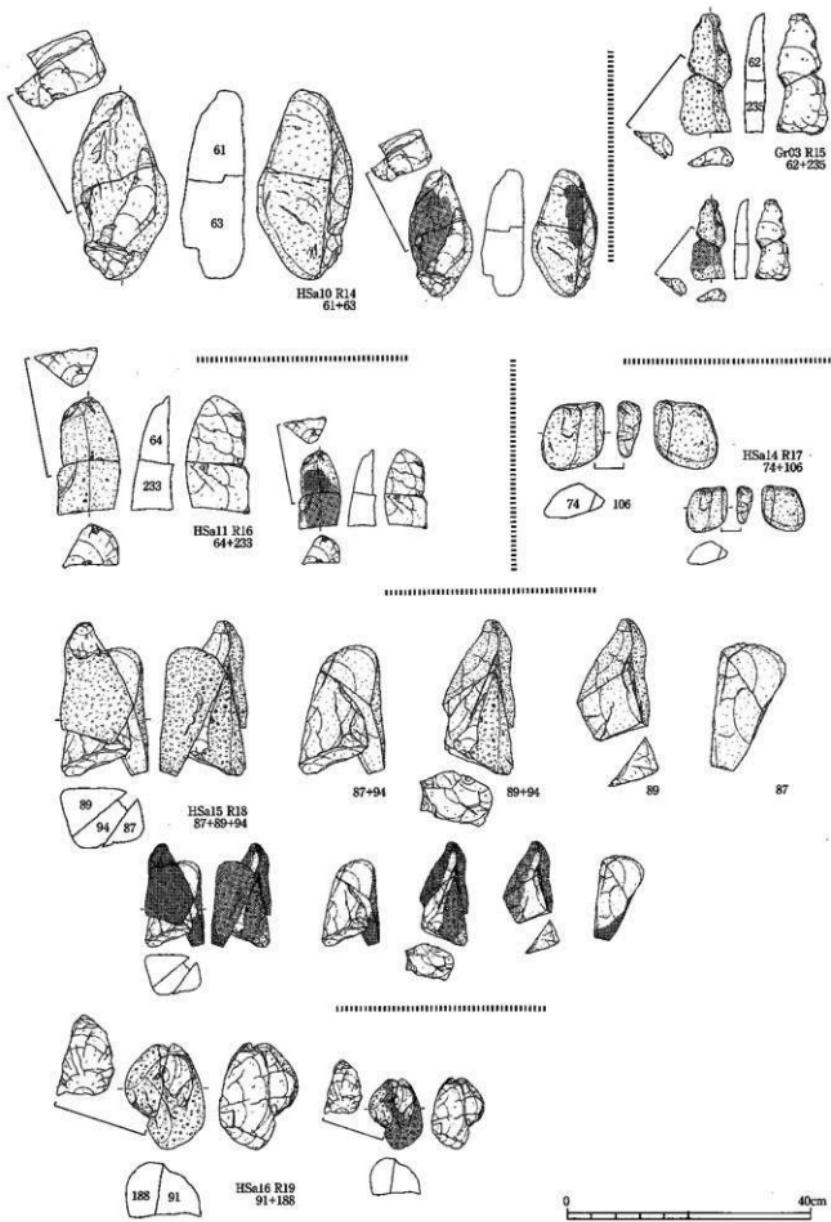
第56圖 平瀬遺跡ⅡC出土石器（2）HSa01 R01



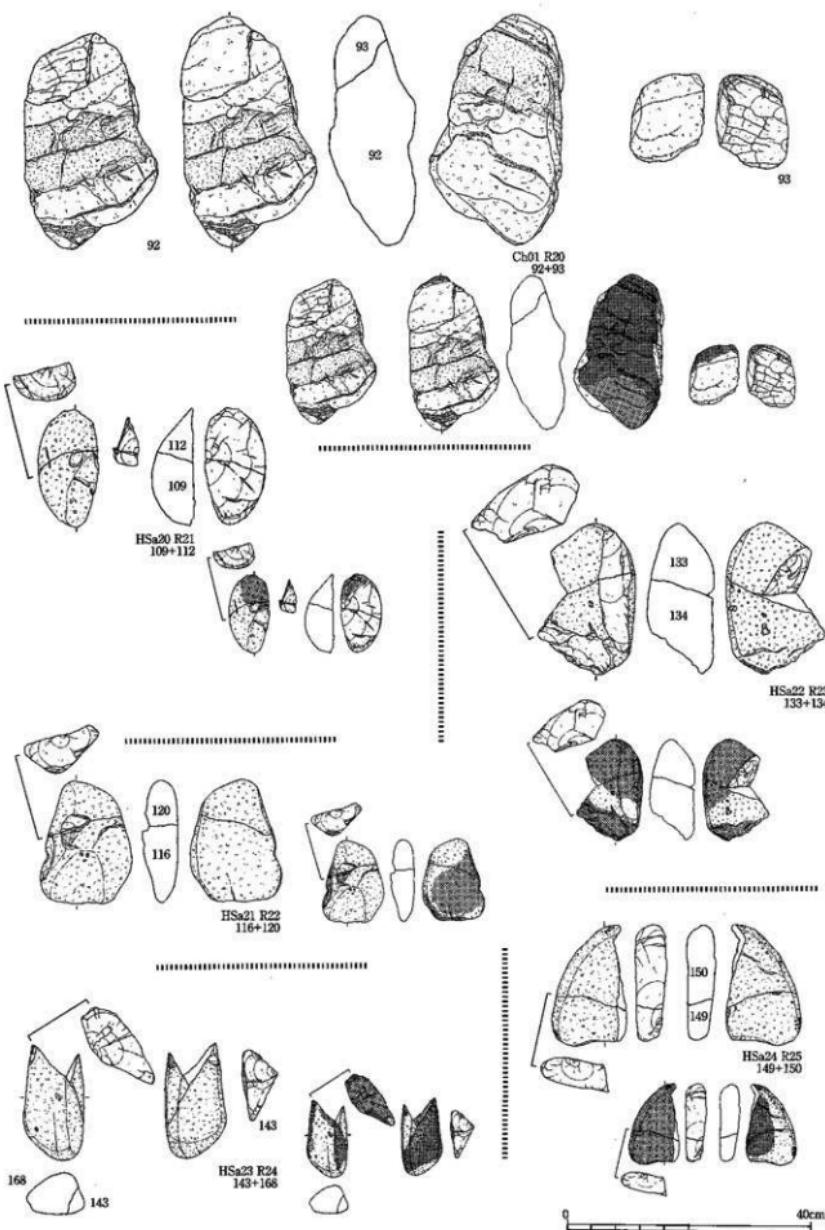
第57図 平瀬遺跡 II C出土石器 (3) R02~R07



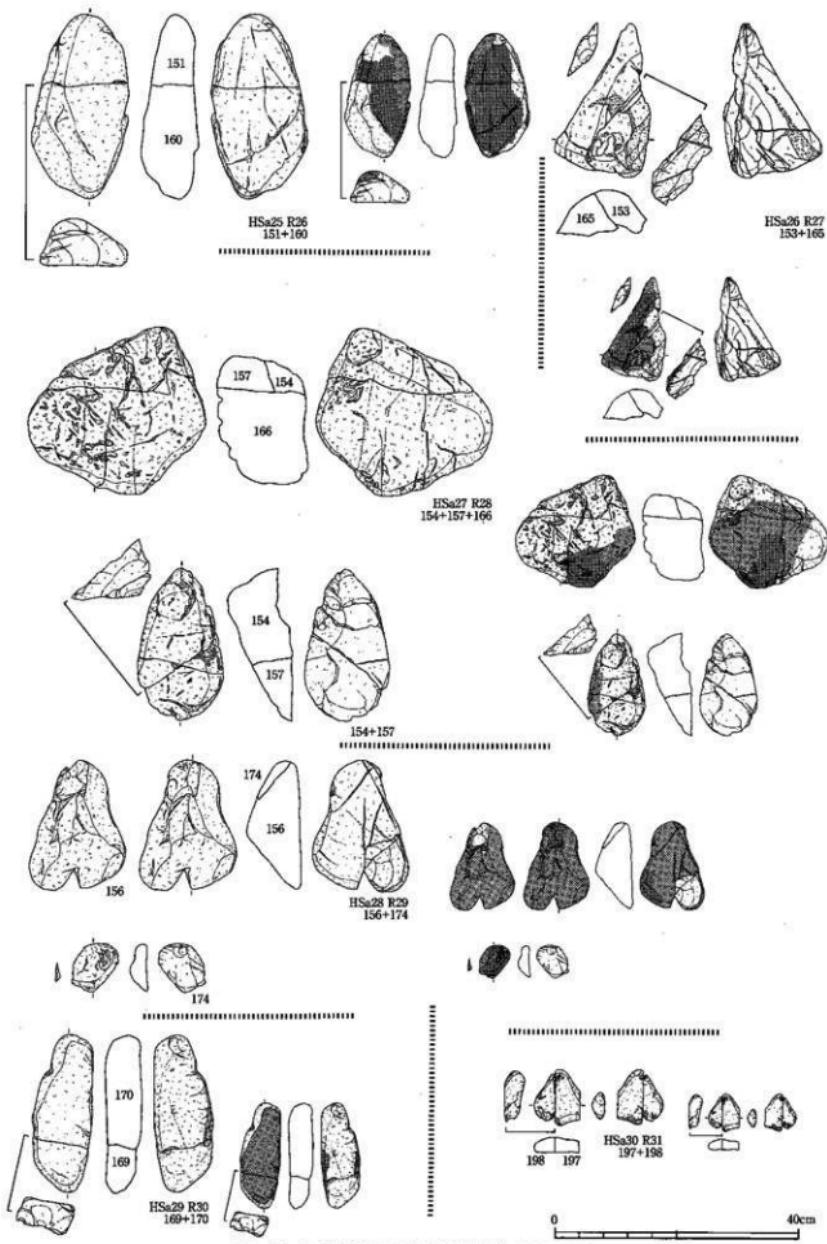
第58図 平瀬遺跡Ⅱ-C出土石器(4) R08~R13



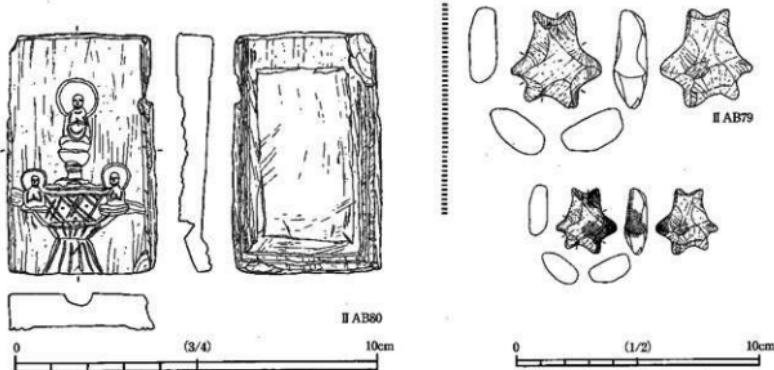
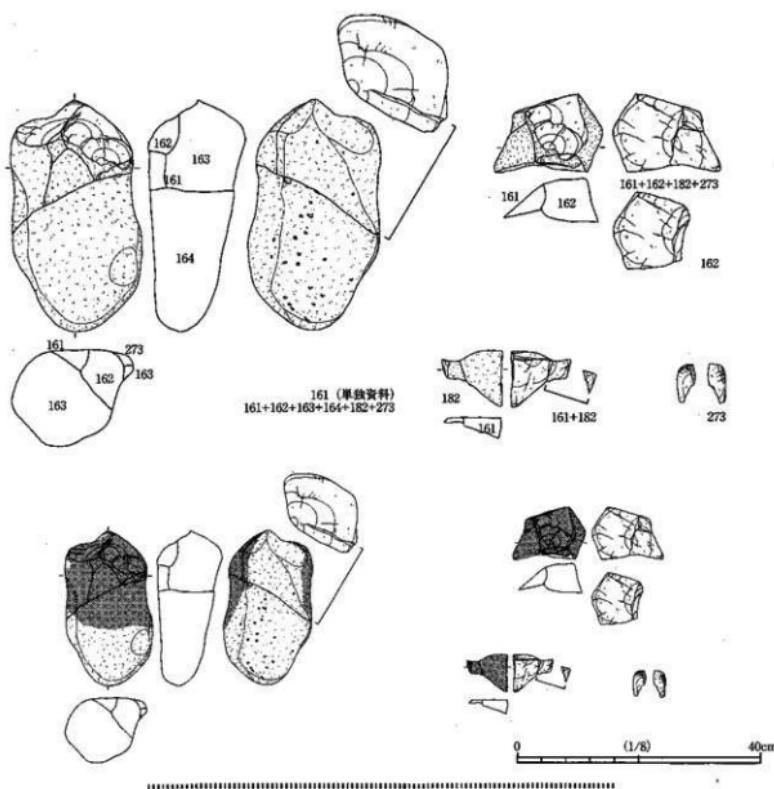
第59図 平瀬遺跡 II-C出土石器 (5) R14～R19



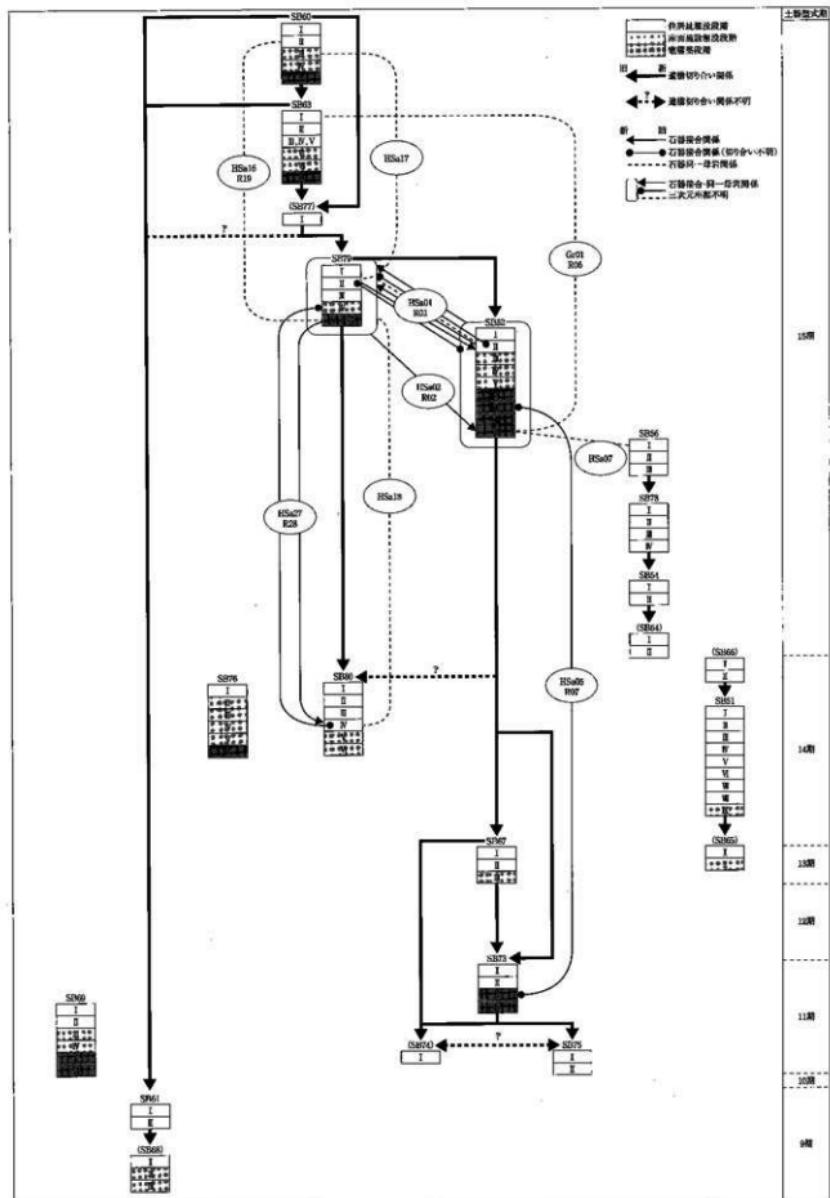
第60図 平瀬遺跡 II C出土石器 (6) R20～R25



第61図 平瀬遺跡 II-C出土石器 (7) R26~R31



第62図 平瀬遺跡 II C出土石器 (8), II A・II B出土石器



第63図 平瀬遺跡 II C造構間土層対比模式図

第4章 自然遺物分析

第1節 出土炭化材・炭化物

今回の調査では、A、C地区の住居址内を中心に多くの炭化物・炭化材がみられた。それらのうち遺存状況の比較的良好的なものについて可能な限り分析し、樹種の判別を試みた。分析は森義直氏による。

第19表 平瀬遺跡出土炭化材・炭化物一覧表

件名	発見場所	性質	採取場所	採取日	記載
1 平瀬 II A	5住			980709	ヒノキ・ニレ
2 平瀬 II A	6住	SW		980723	クルミ材
3 平瀬 II A	11住			980724	ヤナギ
4 平瀬 II A	11住			980724	スギ
5 平瀬 II A	11住			980724	スギ
6 平瀬 II A	11住			980724	スギ
7 平瀬 II A	11住	カマド		980723	ヒノキ・クヌギ
8 平瀬 II A	11住	NE		980717	スギ・クルミ
9 平瀬 II A	11住	NE		980721	スギ・コナラ・クルミ
10 平瀬 II A	11住	NE		980721	アカマツ
11 平瀬 II A	11住	NE		980721	ヒノキ
12 平瀬 II A	11住	SE		980717	クルミ・スギ・ケヤキ
13 平瀬 II A	11住	SW		980717	ヤナギ・クルミ
14 平瀬 II A	11住	NW		980717	ヤナギ・クリ
15 平瀬 II A	11住	ベルトN		980723	ヤナギ・クリ・クルミ・モモ
16 平瀬 II A	11住	ベルトE		980723	ヤナギ・クルミ・クヌギ
17 平瀬 II A	30住	N		980721	スギ
18 平瀬 II A	30住	S		980722	コナラ
19 平瀬 II A	30住	S		980721	クヌギ・モミ
20 平瀬 II A	土集3堆内			980717	特になし
21 平瀬 II C	44住	SW		981002	落・コナラ
22 平瀬 II C	47住	NE		981002	落・ニレ
23 平瀬 II C	51住	No.8		981027	落・コナラと樹皮
24 平瀬 II C	51住	No.9		981027	コナラ片
25 平瀬 II C	51住	No.10		981027	針葉樹膜片
26 平瀬 II C	51住			981105	落・コナラ
27 平瀬 II C	52住	No.20		981218	
28 平瀬 II C	52住	No.20		981218	スギ
29 平瀬 II C	52住	No.20		981218	針葉樹(スギ)とコナラ
30 平瀬 II C	52住	No.45		981219	コナラ
31 平瀬 II C	52住	No.45-2		981219	落・クリ材建築部材か
32 平瀬 II C	52住	SE覆土		981217	シカの足骨の骨片
33 平瀬 II C	52住	SW覆土		981217	ヒノキ
34 平瀬 II C	52住			981228	コナラ片
35 平瀬 II C	52住			981028	針葉樹その他の
36 平瀬 II C	52住			981028	針葉樹・スギ材
37 平瀬 II C	52住			981028	コナラ片
38 平瀬 II C	55住	No.13		981107	サンドパイプ虫穴に鉄分が入ったもの
39 平瀬 II C	55住	No.14		981107	後の微小片
40 平瀬 II C	62住	S		981009	コナラ片?
41 平瀬 II C	63住	P7No.1		981118	全コナラ
42 平瀬 II C	63住	P9No.1		981120	白色の物質(石英粒、長石粒) 黒色の物質は何か不明気泡多しこの両者が混ざっている所あり從て同時に(何等かの目的)で(何かを作る)為に使った一種と推定される
43 平瀬 II C	63住			981111	コナラ
44 平瀬 II C	67住	No.22			コナラ
45 平瀬 II C	67住	No.31			コナラ
46 平瀬 II C	67住	No.35		981217	クリ
47 平瀬 II C	67住	No.38		981217	コナラ
48 平瀬 II C	67住	No.39		981217	コナラ
49 平瀬 II C	67住	ベルト		981215	コナラ
50 平瀬 II C	79住	No.2		981218	灰化・針葉樹(多)コナラ片(少)
51 平瀬 II C	79住	No.5		981218	針葉樹片・コナラ片
52 平瀬 II C	79住	No.8		981218	スギ小片
53 平瀬 II C	79住	No.10		981218	スギ片等不明な針葉樹
54 平瀬 II C	79住	No.35		981219	スギ
55 平瀬 II C	79住	No.38		981219	針葉樹片・ヒノキ?

56	平瀬	EC	79住	No.39	981219	針葉樹片 コナラ片	
57	平瀬	EC	79住	No.39	981219	スギ	No.39の追加
58	平瀬	EC	79住	No.53	981219	スギ	
59	平瀬	EC	79住	No.53	981219	(構造材?)コナラ	
60	平瀬	EC	79住	No.54	981219	コナラ	
61	平瀬	EC	79住	No.54	981219	炭化ひどい コナラ? + α	
62	平瀬	EC	79住	No.54	981219	コナラ	
63	平瀬	EC	79住	No.54	981219	スギ	
64	平瀬	EC	79住	No.54	981221	炭化ひどい スギ?クリ?の小片	
65	平瀬	EC	79住	SE樹土	981217	スギ	
66	平瀬	EC	80住	P1No.1	981222	ヤマザクラ	
67	平瀬	EC	P262	No.1	990118	特になし	灰中に微少炭化物が見られ洗って調べたが 種子と断定できる物なし
68	平瀬	EC	P263	No.1	980118	コナラ	
69	平瀬	EC	N18RW0		981126	モミ	
70	平瀬	EC	N45W24		990112	コナラの半炭化材	
71	平瀬	EC	N48W33	No.1	990118	炭化ひどい落葉樹(コナラ?)	
72	平瀬	EC	N51W30	No.1	990118	針葉樹の樹皮	
73	平瀬	EC	N51W30	No.2	990118	灰中に酸粉質の破片あり	

第10表 平瀬遺跡樹種一覧

平瀬遺跡樹種一覧							
クルミ	7	0	7	8. 2%	20. 0%	0. 0%	
ヤナギ	5	0	5	5. 9%	14. 3%	0. 0%	
クヌギ	3	0	3	3. 5%	8. 6%	0. 0%	
コナラ	2	25	27	31. 8%	5. 7%	50. 0%	
クリ	2	3	5	5. 9%	5. 7%	6. 0%	
ニレ	1	1	2	2. 4%	2. 9%	2. 0%	
ケヤキ	1	0	1	1. 2%	2. 9%	0. 0%	
ヤマザクラ	0	1	1	1. 2%	0. 0%	2. 0%	
落葉樹計	21	30	51	60. 0%	60. 0%	60. 0%	
スギ	8	11	19	22. 4%	22. 9%	22. 0%	
モミ	2	1	3	3. 5%	5. 7%	2. 0%	
ヒノキ	3	2	5	5. 9%	8. 6%	4. 0%	
アカマツ	1	0	1	1. 2%	2. 9%	0. 0%	
不明	0	6	6	7. 1%	0. 0%	12. 0%	
針葉樹計	14	20	34	40. 0%	40. 0%	40. 0%	
総 計	35	50	85				
	41%	59%					

第2節 出土炭化材放射性炭素年代測定結果

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

平瀬遺跡は、平安時代の9世紀末から中世の13世紀にかけての集落跡とされる。同時代の堅穴住居址81棟、掘立柱建物址2棟をはじめとして土坑、ピットなどが多数検出されている。また、土器、陶磁器、石器、石製品、土製品、錢貨、瓦片、鉄滓などの遺物が出土している。特に古瓦、綠釉陶器、仏教に関連すると考えられる遺物の出土から、本遺跡は寺院関連の遺跡である可能性が示唆されている。文献資料では平安時代末に存在した法住寺跡の推定地のひとつとされる。

今回の自然化学分析では、堅穴住居址の年代に関する資料を得るために堅穴住居址から検出された炭化材の放射性炭素年代測定を行う。また、材の用材選択を検討するために樹種同定を行った。

1. 試料

試料は11号住居址から検出されたNo.1とNo.2の2点を放射性炭素年代測定および樹種同定に選択する。本試料は覆土中層から散発的に出土した土器、鉄器、炭化物の中の試料である。出土遺物の時期は10世紀と考えられ、住居の廃絶も同時期と考えられている。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定研究室の協力を得た。なお、年代値の算出には放射性炭素の半減期としてLIBBYの半減期5,570年を使用した。また、各試料とも同位体効果の補正を行った。

(2) 樹種同定

木口(横断面)・柵目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面を作成し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を第21表に示す。得られた放射性炭素年代値は、A.D.1950からの年数でみればNo.1が4世紀、No.2が8世紀頃になる。

(2) 樹種同定

樹種同定結果を第21表に示す。炭化材は、針葉樹1種類(モミ属)、広葉樹1種類(アサダ)に同定された。各種類の特徴を以下に記す。

第21表 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

試料名	試料	樹種	年代値	誤差(±)	δ 13C	測定番号
11号住居址No.1	炭化材	モミ属	1,580	50	-29.1	Gak-20428
11号住居址No.2	炭化材	アサダ	1,180	40	-28.1	Gak-20429

(1) 年代値：1950年を基点とした値。同位体補正を行った値。

(2) 誤差：標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代。

(3) δ 13C：試料炭素の13C/12C原子比を質量分析器で測定し、標準にPDBを用いて算出した。

・モミ属(Abies) マツ科

仮道管の早材部から晚材部への移行は緩やかで、晚材部は不明瞭。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、じゅず状末端壁が認められる。分野散孔はスギ型で、1分野に1~4個。放射組織は単列。1~20細胞高。

・アサダ(Ostrya japonica Sarg.) カバノキ科アサダ属

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2~4個が複合して配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性~異性I I I型、1~3細胞幅、1~30細胞高。

4. 考察

(1) 遺構の年代

今回の試料の検出が検出されたのは覆土中層からで、その共伴遺物が概ね10世紀代と考えられている。一方、今回得られた年代値は、共伴遺物から推定された年代よりNo.1が600年およびNo.2が約200年古い。

このことには、放射性炭素年代と曆年代の「ずれ」も考慮する必要がある。放射性炭素年代と樹木の年輪などにより確かめられた曆年代との間には過去における大気中の¹⁴C濃度変化などに起因する「ずれ」があることが知られており、

その「ずれ」は年代により数十年から数百年になることもある。最近では放射性炭素年代から曆年代に補正することも行われており、補正方法は欧米のデータに基づいて数種類ある。ただし、現時点では補正するためのデータも少なく、また、放射性炭素年代と曆年代が必ずしも1対1で対応するわけではなく年代によっては数100年以上の範囲にわたる複数の曆年代に対応する場合もある。また、今回の試料である炭化材の放射性炭素年代値は、試料となった木材の組織が形成された年代であり、木材が切り倒された年代や炭化、埋積した年代ではない。したがって、木材が大木の場合、その放射性炭素年代値は伐採年代よりも古い年代を示すことがある。さらに、今回の試料は覆土中層から検出されたもので必ずしも住居構築材ではなく、遺構周囲に存在した古い年代の材が埋積した可能性もある。

以上のことから、今回の結果は推定されている住居の年代を概ね支持するものといえるが、遺構の埋積状況および平安時代以前の本遺構周囲の状況も考慮した上で再検討したい。

(2) 炭化材の樹種

11号住居址における炭化材の検出状況は住居の南壁近くから、No.1とNo.2が縦方向に連続するように出土している。樹種同定の結果では、No.1がモミ属、No.2がアサダであった。このことから、2点が異なる部材に由来することは明らかである。これらの炭化材は、壁側から住居中央部に向って倒れたような形状を呈することから垂木などの構築材に由来している可能性もあるが、住居址全体における炭化材の検出状況を考慮すると構築材であるとは断定できない。

松本市内では、北方遺跡・南中遺跡で平安時代の住居構築材について樹種同定が行われている(神沢、1985)。その結果では、アカマツ(マツ属複維管束葉種)やヒノキ等の針葉樹材、アキニレ(ニレ属)、キハダ、クリ、ミズナラ(コナラ属)等の広葉樹材が確認されている。この結果は、今回の調査で針葉樹材と広葉樹材が混在して出土している結果とも調和的である。

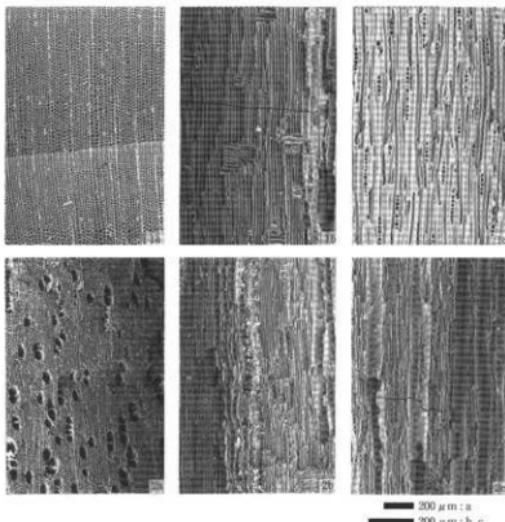
このような住居構築材は、関東地方における調査から、遺跡周辺の植生を反映することが指摘されている(高橋・高木、1994)。本遺跡や北方遺跡・南中遺跡の結果から、周辺にはモミ属等の針葉樹材、アサダ、クリ、コナラ等の落葉広葉樹材が生育していたと考えられる。

引用文献

神沢昌二郎(1985)出土炭化物および木材について。松本市文化財調査報告No.36「松本市島内遺跡群 北方遺跡・南中遺跡-緊急発掘調査報告書-」, p.39. 長野県立信上地改良事務所・松本市教育委員会。

高橋 敦・植木真吾(1994)樹種同定からみた住居構築材の用材選択。PALYNO. 2, p.5-18. パリノ・サーヴェイ株式会社

図版1 炭化材



1. モミ属(11号住居址 No.1), 2. アサダ(11号住居址 No.2)

a:木口, b:板目, c:板目

— 200 μm : a
— 200 μm : b, c

第5章 調査のまとめ

平瀬遺跡の調査は今回で2回目である。以前からこの付近で平安時代の遺物が出土することは知られており、また文献上からも法住寺、平瀬城がこの周辺に存在していたことが知られている。平成8、9年度におこなわれた、平瀬緑地造成に先立つ第1次調査では、銅製三尊仏像、銅鏡等といった仏教関連遺物が出土し、法住寺についてはその存在を示唆する資料を得ている。しかし寺院に直接関連した遺構は確認されなかった。今回の調査において検出できるのではないかということ、その確認を期待していた。

今回の調査においても、基壇等の寺院に直接関連する遺構の検出はされなかった。しかし、①平安時代から鎌倉時代にかけての集落の確認、②三尊仏像の影刻された石製鏡の出土、③古墳時代遺構(住居址・土器集中域等)の確認等という多大な成果を得ることができた。ここでは、これらの点を中心に簡単に考察してみたい。

①について、古くよりこの周辺は青磁、白磁といった輸入陶磁器片が出土しているところで、法住寺の位置は今回調査地の範囲内に収まるであろうと思われていた。そのため当初は寺院関連遺構の検出を期待していたが、確認された遺構は竪穴住居址を中心とするものであった。調査区南部を中心に76軒を確認している。これらは、古墳時代中期に属する1軒を除き、古代から中世にかけての集落を構成していたものとみられ、大きくは平安時代前期の9~10世紀に属するもの、平安時代末の11~12世紀に属するもの、鎌倉時代の13~14世紀に属するものと大別できるが、大半は11~13世紀、すなわち平安時代後期から鎌倉時代に属するとみられている。これは法住寺が文献上で確認されている養和2年(1182)前後を含む時期であるといえる。つまりこの集落は法住寺と同時に存在したものと考えるのが妥当であるといえる。このことから法住寺は、今回の調査区域内には存在せず、別の場所にあったという結論が導き出される。ただ、②がいわゆる瑞仏の型だとすれば、それは直接寺院の表前にかかわるものであり、そうした遺物が出土しているという点、破片ではある多くの布目瓦が出土しているという点、それに第2章第3節で述べた第1次調査結果を合わせて考えると、法住寺が建っていた場所は今回、前回調査地からさう遠い場所ではないように思われる。とすれば今回確認された集落跡は、法住寺の周間に展開していたものとみてよい。では法住寺の位置はどこであろうか、もちろん規模が不明であるため、その収まる範囲も不明であるが、地名・伝承等から想定してみると、i調査区の北東側隣接地、ここには、近年新しい道路の付け替えなどにより失われてしまったが経塚と思しき塚があったといわれ、その周辺から多くの土器(輸入陶磁器を含む)が出土したといわれ、また寺塔等の小字が散在している。ii今回調査区及び川合鶴宮神社の南側隣接地、ここには「寺村」地籍が凡そ東西140m×南北190mの範囲で広がっており、近代までその地名を残している(大日本帝国陸地測量部大正2年発行1:25000地形図「豊科」)。と大きくはこの2ヶ所が考えられる。無論これららの範囲は未調査であり、結論については今後この周辺での調査結果を待つことになる。

平瀬城について、その存在の最後の時期については第2章第2節で述べたとおり文献に残っており、平瀬氏滅亡後、武田氏が平瀬城を安曇郡攻略の前線基地として使用していたことが知られる。しかしその位置についても、前回、今回ともに明らかにすることはできなかった。確認できた中世の遺構は、今回の調査ではA地区南部で検出した2軒の住居址と、B地区の2軒の住居址他、前回は1次A、Bの各1軒他である。いずれも遺物は少ないが、13~14世紀に帰属するとみられる青磁片、土器部品、陶器片等が出土していることから、それらの遺構は鎌倉時代に属すると考えれる。文献に表われる平瀬城、すなわち武田氏が統治していた16世紀中頃~後半の時期(室町時代最末)の遺構は確認できていない。またその時期に該当する遺物も非常に少ない。通常戦国期の城(砦的なものを除く)は、平時の政府施設及び住居空間である館と、合戦等有事の際に立て篭もある山城(詰めの城)で構成されている。平瀬城の場合、山城は平瀬川東の平瀬城(北の城、市の城)とされているが、館については正確な位置は不明である。前述通り川合鶴宮神社境内が比定されているが、今まで発掘調査は行われていないため不明である。本調査に先立って実施(平成10年6月25日)された神社の南東隣接地である平瀬川西町会公民館建設に伴う試掘調査においても何らの遺構、遺物を確認していない。ただ神社東側の土手下において、宅地造成基礎の掘り方内から、南北方向を指向し、西側の土手下に並行した幅2mほどの溝の存在が確認されている。これが館を囲繞する堀のうち東側の一部分である可能性があるが、それについても調査を実施したわけではないので、ここで断言することはできない。いずれにせよ、今回の調査範囲は平瀬城跡部分には該当せず、その関連遺構を検出することはできなかった。

③について、今まで、島内地区では古墳時代の遺構(古墳を除く)は見つかっていない。古墳は、坂下(立坂)古墳群・下平瀬権現宝古墳が平瀬川東地区に、高松立石古墳が高松地区にそれぞれ存在している。高松立石古墳は、遺物から7世紀の古墳とみられている。坂下(立坂)古墳群は、平成2年に周辺調査が実施されているが、遺構・遺物を得るに至っていない。この古墳の被葬者の集落を平瀬にもとめる見方もあるが、墳丘自体の調査が行われていないため